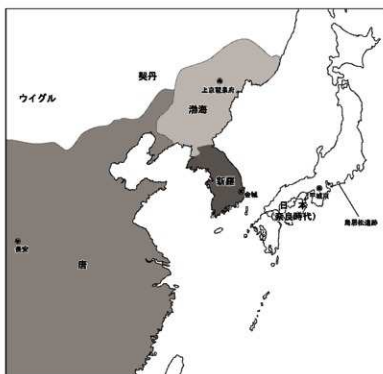


鳥居松遺跡5次

伊場大溝編

2009年12月

(財)浜松市文化振興財団



8世紀の東アジア



伊場大溝出土祭祀遺物



伊場大溝完掘状況（東から）



1 IVb層 SX01 遺物出土状態（北東から）



2 IVb層 SX03 遺物出土状態（北西から）



例 言

- 1 本書は浜松市中区森田町133他において実施した鳥居松遺跡（5次調査）の発掘調査にかかわる報告である。当発掘調査の報告書は、弥生時代編（第1分冊）、伊場大溝編（第2分冊）、円頭大刀編（第3分冊）の3部で構成される。本書は第2分冊に相当する伊場大溝編であり、古墳時代から平安時代の自然河川である伊場大溝と、南側に広がる古墳時代以降の集落の調査成果を扱う。なお、調査にいたる経緯および調査経過については、第1分冊である弥生時代編に一括して掲載している。
- 2 当発掘調査は集合住宅建設および宅地造成に先立つ事前調査として実施した。調査は、株式会社マルハンおよびセキスイハイム東海株式会社への委託により、浜松市教育委員会の指導（浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当が補助執行）のもと、財団法人浜松市文化振興財団が行った。
なお、当初、集合住宅の建設が計画されていた対象地北側については、発掘調査終了後に開発計画が変更されたため、別途に発掘調査を実施した部分がある（財団法人浜松市文化振興財団2009『鳥居松遺跡6次』）。
- 3 当発掘調査にかかわる契約期間は平成19年11月9日から平成21年12月25日までである。このうち現地発掘調査は、平成20年1月4日から6月16日の間に実施した。調査面積は1200m²である。
- 4 発掘調査は、安藤 憲、小粥良和、鈴木一有（浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当）が担当し、原田和子、鈴井けい子、藤森紀子（浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当非常勤職員）が補助した。
- 5 本書の編集、事実記載などの執筆は鈴木一有が行った。第3章1～5にかかわる執筆者は以下の通りである。第3章1：バリノサーヴェイ株式会社、第3章2：松原彰子（慶應義塾大学）、第3章3：金原正明（奈良教育大学）、古環境研究所、菊地大樹（京都大学）、古山真波（奈良教育大学）、第3章4：渡辺晃宏（奈良文化財研究所）、第3章5：山本 崇（奈良文化財研究所）。
- 6 本書に掲載した写真は調査担当者が撮影したが、巻頭図版4、図版44～46については奈良文化財研究所が撮影した。
- 7 調査の記録、出土遺物は浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当が保管している。

凡 例

- 1 本書で用いる座標値は、世界測地系に基づく。方位（北）は座標北、標高は海拔高である。
- 2 遺構の略記号は以下の通りである。

SD：溝 SP：小穴 SK：土坑 SE：井戸 SB：竪穴建物 SX：遺物集積

- 3 遺物番号は、遺物の種別にかかわらず、調査層位ごとに連番を付した。
- 4 本書で報告する土器の断面と種別の関係は以下の通りとする。

 弥生土器・土師器

 須恵器

 灰釉陶器・山茶碗

- 5 本文中の引用文献等の表記については、以下のように略す。

浜松市博物館→浜市博

(財) 浜松市文化協会→浜文協

(財) 浜松市文化振興財団→浜文振

(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所→静岡研

教育委員会→教委

- 6 本書で扱う須恵器を中心とした出土土器の編年的位置づけについては、主に遠江編年を用いるが、部分的に陶邑編年および飛鳥編年を併用している箇所がある。これらの編年については、以下の文献を参考にした。

遠江編年

山村宏・向坂鋼二・平野和男 1966「出土須恵器の編年」『大沢・川尻古窯調査報告書』湖西文化研究会

川江秀孝 1979「静岡県下の須恵器について」『須恵器—古代陶質土器—の編年』静岡県考古学会

鈴木敏則 2004「静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』浜松市教育委員会

鈴木敏則 2005「出土須恵器について」『東若林遺跡』（財）浜松市文化振興財団

陶邑編年

田辺昭三 1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古クラブ

田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

飛鳥編年

西 弘海 1978「土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所

西 弘海 1982「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』

古代の土器研究会 1997『古代の土器 5-1』7世紀の土器

鳥居松遺跡 5 次 伊場大溝編

目 次

巻頭図版

例言・凡例

第 1 章 序 論	1
-----------------	---

1 伊場大溝の概要	1
2 伊場大溝の層位と調査の方法	3

第 2 章 調査成果	9
------------------	---

1 VIII 層の調査	9
2 VII b 層の調査	11
3 VII a 層の調査	51
4 V 層の調査	79
5 IV b 層の調査	97
6 IV a 層・III 層の調査	117
7 B 区の調査	123
8 D 区の調査	130

第 3 章 後 論	131
-----------------	-----

1 鳥居松遺跡における堆積層の年代	131
2 鳥居松遺跡の立地環境	136
3 鳥居松遺跡における環境考古学的検討	141
4 鳥居松遺跡出土木簡の概要	165
5 鳥居松遺跡出土墨書土器の概要	169
6 鳥居松遺跡における伊場大溝調査の意義	173

第 4 章 総 括	193
-----------------	-----

出土遺物観察表	197
---------------	-----

図 版

図 版 目 次

巻頭図版

- 1 伊場大溝出土祭祀遺物
- 2 伊場大溝完掘状況（東から）
- 3 1 IV b 層 SX01 遺物出土状態（北東から）
2 IV b 層 SX03 遺物出土状態（北西から）
- 4 木 簡

図 版

- 1 VIII 層 完掘状況（西から）
- 2 VII b 層 SX05 遺物出土状態（北東から）
- 3 VII b 層 SX05 遺物出土状態（北西から）
- 4 1 VII b 層 SX05 遺物出土状態（東から）
2 VII b 層 遺物出土状態（C2 区、南西から）
- 5 1 VII b 層 円頭大刀出土状態（南東から）
2 VII b 層 円頭大刀出土状態（東から）
- 6 VII a 層 完掘状況（東から）
- 7 V 層 貝塚 SS01・02（北東から）
- 8 1 V 層 馬頭骨（B11）出土状態（南西から）
2 V 層 馬骨（B8・B9）出土状態（北から）
3 V 層 3 号木簡出土状態（北東から）
- 9 1 V 層 貝塚 SS04（南から）
2 V 層 貝塚 SS02（東から）
3 V 層 貝塚 SS02 断面（西から）
- 10 IV b 層 SX01 遺物出土状態（南東から）
- 11 1 IV b 層 SE 01（南から）
2 IV b 層 B 区 SE102（西から）
- 12 1 IV b 層 SX03 遺物出土状態（北西から）
2 IV b 層 SX03 遺物出土状態（南東から）
3 IV b 層 SX03 遺物出土状態（南東から）
4 IV b 層 斎串（201）出土状態（南西から）
- 13 III 層 完掘状況（西から）
- 14 B 区最上層遺構（東から）
- 15 VII b 層出土主要遺物
- 16 VII b 層 SX05 出土遺物

- 17 VII b 層 出土遺物 (1)
- 18 VII b 層 出土遺物 (2)
- 19 VII b 層 出土遺物 (3)
- 20 VII b 層 出土遺物 (4)
- 21 VII b 層 出土遺物 (5)
- 22 VII b 層 出土遺物 (6)
- 23 VII b 層 出土遺物 (7)
- 24 VII a 層出土主要遺物
- 25 VII a 層 出土遺物 (1)
- 26 VII a 層 出土遺物 (2)
- 27 VII a 層 出土遺物 (3)
- 28 VII a 層 出土遺物 (4)
- 29 VII a 層 出土遺物 (5)
- 30 V 層出土主要遺物
- 31 1 V 層 SS02 出土製塩土器
- 2 V 層出土祭祀遺物
- 32 V 層 出土遺物 (1)
- 33 V 層 出土遺物 (2)
- 34 V 層 出土遺物 (3)
- 35 IV b 層出土主要遺物
- 36 1 IV b 層 SX01 出土遺物
- 2 IV b 層 SX02 出土遺物
- 37 IV b 層出土「稲万呂」墨書土器
- 38 IV b 層 SX03 出土遺物
- 39 1 IV b 層 SX04 出土遺物
- 2 IV b 層出土転用硯
- 40 IV b 層 出土遺物 (1)
- 41 IV b 層 出土遺物 (2)
- 42 IV b 層 出土遺物 (3)
- 43 IV a 層・III 層出土遺物
- 44 木 簡 (赤外線照射写真、斜光写真)
- 45 墨書土器 (1) (赤外線照射写真)
- 46 墨書土器 (2) (赤外線照射写真)

挿 図 目 次

Fig.1 鳥居松遺跡の位置	1	Fig.35 VII b 層出土遺物 (13)	41
Fig.2 伊場大溝の流路	2	Fig.36 VII b 層出土遺物 (14)	42
Fig.3 伊場大溝土層断面図	5	Fig.37 VII b 層出土遺物 (15)	43
Fig.4 伊場大溝の埋設過程	6	Fig.38 VII b 層出土遺物 (16)	44
Fig.5 伊場大溝断面土層の調査	7	Fig.39 VII b 層出土遺物 (17)	45
Fig.6 土器集積の調査	7	Fig.40 VII b 層出土遺物 (18)	46
Fig.7 グリッド配置図	8	Fig.41 VII b 層出土遺物 (19)	47
Fig.8 伊場大溝VII層	9	Fig.42 VII b 層出土遺物 (20)	48
Fig.9 VII層出土遺物	10	Fig.43 VII b 層出土遺物 (21)	49
Fig.10 伊場大溝VII b 層	11	Fig.44 VII b 層出土遺物 (22)	50
Fig.11 VII b 層における遺物出土位置	12	Fig.45 伊場大溝VII a 層	51
Fig.12 銅鐵	14	Fig.46 VII a 層における遺物出土位置	52
Fig.13 伊場大溝形成以前の遺物 (1)	15	Fig.47 VII a 層出土遺物 (1)	56
Fig.14 伊場大溝形成以前の遺物 (2)	16	Fig.48 VII a 層出土遺物 (2)	57
Fig.15 SX05 の位置	17	Fig.49 VII a 層出土遺物 (3)	58
Fig.16 SX05 遺物出土状態	18	Fig.50 VII a 層出土遺物 (4)	59
Fig.17 SX05 出土遺物対照図	19	Fig.51 VII a 層出土遺物 (5)	60
Fig.18 円頭大刀実測図	20	Fig.52 VII a 層出土遺物 (6)	61
Fig.19 SX05 出土遺物 (1)	21	Fig.53 VII a 層出土遺物 (7)	62
Fig.20 SX05 出土遺物 (2)	22	Fig.54 VII a 層出土遺物 (8)	63
Fig.21 SX05 出土遺物 (3)	23	Fig.55 VII a 層出土遺物 (9)	64
Fig.22 SX05 出土遺物 (4)	24	Fig.56 VII a 層出土遺物 (10)	65
Fig.23 VII b 層出土遺物 (1)	29	Fig.57 VII a 層出土遺物 (11)	66
Fig.24 VII b 層出土遺物 (2)	30	Fig.58 VII a 層出土遺物 (12)	67
Fig.25 VII b 層出土遺物 (3)	31	Fig.59 VII a 層出土遺物 (13)	68
Fig.26 VII b 層出土遺物 (4)	32	Fig.60 VII a 層出土遺物 (14)	69
Fig.27 VII b 層出土遺物 (5)	33	Fig.61 VII a 層出土遺物 (15)	70
Fig.28 VII b 層出土遺物 (6)	34	Fig.62 VII a 層出土遺物 (16)	71
Fig.29 VII b 層出土遺物 (7)	35	Fig.63 VII a 層出土遺物 (17)	72
Fig.30 VII b 層出土遺物 (8)	36	Fig.64 VII a 層出土遺物 (18)	73
Fig.31 VII b 層出土遺物 (9)	37	Fig.65 VII a 層出土遺物 (19)	74
Fig.32 VII b 層出土遺物 (10)	38	Fig.66 VII a 層出土遺物 (20)	75
Fig.33 VII b 層出土遺物 (11)	39	Fig.67 VII a 層出土遺物 (21)	76
Fig.34 VII b 層出土遺物 (12)	40	Fig.68 VII a 層出土遺物 (22)	77

Fig.69 VII a 層出土遺物 (23)	78	Fig.105 III 層出土遺物	122
Fig.70 伊場大溝 V 層	79	Fig.106 調査区と遺構の位置関係	123
Fig.71 V 層における遺物出土位置	80	Fig.107 B 区検出遺構	124
Fig.72 馬骨・馬歯出土状況	81	Fig.108 SX111・112 出土遺物	125
Fig.73 SS01・02 実測図	82	Fig.109 SE102 実測図	126
Fig.74 SS01・02 出土遺物	83	Fig.110 SE102 出土遺物 (1)	127
Fig.75 SS04 出土遺物 (1)	84	Fig.111 SE102 出土遺物 (2)	128
Fig.76 SS04 出土遺物 (2)	85	Fig.112 SE101 実測図	129
Fig.77 V 層出土遺物 (1)	89	Fig.113 SE101 出土遺物	129
Fig.78 V 層出土遺物 (2)	90	Fig.114 D 区検出遺構	130
Fig.79 V 層出土遺物 (3)	91	Fig.115 D 区出土遺物	130
Fig.80 V 層出土遺物 (4)	92	Fig.116 試料採集位置	131
Fig.81 V 層出土遺物 (5)	93	Fig.117 試料⑦中の火山ガラスの屈折率	133
Fig.82 V 層出土遺物 (6)	94	Fig.118 火山灰写真	134
Fig.83 V 層出土遺物 (7)	95	Fig.119 浜松低地の地形と遺跡分布地質	136
Fig.84 V 層出土遺物 (8)	96	Fig.120 地質層序確認部分位置図	138
Fig.85 伊場大溝 IV b 層	97	Fig.121 地質層序の観察 (1)	139
Fig.86 IV b 層における遺物出土位置	98	Fig.122 地質層序の観察 (2)	139
Fig.87 SE01 実測図	99	Fig.123 貝類の計測点	141
Fig.88 SE01 出土遺物	100	Fig.124 鳥居松遺跡の貝類 (1)	146
Fig.89 SX01・02 遺物出土状態	103	Fig.125 鳥居松遺跡の貝類 (2)	147
Fig.90 SX01・02 出土遺物	104	Fig.126 貝塚における貝類の組成	148
Fig.91 SX03 遺物出土状態	105	Fig.127 貝塚出土貝類の形態分布	149
Fig.92 SX03 出土遺物 (1)	106	Fig.128 鳥居松遺跡の動物遺存体	151
Fig.93 SX03 出土遺物 (2)	107	Fig.129 鳥居松遺跡の貝塚における 花粉ダイアグラム	153
Fig.94 SX03 出土遺物 (3)	108	Fig.130 鳥居松遺跡の断面における 花粉ダイアグラム (1)	154
Fig.95 SX04 出土遺物 (1)	109	Fig.131 鳥居松遺跡の断面における 花粉ダイアグラム (2)	155
Fig.96 SX04 出土遺物 (2)	110	Fig.132 鳥居松遺跡の花輪・胞子・寄生虫卵	156
Fig.97 IV b 層出土遺物 (1)	112	Fig.133 鳥居松遺跡の貝塚における 主要珪藻ダイアグラム	158
Fig.98 IV b 層出土遺物 (2)	113	Fig.134 鳥居松遺跡の断面における 主要珪藻ダイアグラム (1)	160
Fig.99 IV b 層出土遺物 (3)	114		
Fig.100 IV b 層出土遺物 (4)	115		
Fig.101 IV b 層出土遺物 (5)	116		
Fig.102 伊場大溝 III 層	117		
Fig.103 IV a 層における遺物出土位置	118		
Fig.104 IV a 層出土遺物	121		

Fig.135 鳥居松遺跡の断面における 主要珪藻ダイアグラム (2)	161	Fig.147 鳥居松遺跡出土祭祀具の変遷	180
Fig.136 鳥居松遺跡の珪藻	162	Fig.148 伊場遺跡群出土人形	181
Fig.137 鳥居松遺跡 5 次調査出土木簡	167	Fig.149 伊場遺跡群出土馬形	182
Fig.138 「稲万呂」墨書土器の分類	171	Fig.150 伊場遺跡群出土舟形	183
Fig.139 伊場大溝堆積状況模式図	173	Fig.151 伊場遺跡群出土人面墨書人形	184
Fig.140 伊場大溝の土層断面比較	174	Fig.152 伊場遺跡群出土人面墨書土器	185
Fig.141 伊場大溝堆積状況の変遷	175	Fig.153 伊場遺跡群出土紀年銘木簡	186
Fig.142 伊場大溝Ⅶ層出土生産用具	176	Fig.154 鳥居松遺跡における 古代文字資料出土位置	187
Fig.143 伊場大溝出土耳環	177	Fig.155 伊場遺跡群における 「稲万呂」墨書土器の分布	188
Fig.144 銅製有孔円盤と円形銅金具	177	Fig.156 敷智郡家の機能想定図	189
Fig.145 製塩土器出土量の比較	178	Fig.157 敷智郡家の立地環境	190
Fig.146 鳥居松遺跡における 祭祀具の出土位置	179		

挿 表 目 次

Tab.1 伊場大溝の層位比較	4	Tab.6 鳥居松遺跡出土動物骨分析一覧	150
Tab.2 放射性炭素年代測定結果	133	Tab.7 鳥居松遺跡 5 次調査出土墨書土器	169
Tab.3 暦年校正結果	134	Tab.8 「稲万呂」墨書土器一覧	171
Tab.4 貝類同定結果 (1)	144	Tab.9 製塩土器口縁点数	178
Tab.5 貝類同定結果 (2)	145	Tab.10 伊場遺跡群出土紀年銘木簡	185

第1章 序 論

1 伊場大溝の概要

伊場大溝の流路 伊場大溝は、静岡県浜松市中区にある伊場遺跡の発掘調査で確認された自然河川である。1969年にその存在が確認されてから、2008年の鳥居松遺跡5次調査に至るまで広域に発掘調査が実施され、総延長1.5kmほどの流路が確認されている。古代敷智郡家と推定される伊場遺跡群を貫いていることから、木簡をはじめとした文字資料が豊富に出土する。

伊場遺跡の調査 伊場遺跡における伊場大溝の発掘調査は、1969年の第3次調査から1978年の第12次調査までの10年間に及び、飛鳥時代から平安時代にいたる紀年銘木簡13点を含む合計108点の木簡が出土した。伊場遺跡から木簡のほかにも、400点を超える墨書土器が出土し、古代出土文字資料の宝庫と評された。古代敷智郡家の様相を具体的に伝えるこれら古代文字資料の大部分が伊場大溝からの出土品であることから、その重要性は充分理解できるだろう。

伊場遺跡で確認された大溝は、幅約20m、深さ2.5mの規模をもつ。底部の標高は-2.0mほどになり、底部まで掘削すると湧水が激しい。木製品の保存環境としては最適であるが、排水機器が用意されていない1970年代においては、完全な調査が実施できない部分が残った。

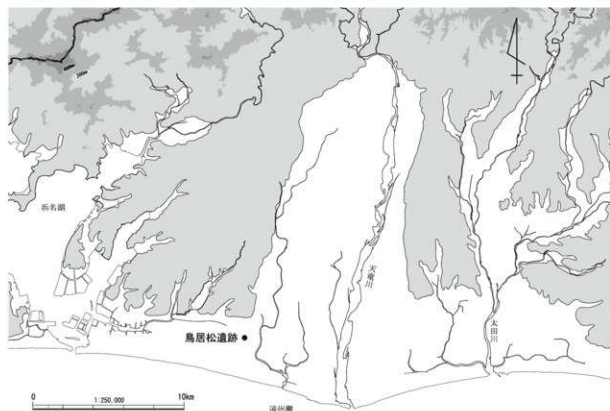


Fig.1 鳥居松遺跡の位置

梶子遺跡 9 次調査 1992 年に行われた梶子遺跡 9 次調査によって、伊場大溝の上流部分が調査された。調査地点は伊場遺跡から北東 250m ほどに位置し、延長部分約 30m 分を確認した。梶子遺跡 9 次調査における伊場大溝の規模は、幅約 20m、深さ 2.5m ほどで、伊場遺跡で確認できた規模とはほぼ同様である。梶子遺跡 9 次調査では排水装置が整い、15 点の木簡をはじめとする古代文字資料が出土し、伊場大溝の重要性を再認識させた。なお、梶子遺跡 9 次調査では、伊場大溝が 4 世紀代に人工的に掘削された可能性が指摘されたが、その当否はなお不明瞭と言わざるをえない。

城山遺跡 6 次調査 1995 年の城山遺跡 6 次調査によって、部分的ながら伊場遺跡の上流部分が検出された。城山遺跡 6 次調査地点が、現在までのところ、伊場大溝が確認できた最も上流部分である。この調査では枝溝と呼ばれる支流も確認できた。

九反田遺跡の調査 1996 年に実施した九反田遺跡の調査では、伊場遺跡調査地点よりも 400m ほどの下流部分を確認している。とくに試掘調査によって、伊場大溝の両岸が明確になり、軒丸瓦や平瓦などの古代瓦が数多く出土した。古代瓦の出土量としては伊場遺跡群の中でも突出しており、近辺に瓦葺建物の存在が想定できる。

鳥居松遺跡 2・4 次調査 伊場大溝の下流部分の調査は 2000 年以降、鳥居松遺跡で相次いでいる。2000 年に実施した鳥居松遺跡 2 次調査では、伊場大溝の最下流部を検出し、貝塚を確認するとともに、墨書土器が出土した。現在までのところ、この調査地点が、伊場大溝が確認できた最も下流部分である。この調査によって、鳥居松遺跡に郡家の一部が及んでいることが明らかになったが、九反田遺跡と若干の距離があることもあり、伊場大溝の正確な流路は未確定であった。

2003 年に実施した鳥居松遺跡 4 次調査によって、伊場大溝の両岸が確認され、伊場大溝は鳥居松遺跡内において流れの方向を、東から南西へ大きく変えていることが判明した。鳥居松遺跡 4 次調査地点からは、伊場遺跡から複数数の出土が知られていた「稲万呂」と記した墨書土器が出土し、鳥居松遺跡と伊場遺跡は一連の遺跡空間にあることを印象づけた。

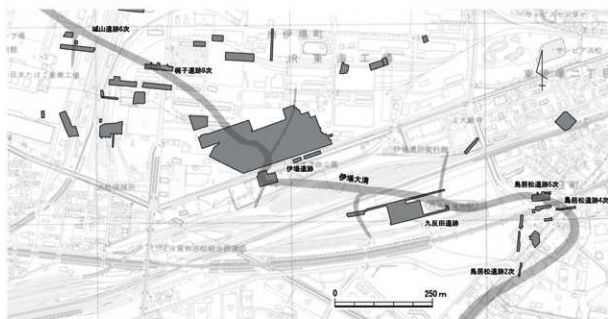


Fig.2 伊場大溝の流路

2 伊場大溝の層位と調査の方法

(1) 伊場大溝の層位

層位名称の概要 伊場大溝内の層位の名称は、伊場遺跡の調査時に用いられたものがその後の調査においても継続的に使用されている。今回の調査においても、伊場遺跡の調査時に用いられた層位名称に従ったが、細部にかんしては必ずしも一致しない部分がある。とくに、ローマ数字の後にアルファベットで示した層位の細分（Ⅶa層、Ⅶb層、Ⅳa層、Ⅳb層）は本調査独自の理解であり、伊場遺跡や梶子遺跡9次調査時で用いられた層位名と一致するものではない。

今回の調査では、伊場大溝の層位をⅧ層、Ⅶa層、Ⅶb層、Ⅴ層、Ⅳa層、Ⅳb層、Ⅲ層の7層に識別した。今回の調査では、Ⅵ層は確認できていない。伊場遺跡の調査においては、Ⅵ層はⅦ層とⅤ層の間に挟まれる薄い砂層とされ、Ⅴ層とⅦ層を分離する鍵層として認識されている。ただし、梶子遺跡9次調査でもⅥ層は確認できておらず、伊場遺跡内において部分的に堆積した層位と理解できる。梶子遺跡9次調査の所見どおり、Ⅵ層はⅦ層の最上部に相当すると捉えておきたい。

Ⅷ層については、梶子遺跡9次調査のⅧ層と伊場遺跡におけるⅧ層は異なる層位と理解されている。ただし、両者はともに青灰色微砂層を基本とし、5世紀後半の遺物を主体的に包含する。大局的には、今回の調査で確認したⅧ層を含め、同一層位として捉えることができると判断する。

なお、Ⅸ層（伊場遺跡のⅨ層と梶子遺跡9次調査でのⅨ層は異なる）に相当する層位は今回の調査では認められなかった。

Ⅷ層 Ⅷ層は、調査区の南西側において確認できた古墳時代中期後葉（5世紀後葉）を中心とする堆積層である。灰色や緑灰色を呈するシルト層を主体に、炭化物や未分解の有機物を多く含む地層が交互に堆積している。地層は厚く、底面から上位までの比高は2.2mほどである。Ⅷ層に含まれる遺物は上位の地層と比べると少ないが、古墳時代中期後葉の遺物が出土する。

Ⅷ層の堆積がいつ始まったかは不明瞭である。Ⅷ層はⅧ層によって切り込まれており、流路を若干変えた6世紀の伊場大溝によってⅧ層の大部分が破壊されている。Ⅶb層には、本来Ⅷ層に含まれていたとみられる5世紀以前の遺物も出土する。この中には僅かであるが4世紀代の遺物も含まれる。これら4世紀代の遺物の評価は難しいが、いずれも小破片であることをふまえると、周辺の遺構や包含層から流れ込んだものとみることが妥当であろう。伊場大溝内から安定的に出土するのは、古墳時代中期後葉からであり、この時期をもって伊場大溝の形成が始まると捉えておきたい。

Ⅶb層 Ⅶb層は、青灰色砂と灰色粘土の互層で、古墳時代後期後半（6世紀後半）を中心とする堆積層である。Ⅷ層の堆積が進み、部分的に厚さ2m以上の地層が形成された後、伊場大溝は新たな流路を形成する。新しい流路の底部に堆積した層位がⅦb層である。Ⅶb層の底面には川底溝があり、所どころに澁みのような深い部分が認められる。川底溝やその上面からは弥生時代後期から6世紀後半にいたるまでの土器が混在して出土した。とくに川底溝が埋没した段階で含まれる土器の量は極めて多く、人為的な営為が活発化していることがうかがえる。Ⅶb層中からは円頭大刀が出土したほか、円頭大刀出土地点に隣接して、大規模な土器集積SX05も形成されている。

Tab.1 伊場大溝の層位比較

層位	伊場遺跡	層位			島居松5次		
		層位名	層位名	年代	層位名	層位名	年代
I層	表土層	I層	表土	—	I層	黒灰色粘土層	—
II層	水田床土	II層	床土	—	II層	青灰色粘土層	—
III層	黒色有機粘土層	III層	茶～灰色泥炭層	10～13世紀	III層	茶褐色有機物層	11～13世紀
IV層	暗灰色粘土層	IV層	灰茶色粘土層	9～10世紀	IVa層	褐色粘土	10世紀
V層	暗灰色～褐色粘土層	V層	灰茶色有機質粘土層	8世紀	IVb層	灰～茶褐色粘土	8世紀後葉～9世紀前葉
VI層	灰色砂層 (厚さ2～5cm)	VI層	(未検出)	—	V層	灰～褐色粘土、砂	8世紀前葉～8世紀中葉
VIa層	灰色砂層	VIa層	砂と粘土の互層	7世紀	VI層	(未検出)	—
VIb層	灰～暗灰色砂、粘土層	VIb層	砂と粘土の互層	7世紀	VIa層	灰色粘土、砂	7世紀前葉～7世紀後葉
VIc層	青灰～暗灰色微砂、粘土層	VIc層	砂層	6世紀後半	VIb層	青灰～灰色砂、粘土	6世紀後半～7世紀初頭
VIId層	青灰～暗灰色微砂、粘土層	VIId層	青～灰色微砂層	5～6世紀前半	VIc層	灰～緑灰シルト	5世紀後葉～6世紀前半
VIId層	灰黒色粘土層	VIId層	灰色粗砂層	(4世紀)	—	(未検出)	—

Ⅶa層 Ⅶa層は、灰色粘土層と砂層が交互に堆積した地層で、飛鳥時代（7世紀）の土器を包含する。Ⅶb層の堆積後、再度、伊場大溝の流路が更新され、Ⅶa層の堆積が始まっている。ただし、Ⅶb層からⅦa層への流路変更は僅かで、Ⅶ層にみられるような大規模な不整合はみられない。Ⅶa層中には砂の堆積が顕著にみられるが、面をなして広がっている状況は確認できない。なお、伊場遺跡で確認されたⅦ層（灰色砂層）とは、Ⅶa層中に多くみられる砂層の一部を指したものとみられる。Ⅶa層中の砂層の堆積は複雑であり、明確な基準層位として把握することは困難であることから、Ⅶ層の認定は控えざるを得ない。Ⅶa層の最深部は、北側に偏っているため、斜面の角度は北側が急で、南側は比較的緩やかである。この傾斜の違いは、伊場大溝の流路の方向と関係があるとみてよいだろう。

V層 V層は、灰色ないしは褐色の粘土層を基本に所どころに砂層が混ざる層位で、奈良時代（8世紀前葉から中葉）を中心とした時期の堆積層である。V層より上位の層は、伊場大溝が埋まっていく過程で堆積した層位である。V層中においては貝塚（SS01～04）が形成されている。出土遺物には木簡が含まれるほか、木製祭祀具も多くみられる。

Ⅳb層 Ⅳb層は、暗茶灰色を呈する層位で、砂層は全く混ざらない。奈良時代後葉～平安時代前葉（8世紀後葉～9世紀前葉）を中心とした時期の堆積層である。砂層が混入しないことからうかがえるように、Ⅳb層が堆積した時期には伊場大溝の水量は減少し、常時は湿地帯のような環境にあったと推定できる。

Ⅳa層 Ⅳa層は、褐色粘土で形成される非常に薄い層で、大溝の北岸にわずかに堆積している。調査区の北東側において部分的に確認できたのみである。Ⅳa層の堆積年代は、平安時代中葉（10世紀）である。伊場大溝全体にわたる基準層位とはいいいくいが、灰陶陶器が出土する地層はこの部分だけであることから、Ⅳa層として分離して捉えた。

Ⅲ層 Ⅲ層は茶褐色有機物層であり、未分解の植物片を大量に含んでいる。出土遺物はないが、伊場遺跡や梶子遺跡の調査成果から、平安時代中葉から鎌倉時代前半（11～13世紀）頃の堆積と推定できる。なお、Ⅲ層の堆積途上において、伊場大溝の南岸の高まりを畦畔として利用し、水田として用いていた可能性が考えられる。

Ⅱ・Ⅰ層 Ⅱ層は、青灰色粘土層、Ⅰ層は黒灰色粘土層とともに現代の盛土施工前まで使用されていた水田耕作にかかわる地層である。

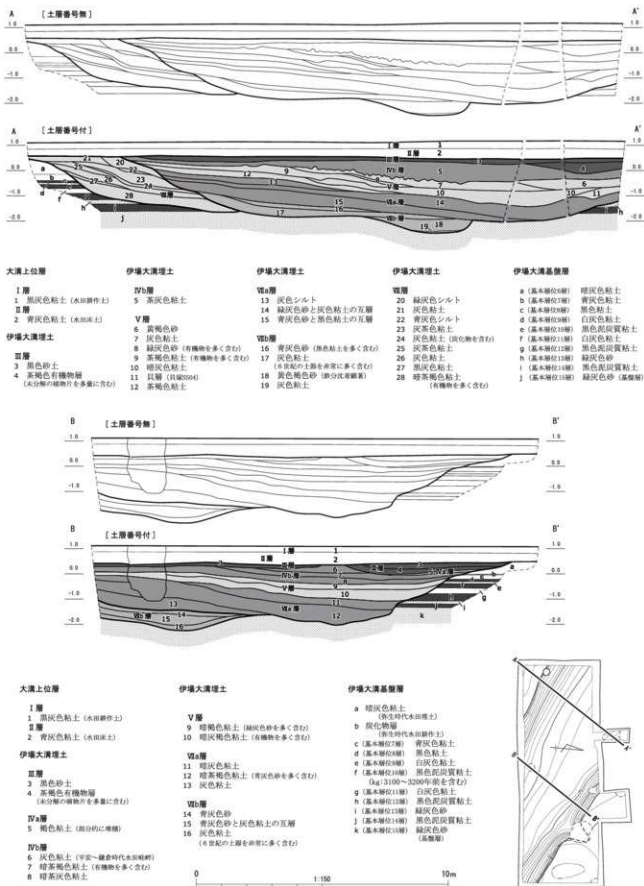


Fig.3 伊場大溝土層断面図

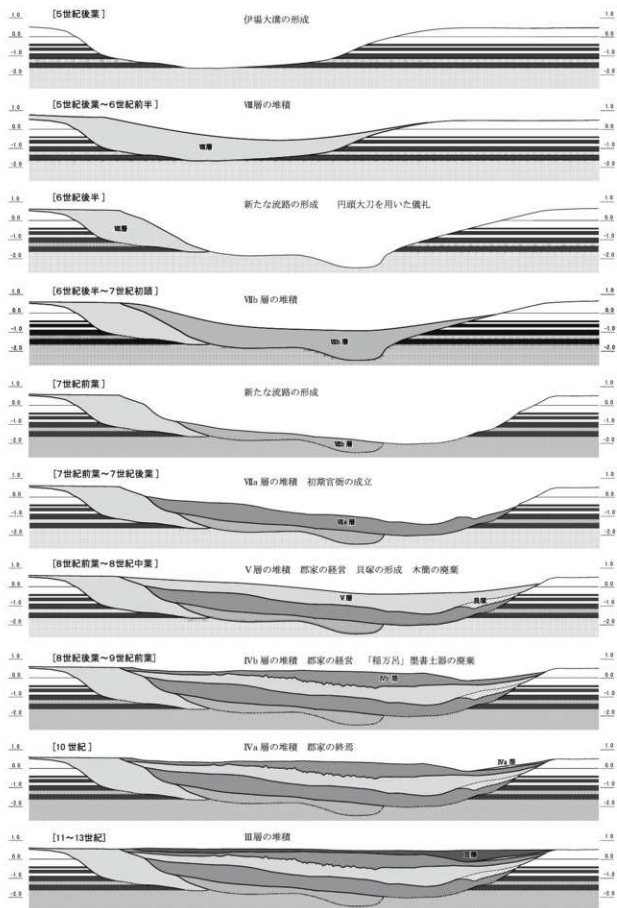


Fig.4 伊場大溝の埋没過程

(2) 伊場大溝の調査方法と経過

調査区とグリッドの設定 発掘調査に用いたグリッドは、弥生時代の調査のものと同一である。調査区の方眼は、調査対象地に国家座標軸（世界測地系）に合わせ、10m 間隔に設定した（Fig.7）。各グリッドの名称は、北西の基準点に従って命名している。

表土掘削と排水工事 伊場大溝の表土掘削は、現代の盛土施工前の水田関連層であるⅠ層およびⅡ層を対象に、バックホーを用いて行った。Ⅲ層以下は人力による精査を実施したが、一部、既設建物の解体工事に伴う基礎の撤去のために調査区内に大穴が空けられており、この部分にかんしてはバックホーによる埋土除去を行った。

今回の調査は伊場大溝の底面まで精査する予定であったことから、排水施設（ウェルポイント）を設置し湧水に備えた。排水装置の先端は伊場大溝の底面と想定された-2mの位置に設定したが、最終的には最深で-2.4m 以下まで掘削した。-2.2m を超えると湧水がみられるようになり、最深部は浸水状態で調査せざるをえなかった。

層位の認識 伊場大溝の層位は、伊場遺跡および梶子遺跡9次調査での層位名、認識にあわせるように努めた。伊場大溝埋土の精査をはじめる前に発掘区の西側（Aセクション）と中央部（Bセクション）に土層観察用アゼを設定し、トレンチを掘削した。双方の土層観察によって、おおむね伊場大溝の基本層位が把握でき、層位の特徴と高さを確認しながら、埋土を撤去した。ただし、層位の境界は漸移的であることも多く、各層位に含まれる遺物を判然と分離できなかったわけではない。

遺物取り上げの方法 大溝内から出土する遺物は、比較的まばらであったことから、とくに遺物が集中する部分を除いては出土状態についての情報は取得していない。遺物は、10m グリッドを4分割した範囲でまとめて取り上げたが、木器や金属器などの特殊な遺物および遺存部分が大きい土器については、トータルステーションによって出土位置を記録した。

遺物帰属層位の認定 室内における整理作業によって、層位ごとにとりあげた遺物相互の検討を行った。土器については、上下の層位を跨いで接合するものは極めて少ないことから、上下層相互の擾乱はほとんどなかったものと捉えられる。しかし、各層位の境界付近においては、確実に層位の境界が把握できない場合があったため、土器の年代観から帰属層位を改めたものがある。



Fig.5 伊場大溝断面土層の調査



Fig.6 土器集積の調査



Fig.7 グリッド配置図

第2章 調査成果

1 VIII層の調査

(1) VIII層の概要

VIII層は、伊場大溝の最下層の層位で、灰色や緑灰色を呈するシルト層を主体に、炭化物や未分解の有機物を多く含む地層が交互に堆積している。VIII層は、伊場大溝の南側に部分的に遺存しているが、調査区の設定位置の関係から、僅かな面積を調査したにすぎない。調査面積が限られることから、VIII層から得られた遺物は少なかった。また、本来はVIII層中に含まれていた土器が、新しい流路の形成によって掘り出され、VII b層中に混入したものと想定できる。その多くは次節で解説するが、弥生時代後期から終末期の遺物で、古墳時代前期の土器も僅かにみられる。

(2) 伊場大溝の形状と遺物の出土状態

形 状 VIII層は伊場大溝の南側の岸、幅5m程度しか遺存していない。北側斜面は後世の流路(VII b層以上の堆積層)によって破壊されているため、形状をうかがうことができないが、VII b層以上

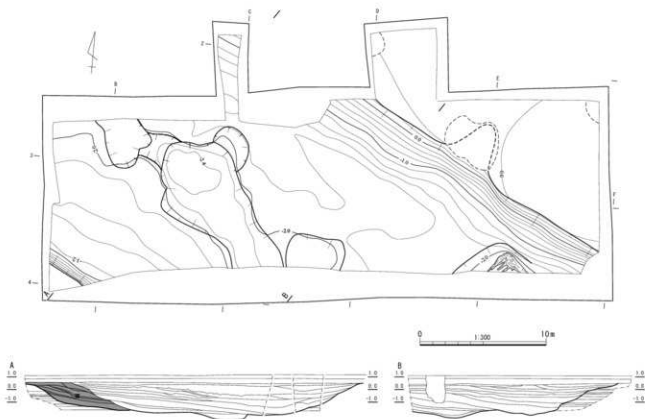


Fig.8 伊場大溝VIII層

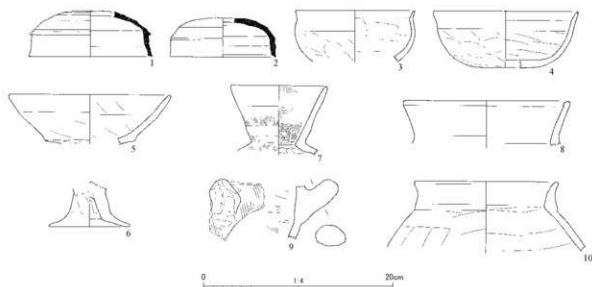


Fig.9 ヲ層出土遺物

の各層と比べると斜面の傾斜が急であることが留意される。Ⅱ層の南側斜面は攻撃面であったとみられる。Ⅱ層が堆積する流路の方向は、Ⅱb層以上の層位が堆積する流路のそれと異なっていたと捉えられよう。遺存部分におけるⅡ層の最深部は-1.6m程度である。

遺物出土状態 Ⅱ層中における遺物の出土状況は、極めてまばらであった。Ⅱ層に本来伴っていた土器は、Ⅱ層の底面付近に集中していたとみられるが、大部分は後世の流路によって掘り出され、Ⅱb層中に再堆積したと考えられる。

(3) 出土遺物

須恵器 (Fig.9) 1・2は須恵器の坏蓋である。1は稜の突出が顕著で中期後葉の中でも古相の特徴を残す。TK208型式期に比定できるだろう。2は1と比べると新相の形態である。

土師器 (Fig.9) 3～10は土師器である。3・4は鉢、5・6は高杯、7は直口壺、8・10は甕、9は瓶などの把手である。8の甕は胎土に白色の粒子を多く含むことから、駿河地域からの搬入品であるとみられる。

年代 Ⅱ層から出土する遺物は少ないながら、いずれも5世紀後半代に位置づけられる。Ⅱ層の堆積年代を明確に示すものと捉えられよう。

(4) 小 結

調査区の関係で、Ⅱ層は部分的な調査にとどまった。出土遺物も少ないが、伊場大溝Ⅱ層は、5世紀後葉に堆積したことを裏付ける資料が得られている。土層の堆積状況や含まれる土器の年代観などは伊場遺跡や梶子遺跡9次の調査成果とほぼ同じであるといえる。伊場大溝は、弥生時代や古墳時代前期の遺構を破壊しているため、古い時期に属する遺物が下層に含まれる。本来は最下層のⅡ層中に多くの混入品が含まれていたとみられるが、底面が後世の流路で破壊されたことによって、後述するⅡb層に再堆積したとみられよう。

2 VII b 層の調査

(1) VII b 層の概要

VII b 層は、青灰色砂と灰色粘土の互層で、古墳時代後期後半（6世紀後半）を中心とする堆積層である。南側斜面から底面にかけては、VII b 層堆積直前の形状を示しているが、北側斜面については、VII a 層によって大きく切り込まれており、本来の形状をうかがうことができない。最下層には川底溝があり、最深の標高は -2.4m を超える。川底溝は一定の形状をなしておらず、所どころに流れの水がよどんで深くなった淵状の穴が認められる。川底溝が堆積した後に大規模な土器集積（SX05）が形成されている。また、SX05 に隣接して円頭大刀が出土した。円頭大刀については、別冊の『円頭大刀編』において詳述する。VII b 層から出土する遺物量は極めて多い。とくに SX05 が形成される川底溝の埋没直後に形成された砂層からは、6 世紀後半を中心とした須恵器・土師器が折り重なるように堆積していた。出土状態を図示したのは SX05 の範囲のみであるが、その周りにおいても相当量の土器が出土している。

出土物は、大量の土器のほかに、円頭大刀が特筆される。また、玉類や輪羽口、鉄滓などの特殊な遺物も含まれる。出土物は、弥生時代後期から古墳時代後期までの年代幅があるが古墳時代後期前半以前の土器は、下層にあたるVIII層もしくは周囲の遺跡からの混入品と捉えられる。

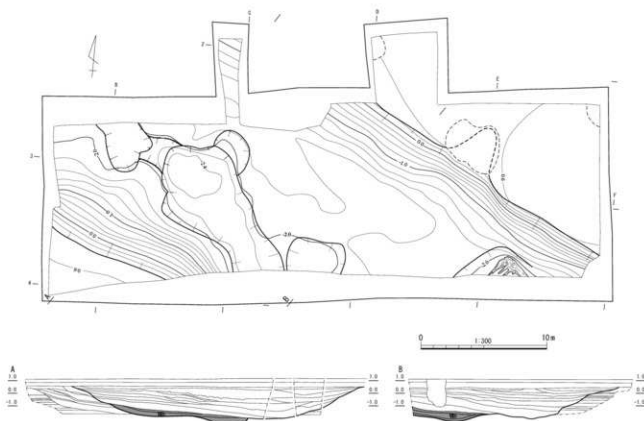


Fig.10 伊場大溝VIIb層

(2) 伊場大溝の形状

Ⅶ b 層が堆積した伊場大溝の本来の形状がうかがえる部分は、南側斜面の-1.0m以下の部分と、川底を挟んで北側斜面の標高-1.8m以下の部分である。これより上の部分は上層の堆積層(Ⅶ a 層以上)によって切られている。伊場大溝の底面には、-2.0m以下の川底溝があり、最深部分の標高は-2.4mを超えている。川底溝の最深部は形状が定まらず、所どころに流れの水がよどんで深くなった淵状の穴が認められる。川底溝が形成されることは、水の流れが比較的激しかったことをうかがわせる。川底溝の中に堆積した土層は基盤層と同様の砂を主体とするため、識別が比較的困難であるが、砂の堆積中に部分的に粘土層が挟まっている状況が認められたことから、再堆積した砂層であると判明した。

川底溝の堆積は比較的短期間に進んだとみられる。川底溝の最深部からも6世紀後半の遺物が出土することから、Ⅶ b 層の堆積は6世紀後半に始まったことが知られる。ただし、川底溝から出土する遺物の量は比較的少なく、SX05に典型的にあらわれているように面をなして出土することもなかった。

川底溝が埋没した後、標高-1.9m~-2.0m程度で伊場大溝の底面形状が平坦になる段階が認められる。激しい水流が一段落し、比較的穏やかな流れに変わったことをうかがわせる。川底溝が埋没した段階において、伊場大溝の底面に極めて大量の遺物が堆積している。円頭大刀が出土したのもこの段階の層位であり、円頭大刀の埋没とほぼ同時期にSX05といった土器集積も形成されている。

(3) 遺物の出土状態

出土位置の傾向 Ⅶ b 層の出土遺物は、底面に集中する傾向が強い。SX05の出土状態に典型的に示されるように、伊場大溝の底部に張り付く状態で多くの土器が出土したことが分かる。Fig.11には、発掘調査中にⅦ b 層から出土したと認識した遺物のうち、出土位置を記録したものの平面分布を示した。この図において、底面から離れた位置から出土している遺物は、下層(Ⅷ層)もしくは上層(Ⅶ a 層)に含まれていたものであった可能性を考慮してもよいだろう。南側に偏って出土した遺物(225、302、341、352、490、574など)はⅧ層、北側に偏って出土した遺物(245、254、384、447、583など)はⅦ a 層から出土したものとして捉える方が妥当かもしれない。

土器 Fig.11に示されているように、Ⅶ b 層中の遺物の多くは伊場大溝の底面に集中して出土した。最下部の川底溝から出土する遺物量は比較的少ないが、出土位置を明確に記録した資料がある。

Fig.11に示した出土位置を記録した土器のうち、川底溝から出土したものは、148(-2.2m)、174(-2.2m)、205(-2.2m)、424(-2.1m)、493(-2.4m)、509(-2.2m)である(パーレン内の数値は出土地点の標高)。148、174、205といった6世紀後半の須恵器がみられることから、川底溝の埋没時期は6世紀後半代であることが確実である。

川底溝が埋没した後、伊場大溝の底面が平坦になり、大量の土器が堆積する。その時期は古墳

時代後期後半（6世紀後半）であるが、の中には弥生時代後期から古墳時代前期の土器が混入している（Fig.13・14）。これら伊場大溝形成以前の土器は、周囲の集落から流れ込んだものと捉えられよう。また、VIIb層の形成によってVIII層が大きく破壊されており、VIII層中に含まれる遺物も数多く混入している。VIIb層中に含まれる古墳時代中期後葉（5世紀後葉）から後期前半（6世紀前半）の土器は、VIII層中に含まれる土器が混入したものと捉えられよう。

伊場大溝底面から出土する土器には、完形もしくは完形に近い状態のものが多くみられる。人為的に伊場大溝内に土器を沈めたものも含まれているとみられるが、土器を並べたような出土状況は認められない。比較的土器がまとまって出土したSX05においても、土製支脚が混在する状況が認められ、特別な祭祀行為を土器の出土状態から復原することは難しい。

その他の遺物 VIIb層から出土する土器以外の出土遺物には、別冊で詳述する円頭大刀のほか、玉類や土製品、輪羽口、鉄滓、砥石、木製品などがある。これらの遺物は、大量に出土する土器の中に混ざって出土しており、特定の種類のものが集中しているような傾向は認められない。なお、玉類については、目視できるものについて採集したのち、周辺の埋土を取り上げ、篩いがけをした。しかし、篩いがけによって得られた玉類はごく僅かである。玉類の分布は散漫であるが、伊場大溝底面から満遍なく出土していることを指摘できるにすぎない。

（4）伊場大溝形成以前の遺物

概要 Fig.13・14にVIIb層に含まれる、弥生時代後期から古墳時代前期の遺物を示す。多くは、弥生時代後期（山中様式期）から終末期（欠山様式期）にかけての遺物で、伊場大溝によって破壊された弥生時代の集落に伴うものである。また僅かながら、古墳時代前期に降る土器（S字甕）も知られる。

出土遺物 1～13は壺である。在来の特徴をもつもののほかに、菊川式土器（9・10）、および、南関東系土器（11）が知られる。11は壺の肩部に相当する。円形浮文に比較的大きな工具によって刺突文が施されている。



Fig.12 銅鏡

15～22は高坏である。山中式系統のもの（15・16）と欠山式系統のもの（17）の双方が認められる。14は大型の鉢、23・24は小型の壺、25・27は小型直口鉢である。26は壺の蓋で、摘みと比べて円形部が小さい。

28～48は甕である。口縁形態には多様性があり、く字甕（28）、受口甕（31～34）、S字甕（35～48）が認められる。S字甕には製作時期の差があり、A類（35）、B類（36～38）、C類（39～47）の各種が知られる。S字甕C類は古墳時代前期に降るものであり、この時期の遺物が出土する意義については後述したい。

49は扁平片刃石斧である。いわゆる赤チャートを用いたもので、ほぼ完形である。石材の特徴から駿河地域から

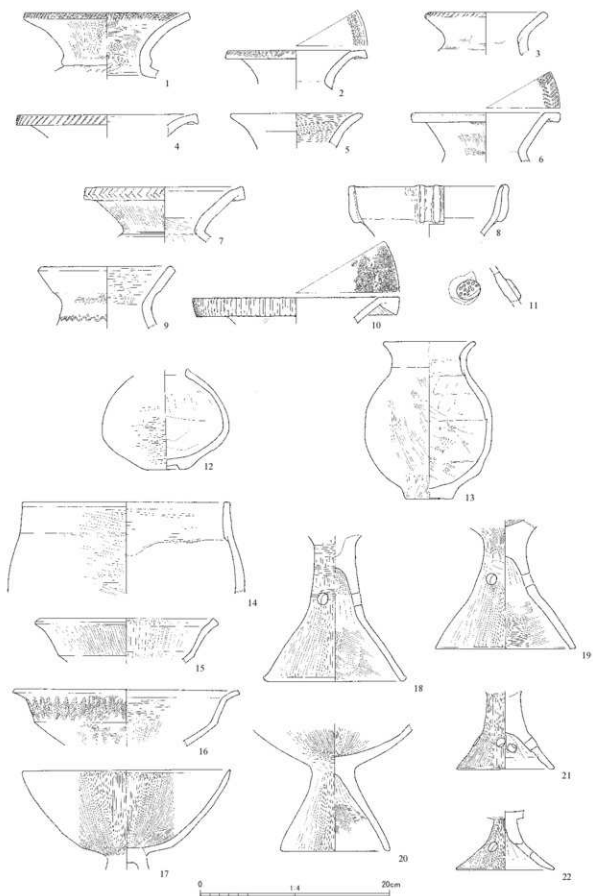


Fig.13 伊場大溝形成以前の遺物 (1)

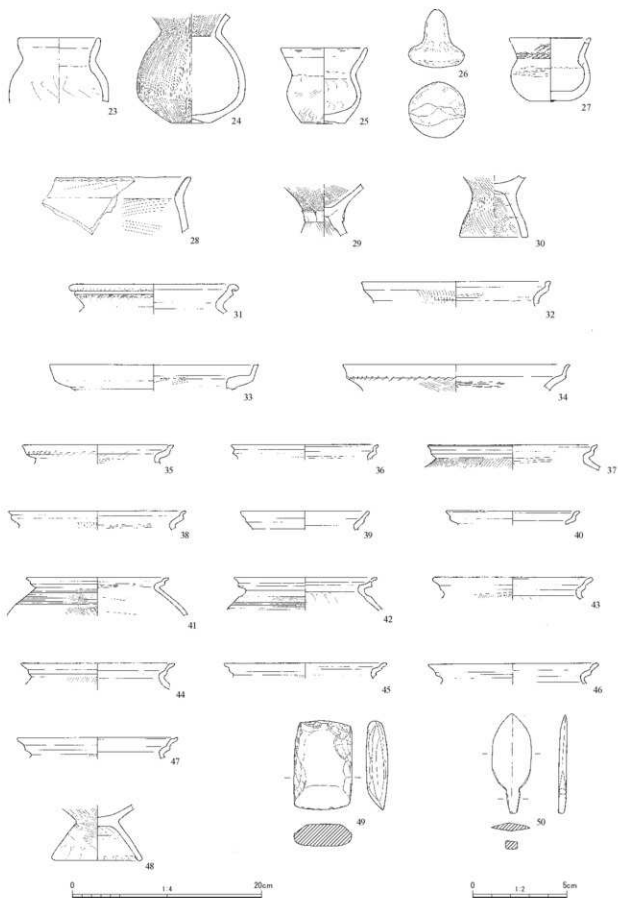


Fig.14 伊場大溝形成以前の遺物 (2)

の搬入品とみられる。50 は銅鍬である。鍬身部は柳葉形を呈しており、主軸方向に錆がみられる。茎は短く、断面は長方形を呈している。茎の表面は鍛造されたような変形の痕跡が認められる。

小 結 古墳時代前期の遺物が伊場大溝から出土することに対しては、伊場大溝の形成時期を示す遺物として捉える見方と、伊場大溝によって破壊された遺構や包含層に伴う土器として捉える見方がある。今回の調査の状況では、古墳時代前期に属する遺物は全体量から比べてごく僅かであること、出土状態にまつた状況がみとめられないことから、伊場大溝によって破壊された遺構や包含層に伴っていた遺物と解釈することが妥当だといえる。別冊で紹介した弥生時代の集落の状況でも、集落の衰退後に、僅かながら古墳時代前期に降る遺物が出土している。

(5) 土器集積 SX05

遺物出土状態 (Fig.16) SX05 は伊場大溝Ⅶb層の底面に形成された土器集積である。土器がまとまって出土しているのは-1.7m ~ -1.9mの高さであり、その広がり東西6m、南北4mほどである。土器の集積度は非常に高く、隙間無く遺物が広がっている状況である。土器の出土状態は破片も多いが、須恵器の灯蓋・坏身を中心に完形のものも目立つ。また、出土量は僅かであるが、輪羽口や鉄滓が出土している。小破片の土器や輪羽口、鉄滓などは混入品である可能性があるため、すべての出土遺物を SX05 本来の帰属物として捉えないほうがよい。また、時期が異なる遺物も若干ながら出土している。完形の土器が多いこと、出土品の主体的な帰属時期がほぼ限定できることなどを積極的に評価すれば、土器集積 SX05 出土遺物は、なんらかの儀礼に伴い川底に沈めた土器群と捉えることもできる。

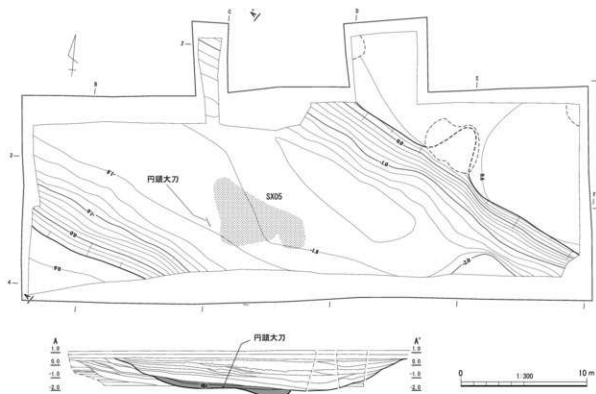


Fig.15 SX05 の位置

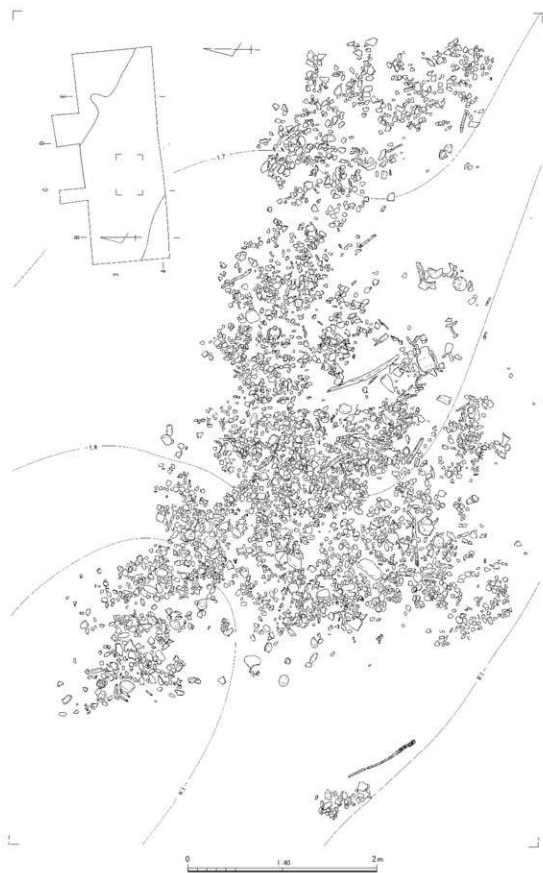


Fig.16 SX05 遺物出土状態

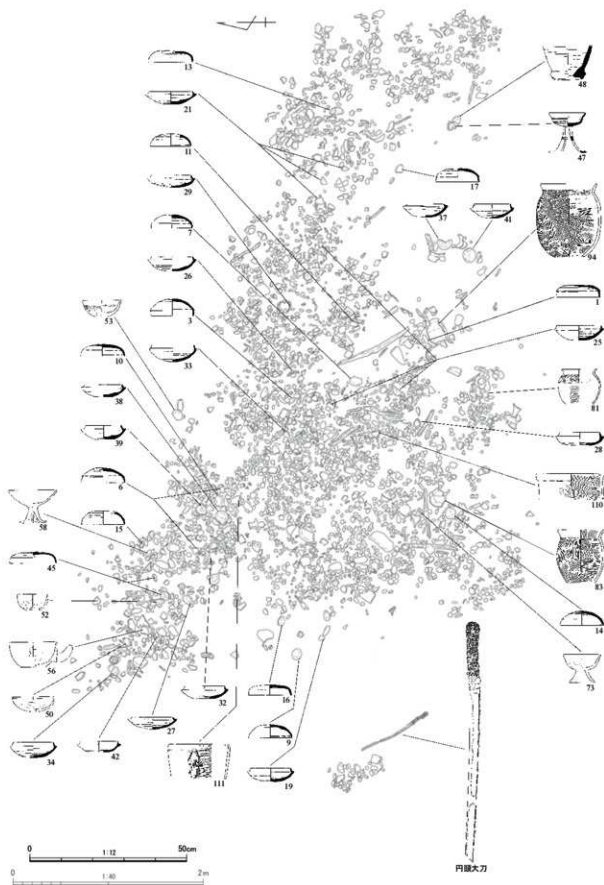


Fig.17 SX05 出土遺物対照図

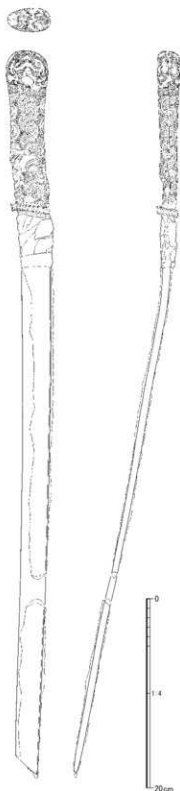


Fig.18 円頭大刀実測図

円頭大刀 (Fig.18) 詳細は別冊『円頭大刀編』において紹介する。SX05の西側約1mの地点で出土した。完形の大刀を鞘から抜いた状態で川底に沈めたものである。SX05との共存関係は厳密でないが、出土位置や層位から考えると、遺物を廃棄した同時代性は認めてよいだろう。

金銀装円頭大刀は、全長76.5cmで、刀身の鉄部分の破損が著しい。柄頭と柄間は木芯金銀張りで、柄頭には龍文、柄間には連続波頭文が彫りだされている。柄頭には金板、柄間には銀板が遺存しているが、柄頭には補修の痕跡が認められる。

SX05 出土遺物 (Fig.19～22) 1～49は須恵器である。SX05 出土遺物の図示した須恵器のうち、およそ9割が坏蓋・坏身であり、その組成が特異なものであることが理解できる。45は高坏の蓋、46・47は無蓋高坏、48は鉢、49は甕である。坏蓋・坏身の1や18など、古墳時代中期に遡るようなものが若干、認められるが、大部分は時期的なまとまりがあるといえよう。古い時期の須恵器はⅦ層からの混入品として捉えることも可能である。SX05から出土した須恵器の中心的な時期は陶邑編年のTK43型式期、実年代でいうなら6世紀後半とみられる。

50～114は土師器である。土師器も51や81など、若干古い時期に遡るものがあるが、主体的な時期はTK43型式期としてみて矛盾はない。

115・116は幡羽口、117～119は鉄滓である。いずれも小破片であり、SX05に本来伴うものかは不明である。120・121は凝灰岩製の砥石、122は先端を加工した棒状品である。

小 結 SX05はⅦb層のある時期の底面に形成された土器集積である。完形の土器が多いことから何らかの儀礼に伴って川底に沈められたとみることもできるが、土器集積中に混入したとみられる遺物も多い。出土遺物の時期は比較的まとまっている。その時期は、陶邑編年におけるTK43型式期とみられる。実年代では6世紀後半に相当するだろう。この土器集積の1mほど西からは円頭大刀が出土している。円頭大刀と土器集積は一連のものと捉える保障は無いが、出土位置が近いことから同時代性は認めてよいだろう。SX05の年代観によって、円頭大刀の廃棄年代をTK43型式期とすることができる。また、SX05を儀礼に伴う土器集積と解釈するなら、円頭大刀を川底に沈めた行為との関連を認めることもできる。

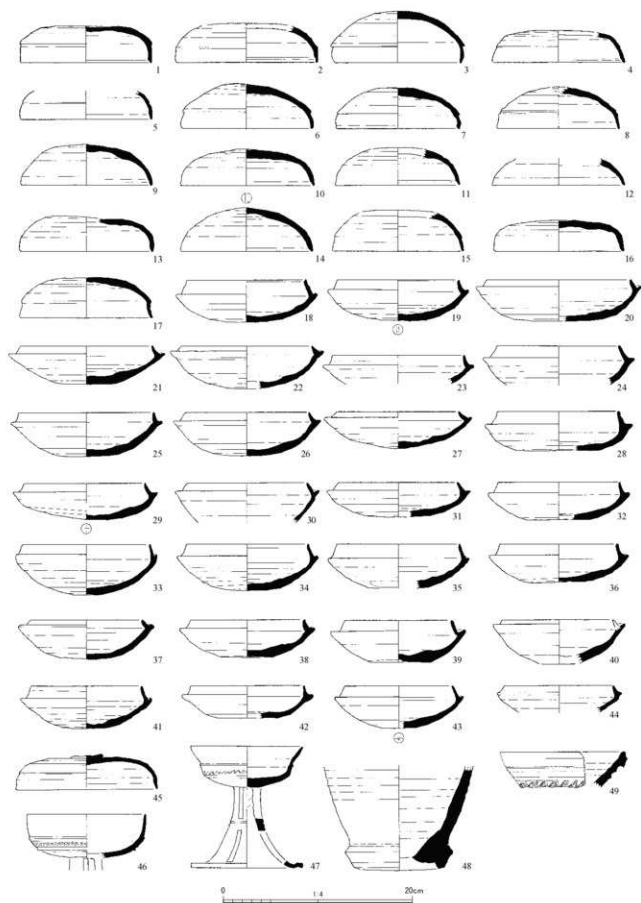


Fig.19 SX05 出土遺物 (I)

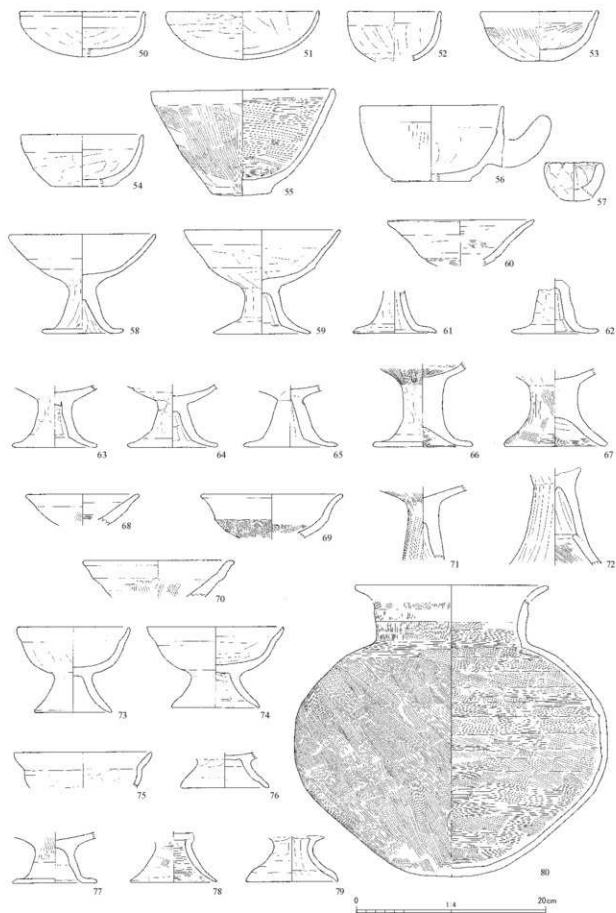


Fig.20 SX05 出土遺物 (2)

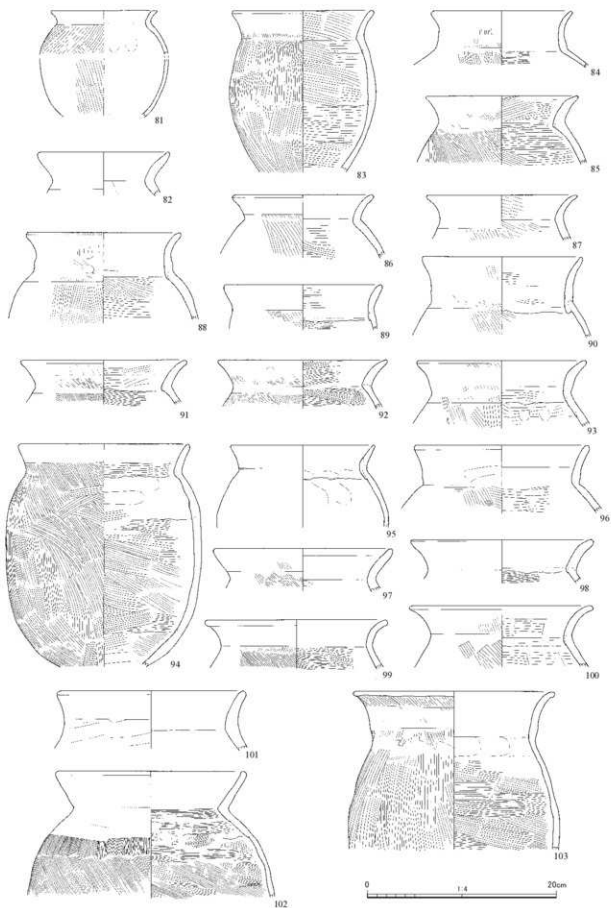


Fig.21 SX05 出土遺物 (3)

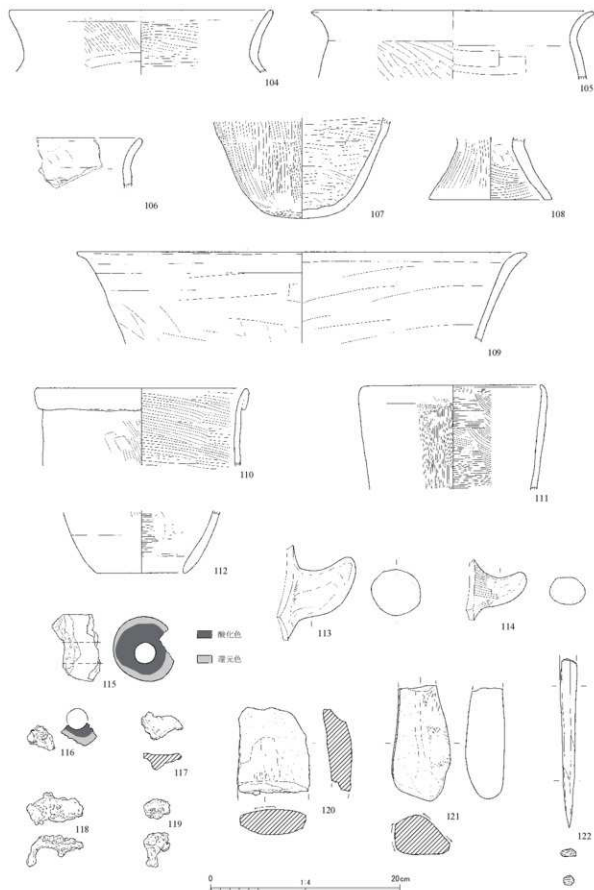


Fig.22 SX05 出土遺物 (4)

(6) VII b 層出土遺物

概要 Fig.23～44 に VII b 層から出土した遺物を示す。VII b 層から出土した遺物のうち、図示したものは 563 点 (SX05 出土遺物を含む) と 685 点、弥生時代の混入品まで含めると 735 点) である。以下、須恵器 (123～293)、土師器 (294～627)、土製支脚 (628～632)、玉類 (633～642)、土製品 (643～651)、漆が付着する土器 (652)、輪羽口・鉄滓 (653～657)、砥石・叩石 (658～670)、木製品 (671～685) の項目に分けて紹介する。

須恵器 (Fig.23～27) 123～293 は VII b 層から出土した須恵器である。坏蓋・坏身 (123～222) の比率が多いが、高坏 (223～246)、広口壺 (247～254)、長頸壺 (255～263)、短頸壺 (264～268)、甕 (269～274)、提瓶 (275・276)、横瓶 (277)、甕 (281～293) などの器種が認められる。帰属時期が明瞭な坏蓋・坏身 (123～222) に注目すると、123～138、175～189 といった古墳時代中期後葉～後期前半に遡る形態が一定量含まれることが分かる。これらの遺物は、下層にある VIII 層からの混入品であると評価できる。VII b 層から出土する坏蓋・坏身の中心的年代は、陶邑編年における TK43 型式期 (遠江 III 期中葉) にあると評価できる。坏蓋・坏身以外の土器においても、この年代観から大きく矛盾するものはない。以下、特徴的な事柄について触れておきたい。

古墳時代中期に遡る坏蓋・坏身の時期については、123 や 175 は TK208 型式期に、124～127 や 176～179 は TK23～47 型式期にそれぞれ位置づけることができる。後述する無蓋高坏 225 も TK208 型式期に位置づけられ、伊場大溝出土須恵器の時期は TK208 型式期を大きく遡らないことが明確になった。これら古墳時代中期の遺物は本来、最下層の VIII 層に含まれることから判断すると、伊場大溝の形成期は、TK208 型式期、実年代では 5 世紀後葉頃と捉えられる可能性が指摘できる。

古墳時代中期に遡る須恵器はほとんどが大阪府陶邑産とみられるが、製作時期が若干降ると東海地方産の須恵器がみられるようになる。尾張系といえる坏蓋・坏身には、132、138、186 などが知られる。また、遠江産の須恵器で生産地が比較的明瞭なものとして、132 (湖西市峠場壺産)、180 (袋井市衛門坂壺産) などがあげられる。

高坏 (223～246) は、無蓋高坏 (225・226) や有蓋高坏 (224) など VIII 層からの混入とみられる製品が多い。また、半球形状の坏部をもつ個体 (243、244) には、若干新しい傾向を認めることができるだろう。なお、246 は、同時期の土師器高坏に似た形態をなしているやや特殊な形態である。

広口壺 (247～254) にも、VIII 層からの混入品を多く認めてよい。254 は短い口縁部に球形の胴部をもつ特異な形態である。器壁は総じて厚いが、全体の厚みは不揃いである。外面はタタキによって調整されているが、内面はナデの痕跡が明瞭である。現地調査の地点では VII b 層に帰属する遺物と判断したが、出土位置からは、VII a 層 (飛鳥時代) に伴っていた可能性もある。

278 は、小型の壺の蓋と考えられ、上面に細かな刺突がみられる。279 は把手付の碗とみられるが、把手の大部分と口縁、底部を欠損しており、全体的な形状が不明確である。280 は器台状の脚部であるが、上端部が外側に彎曲している。脚付の壺の脚部である可能性もあるだろう。

土師器 (Fig.28～41) 294～627 は VII b 層から出土した土師器である。内彎坏 (294～315)、台形鉢 (316～320)、模倣坏 (321～340)、有稜坏部高坏 (341～405、409～416)、長脚高坏 (406

～408、417～432)、鉢形坏部高坏(433～466)、二重口縁壺(467～474)、折返口縁壺(475～482)、長頸壺(485～491)、鉢(494～512)、甌(513～532)、甕(533～627)などの器種が認められる。土師器についてもⅧ層から流れ込んだ古墳時代中期後葉から後期前半の遺物が混入しているが、概ね古墳時代後期前半頃に時期的な中心があるとみてよい。以下、特徴的な事項について記す。

306の内罫坏には外面に丁寧なミガキ調整がなされている。駿河からの搬入品の可能性がある。模倣坏は蓋模倣(321～329)と身模倣(330～340)の双方が認められる。321の模倣坏は精良な胎土を用い焼成も良好である。遠方地域からの搬入品の可能性がある。

有稜坏部高坏には341・342など中期に遡る形態のものが含まれるが、大多数が後期的形態といえる。脚部内面を中空にするもの(363～402)と、中実にするもの(409～416)があり、後者には長脚化の傾向が認められる。長脚高坏は完形のものが知られないが、外反する坏部をもつ406～408が相当するだろう。鉢形坏部高坏には、口縁端部がく字形に明確に屈曲するもの(433～443)と屈曲が不明瞭なもの(444～449)が知られる。後者の坏部には、446など模倣坏状の形態をなす個体がみられる。

二重口縁壺(467～474)や折返口縁壺(475～482)、長頸壺(485～491)などは古墳時代中期から後期前半の形態であり、Ⅷ層からの混入品と捉えることができる。485の長頸壺や、鉢(494～512)の中に底部に龍目を残すもの(496・502・504)がある。龍目を残す製作技法も古墳時代中期的な特徴である。

甌(513～532)は胴部が短く、底部の開口部はすべて単純である。また、口縁端部を折り返すものが多い。形態の特長からは、Ⅷb層の埋没時期である後期前半に中心があることを示している。

甕(533～627)の中には宇田型甕(533・534)が認められ、後期前半以前の個体が少なからず混入していることを示している。

535は完形の台付甕であるが、厚い造りの脚台部をもち、イタナデもしくはナデ調整されている点で特異である。関東地域などからの搬入品の可能性があるが、その故地は明確にできない。Ⅷb層からは608～625に示すように、台付甕の脚台部が一定量出土している。一般的に後期には台付甕が消滅するとみられているが、在来形態の台付甕がある時期まで残存している可能性が考えられる。

626や627は、高い温度を受けて変形した甕の口縁である。土器の器壁は発泡し、表面がひび割れている。

土製支脚 (Fig.41) 628～632は土製支脚である。土製支脚には、横断面が正方形のもの(628～630)と、円形のもの(631・632)の2種が認められる。628は遺存状態が良好で、表面には稲柄の圧痕が大量にみられる。土製支脚の製作時に、稲柄を混ぜ合わせたものと考えられよう。

玉類 (Fig.42) 633～642は玉類である。633～635、639はガラス製、636・638は滑石製、637は蛇紋岩製の小玉である。ガラス玉の色調は、635が水色、633、639が紺色、634が緑色である。640は蛇紋岩製、641・642は碧玉製の管玉である。640は両面穿孔、641・642は片面穿孔である。玉類には滑石製品が含まれることから、Ⅷ層中からの混入品が含まれる可能性が高い。伊場大溝の埋土の量が膨大であることに對して玉類の出土状態が散漫であるため、玉類の検出作業は粗くならざ

るをえなかった。本来はさらに多くの玉類が伊場大溝中に含まれているとみられよう。

土製品 (Fig.42) 643～651は土製品である。土製品には、紡錘車(643・644)、土鍾(645～651)がある。土製紡錘車のうち、643は直径3.5cm、644は直径4.3cmと若干の大きさの違いがある。

645は水滴形を呈した土製品で、頂点に偏った部分に穿孔がみられる。孔は紐ずれによる摩滅が顕著で、頂点の側面にも紐ずれの痕跡が残る。これらの使用痕跡から、孔に紐を通して使用していたことが判明する。想定できる使用方法から、645は土鍾であった可能性が高いだろう。

646～651は円筒形の土鍾である。646は直径1.4cm程度の小型の土鍾で、647～651は直径3～4cm程度の中型の土鍾である。651の表面には稲穂の圧痕が顕著である。

漆附着土器 (Fig.42) 652は漆が附着した須恵器の坏である。須恵器の坏を漆塗りの容器として使用したもので、数層にわたり漆が附着している。破片の断面にも漆が附着しており、土器が破損してから使用していたことが分かる。今回の調査では、上層のⅦa層においても、漆附着の須恵器(Fig.65・569・570)が出土している。

輪羽口・鉄滓 (Fig.42) 653は輪羽口が附着する鉄滓、654～656は輪羽口、657は鉄滓である。653は輪羽口が僅かに遺存しており、その延長上に鉄滓が附着している。輪羽口はいずれも暗灰色を呈する還元域と赤褐色を呈する酸化域が明確に観察できる。輪羽口・鉄滓は同じⅦb層のSX05からも出土しており、伊場大溝中ではこの層が最も出土量が多い。

砥石・叩石 (Fig.42) 658～669は砥石である。いずれも凝灰岩を使用したもので、側面形態が面的に整えられたもの(658・659・664)と自然石の状態を残すもの(660～663、665～669)の2者が認められる。658は一箇所の穿孔がみられるもので、提砥として使用されたものである。

670は輝緑岩製の叩石である。片側に使用痕が認められる。

木製品 (Fig.43・44) 671～685は木製品である。Ⅶb層から出土した木製品には、鋏(671～674)、木鍾(675～677)、櫓(678)、アカ取り(推定、679)、底板(682)、槽(684)、横櫓(685)などがあり、このほかにも不明品を3点(680、681、683)図示する。

671・672・674は、曲柄平鋏である。前二者はコナラ属アカガシ亜属を用いており、鉄製鋏先を装着していた痕跡が認められる。673は曲柄又鋏の一種とみられる。木材は曲柄平鋏と同様、コナラ属アカガシ亜属を用いている。実測図の復原線に示すように、本来は先端が3方向に分かれていたとみられるが、現状では中央の一本しか遺存していない。先端は角が切断されていて多角形状を呈している。

675～677は木鍾である。675・677はアスナロ属、676はモミ属を用いている。いずれも柱状の素材に抉りを彫り込んで成形しているが、形態や大きさは多様である。676の端面の一端は切断したままの状態で小口面が明確である。

678は櫓である。遺存長54.3cmであり、柄は欠損している。木材は、コナラ属アカガシ亜属を用いている。679はアカ取りの可能性が高いが、遺存状態が悪く形態の詳細は不明である。アカ取りと捉えた場合、把手から底面の先端まで遺存しているが、側面の殆どが欠損しているとみられる。

680は先端が加工された棒状品である。681は両端に三角形の切り欠きがみられる板状の製品で、両端は欠損している。682は円形の底板である。側板をあてるための溝や段がなく、曲物の底板と

は断定できない。むしろ刳物桶などの底板である可能性も考慮してよいだろう。底板側面が直接側面の部材に接合される構造である。底板側面には釘が打ち込まれた痕跡が7箇所みられる。また、底板表面には刃物があてられた痕跡が無数に残っている。683は先端に突起がみられる棒状品である。片側が欠損しており、種別の特定はできない。684は把手付の槽である。木材はアスナロ属を用いている。両側の短辺に把手が取り付けとみられるが、片方の把手は欠損している。

685は横櫓である。菌の大部分と本体の3分の2ほどを欠損している。木材は、ツゲ属ツゲを用いている。いわゆる刻菌式横櫓に分類できる形態である。本体部と菌部には僅かな段が彫りだされている。

年代 以上、VIIb層から出土した遺物を紹介してきた。弥生時代後期から古墳時代前期の遺物(FIG.13・14)は明らかに周囲の集落からの混入品と認定できるが、VIII層から混入したとみられる古墳時代中期後葉から後期前半の土器にかんしては、それ以後の時期との連続性が高く、VIIb層本来に含まれる遺物との分離は難しい。VIIb層から出土する遺物の主体的な時期は古墳時代後期後半(6世紀後半)といえることができるが、若干の時期幅をもって捉えておく方が妥当である。

よって、土器以外の土製品や石製品、木製品についても古墳時代中期後葉まで遡る可能性は否定できない。いっぽうで、VIIb層出土遺物には飛鳥時代に降るものがみられないので、年代の下限は古墳時代後期後半と捉えてよいだろう。

(7) 小 結

鳥居松遺跡5次調査で確認できた伊場大溝各層出土遺物のなかでも、VIIb層から出土した遺物が最も数が多く、種類も豊富である。弥生時代の遺物や下層のVIII層に伴う遺物が混入していることもあるが、VIIb層の埋没時期を示す古墳時代後期後半(6世紀後半)に属する遺物が極めて多いことにはかわりない。さらに、VIIb層出土遺物の時期を絞り込むと、後期後半の中でも比較的古い時期、TK43型式期にその中心があるとみられる。

VIIb層の最下層に刻まれた川底溝から出土する遺物は少ないが、148、174、205といった6世紀後半の須恵器がみられることから、川底溝の埋没時期は6世紀後半代であることが確実である。川底溝の埋没年代にかんしては、梶子遺跡9次調査時の所見と同様であり、1kmほど離れた上流部と下流部において、ほぼ変わらない状況を示す調査結果が得られたといえる。

伊場大溝は、古墳時代後期後半(6世紀後半)の比較的古い時期に、膨大な水量が流れ込み新たな流路が形成されたとみられる。川底溝の存在は、その水流の激しさを物語るものといえよう。その後、川底溝は急速に埋没し、水流が安定した段階で大量の土器が川底に埋まった。円頭大刀や土器集積SX05をはじめ、VIIb層出土遺物の大多数がこの段階で埋没したものである。

短期間のうちに極めて大量の土器が埋没した理由は何か。伊場大溝の新たな流路が同時期の集落を破壊し、遺物が伊場大溝内に堆積したことも考慮できるが、円頭大刀の出土にみるように、伊場大溝に対してなんらかの儀礼行為がなされたことは確実である。VIIb層から出土する土器についても儀礼に伴って川底に沈められたものが含まれる可能性を指摘しておきたい。とくにSX05の主体的な遺物はその可能性が高いものとして評価できるだろう。

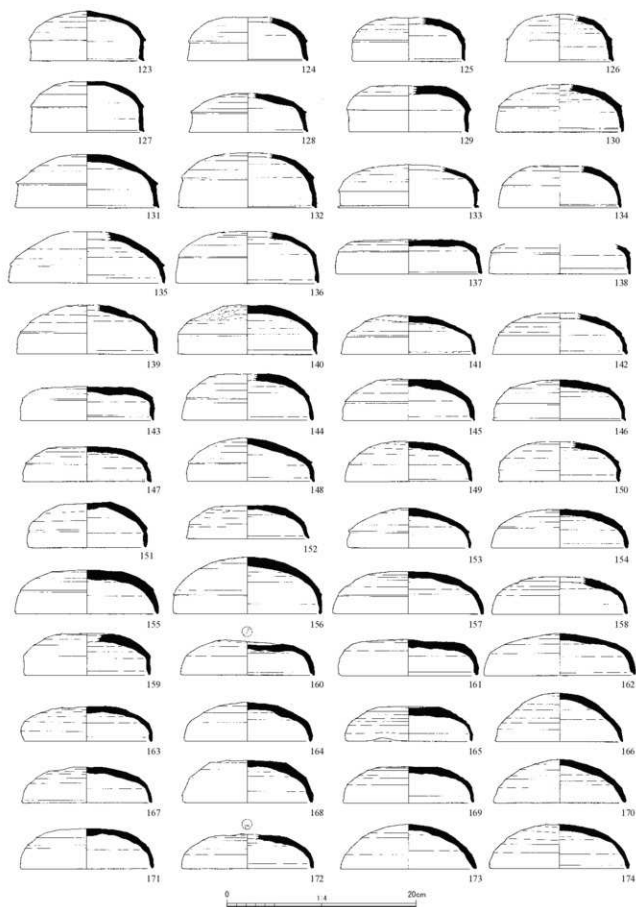


Fig.23 VI b層出土遺物 (1)

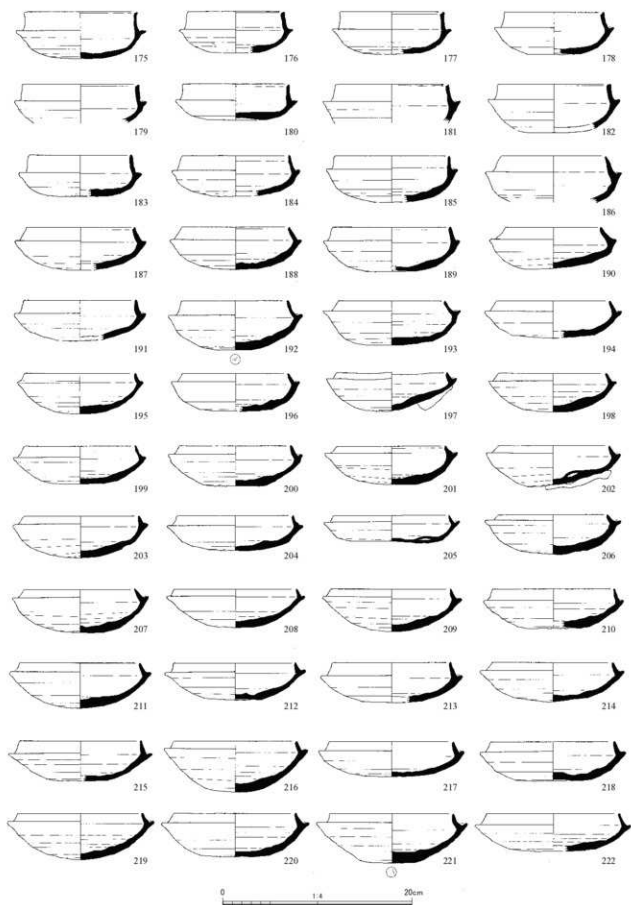


Fig.24 VI b 層出土遺物 (2)

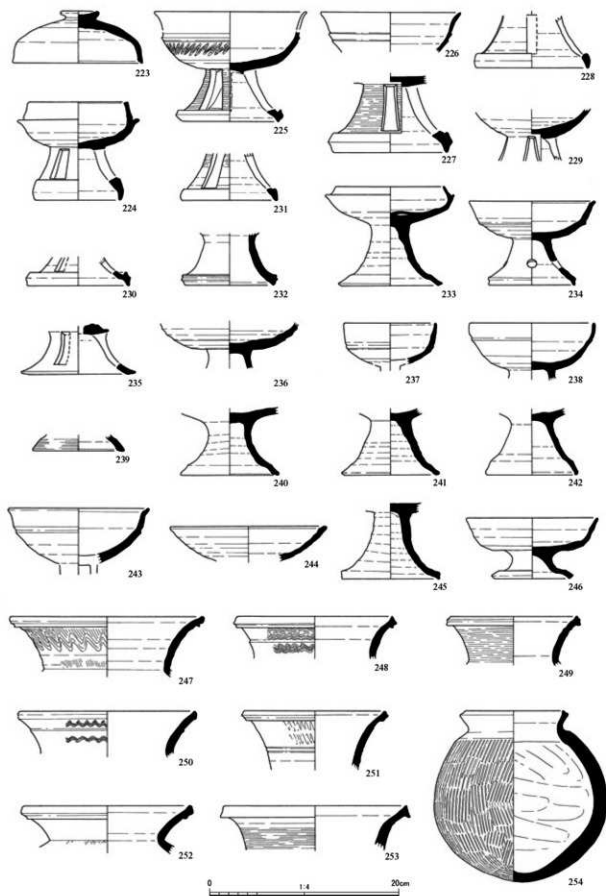


Fig.25 VII b 層出土遺物 (3)

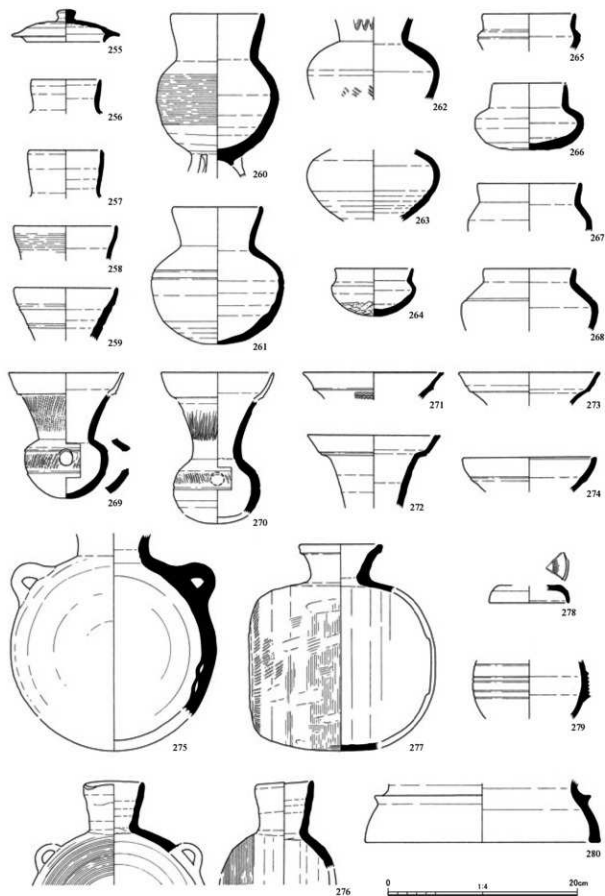


Fig.26 VII b 層出土遺物 (4)

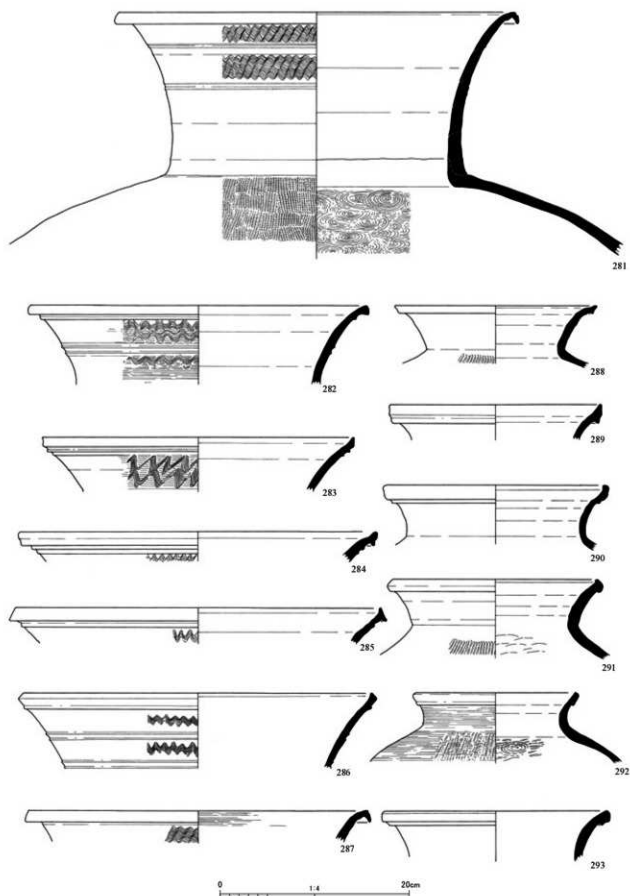


Fig.27 VII b 層出土遺物 (5)

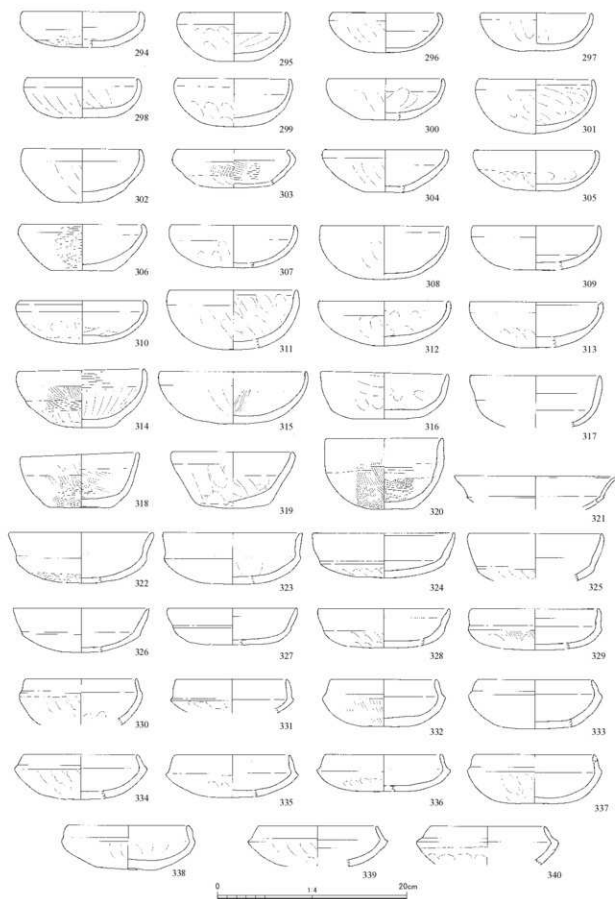


Fig.28 VII b 層出土遺物 (6)

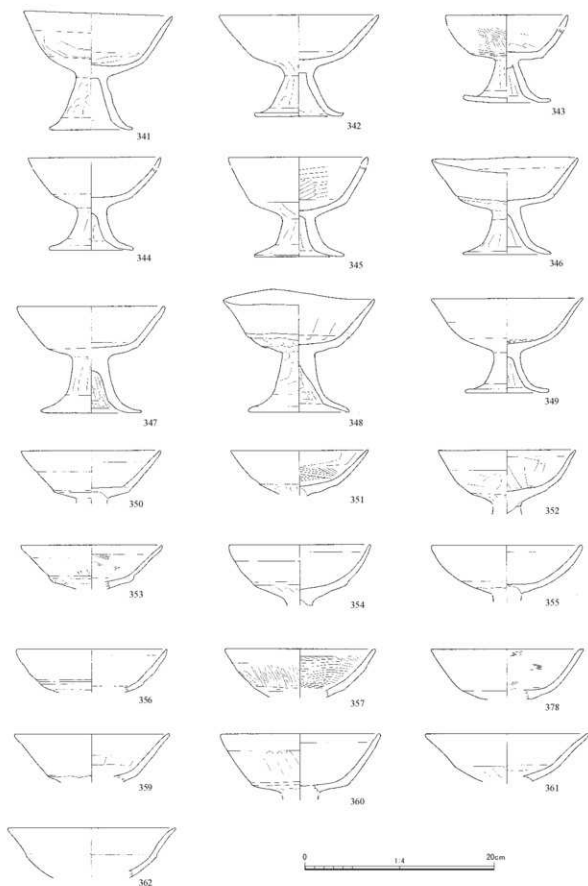


Fig.29 VII b層出土遺物 (7)

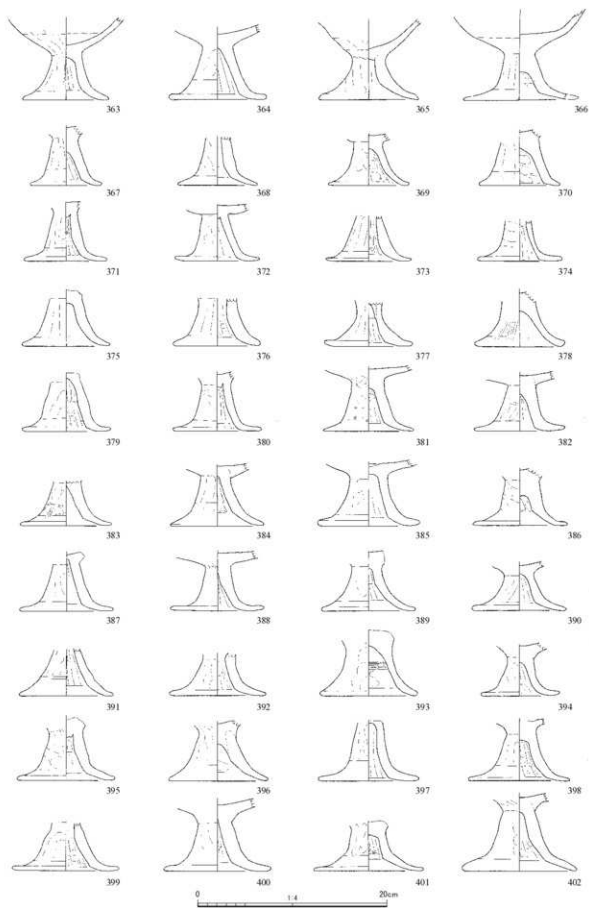


Fig.30 VII b 層出土遺物 (8)

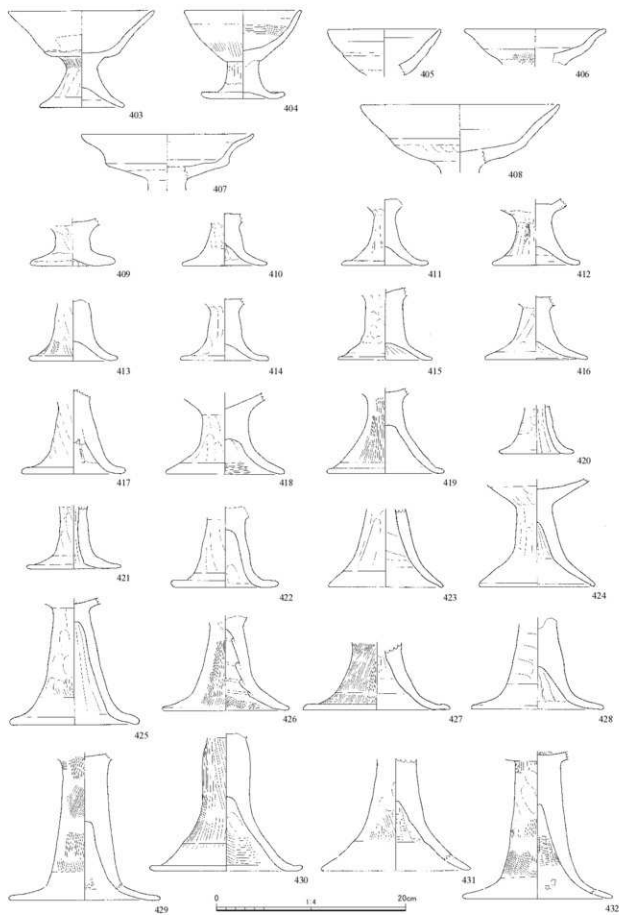


Fig.31 VII b層出土遺物 (9)

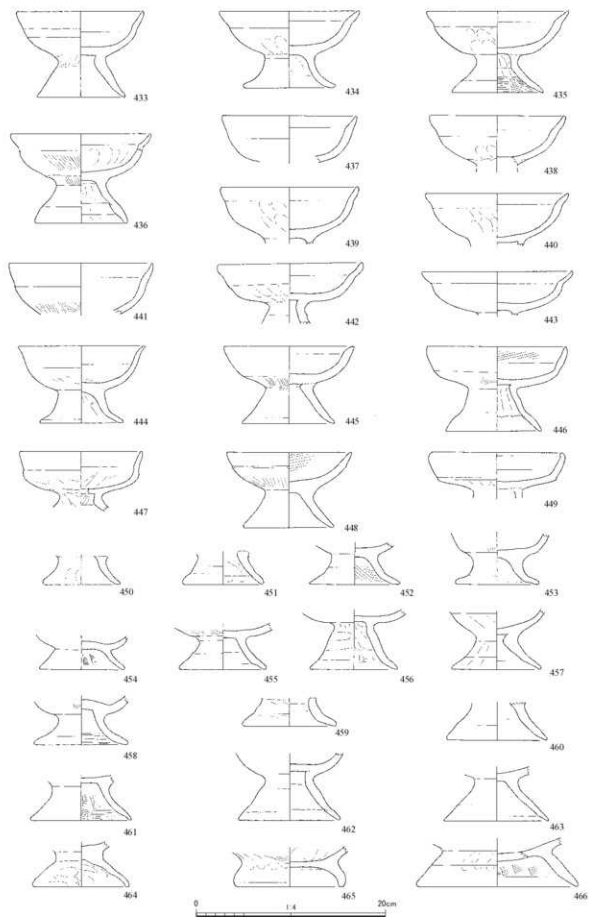


Fig.32 VI b層出土遺物 (10)

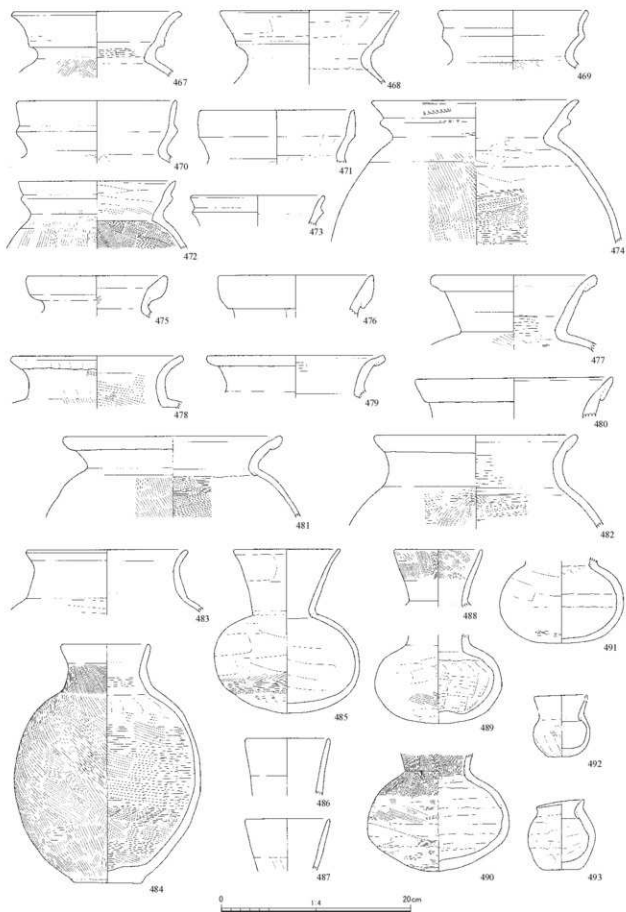


Fig.33 VII b層出土遺物 (11)

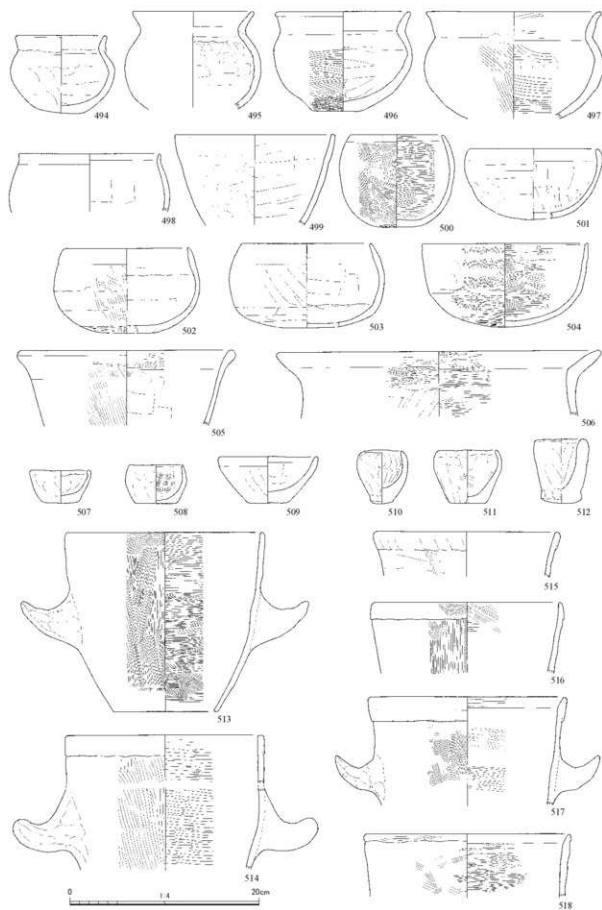


Fig.34 VI b層出土遺物 (12)

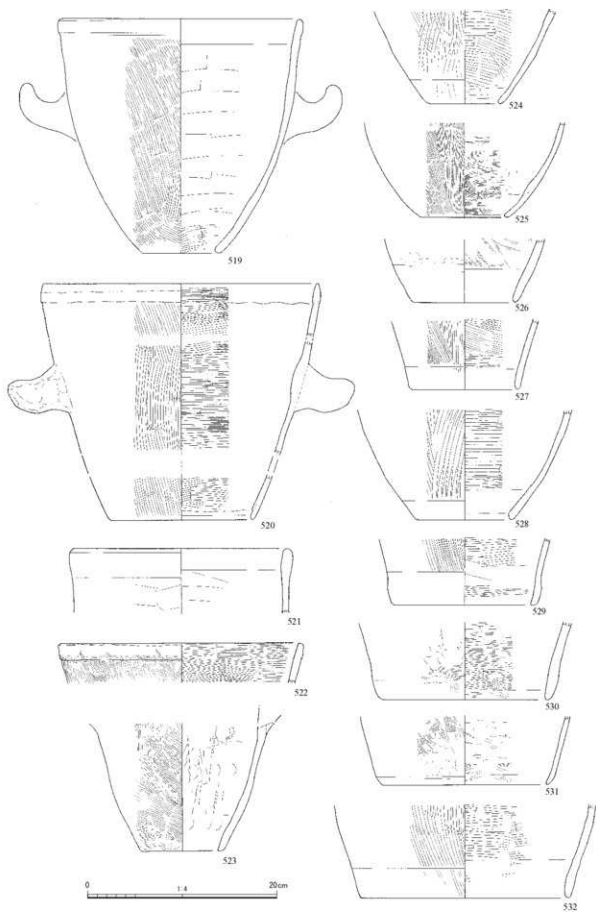


Fig.35 VI b層出土遺物 (13)

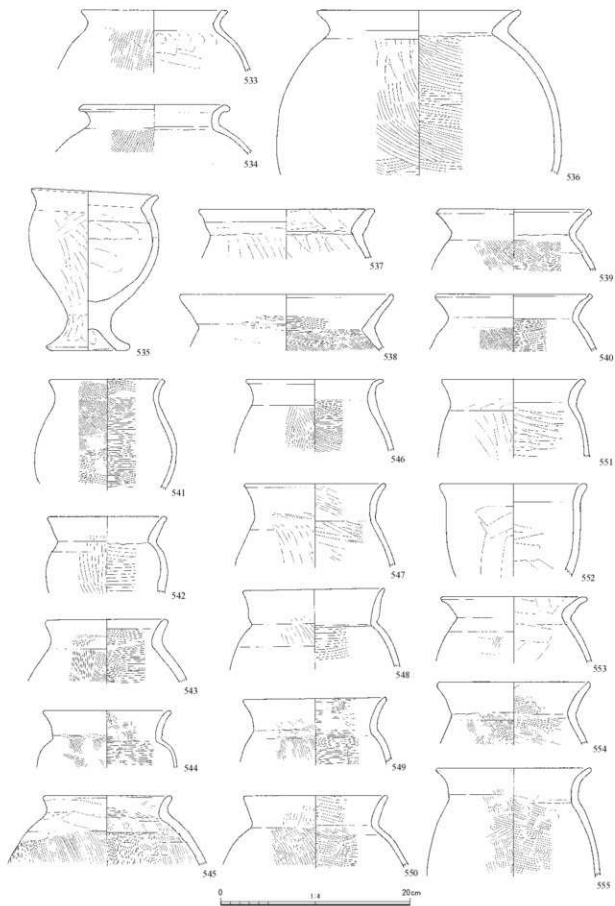


Fig.36 VI b層出土遺物 (14)

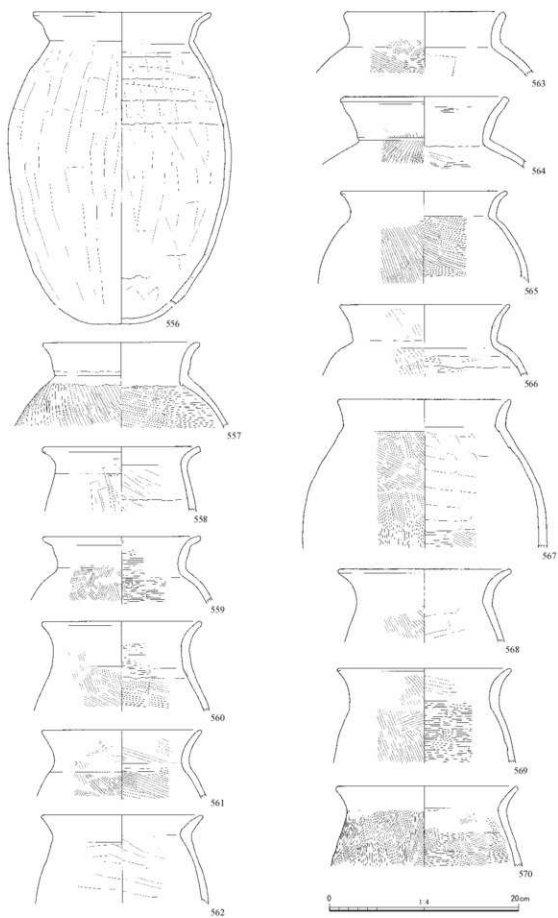


Fig.37 VI b層出土遺物 (15)

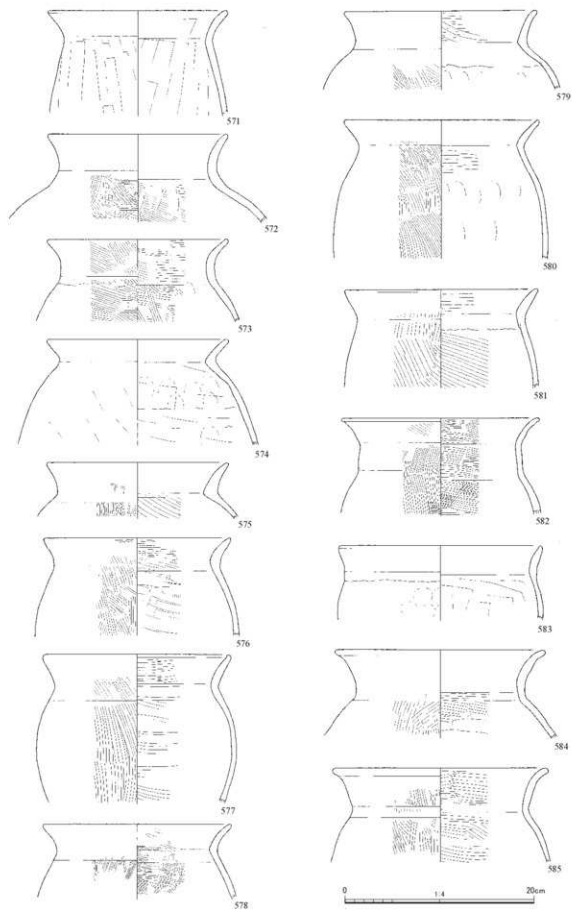


Fig.38 VI b層出土遺物 (16)

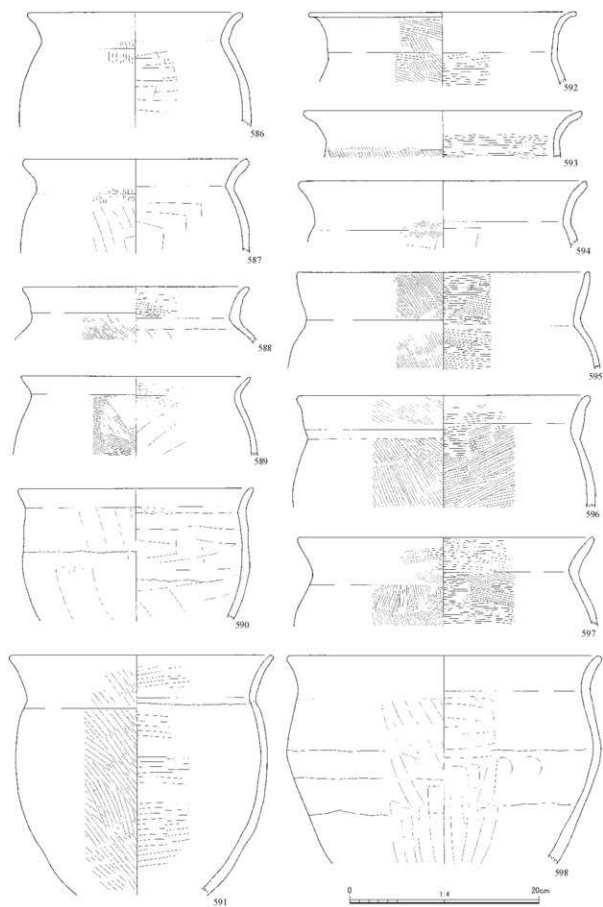


Fig.39 VI b層出土遺物 (17)

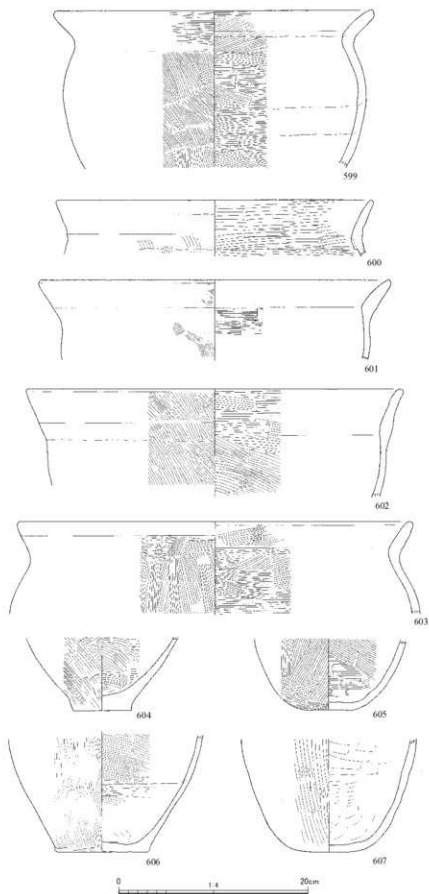


Fig.40 VI b層出土遺物 (18)

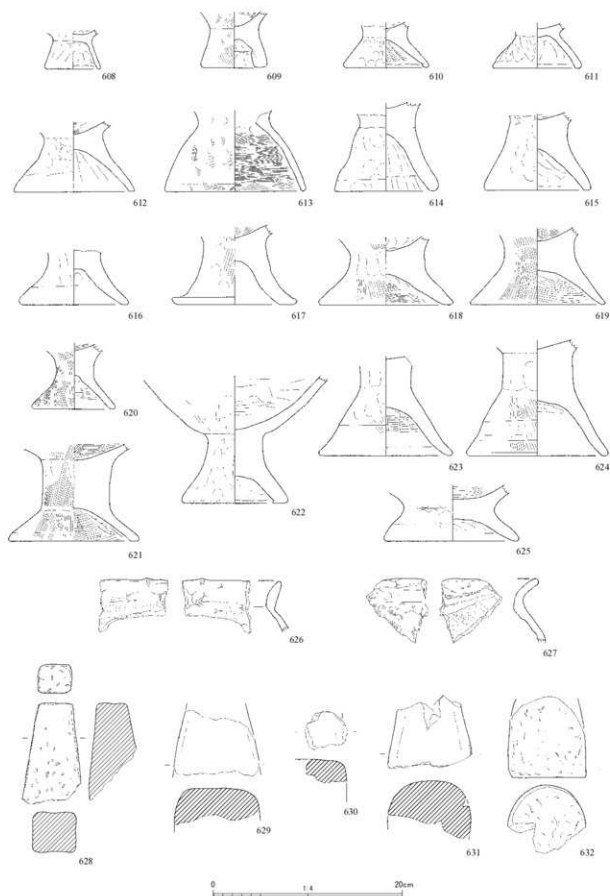


Fig.41 VI b層出土遺物 (19)

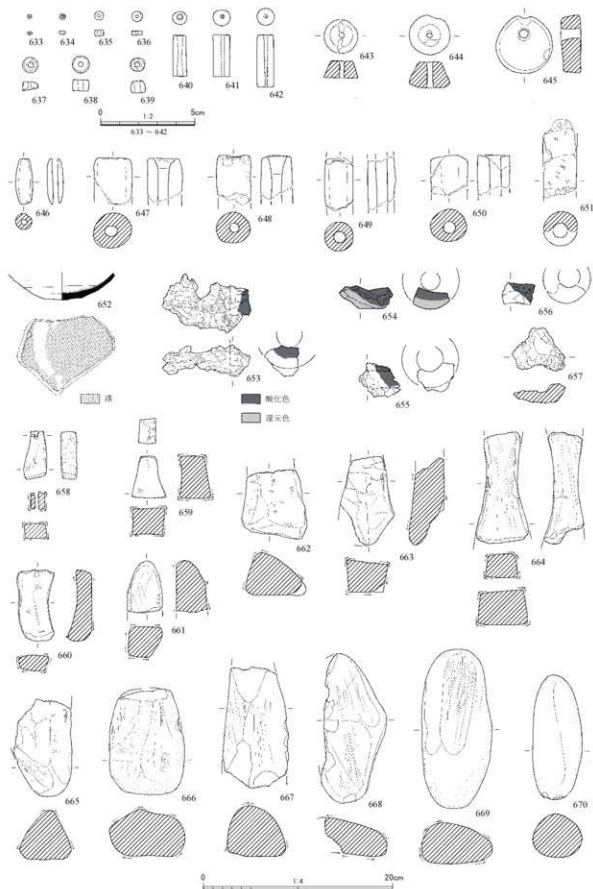


Fig.42 VI b層出土遺物 (20)

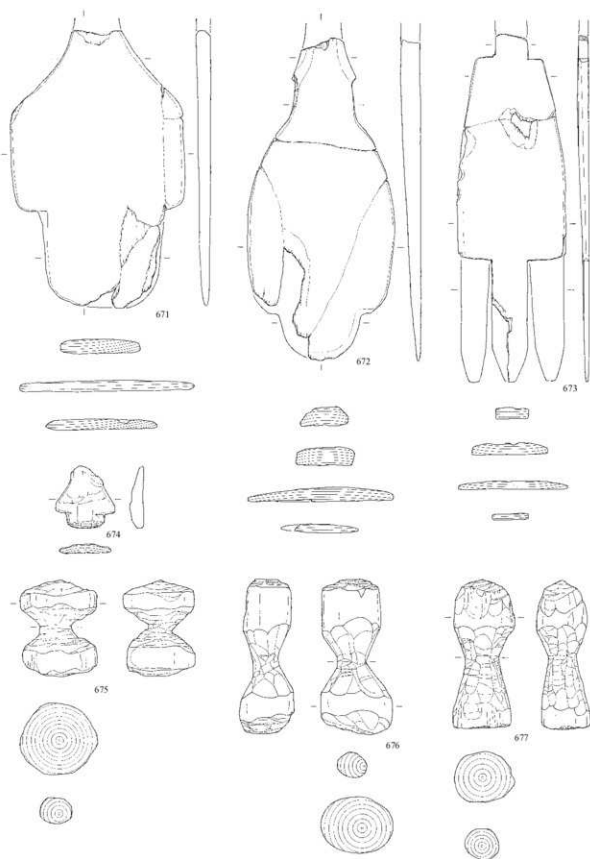


Fig.43 VI b層出土遺物 (21)

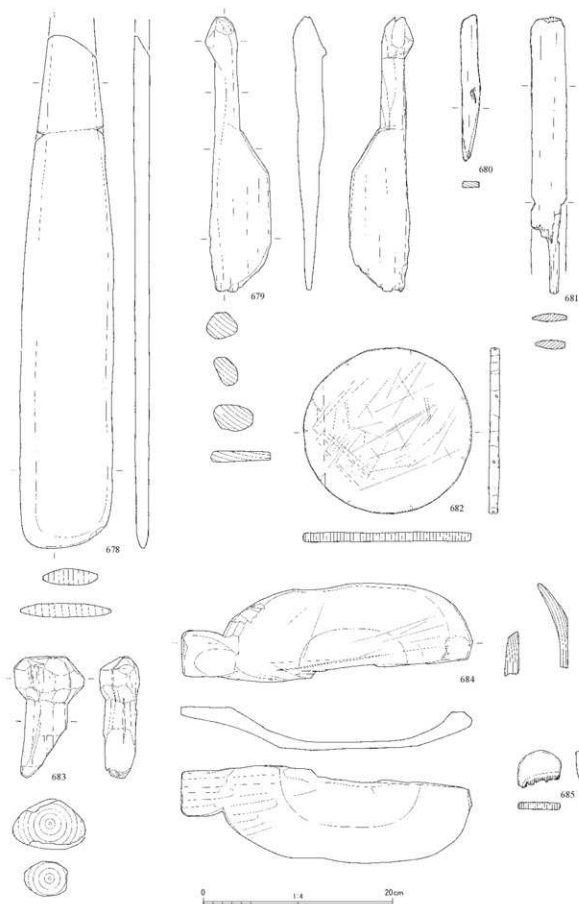


Fig.44 VI b層出土遺物 (22)

3 VII a 層の調査

(1) VII a 層の概要

VII a 層は、灰色粘土層と砂層が交互に堆積した地層で、飛鳥時代（7世紀）に堆積した。VII b 層の堆積後、再度、伊場大溝の流路が更新され、VII a 層の堆積が始まっている。調査区では北側に流路を移しており、伊場大溝の北側斜面から底面にかけての形状は、飛鳥時代になって新たに掘り込まれたものである。この段階の流路変更は大規模なものではなく、僅かな移動である。

出土遺物は、大量の土器のほかに、耳環や円形銅板などの金属製品や、木製品が含まれる。木製品には斎串や馬形などの祭祀具が含まれ、伊場遺跡群における初期官衙の形成を物語っている。

(2) 伊場大溝の形状

VII a 層が堆積した伊場大溝の本来の形状がうかがえる部分は、北側斜面の -1.0m 以下の部分から川底を挟んで南側斜面の 0.0m 以下の部分である。底面の標高は -1.8m ~ -2.0m で若干の起伏がある。VII a 層中の砂層は水平堆積ではなく、南側斜面に貼り付くように北に向かって下がる傾斜をもって堆積している。伊場大溝の最深部は北側斜面に偏っており、斜面の傾斜も北側が急で南側は比較的緩やかである。北側が攻撃斜面にあたり流れが激しく、これに対して南側の流れは比較的穏やかであったとみられよう。

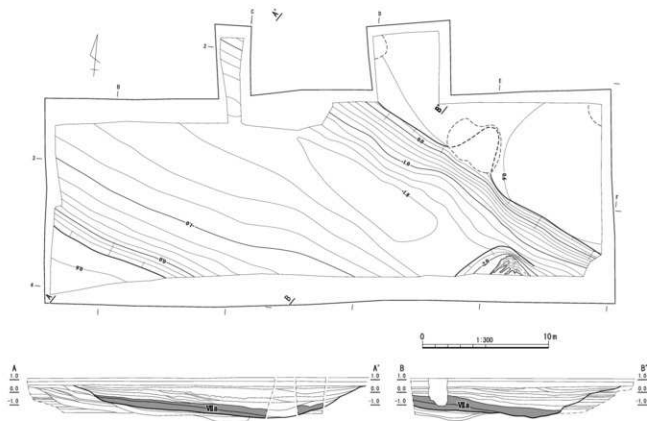
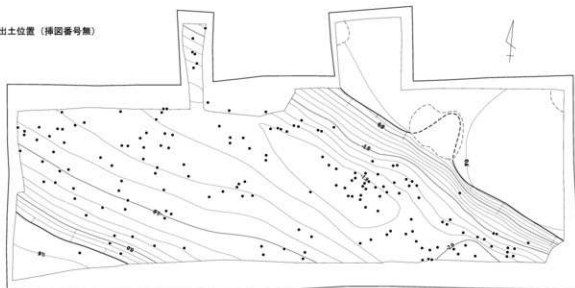


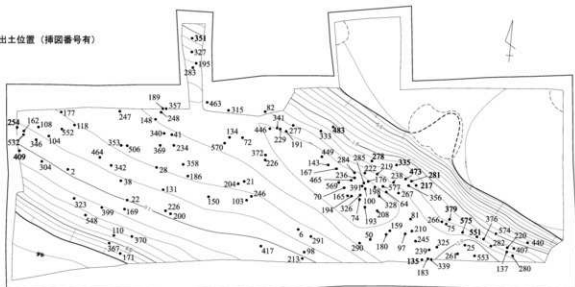
Fig.45 伊場大溝VII a 層

3. VIIa層の調査

遺物出土位置 (挿図番号無)



土器出土位置 (挿図番号有)



石製品・木器等出土位置 (挿図番号有)

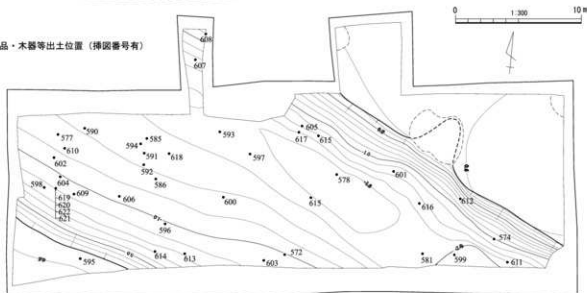


Fig.46 VII a 層における遺物出土位置

調査区の南東端において、枝を残す大きな流木が底面に埋没している。流木の周りの水流が激しかったのか、この部分だけは非常に深くなっており、底面は標高-2.2m以下までに至っている。流木の出土位置が深く、かつ流木そのものが大きかったため撤去できず、正確な底面の標高は確認できていない。なお、この周りでは遺物は全く出土しなかった。

Ⅶa層の堆積は南北の両岸に跨るので、伊場大溝の規模が想定できる。Ⅶaの堆積が認められる部分の幅は16m、復元的に両岸を結んだ幅は20～22mであったとみられる。地表から底面までの深さは2.5mである。

(3) 遺物の出土状態

出土位置の傾向 Ⅶa層から出土する遺物は、比較的分布が散漫である。下層のⅦb層のように、折り重なるように一箇所に集中して遺物が出土することもなく、出土遺物のまとまりを認識することができなかった。調査区の北東側で土器が底面に集中する傾向が若干みられるが、調査区の西側においては底面から南の岸に近い位置まで満遍なく遺物が出土している。

土器 上述のとおり、Ⅶa層から出土する土器の分布状況は比較的散漫で、斜面部分や底面部分から分散して出土している。北東側底面において若干多く出土する傾向がみられるが、とくに目立って集中するような状態にはない。土器の多くは岸の上から投棄されたものとみられるが、伊場大溝の南側、北側に偏った傾向も認められない。

その他の遺物 Ⅶa層から出土する土器以外の出土遺物には、耳環や銅製有孔円盤などの金属製品、土製品、輪羽口、砥石、木製品などがある。これら土器以外の出土遺物についても、土器と同様、伊場大溝内から分散して出土している。

(4) Ⅶa層出土遺物

概要 Fig.47～69にⅦa層から出土した遺物を示す。Ⅶa層から出土した遺物のうち、図示したものは622点である。出土遺物量ではⅦb層の状況と近い。以下、須恵器(1～394)、土師器(395～568)、漆付着土器(569・570)、金属器(571～573)、土製品(574～576)、輪羽口(577～578)、砥石(579～591)、木製品(592～622)の項目に分けて紹介する。

須恵器 (Fig.47～57) 1～394はⅦa層から出土した須恵器である。坏蓋・坏身(1～287)の比率が多いが、高盤(288～290)、高坏(291～319)、広口壺(320～327)、壺蓋(328)、長頸壺(329～338)、鉢(339～353、360～376)、短頸壺(354～359)、甕(377～379)、フラスコ形瓶(380・381)、横瓶(382)、甕(383・384、387～394)などの器種が認められる。

帰属時期が明瞭な坏蓋・坏身(1～394)に注目すると、古墳時代的ないわゆる「坏H」(1～209)が主体を占め、返り蓋を伴う「坏G」もしくはその系統に連なる台形の無台坏身(210～229)、碗形の無台坏身(無台碗、230～275)、返りをもたない摘蓋と有台坏身(276～287)の各種がみられる。坏Hは、Ⅶb層出土品で主体を占めた遠江Ⅲ期後葉(TK43型式併行)の製品を含みながら、遠江Ⅳ期後葉に位置づけられる口径が9cm台のものまでみられる。時期的に途切れることなく連続と続いていることが坏の多様性からうかがえる。返り蓋を伴う「坏G」としたものの中

には、壺の蓋を含んでいる可能性がある。ただし、いずれも直径が10～11cm台で、大型化したものは知られない。遠江Ⅳ期後葉に中心があるとみられる。碗形の無台坏身としたものには、遠江Ⅳ期後葉の坏Hの蓋が含まれる可能性がある。また、直径が11cmを超える250～275については、遠江Ⅳ期末葉に降るとみられよう。とくに、270～275は蓋を伴わない無台碗として奈良時代に連続する系統とみられる。摘蓋と有台坏身の組み合わせは、遠江Ⅳ期末葉に出現する形態で、その初源的形態をなしている。

以上、坏蓋・坏身の様相からうかがえるⅦa層の堆積年代は、遠江Ⅲ期後葉（TK209型式期）を境界にして、遠江Ⅲ期末葉から遠江Ⅳ期末葉の飛鳥時代（7世紀）全般にわたることが明らかである。遠江Ⅲ期中葉（TK43型式期）以前の製品は、Ⅶb層からの混入品と解釈できるだろう。

土師器（Fig.58～65） 395～568はⅦa層から出土した土師器である。Fig.58に示した坏（395～405）や高坏（406～424）、壺（425・426）などは古墳時代後期以前の形態的特長を示しており、多くはⅦb層からの混入品と捉えられる。Ⅶa層が堆積した飛鳥時代の土師器坏類は、Fig.60に示すものである。大型の外反口縁壺（429～436）や箱形や碗形を呈する鉢（437～458）、く字鉢（459～462）などが遠江Ⅲ期末葉から遠江Ⅳ期後葉の代表的な土師器の組成といえるだろう。土製品形態の壺形（463・464）や、甔形（465・466）、および革袋形土製品（467）なども遠江Ⅳ期の中で出現していることが分かる。

Fig.60には暗文を施す坏（468～482）や高盤（483～485）をあげた。468・469は畿内産土師器で、飛鳥Ⅳ期（680年～690年代）に相当する。473～485は在来産の土師器で、いずれも精緻な胎土を用い、赤彩が施されているものが多い。これら暗文土師器の時期は遠江Ⅳ期末葉に中心がある。

486～557は、甔である。487・488の口縁端部は摘みあげた独特の形態をもつ。伊勢から尾張に特徴的な技法で、搬入品の可能性がある。489は胎土に白色粒子を多く含み、駿河産の特徴を示している。545～550といった大型の口縁は台付甔になるとみられる。脚台部には肉厚のもの（552・553）と薄いもの（554～557）が認められる。

558～565は甔である。いずれも口縁端部の折返し跡は残さず、Ⅶb層出土品と比べて新しい様相をみせている。566～568は把手である。567には穿孔がみられる。

漆附着土器（Fig.65） 569・570は漆が附着した須恵器である。569は高坏の坏部の破片、570は坏身が用いられている。漆が附着した須恵器はⅦb層にも認められるので、古墳時代後期後半から鳥居松遺跡で漆を使った製品が生産されていた可能性がある。その下限の時期は、570が示す遠江Ⅳ期後葉頃とみられる。

金属器（Fig.65） 571・572は耳環である。ともに幅3.2cmほどの大きさである。571は表面の金属板が剥がれ銅芯のみが遺存する。572には金銅板が残っている。

573は銅製の有孔円盤である。変形が著しいが、本来は直径6cmほどの円形をなし、中央にやや膨らみがある形態とみられる。4方向に2個一組の穿孔があり、中央に方形の孔がある。銅板の厚さは1mm以下である。詳しい用途は不明であるが、法隆寺や東大寺正倉院に伝わる円形飾金具が形態的に似ている。これらの円形飾金具は金銅製で、布幡に糸で取り付けただものである。本例には金銅の痕跡はみられないが、幡をはじめとした布に装着した飾金具である可能性が高いだろう。

土製品 (Fig.65) 574は土製紡錘車、575・576は土鍾である。いずれもⅦb層から出土したもののの中に類例が認められる。

輪羽口 (Fig.65) 577・578は輪羽口である。いずれも小破片であることから、輪羽口がまとまって出土したⅦb層から混入した可能性が考えられる。

砥石 (Fig.66) 579～591は砥石である。凝灰岩もしくは砂岩を用いている。583はよく使い込まれているが、Ⅶb層出土品のように形態が整ったものはない。

木製品 (Fig.67～69) 592～622は木製品である。Ⅶa層から出土した木製品には、木鍾(592・593)、堅杵(594)、有孔棒(595～598)斎串(606～608)、馬形(610・611)、横櫛(612)、琴柱(613)、曲物(615～622)などがあり、このほかにも不明品がある(599～605、614)。

592・593は木鍾である。いずれもⅦb層出土品と似た形態で、592はヒノキ属、593はトウヒ属を用いている。594は小型の堅杵とみられるが両端を欠損している。木材はアカガシ亜属を用いている。595～598は用途不明の有孔棒(595は木柄の可能性もある)、599～605も不明品である。

606～608は斎串である。606は上下とも遺存しており、ヒノキ属を用いている。607は下端を欠損するもので、アスナロ属を用いる。610・611は馬形である。610は独立した頭部を表現したもので、蛇にも似る。611はやや単純な形態であるが、頭部と尾の造り分けがみられる。木材はともにアスナロ属を用いている。

612は横櫛である。炭化が顕著で樹種の同定はできなかった。613は琴柱である。上端に糸をはめ込む沈線が入られている。木材はアスナロ属を用いている。614はN字形をした用途不明品である。木材はマツ属を用い、表面は丁寧に加工されている。

615～622は曲物である。曲物底板(615～618)はいずれも端面に段を掘り込んで側板をあてての構造である。616と617はヒノキ属を用いている。619～622は曲物側板であり、すべて同じ地点から出土した。

年代 須恵器の坏蓋・坏身の特徴から明確のように、Ⅶa層は遠江Ⅲ期末葉から遠江Ⅳ期末葉までの飛鳥時代(7世紀)全般にかけて堆積したものと捉えられる。Ⅶa層が堆積する最終段階(7世紀末)には、鳥居松遺跡にも評にかかわる施設が広がり、律令時代的な土器様式が出現している。

(5) 小 結

Ⅶa層の堆積は、遠江Ⅲ期後葉を境界として、遠江Ⅲ期末葉から遠江Ⅳ期末葉まで続いている。その堆積年代は、およそ飛鳥時代(7世紀)の100年間が相当するが、伊場大溝内の堆積状況や遺物の出土状況からは、飛鳥時代の中を分離することができなかった。ただし、出土遺物の傾向からは飛鳥時代における遺跡の変化を明確にあとづけることができる。7世紀の前半に属するとみられる遺物の様相は、一般的な土器の様相に加え、漆付着土器、耳環、土製紡錘車、土鍾の存在など、Ⅶb層との共通性が高い。いっぽうで、飛鳥時代の末期にあたる段階(遠江Ⅳ期末葉頃)の出土遺物には、畿内産土師器や銅製有孔円盤、斎串、馬形など、次第に官衙的性格を強めていく様相が認められる。鳥居松遺跡においても7世紀代から官衙の一部が広がっていたと判明した意義は大きいといえるだろう。

3. VIIa層の調査

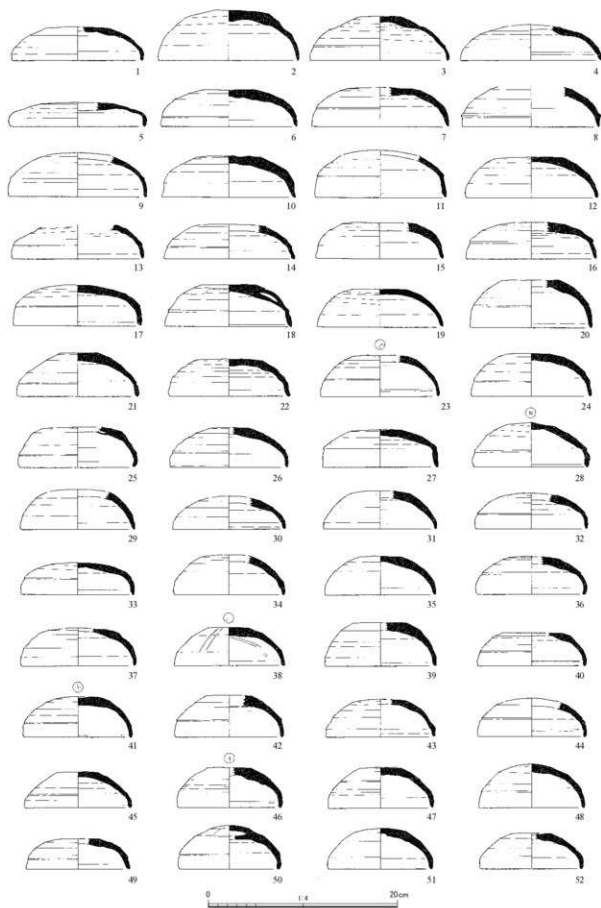


Fig.47 VII a 層出土遺物 (1)

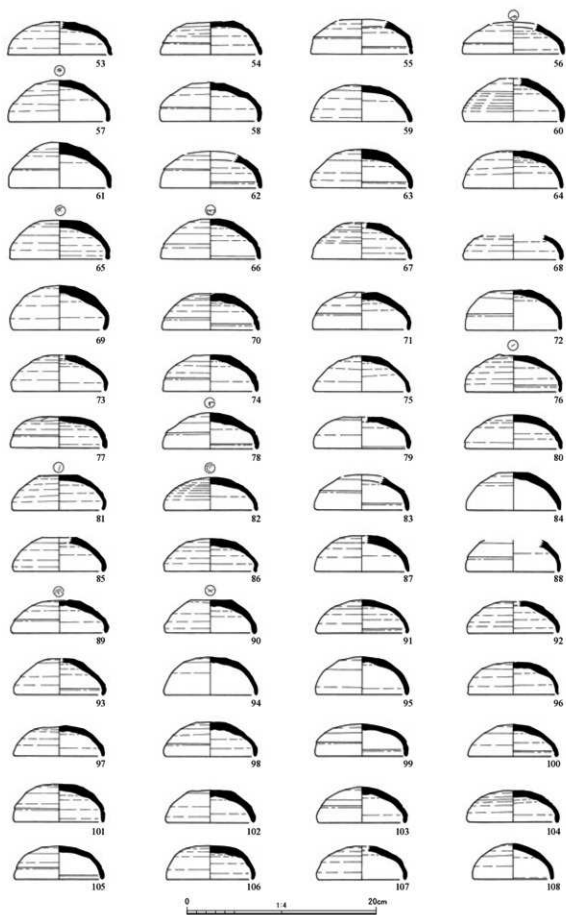


Fig.48 VII a 層出土遺物 (2)

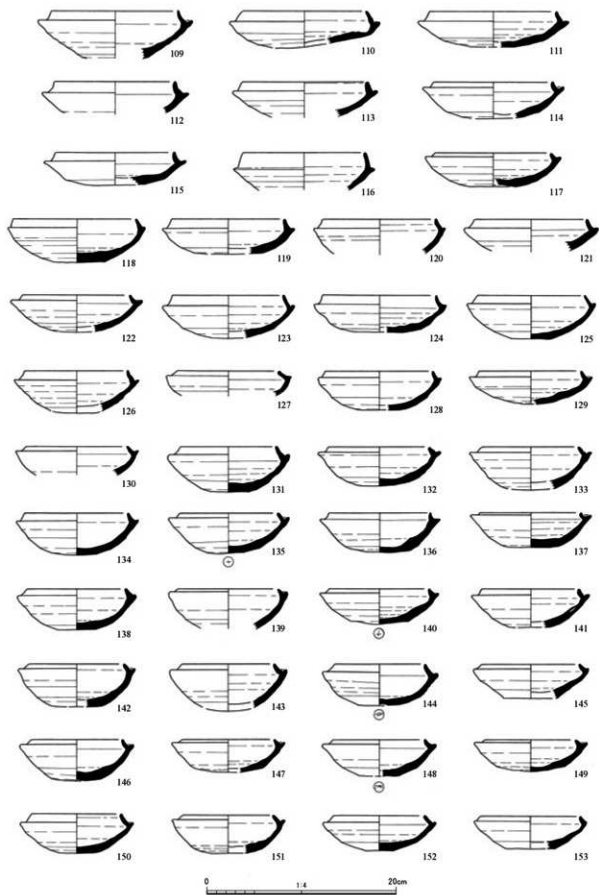


Fig.49 VII a 層出土遺物 (3)

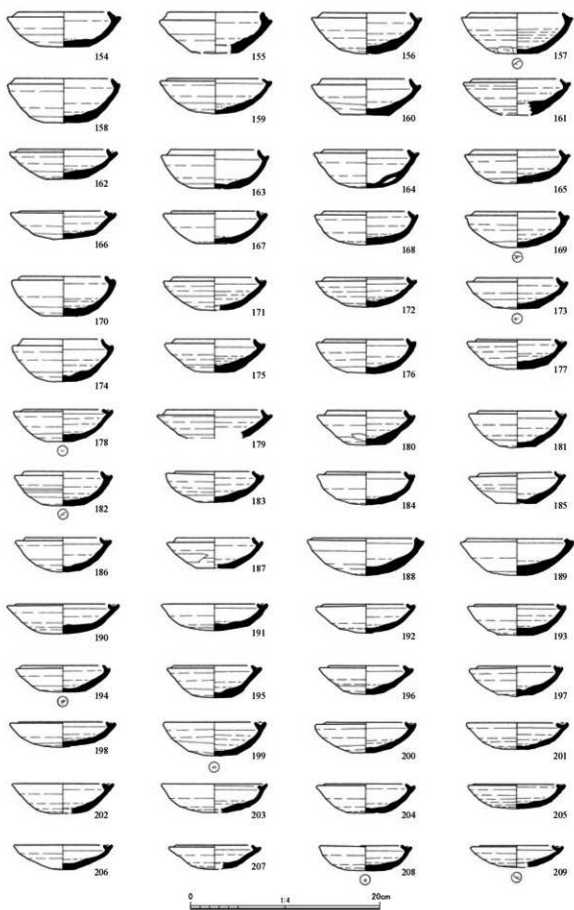


Fig.50 VII a層出土遺物(4)

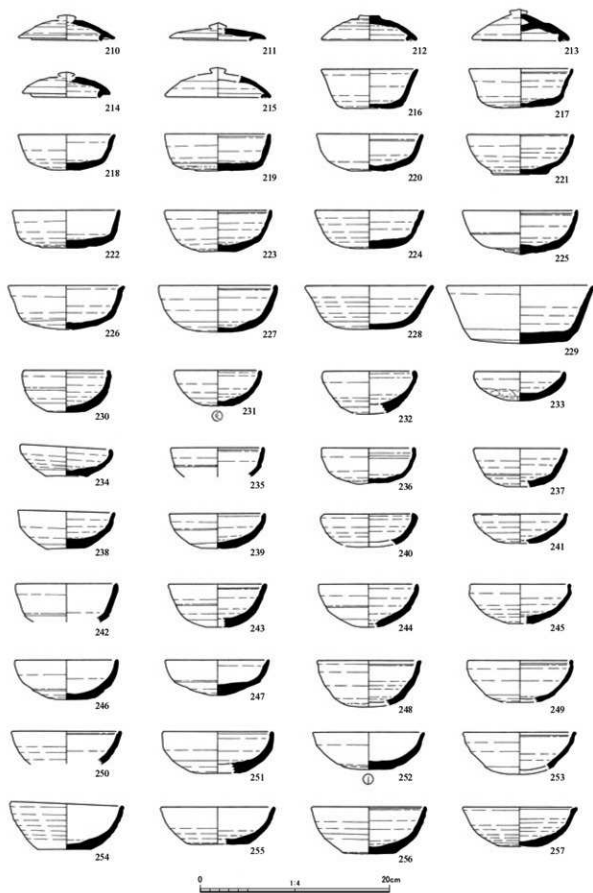


Fig.51 VIIa層出土遺物 (5)

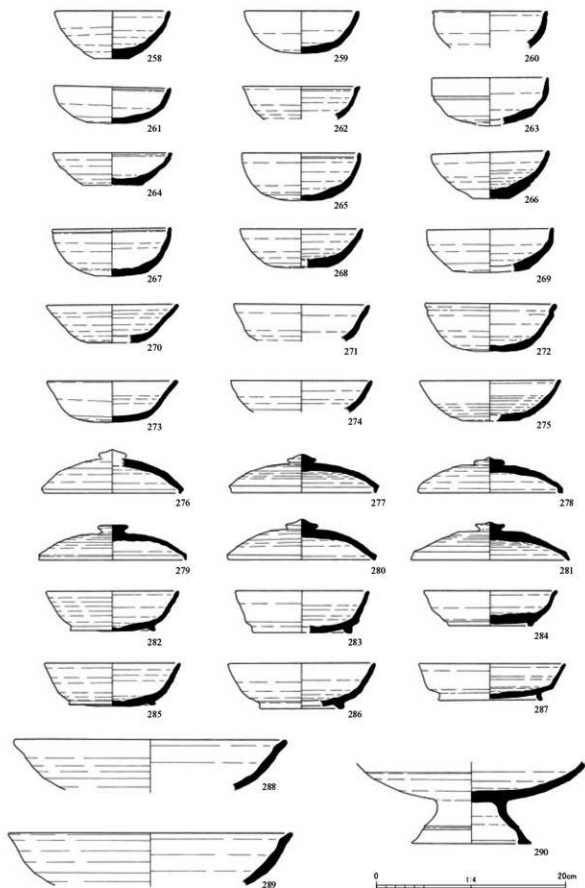


Fig.52 VI a層出土遺物 (6)

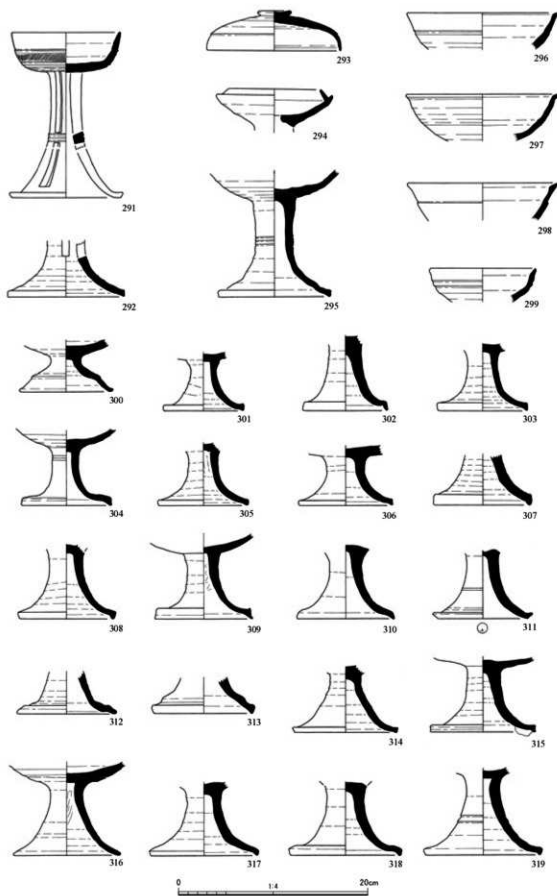


Fig.53 VII a 層出土遺物 (7)

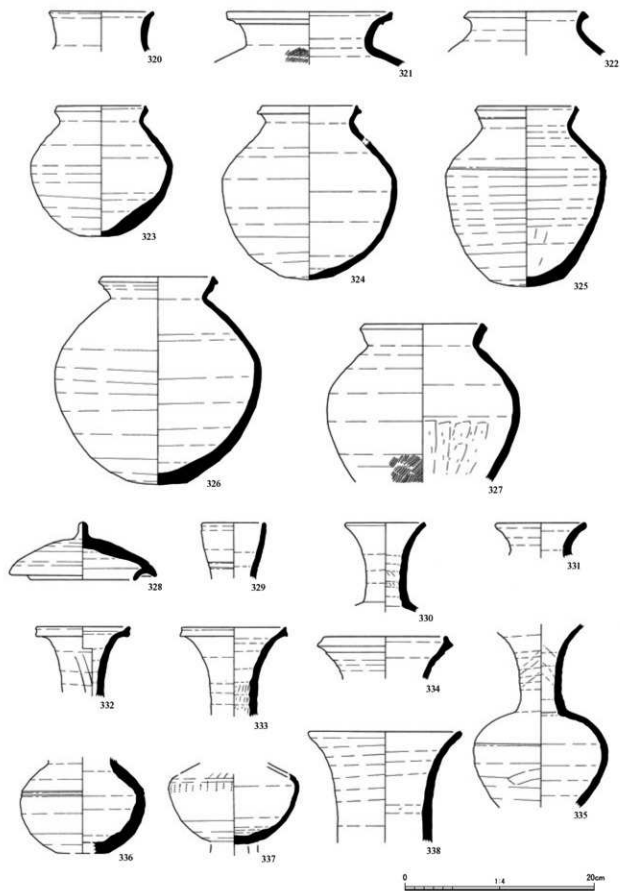


Fig.54 VII a 層出土遺物 (8)

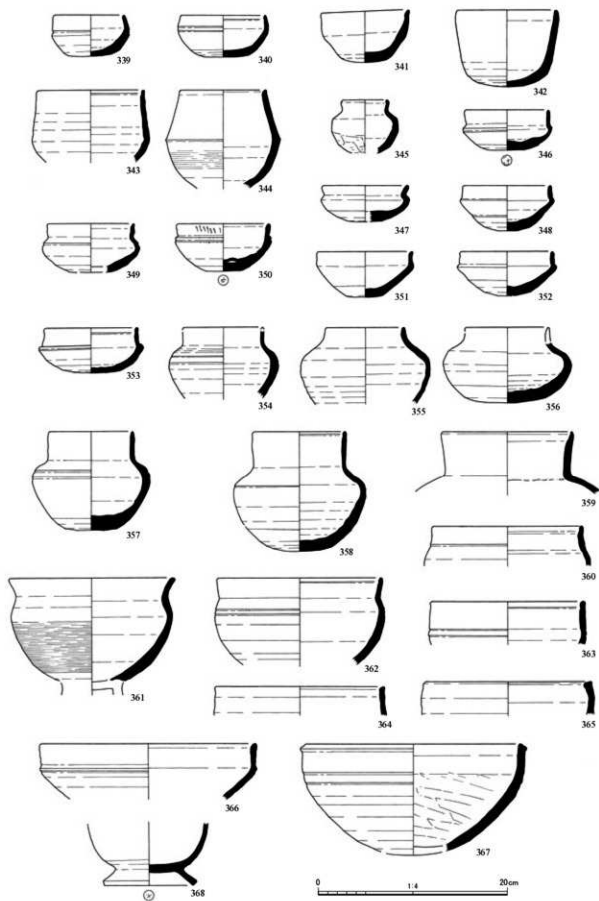


Fig.55 VII a 層出土遺物 (9)

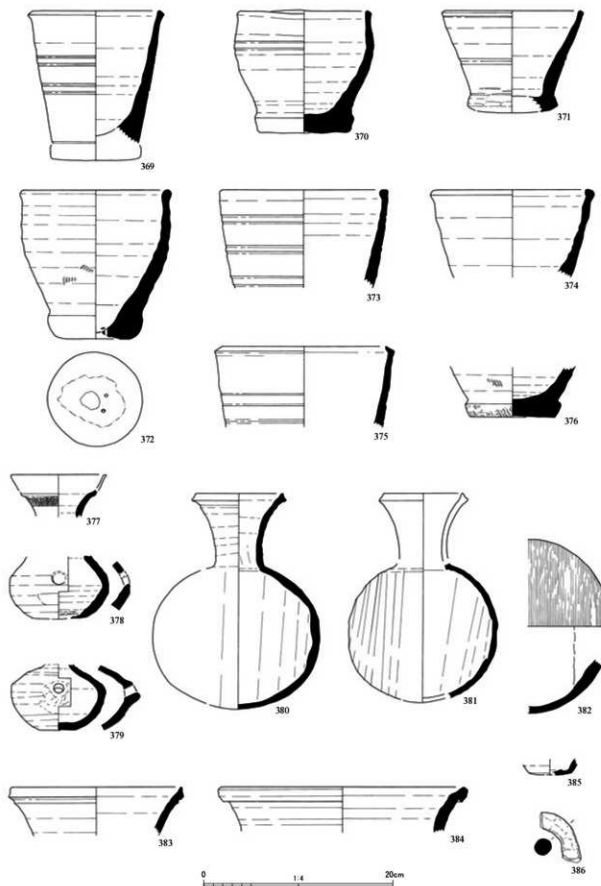


Fig.56 VI a層出土遺物 (10)

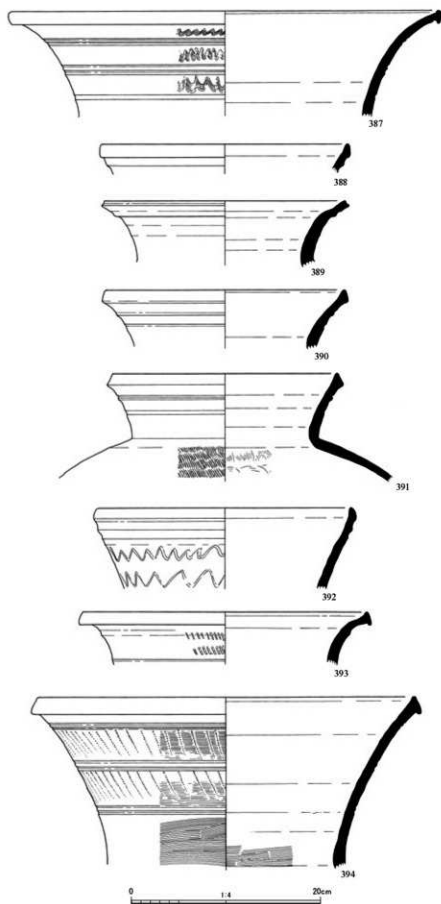


Fig.57 VI a層出土遺物 (11)

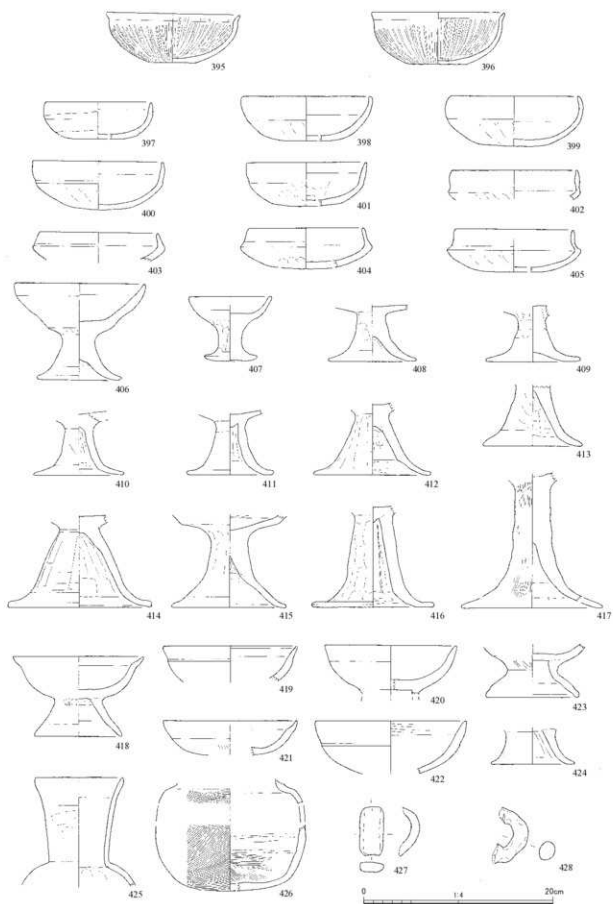


Fig.58 VI a層出土遺物 (12)

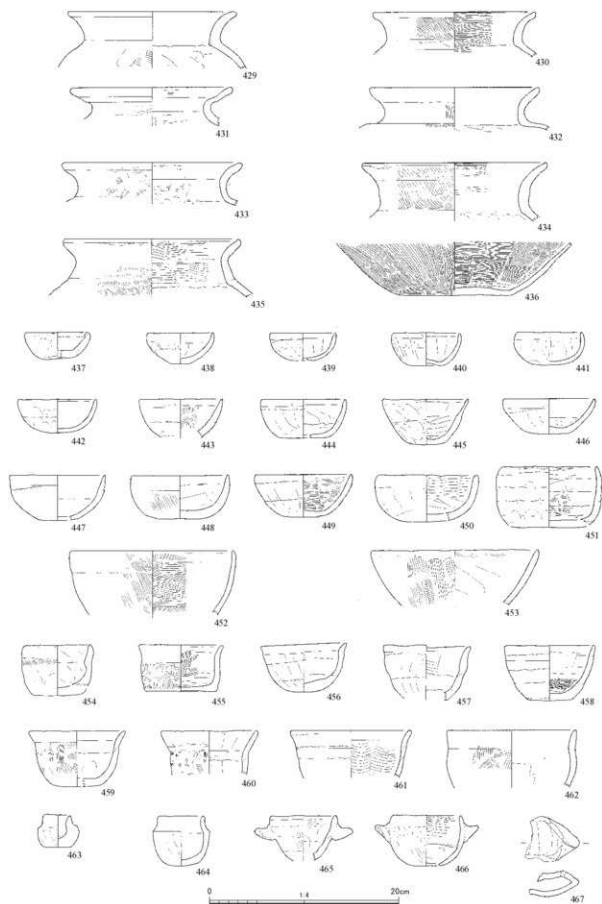


Fig.59 VI a 層出土遺物 (13)

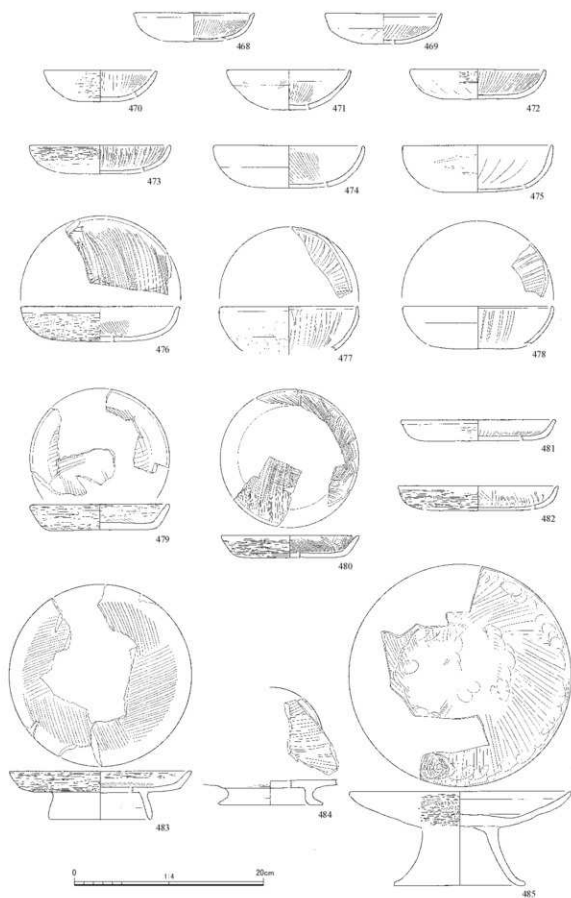


Fig.60 VI a層出土遺物 (14)

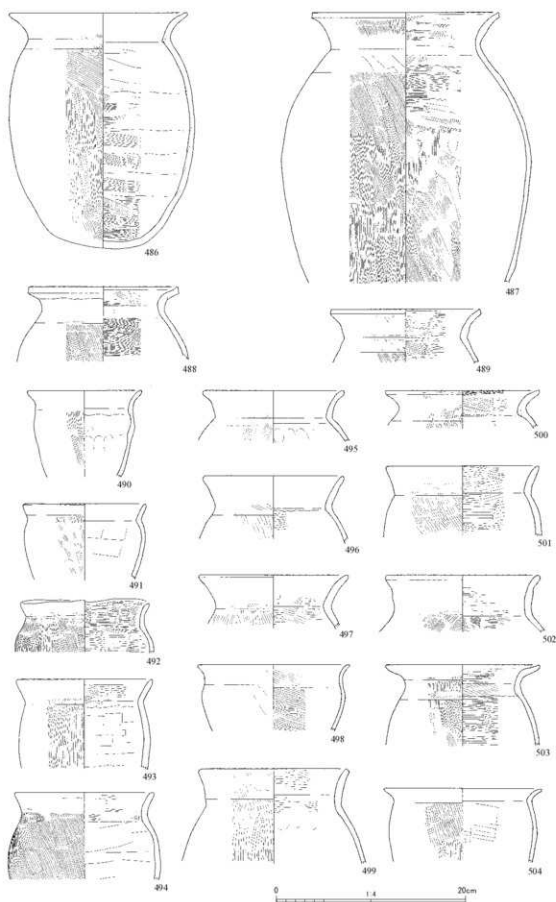


Fig.61 VI a 層出土遺物 (15)

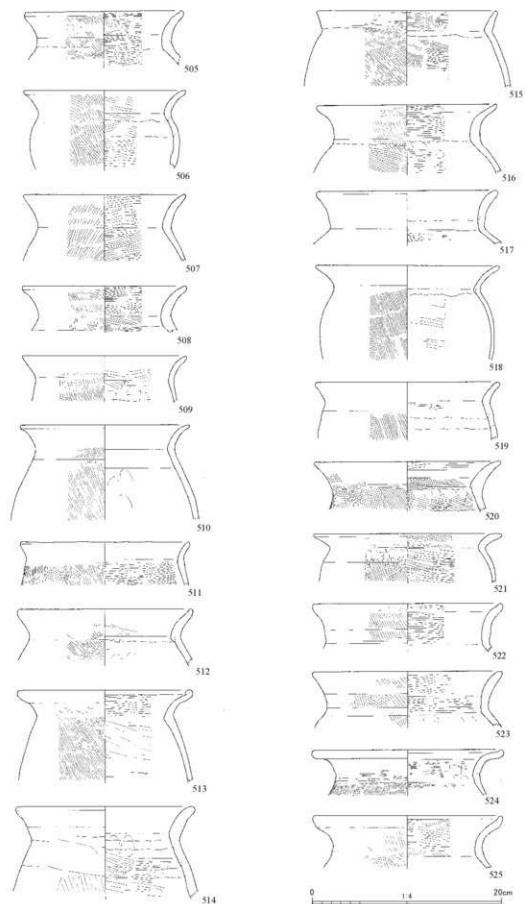


Fig.62 VI a 層出土遺物 (16)

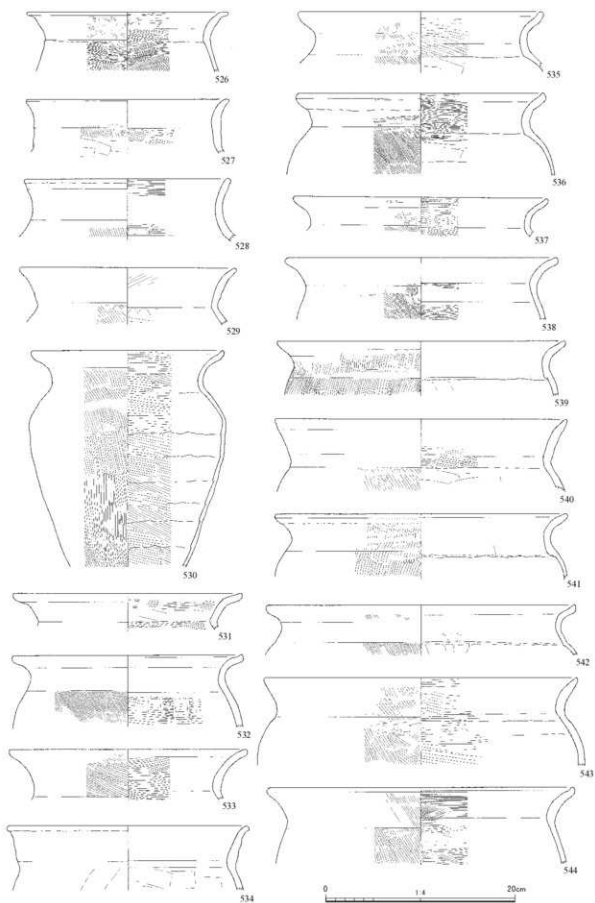


Fig.63 VI a 層出土遺物 (17)

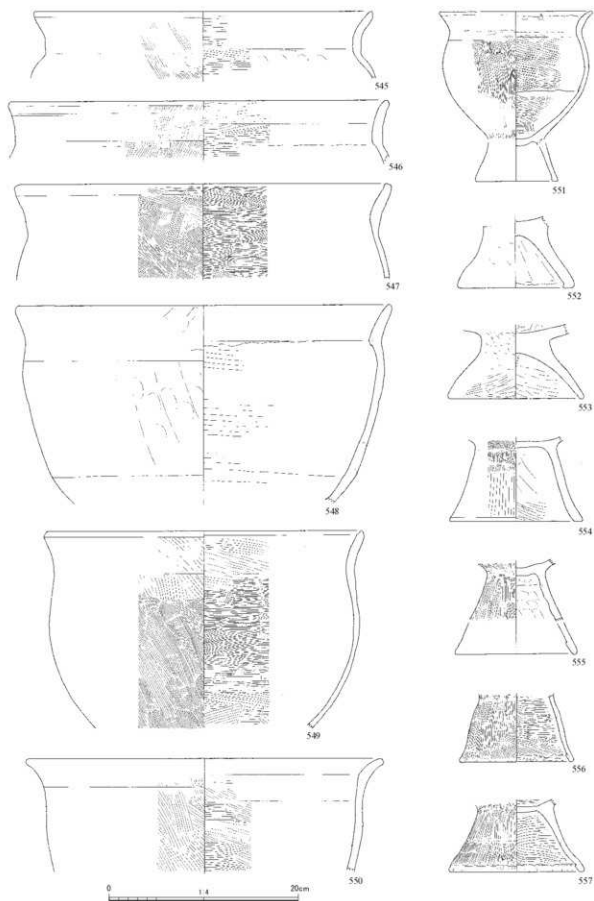


Fig.64 VI a層出土遺物 (18)

3. VIa層の調査

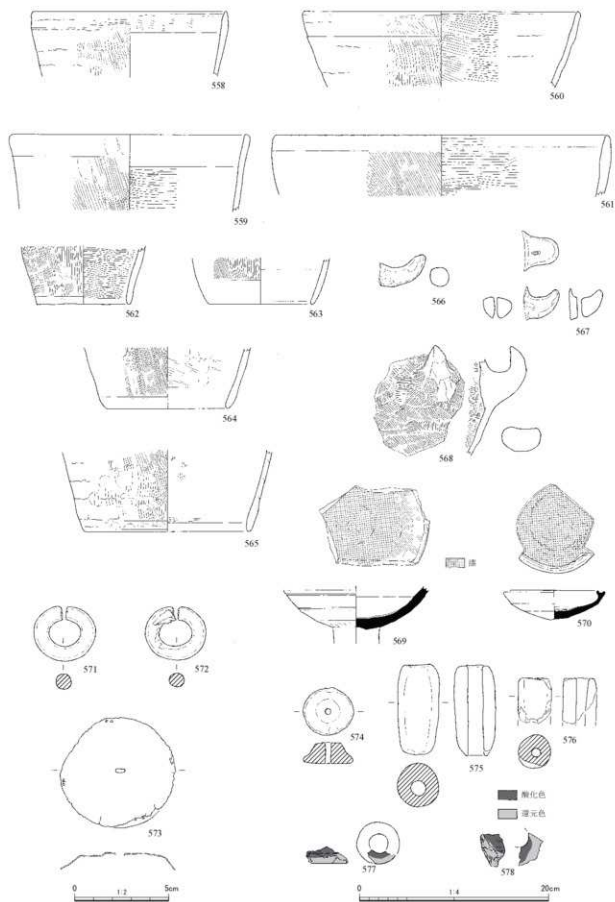


Fig.65 VIa層出土遺物 (19)

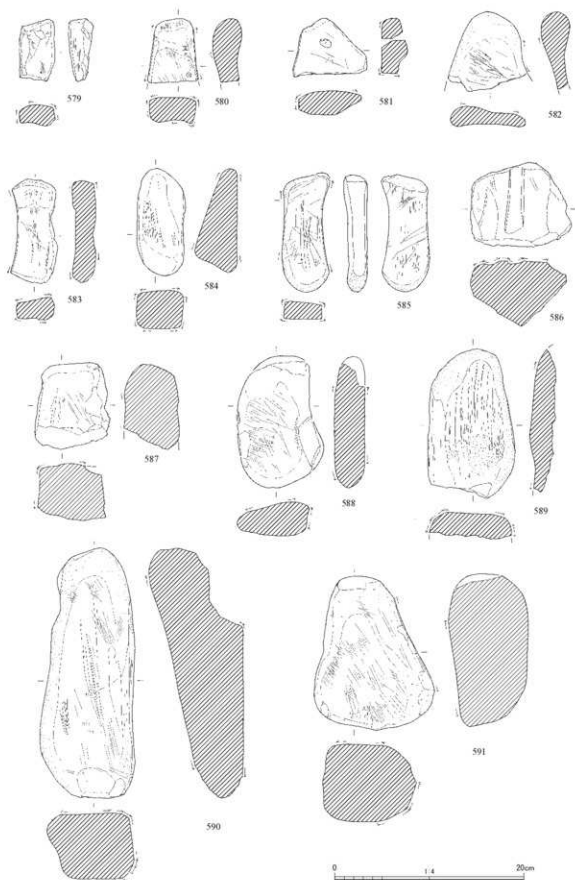


Fig.66 VI a層出土遺物 (20)

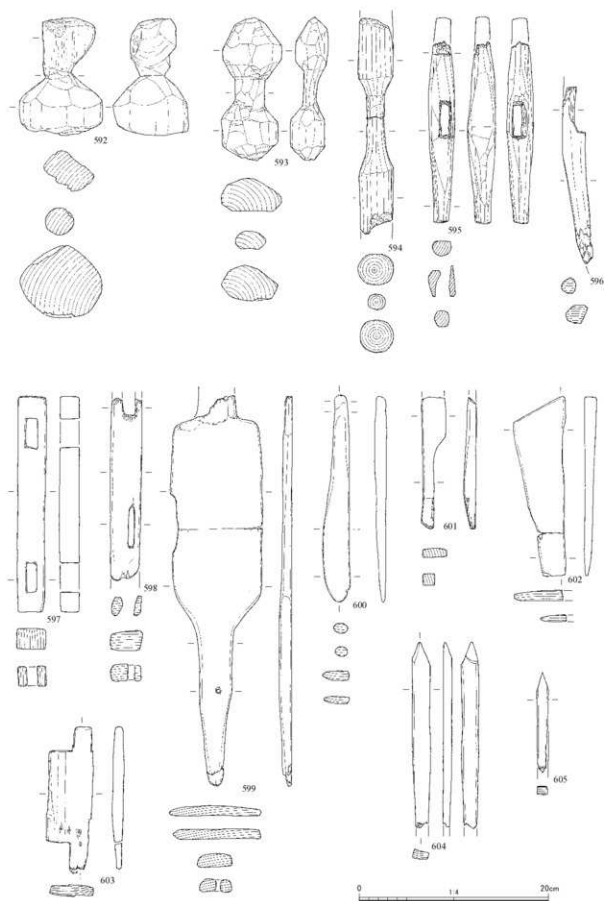


Fig.67 VI a層出土遺物 (21)

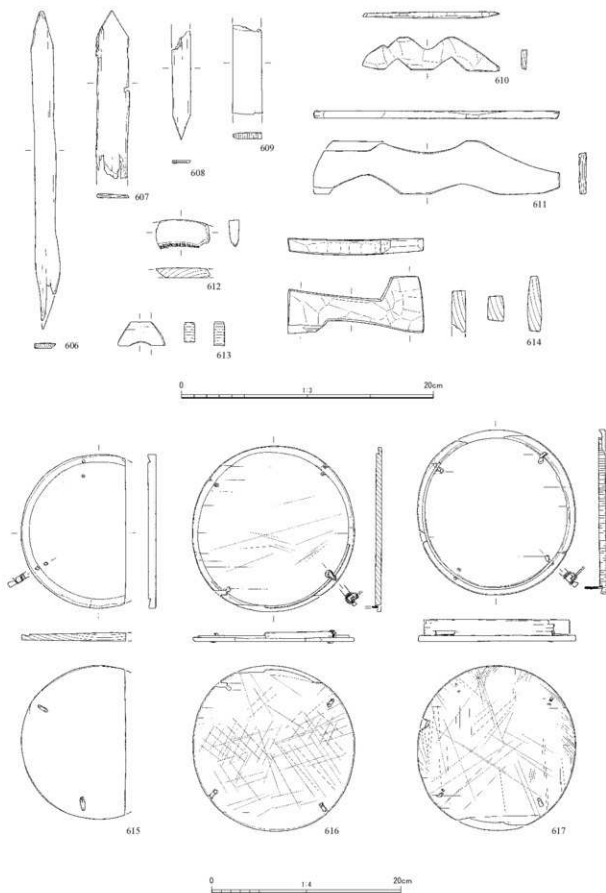


Fig.68 VI a層出土遺物 (22)

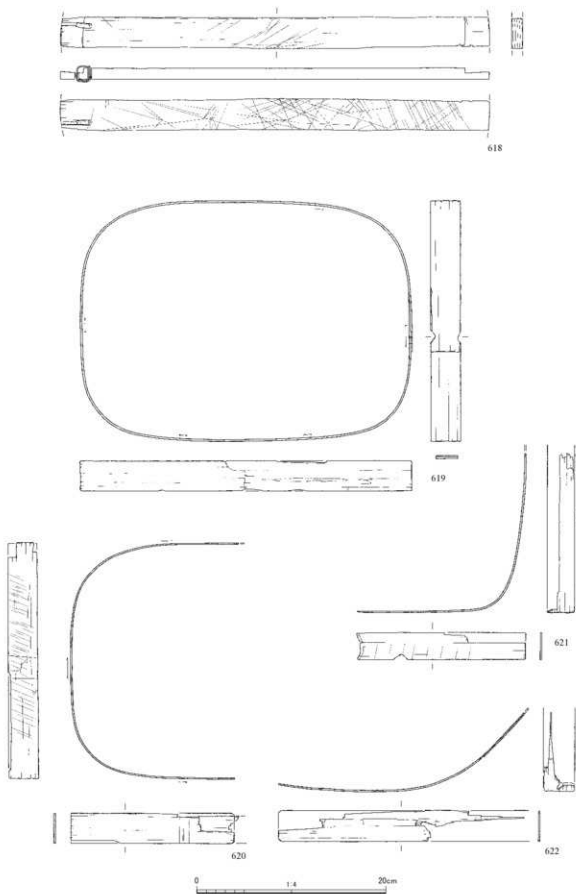


Fig.69 VI a 層出土遺物 (23)

4 V層の調査

(1) V層の概要

V層は、灰色ないしは褐色の粘土層を基本にして部分的に砂層が混ざる層位で、奈良時代（8世紀前葉から中葉）に堆積した。底面の標高は-0.8mほどであり、伊場大溝内の水量は少なくなっていたとみられる。北岸においては貝塚（SS01～04）が形成され、その近辺には杭を伴う階段状の護岸施設がつくられている。貝塚 SS02・SS04 からは製塩土器がまとめて出土している。

V層から出土する土器の量はⅦ層と比べると少ないが、敷智郡家関連の遺物が目立つ。その筆頭が6点の木簡であり、己酉年（709）や神亀元年（724）の年号が記されたものが含まれる。このほかに、斎串、人形、馬形、舟形といった木製祭祀具がまとめて出土している。

(2) 伊場大溝の形状

V層が堆積した伊場大溝の本来の形状がうかがえる部分は、北側斜面の0.0m以下の部分から川底を挟んで南側斜面の0.5m以下の部分である。底面の標高は-0.8mほどで、目立った凹凸はない。V層中の堆積も、Ⅶa層と同じく南側斜面に貼り付くような傾斜をもつ。V層中には砂の堆積がみられるが、その量は少ない。V層の堆積時は、Ⅶ層の堆積時と比べて、伊場大溝の水量が少なく

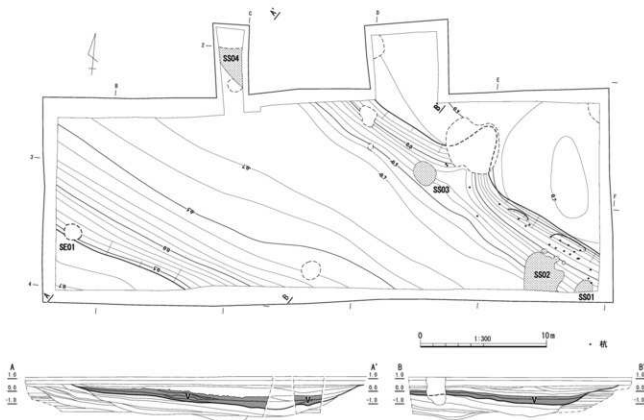
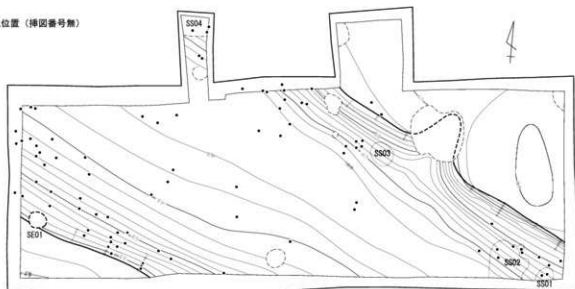
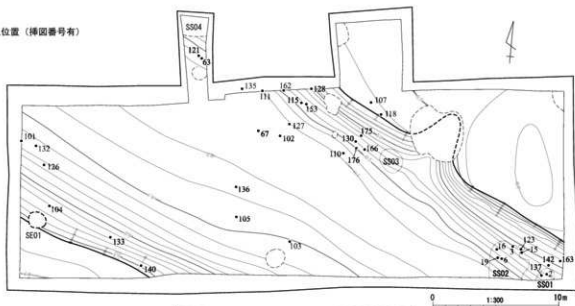


Fig.70 伊場大溝V層

遺物出土位置 (棒図番号無し)



土器出土位置 (棒図番号有)



石製品・木器等出土位置 (棒図番号有)

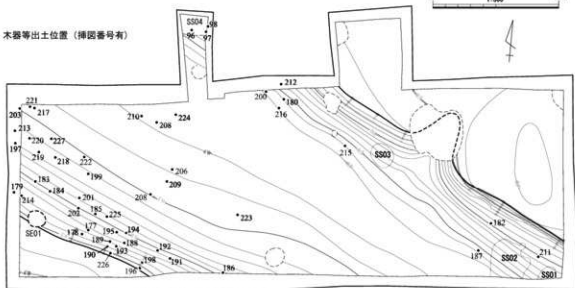


Fig.71 V層における遺物出土位置

ななつとみられるだろう。V層の堆積が認められる部分の幅は20m、復元的に両岸を結んだ幅は22m程度である。また、地表から底面までの深さは約1.5mである。

(3) 遺物の出土状態

出土位置の傾向 V層に含まれる遺物の出土位置は、伊場大溝の両岸に偏る傾向がみられる。大溝の底面から遺物が出土することが少なく、Ⅶb層やⅦa層の遺物の出土状態と大きく異なる。Ⅶb層やⅦa層は伊場大溝内の水流が急激であったため、岸から川底に遺物が集まるが多かったとみられるが、V層の堆積時には伊場大溝内の水量が減り、両岸から投棄される遺物は大きく移動することなく埋没したと捉えられよう。

土器 上述の出土位置の傾向どおり、V層から出土する土器は南北の両岸に集中する。北岸には貝塚が形成されるが、貝塚(SS02・SS04)からは製塩土器がまとまって出土している。このほか、特殊な土器として、中空把手付円面硯(140)が南岸から出土している。

木簡 木簡は南岸から4点(鳥居松2～5号木簡、183～186)北岸から2点(鳥居松1号木簡・182、6号木簡・187)出土している。己酉年(709)銘をもつ5号木簡(186)は単独で出土し、相伴すると判断できるような遺物には恵まれなかった。いっぽう、神亀元年(724)銘をもつ3号木簡(184)と近い位置から出土した土器として、108、126、132、165をあげるができる。いずれも、同時代の資料として矛盾はない。なお、3号木簡は、中央で半分に折り曲げられ破却した状態で出土している。

その他の遺物 斎串や馬形などの木製祭祀具は、伊場大溝の南北両岸からほぼ均等にみられる。2点の土馬(177・178)、ト骨(179)はいずれも南岸から出土している。とくに、2点の土馬は互いに似た造りで、出土位置も近接する。二個一組で用いられていた可能性が指摘できるだろう。

馬骨・馬歯 (Fig.72) V層とⅣb層を中心に、伊場大溝内から馬骨・馬歯が出土している。馬骨・馬歯は出土時において脆弱であることが多く、取り上げられないものがあつた。こうした中でV層の南岸に近い位置において、馬の頭骨がほぼ完全な状態で出土した(PL.8-1)。首から下の骨格は検出できなかったので、馬の頭のみを切り取って伊場大溝内に沈めたものと考えられる。

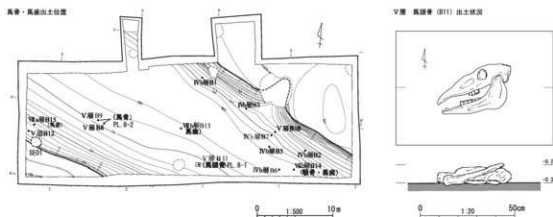


Fig.72 馬骨・馬歯出土状況

(4) 貝 塚

概 要 伊場大溝の北岸において貝塚を4箇所(SS01～04)検出した。このうち、SS03は貝層が非常に薄く、共伴する土器を明確に抽出することができなかった。SS01・02・04については貝塚内の動植物遺体のサンプルを採取し、分析を試みた(第3章3)。SS01・02・04ともダンベイクサゴとヤマトシジミが半数以上を占め、よく似た組成を示している。SS02やSS04から出土した土器は比較的豊富で、三河湾沿岸地域から搬入されたとみられる製塩土器が含まれる点でも注目できる。

また、SS02の北側や北西側において、伊場大溝の岸を階段状に成形した痕跡がみられた。階段状施設の周りには岸に沿って打ち込まれた杭列も確認できている。杭列は伊場大溝の岸に設けられた護岸施設に使われていたものと捉えられよう。

SS01 (Fig.73) 調査区の南東隅において検出した貝塚である。-0.2m～-0.4mほどの緩やかな斜面に、貝層が東西1.3m、南北1.5mほどにわたり広がっている。発掘区外の南側にも貝塚が連続するので、その正確な規模は不明であるが、全体の半分ほどは調査したとみられる。貝層の厚さは最も厚い部分で20cmほどあり、貝塚の西側はSS02に接する。

SS01 出土遺物 (Fig.74) 1～4はSS01から出土した遺物である。すべて須恵器の坏蓋もしくは無台碗である。遠江V期に位置づけられ、8世紀前半の資料群としてよいだろう。

SS02 (Fig.73) SS01の西側において検出した貝塚である。-0.2m～-0.5mほどの緩やかな斜面に築かれており、東西3.5m、南北4.0mほどにわたり貝層がみられる。発掘区外の南側に貝塚が広がっているが、ほぼ全容をうかがうことができるだろう。貝層の厚さは最も厚い部分で30cmほどある。大量の貝に混じって土器(5～62)が出土している。墨書土器(6)や大量の製塩土器(29～62)を含むことが注目できる。

SS02 出土遺物 (Fig.74) 5～62はSS02から出土した遺物である。5～18が須恵器、19～28が土師器、29～62が製塩土器である。須恵器坏身(6)には、墨書「逆」が確認できる。土師器の碗もしくは皿の破片(21)にも墨痕がみられるが、文字であるか不明確である。11は須恵器坏身を転用した碗である。SS02から出土した須恵器は概ね遠江V期に相当しよう。

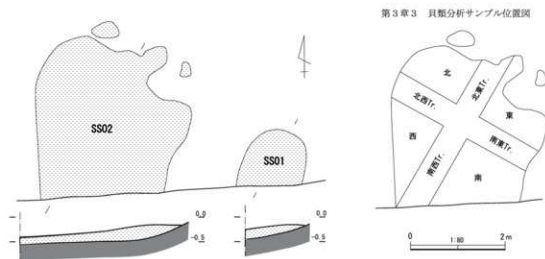


Fig.73 SS01・02 実測図

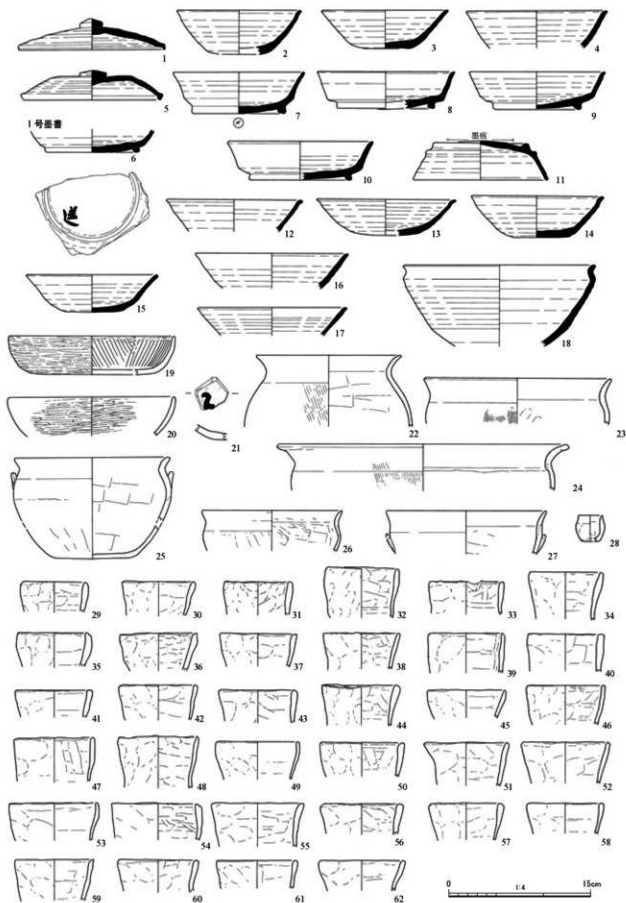


Fig.74 SS01・02 出土遺物
1～4：SS01 5～62：SS02

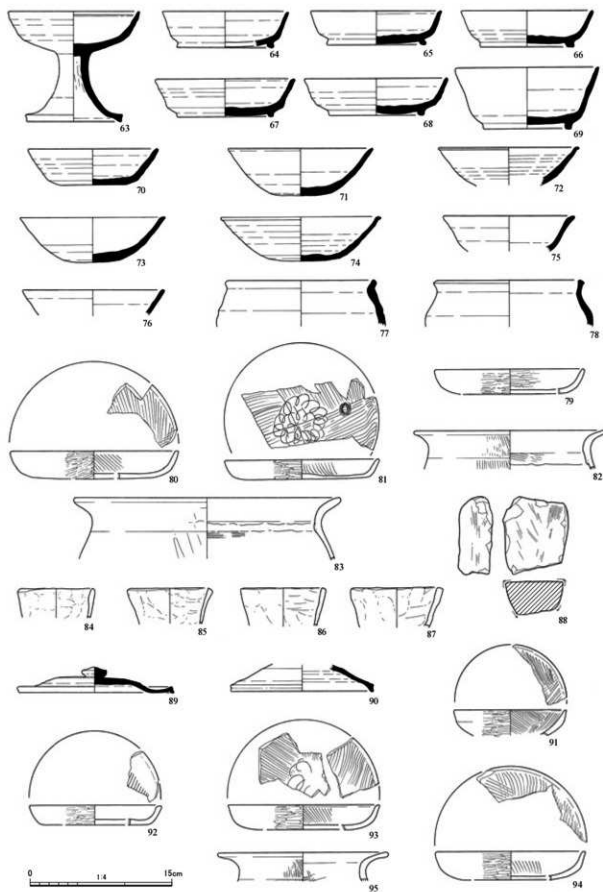


Fig.75 SS04 出土遺物 (1)
63～88：SS04 89～95：SS04 上層

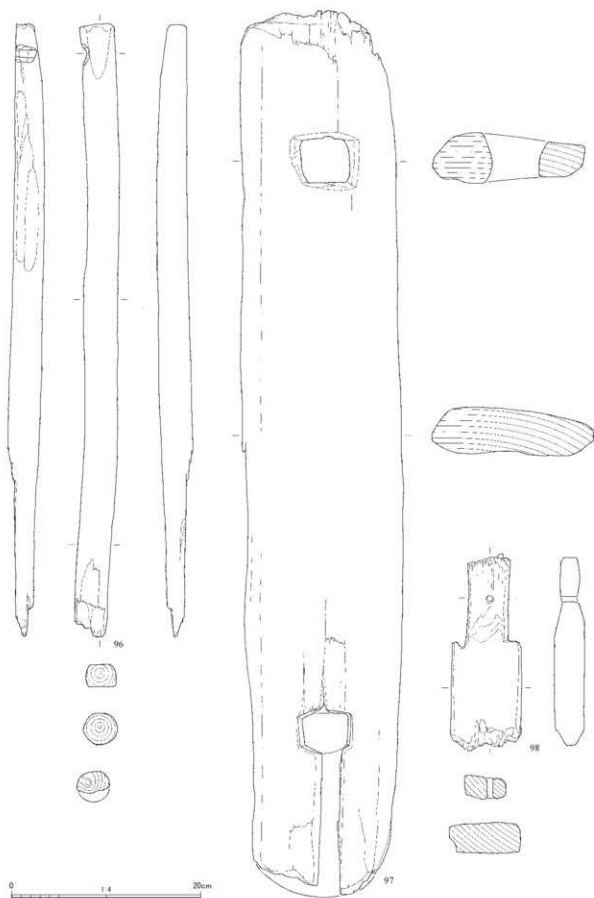


Fig.76 SS04 出土遺物 (2)

29～62は製塩土器である。34点分図化したが、図示しなかった小破片も多い。口縁部の破片数では114点を数える。焼成や胎土から、精良な胎土で焼成が良いもの（A群、29～56）と、砂粒が目立つ粗い胎土で焼成が比較的あまいもの（B群、57～62）の2者に分けることができる。前者には、須恵器のように硬質に焼きあがるもの（30）もみられる。いずれも口縁部のみが遺存し、底部・脚部は破片を含め全くみられない。口縁端部は尖るもの（45・59など）が若干あるが、多くは厚くなるもの（29・30など）が多く、端部に幅が広い面をもつもの（33・40など）も含まれる。ただし、口縁部の造りは粗雑で同一個でも形状の違いが大きく、厳密に形態差を分離することは難しい。

SS03 SS02の北西約10mの地点にみられた小規模な貝塚である。ヤマトシジミがまばらに分布するのみで、貝層の厚さはほとんど確認できない。貝塚に共伴するような土器もみられなかった。

SS04 (Fig.70) 発掘区の北西側に突出した拡張調査区の中において、トレンチ状に調査した貝塚である。伊場大溝の土層図(Fig.3-上図11層)にその断面を示す。貝塚の規模は不明であるが、貝層の厚さが30cmを超えており、今回調査した中でも最も規模が大きいものであった可能性が高い。SS04からは63～88、96～98の遺物が出土した。なお、89～95はSS04の直上出土遺物である。

SS04 出土遺物 (Fig.75・76) 63～88、96～98はSS04中から出土した遺物である。63～78は須恵器である。概ね遠江V期に位置づけられる遺物群とみてよい。やや深めの有台坏身(69)は遠江V-3期を代表する器種である。SS04の形成時期は8世紀中葉頃といえよう。84～87は製塩土器である。焼成、胎土は比較的良好で、SS02出土遺物において分類したA群に相当する。SS04から出土した製塩土器においても、遺存しているのは口縁部のみで、底部・脚部は全く確認できない。96の木製品は用途不明で、先端に挟りがみられる。97の木製品は建築部材と考えられ、貝塚中に構築された階段状施設に使用されていた可能性がある。98も不明品である。

89～95はSS04の直上から出土した遺物である。89の坏蓋は平坦化の傾向がうかがえ、新しい様相をもつものと認識できる。

(5) V層出土遺物

概要 Fig.77～84にV層から出土した遺物を示す。V層から出土した遺物のうち、図示したものは129点（貝塚出土遺物を含むと227点）である。土器の量は比較的小さいものの、木製品の出土量が多い点が注目できる。以下、須恵器（99～140）、土師器（141～176）、土馬（177・178）、ト骨（179）、砥石（180・181）、木筒（182～187）、木製品（188～227）の項目に分けて紹介する。

須恵器 (Fig.77) 99～140はV層から出土した須恵器である。坏蓋・坏身（99～121）の比率が多く、他の器種は希少である。帰属時期が明確な坏蓋・坏身に注目しておこう。遠江IV期に位置づけられる「坏H」や「坏G」の系統に連なるものが少数ながらみられる（99～106）。これらの遺物は下層のⅦa層からの混入品とみることもできようが、V層の堆積開始期が遠江IV期末葉に一部かかることを示している可能性も否定できないだろう。古相を示す有台坏身（113）の存在も示唆的である。ただし、V層出土須恵器の主体は、摘蓋（107～112）、有台坏身（114～121）、無台碗（122～131）が組み合う遠江V期であることには変わりない。

137～139は須恵器の灯蓋・坏身を転用した硯、140は中空把手付円面硯である。今回の調査で出土した専用硯は、140の1点のみで残りは転用硯であった。

土師器 (Fig.78) 141～176はV層から出土した土師器である。坏(141～148)、甕(149～155)、碗(156～170)などの器種がみられる。坏には暗文が施されるものがある(142・148)が、無文のものも多い。甕は良好に遺存するものが少ない。149といった混入品とみられる個体や150・152のような壺とみられる個体を除くと、その量は極めて少ないといえよう。甕が少ない傾向は、上層のIVb層においても同様であり、VIIb層・VIIa層との組成比の違いが明瞭である。

171～174は、甕もしくは把手付鉢の雛形である。いずれも粘土を添付した把手の表現がみられる。175・176は高盤形の雛形である。

土馬 (Fig.78) 177・178は土馬(土製馬形)である。双方ともに弓形の体部に琴柱形の脚部が前後に接合されて形づくられている。製作技法が似るだけでなく、出土位置も近接していることから、両者は二個一組で用いられた可能性が高い。177の頭部には、小さい粘土の添付がみられ、目もしくは耳を表現したものと考えられる。178の頭部とみられる部分には粘土が剥離した痕跡がみられる。

卜骨 (Fig.78) 179は卜骨である。片方を欠損するが、全体形はほぼうかがうことができる。鹿骨を薄くしたものをを用い、表面には入れ違いに長方形の窪み(鑽)が入れられている。いずれの窪みにも先端が十字形をした焼火箸をあてた痕跡が確認できる。

砥石 (Fig.78) 180・181は砥石である。180は凝灰岩製、181は軽石製である。180には垂下用の穿孔がみられ、提砥であったことが分かる。

木簡 (Fig.79) V層から、総数6点の木簡(182～187)が出土し、発見順に鳥居松1号～6号木簡と名付けた。詳細は別項(第3章4)で触れるので、概略のみ記したい。3号木簡は、糸を貸与した証文の木簡であり、郡家が繊維製品の生産管理に関与していたことを示す。4号木簡はイネの出挙に関わるとみられる「サト名+人名」の木簡、5号木簡は何らかの賃借関係の発生に際して発行された木簡とみられる。紀年銘木簡が2点(3号、5号)含まれている。

木製品 (Fig.80～84) 188～227はV層から出土した木製品である。V層から出土した木製品には、人形(188)、斎串(189～199)、馬形(200～202)、舟形(203)、曲物(204～208)、背負子(209～211)、鋏(212・213)、堅杵(214)、田下駄(215)、木鍾(216)、不明品(217～227)がある。

188は人形である。頭部は5角形に成形され、両手の表現がみられる。木材はアスナロ属を用いている。189～199は斎串である。上下ともに完存するもの(196・197)、上部が遺存するもの(189～194)、下端部が遺存するもの(195・199)がある。なお、切り込みがみられないもの(192・198)は、斎串でない可能性も考えられる。木材は、大多数がヒノキ属もしくはアスナロ属で、199の1点のみコウヤマキを用いている。

200～202は馬形である。いずれもM字形をしているが、200は頭部に比べ尾が長い形態である。3個体とも、腹部に切り込みがみられ、201には支柱が残存している。木材は200・202がヒノキ属を、201がアスナロ属を用いている。203は舟形である。大振りなつくりであるが、上面には一条の沈

線が入れられている。木材はアスナロ属を用いている。

曲物は円形のもの(204～206)と楕円形のもの(207・208)の2種がみられる。204の曲物底板と205の曲物側板は組み合せて出土している。206は別の製品に転用されており、側面に穿孔列がみられる。207は両端に突起がある大型の楕円形曲物底板である。木材は、アスナロ属を用いている。

209～211はY字形をした木製品で、伊場遺跡の報告書の分類に合わせ「背負子」とした。伊場遺跡群では類例が数多く知られているもので、背負子としての復原案が示せないことから、「Y字形木製品」と呼称した上で、機織具の一部や、舟の櫂受けもしくは帆立柱の部材といった可能性も示されている。Y字形の又の部分と、その反対側に顕著な擦痕が認められ、又の部分と直交する基部には2箇所のかぎが入れられている。木材はいずれもマツ属(二葉松類)を用いている。

212・213は曲柄平鋏である。213の先端には鉄製鋏先が装着されていた痕跡が残る。木材はともにコナラ属アカガシ亜属を用いている。214は堅杵である。搗き部と握り部への移行部分が遺存している。搗き部端は使用痕が著しい。木材はクスギを使用している。215は田下駄(大足)である。杵型田下駄の縦杵で、両端が完存する。両端には手綱を緊縛した痕跡がみられる。紐擦れが顕著な側を下として使用されたとみられよう。11箇所あけられた方形の孔には、横棧の一部や楔の木材が残存している箇所がある。木材は、アスナロ属を用いている。216は木錘である。三角柱形の本体の側面中央にかぎが入れられている。木材はアスナロ属を用いている。

217～227は不明品である。221は先端に突起が形成され、本体中ほどの側面に弧状のかぎが入れられている。223は板状の側面に2箇所にかぎがみられる。編台の可能性はあるだろう。224は棒状の先端を扁平に加工している製品である。棒状部も底面が扁平に加工されており、板状を呈する端部には穿孔が3箇所みられる。穿孔された孔には別部材の木釘が遺存している。木材はヒノキ属を用いている。225～227は先端が鋭利に加工された棒状品である。

年代 V層から出土した木簡の紀年が己酉年(709)と神亀元年(724)であることが注目できる。須恵器も遠江V期に主体があり、概ね8世紀前半に中心をおいてよい。Ⅶa層からの若干の混入は認められるが、V層出土品は、時期的にまとまりがある遺物群と捉えられる。

(6) 小 結

V層の堆積年代は、遠江V期にほぼ併行する。2点の紀年銘木簡が示す実年代は709年と724年であり、8世紀前半と捉えられている土器の年代観とも整合する。出土遺物の組成は、Ⅶ層と比べると変化が著しい。V層中から出土する土器の量が比較的少ない点は、遺跡の性格が転換したこと示唆しているだろう。とくに、日常の煮沸具である土師器甕の出土量が、Ⅶ層と比べて極めて少ない点は象徴的である。土器の様相の変化と呼応するように、V層出土遺物には官衙的性格をもつ出土品が数多くみられる。6点を数える木簡をはじめ、木製祭祀具といった遺物の存在は、鳥居松遺跡が数智郡家の一角にあることを明確に示している。

伊場大溝内における貝塚のあり方は、伊場遺跡や梶子遺跡と共通する。貝塚SS02・04から出土した製塩土器は、いずれも渥美半島を中心とした三河湾沿岸地域から搬入されたものとみられる。とくにSS02における製塩土器の出土量が伊場遺跡群の他の出土地の中でも突出している点は注目

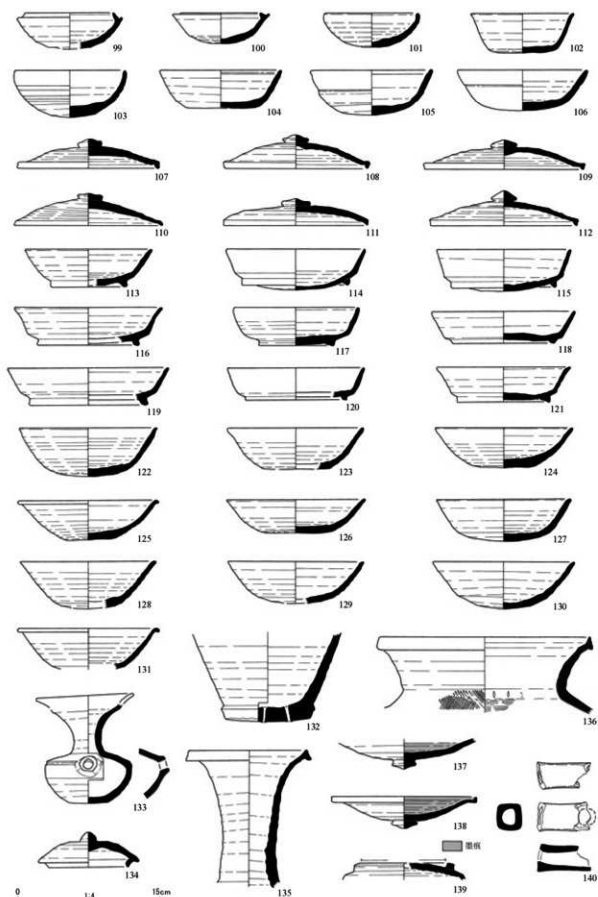


Fig.77 V層出土遺物 (1)

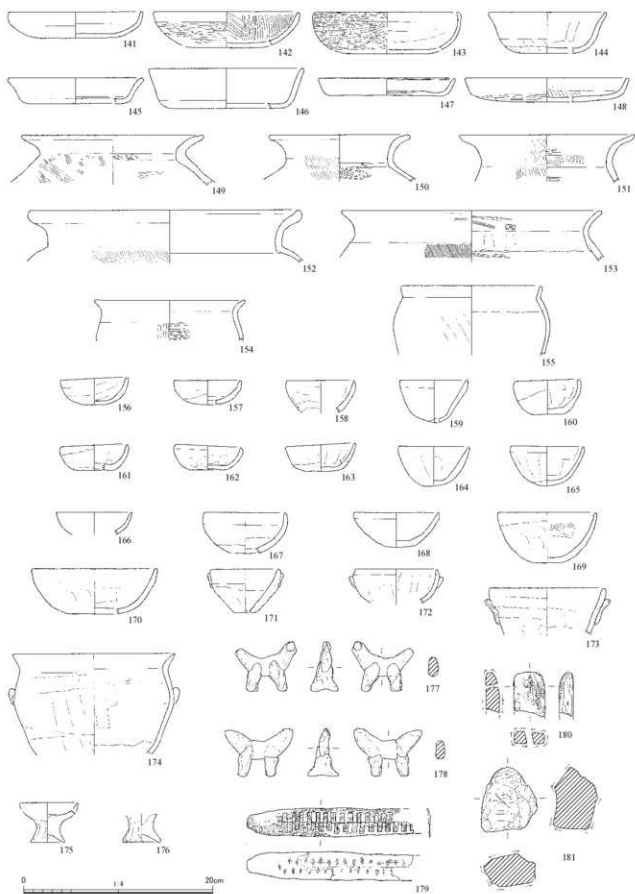


Fig.78 V層出土遺物 (2)

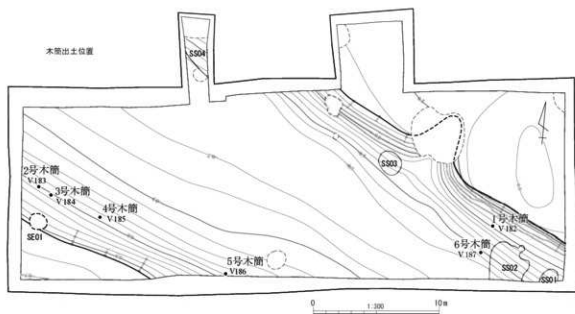
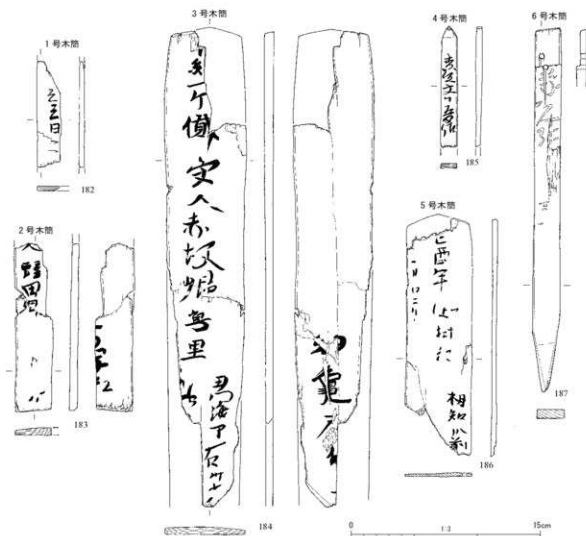


Fig.79 V層出土遺物 (3)

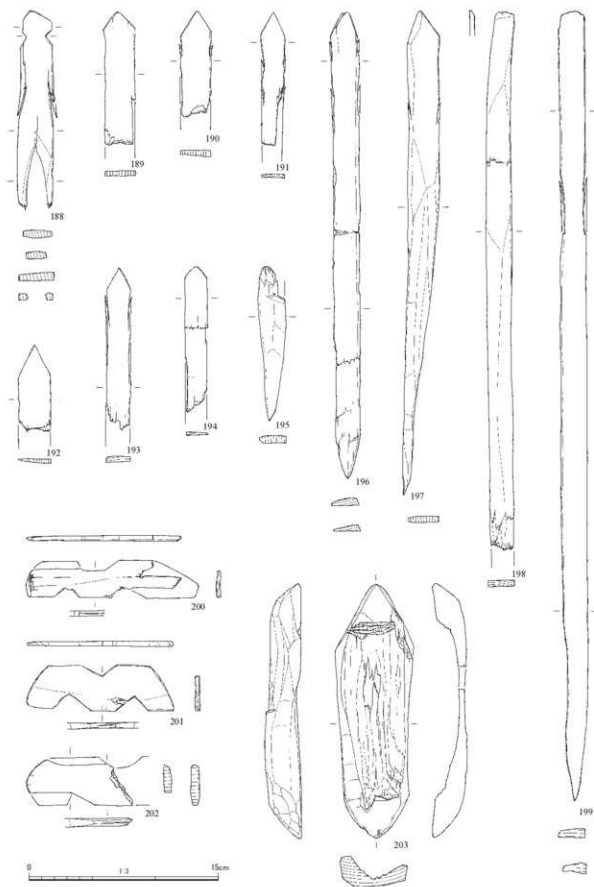


Fig.80 V層出土遺物 (4)

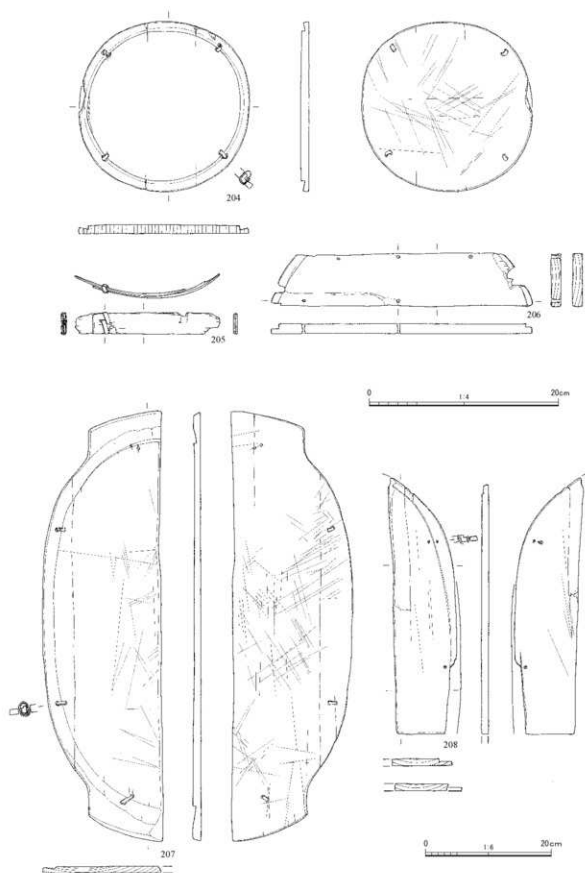


Fig.81 V層出土遺物 (5)

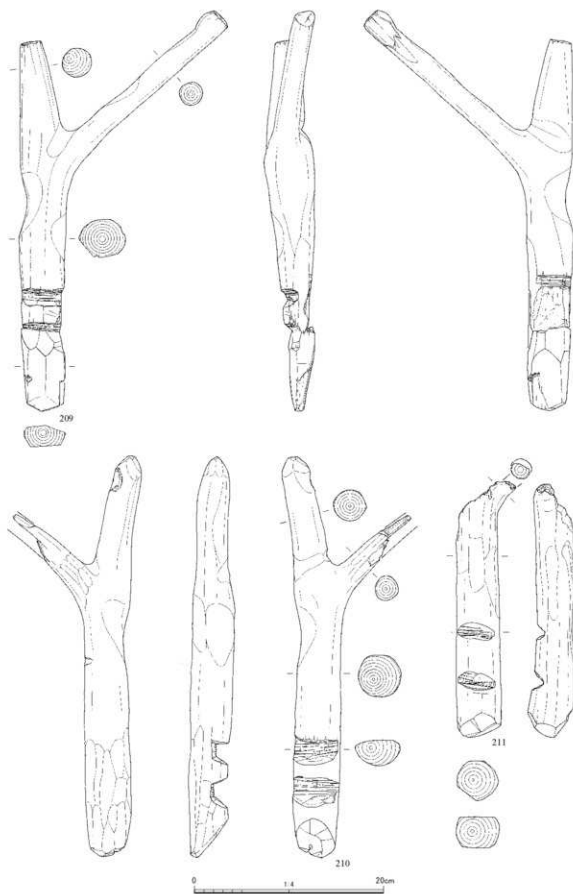


Fig.82 V層出土遺物 (6)

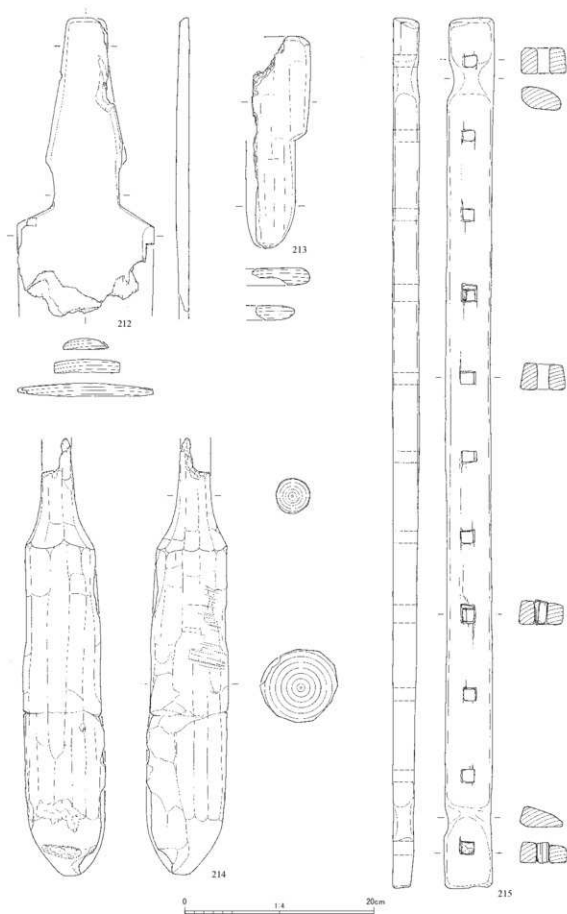


Fig.83 V層出土遺物 (7)

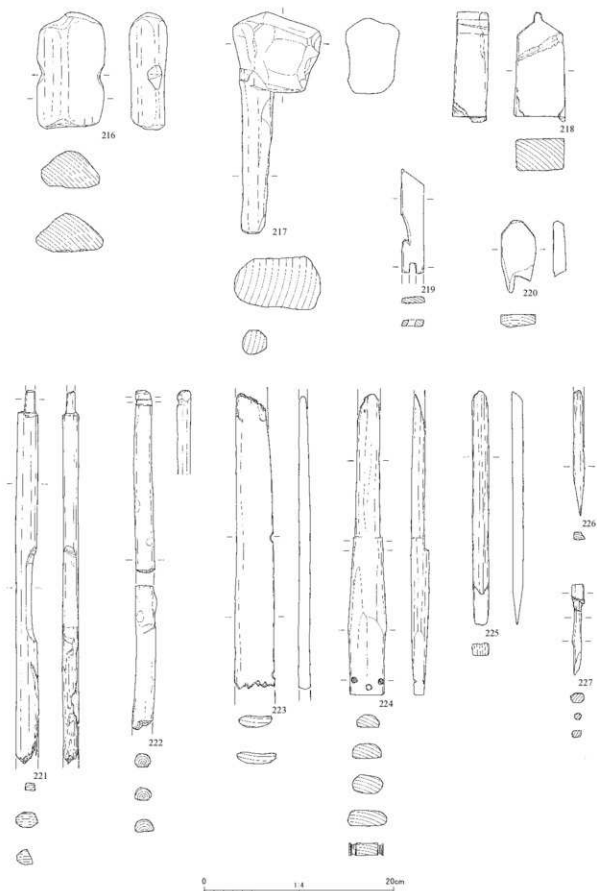


Fig.84 V層出土遺物 (8)

5 IV b 層の調査

(1) IV b 層の概要

IV b 層は、暗茶灰色を呈する層位で、砂層は全く混ざらない。奈良時代後葉～平安時代前葉（8世紀後葉～9世紀前葉）を中心とした時期の堆積層である。砂層が混入しないことからうかがえるように、IV b 層が堆積した時期には伊場大溝の水量は減少し、常時は湿地帯のような環境にあったと推定できる。IV b 層の南岸には井戸状施設（SE01）が築かれている。また、北岸の貝塚上層には、土器や木製祭祀具の集積がみられた。これらの遺物の集積はSX01～04とし、その他のIV b 層出土遺物とは個別に取り扱う。

IV b 層から出土した遺物の中では、11 点の「稲万呂」墨書土器、人面墨書の人形・土器などが注目できる。V 層で出土した木簡とともに、敷智郡家に関連する遺物といえるだろう。

(2) 伊場大溝の形状

IV b 層が堆積した伊場大溝の本来の形状は、Fig.85 に示すものである。底面の標高は-0.4m ほどで、V 層と同様に目立った凹凸はない。北側の斜面の傾斜が南側の斜面の傾斜と比べ急角度である。IV b 層堆積時の伊場大溝の水量は相当少なかったとみられるが、水が流れる部分は北側斜面に偏っ

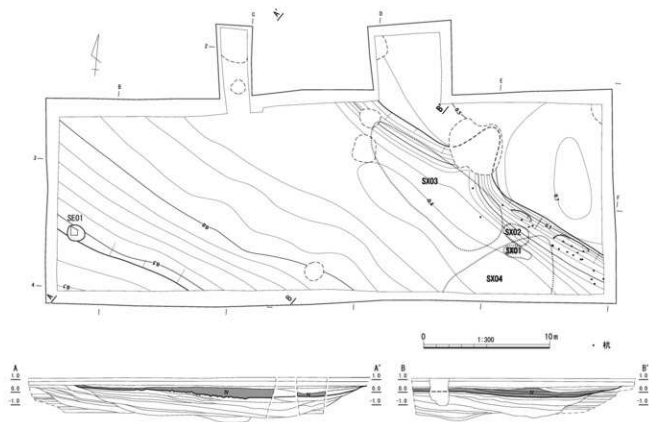
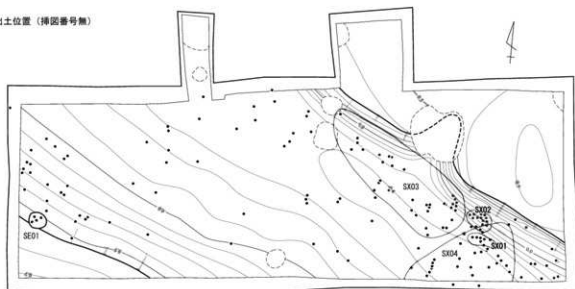
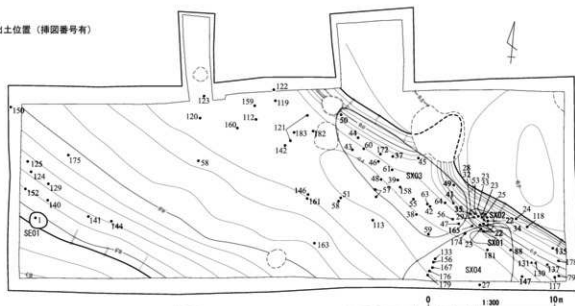


Fig.85 伊場大溝IV b 層

遺物出土位置 (埴図番号無)



土器出土位置 (埴図番号有)



石製品・木器等出土位置 (埴図番号有)

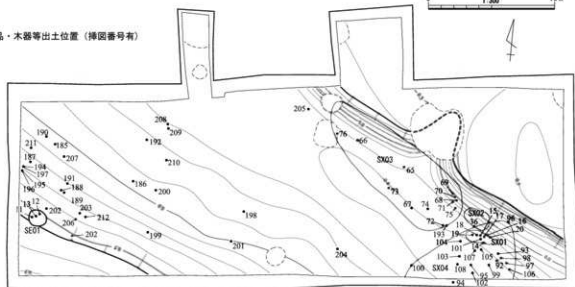


Fig.86 IVb層における遺物出土位置

ていたと考えられる。IV b 層の堆積が認められる部分の幅は 22m 程度であり、伊場大溝の幅に相当する。また、地表から底面までの深さは約 1.1m である。

伊場大溝の北岸には V 層にみられた階段状施設や杭列が存続しているとみられる。水際に近寄りやすい階段状施設や護岸施設の存在は、遺物集積 SX01 ~ 04 の形成ともかかわると捉えられよう。

(3) 遺物の出土状態

出土位置の傾向 IV b 層に含まれる遺物の出土位置は、V 層同様に伊場大溝の兩岸に偏る傾向がみられる。南北兩岸から伊場大溝中にもたらされた遺物は比較的明瞭に分離することができる。遺物が比較的集中するのが、発掘区の東側 SX04 とした範囲と、発掘区の西側 SE01 の近辺である。

土 器 上述の出土位置の傾向どおり、V 層から出土する土器は南北の兩岸に集中する。とくに北岸は SX02 といった土器集積を典型にして、遺物の集中度が高い。SX01 ~ 04 とした遺物の集積がみられ、この中には墨書土器が高い密度で含まれる。11 点におよぶ「稲万呂」墨書土器は、土器集積 SX03 を中心に東西 20m ほどの間のほぼ同一層位から出土している。この中には、「上殿」、「福刀自」、「廣」と書かれた墨書土器も含まれる。

南岸の井戸 SE01 近辺から出土した土器群 (124 ~ 127・129・132・134・140・148・152 など) についても、ある程度のまとまりを認めてよい。また、須恵器の広口壺 141・144 はともに完形に近く、出土位置も近接している。二個一組で扱われ、伊場大溝内にもたらされた可能性が指摘できるだろう。

土師器甕を用いた人面墨書土器 (64) は、北岸の遺物集積 SX03 から、土師器碗を用いた人面墨書土器 (182・183) は SX03 に近接する北岸から 2 個体がまとめて出土している。

その他の遺物 斎串や人形、舟形などの木製祭祀具は、伊場大溝の南北兩岸から出土しているが北岸の出土量が多い。北岸にある SX01 では人面の墨書がある人形と斎串が集中していた。使用状況を示す出土状態といえる。また斎串は、SX03・04 とした北岸の遺物集積中からもまとめて出土している。

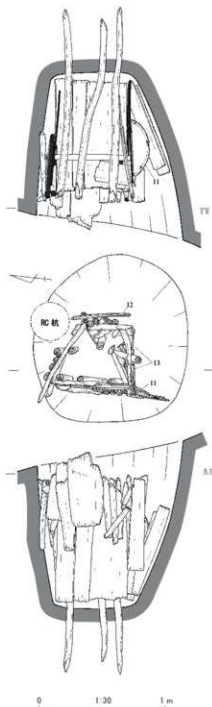


Fig.87 SE01 実測図

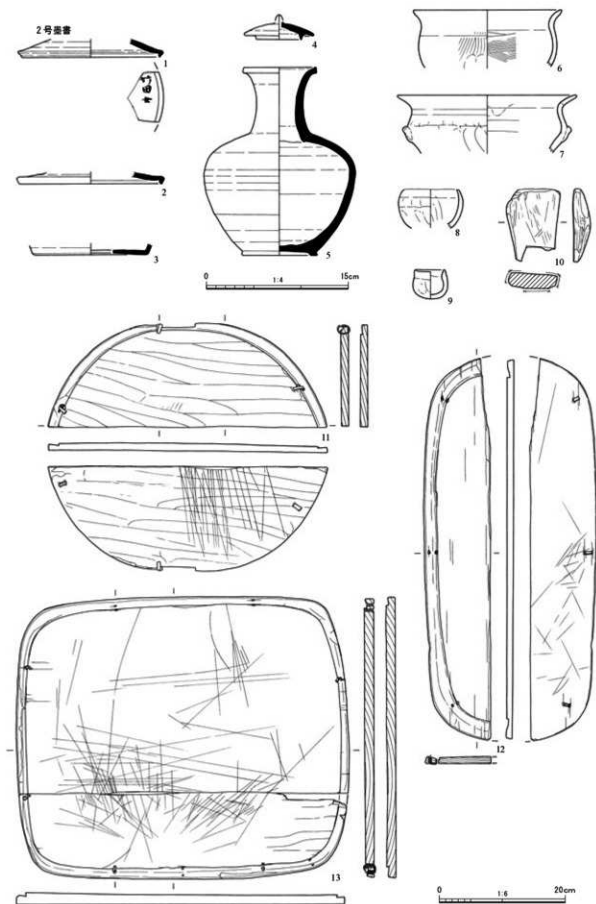


Fig.88 SE01 出土遺物

(4) 井戸

SE01 (Fig.87) 伊場大溝の南岸の斜面において井戸状の施設を検出した。現代のコンクリートの建物基礎杭によって変形しているが、ほぼ全体形をうかがうことができる。方形に枡板を並べ、内側に杭を打ち込んで枡板を固定していた。井戸枠としては粗雑な造りで、水溜め程度の施設であったとみられる。用途は明確ではないが、ここでは、便宜的に「井戸」という表現を用いる。枡板の規模にあわせ、長径 1.3m ほどの平面円形の土坑が掘削されている。土坑の深さは、検出面からおよそ 1.2m ほどである。枡板は比較的丁寧に加工された材を用いていたが、中には曲物底板 (12・13) を転用している部分があった。また、枡木の外側にも曲物底板 (11) が落ち込んでいた。出土遺物は多くないが、1～10 の遺物が主に枡板の外側において確認できた。

SE01 出土遺物 (Fig.88) 1～13 は SE01 から出土した遺物である。1 は須恵器坏蓋で、内面に「竹田女」の墨書がみられる。7 は土師器の把手付鉢の雛形、8 は土師器小碗、9 は鉢形である。10 は粘板岩製の砥石であり、4 側面に使用面がみられる。11～13 は曲物底板である。11 は円形、12・13 は隅丸方形を呈する。12 は 2 片に分かれて転用されていたが、接合してほぼ完形になった。木材はアスナロ属を用いている。箱坏 (3) を含むことから、SE01 出土遺物は遠江 V 期から遠江 VI 期の移行期頃に中心が求められよう。

(5) 遺物集積

概要 伊場大溝の北岸には、木製祭祀具や土器が集中して出土する区域が認められた。これら遺物集積を SX01～04 とし、一部、遺物の出土状態図を作成した。このうち、SX01・02 は遺物どうしの近接度が高く、廃棄時の一括性が高い出土状態が確認できた。いっぽう、SX03・04 は遺物相互の間隔が比較的離れており、集積が形成されるまでにある程度の時間幅を認めてよいような出土状態であった。

SX01 (Fig.89) 伊場大溝北岸の -0.1m ほどの緩やかな斜面上で検出できた木製祭祀具の集積遺構である。検出した位置は、IV b 層の最上層にあたるため、IV b 層の中でも比較的新しい時期（平安時代前葉）に形成されたものとみられる。人面墨書がある人形 2 点 (14・15) と、斎串 5 点 (16～20) で構成されている。これら木製祭祀具の出土位置は互いに近接しており、祭儀を実施した状態を保ったまま埋没したものと推定できる。

人形は全長 22cm ほどのもの (14) と、11cm ほどのもの (15) があり、ともに近接した位置で頭部を上に向けて出土した。とくに 15 は、頭部が立った状態で埋没しており、人形が立てられていた可能性が指摘できる。斎串も 17 の出土状態に表れているように、斜面上に差し込まれて立てられていたとみてよいだろう。

SX01 出土遺物 (Fig.90) 14～20 は SX01 から出土した遺物である。14・15 は人面の墨書がある人形である。ともに手を表現した切り込みはみられない。両者ともに頭部は冠が表現されているとみることもできる。14・15 とともに、首から体にかけて外形に沿った 2 条の線が書き込まれている。衣服とは異なる表現とも解釈できるが、何を表したのか明確でない。

16～20は斎串である。16・17は上下とも完存する。側辺の上下2方向に切り込みがみられる形態で共通性が高い。木材は14、16～18、20がアスナロ属、15がヒノキ属を用いている。

SX02 (Fig.89) SX02は、伊場大溝の北岸斜面、SX01の北側に近接して検出できた土器集積である。伊場大溝V層やIVb層中では、土器がまとまって出土することが稀であり、SX02がほとんど唯一の土器集中箇所といえる。須恵器の坏と長頸壺に加え、土師器の小碗がまとまって出土しており、何らかの儀礼を行った痕跡とも解釈できる。なお、SX02を確認した位置は、IVb層の中では比較的深いこと、出土遺物が示す時期も古いことから、SX02はV層に帰属させるほうが妥当かもしれないことを付記しておく。

SX02 出土遺物 (Fig.90) 21～36はSX02から出土した遺物である。須恵器には摘蓋(21)、無台碗(22)、長頸壺(23・24)がみられる。なお、23は形態や色調の特徴から、猿投産の可能性がある。27～35は土師器の小碗である。口縁部が整うものと、比較的粗雑で波打つものが認められる。SX02出土遺物は、遠江V期から遠江VI期への移行期頃に中心が求められよう。

SX03 (Fig.91) SX02より西側の斜面から「稲万呂」と墨書した土器が集散的に出土した。「稲万呂」墨書土器が出土する範囲をSX03とし、遺物の出土状態を図化した。今回出土が確認できた「稲万呂」墨書土器のすべてが、SX03の範囲から出土している。

SX03からは37～78の遺物が出土した。14点の墨書土器(37～50)が集中している点が最も注目できるだろう。このほか、人面墨書土器(64)や斎串の集中(67～72)も同時代に執行された儀礼の痕跡を示すものといえよう。

SX03 出土遺物 (Fig.92～94) 37～78はSX03から出土した遺物である。「稲万呂」墨書土器(推定分を含む)は総数11点が出土した。稲穂を象ったような独特の記号の中に人物名「稲万呂」が墨書されている。「稲万呂」と墨書されているのは摘蓋の内側である場合(37～42)が多いが、坏身の底(43・44)、皿の底部(47)、高盤の上面(48)、土師器の皿もしくは坏(50)の底部などにもみられる。独特の記号を伴う「稲万呂」の墨書は特徴的である。37～40は筆跡も酷似し、同一人物の手による墨書の可能性が高く44・47なども比較的似た筆致といえるだろう。これに対し42は「万呂」の部分省略して記し、明らかに筆跡が異なる。遺存状態が悪いが43も同様の表記がなされている可能性がある。省略して記された墨書をもつ土器は型式的にも新しく(遠江VII-2期、9世紀前葉)、「稲万呂」墨書土器がある程度の存続期間を有していることが知られる。

このほか、SX03からは「上」「上殿」と記された箱坏(45)、「稲刀自」と記された双耳箱坏(46)、「廣」と記された短頸壺蓋(49)なども知られる。これら墨書土器は遠江VI期に中心があるが、平頂蓋(42)や箱坏(43～46)、高盤(48)などは遠江VII-1期まで降るとみることができる。「稲万呂」墨書土器の存続年代は、遠江VI-2期頃からVII-1期にかけてといえよう。実年代では西暦800年を境に前後数十年頃にあたるとみられる。

墨書土器以外の出土遺物としては、須恵器(51～60)、土師器(61～64)、鹿角(65)、鋳形木製品(66)、斎串(67～72)、曲物(73～78)がある。須恵器には51・52・57などの古相を示す遺物が含まれるが、概ね遠江V期後半の遺物群とみてよいだろう。箱坏を転用した硯(56)には朱墨痕が残る。人面墨書土器(64)は土師器の小型甕に人面を墨書したものである。

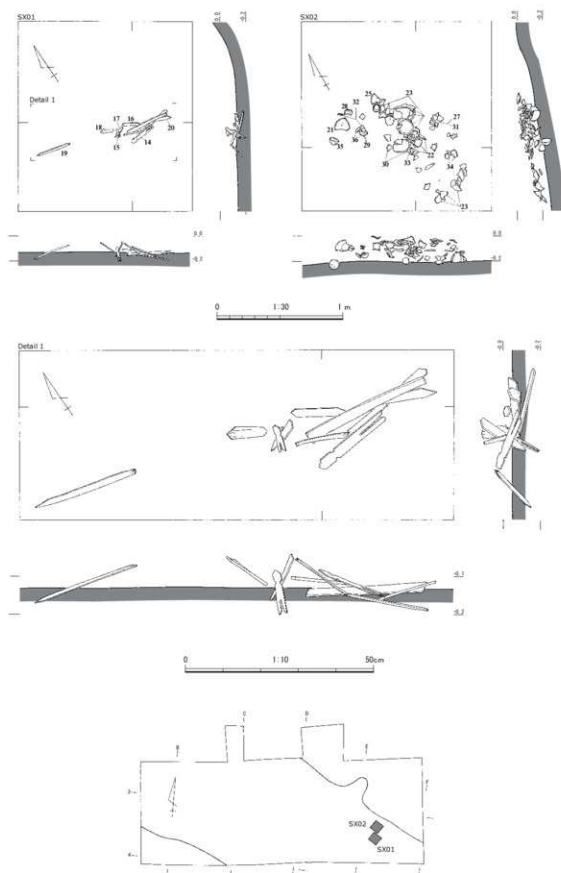


Fig.89 SX01・02 遺物出土状態

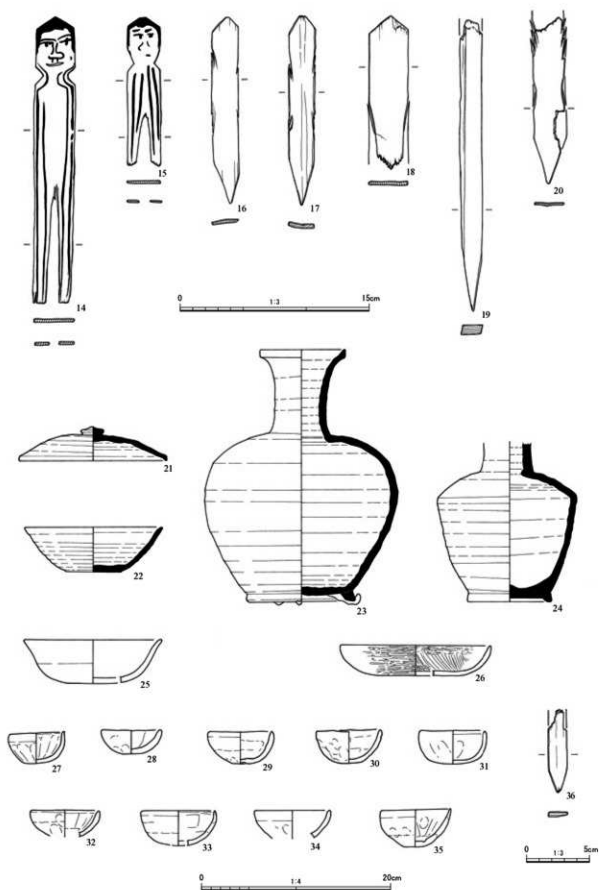


Fig.90 SX01・02 出土遺物
14～20：SX01 21～36：SX02



Fig.91 SX03 遺物出土状態

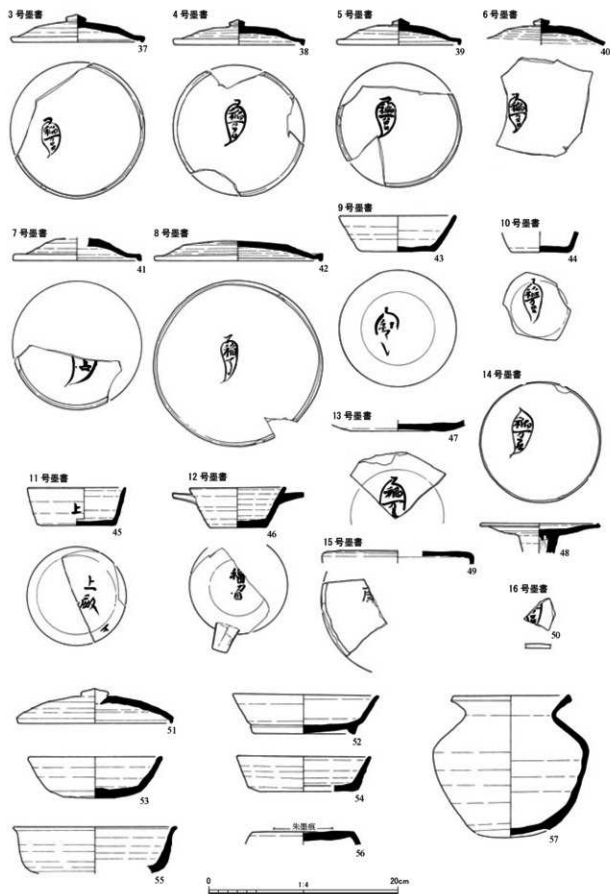


Fig.92 SX03 出土遺物 (1)

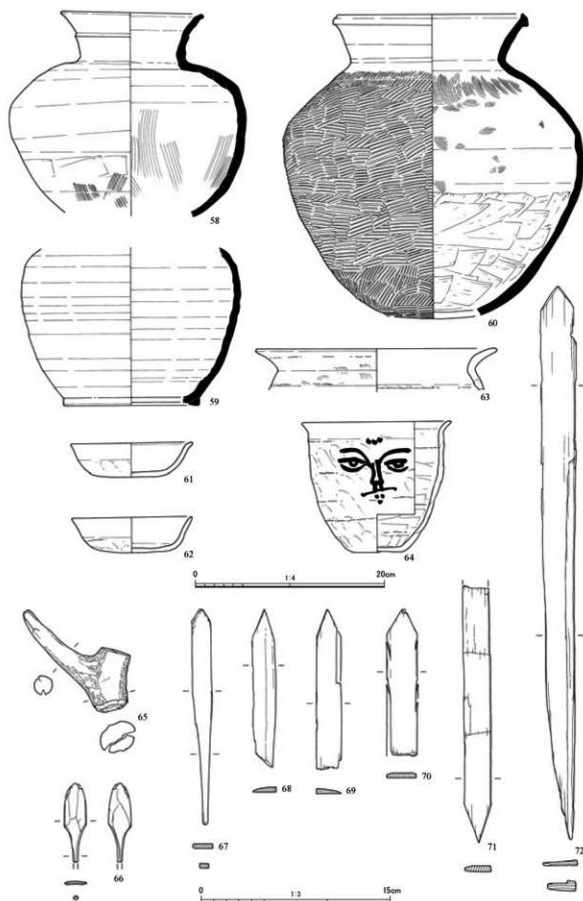


Fig.93 SX03 出土遺物 (2)

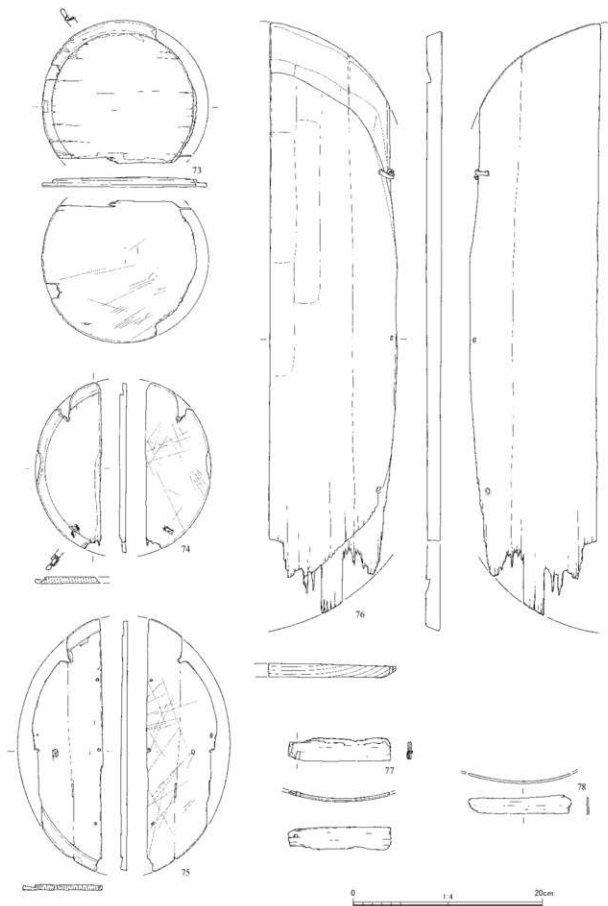


Fig.94 SX03 出土遺物 (3)

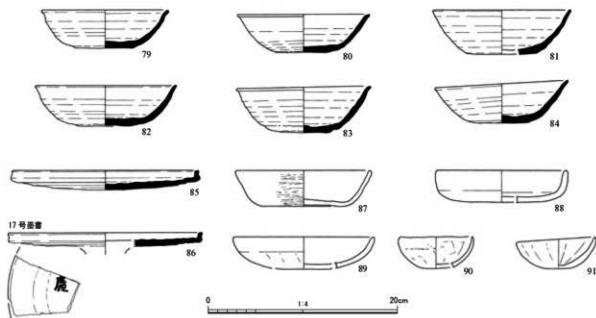


Fig.95 SX04出土遺物 (1)

鹿角 (65) は両端が切断され、短い枝角部分が残されている。何らかの未成品ともみられるが、素材を切り出した残滓の可能性もある。鐵形木製品 (66) は柳葉形を象ったもので、アスナロ属を用いている。67～72は斎串である。67は小型品で下部は棒状に加工されている。72は比較的大型の製品であるが、下部は欠損しており全長は不明である。木材は、アスナロ属もしくはヒノキ属を用いている。73～78は曲物である。底板は円形のもの (73～75) と楕円形のもの (76) が知られる。

SX04 (Fig.86) SX03と同一層位において出土した遺物のうち、SX02よりも東に位置するものをSX04とする。遺物の出土位置はまばらであるが、木製祭祀具が集中している点が注目できる。

SX04出土遺物 (Fig.95・96) 79～108はSX04から出土した遺物である。79～86が須恵器、87～91が土師器、92～108が木製品である。

須恵器には、無台碗 (79～84)、盤 (85)、高盤 (86) がある。85や86といった器種を含むことから、SX04出土遺物は遠江Ⅵ期に位置づけられる。なお、86の高盤の上部下面には「廣」の墨書がみられる。87～91は土師器である。坏身 (87～89) と小碗 (90・91) がみられ、須恵器の年代観とも矛盾しない。

木製品には、人形 (92)、斎串 (93～101)、舟形 (102)、横棧状木製品 (103)、摺り鉢状木製品 (104)、曲物 (105・106)、不明品 (107・108) がみられる。92の人形は、手の切り込み部分が欠損している。木材は、アスナロ属を用いている。斎串 (93～101) は側辺の切り込みがみられないものが多い。木材は、アスナロ属もしくはヒノキ属を用いている。102の舟形は、内側を削り貫いただけの比較的簡易なつくりである。木材は、ヒノキ属を用いている。103は両側に柄が作り出された横棧状の木製品で、田下駄の部材であった可能性がある。104は摺り鉢状の木製品である。先端は欠損しており、全体形は不明である。側辺には漆の塗布が認められる。木材はヒノキ属を用いている。105・106は曲物底板、107は楔形を呈する不明品、108は両端が鋭利に加工された不明品である。

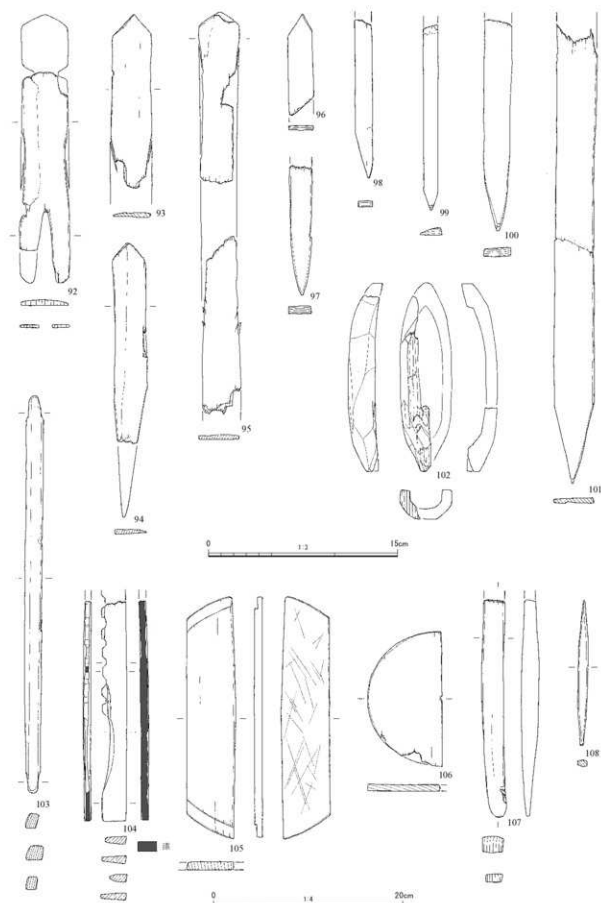


Fig.96 SX04 出土遺物 (2)

(6) IV b 層出土遺物

概要 Fig.97～101にIV b層から出土した遺物を示す。IV b層から出土した遺物のうち、図示したものは105点(遺構出土遺物を含むと213点)である。以下、須恵器(109～152)、土師器(153～184)、木製品(185～213)の項目に分けて紹介する。

須恵器 (Fig.97・98) 109～152はIV b層から出土した須恵器である。坏蓋・坏身(109～129、136～139)のほか、無台碗(130～135)、盤(140)、広口壺(141～145)、鉢(146)、壺蓋(147)、長頸壺(148・149)、横瓶(150)、甕(151・152)などの器種が認められる。

帰属時期が明瞭な坏蓋・坏身(109～129)に注目すると、109のような古相を示す摘蓋や、有台坏身(115～123)を含むものの、直径が縮小した摘蓋(114)や一定量の箱坏(124～129)がみられる。ここに紹介するIV b層出土遺物は、遠江V期を含む可能性を示すが、その主体的な時期は遠江VI期に位置づけてよいだろう。IV b層出土遺物の中には、転用硯が4点(136～139)含まれる。このうち、139は直径27cmを超える大型品である。このほか、IV b層出土須恵器には、広口壺(141～145)が比較的目的立つ。広口壺は、遠江VI期になると数が少なくなることをふまえると、先述のように、IV b層の堆積時期が遠江V期を含んでいる可能性が高いとみられよう。

土師器 (Fig.99) 153～184はIV b層から出土した土師器である。無台の坏身(153～158)のほか、有台坏身(159・160)、皿(161～163)、高盤(164・165)、鉢(166～169、173)、甕(170～172、174・175)、把手付鉢形や甕形・壺形の雛形(176・177・180・181)、小碗(178・179)、碗(182～184)などの器種が認められる。碗には人面墨書土器(182・183)が含まれる。2点の人面墨書土器(182・183)は、器形が若干異なるが、左に傾いた人面の表現が互によく似ている。なお、184の碗にも墨痕がみられ、人面が墨書されている可能性が考えられる。

木製品 (Fig.100・101) 185～213はIV b層から出土した木製品である。木製品には、鎌柄(185)、曲物(186～190)、高台付盤(191)、不明品(192～198)、人形(199・200)、斎串(201～206)、摺り鉢状木製品(207)、不明加工板(208・209)、馬形(210)、舟形(211・212)、加工棒頭(213)がある。

鎌柄(185)は、鉄刃を装着した柄穴部分が遺存している。木材は、アカガシ亜属を用いている。186～190は曲物底板である。190は楕円形とみられるが、そのほかは円形である。186・190は有段、187～189は無段である。191は大型の高台付盤である。遺存状態が極めて悪いが、わずかに高台と側辺の一部が遺存している。192はヘラ状を呈する不明品、193は先端が加工された棒状品である。194～197は先端が山形に加工された角材で、4点がまとまって出土した。198は曲物底板を再加工したような形態をもつが、用途は不明である。

人形(199・200)や斎串(201～206)はV層出土品と共通性が高い。208・209は不明加工板である。両者は厳密には接合関係にないが、同一個体と考えられる。複雑な外形を描くが、何を象ったものが明確でない。表面には墨による縁取りや朱彩が認められる。210は馬形である。幅が2cm近い厚い板を加工している。直線的な下面には棒状の足を挿入したとみられる4箇所孔と、中央に支柱を挿入したとみられるやや大きめの孔があげられている。211・212は舟形である。ともに、中

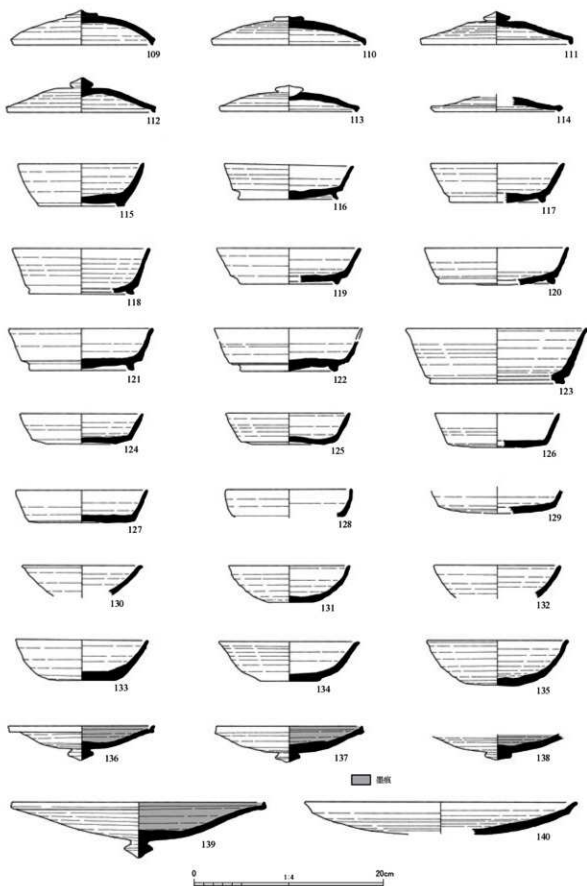


Fig.97 IVb層出土遺物 (1)

央の挟りは少ない。213は翼状の突起を作り出したもので、一端には棒状の部位が連続している。Fig.101の木製品のうち、樹種同定をしたものはすべてヒノキ属もしくはアスナロ属を用いている。

年代 IV b層から出土した遺物の年代は、遠江V期を一部含むとみられるものの、遠江VI期を中心とするとみられる。実年代では8世紀後半から9世紀初頭頃に相当する。また、SX03出土遺物は、遠江VII -1 期（9世紀前葉）まで降るとみられる。

(7) 小 結

IV b層の堆積時期は、8世紀後半から9世紀前葉におよぶとみられる。豊富な墨書土器や木製祭祀具、人面墨書土器の存在が示すように、この時期にも数智郡家関連の施設が鳥居松遺跡にも展開していたとみられる。「稲万呂」墨書土器は、従来、伊場遺跡群からの出土が知られていたが、その数を凌駕する量が集中して出土した。数智郡家に強い影響力をもっていたとみられる稲万呂の本拠地が、鳥居松遺跡にあった可能性を示唆するものといえるだろう。

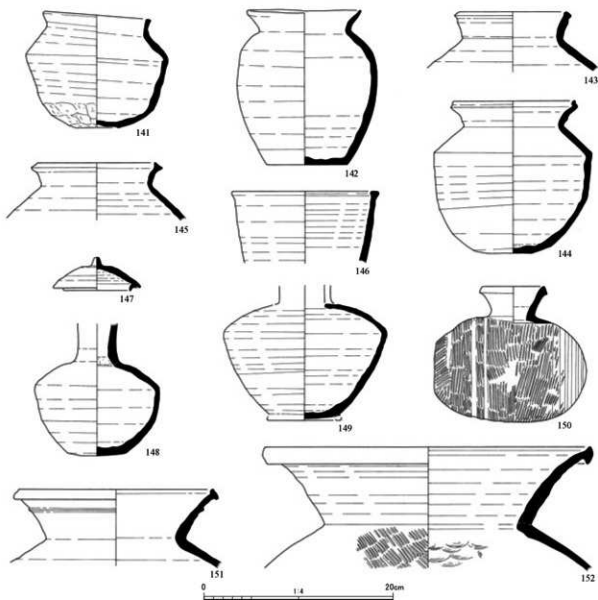


Fig.98 IV b層出土遺物 (2)

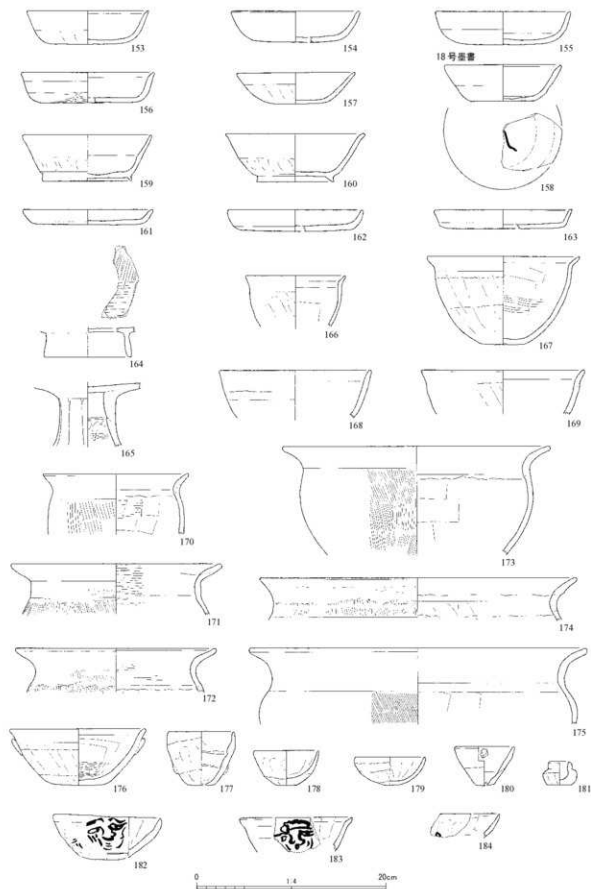


Fig.99 IVb層出土遺物 (3)

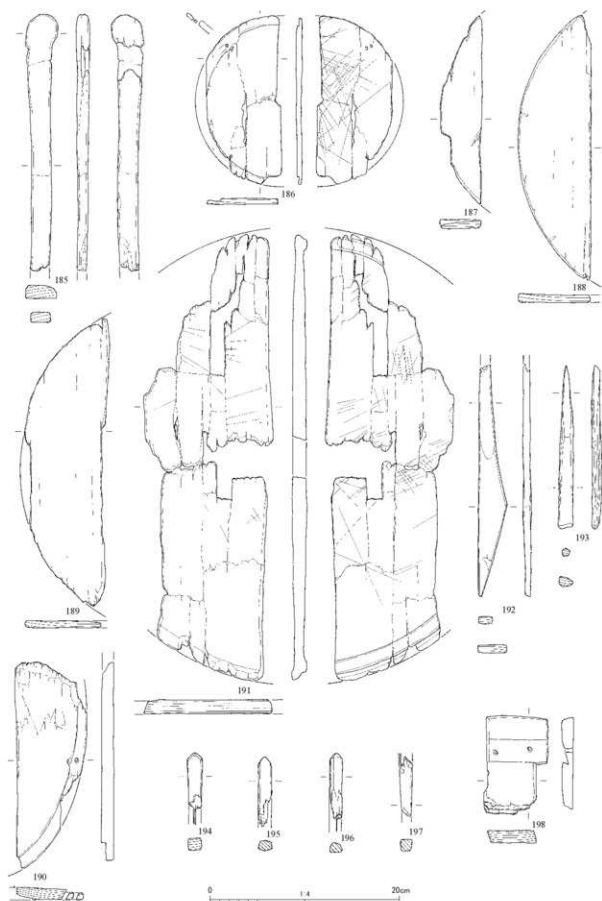


Fig.100 IV b層出土遺物 (4)

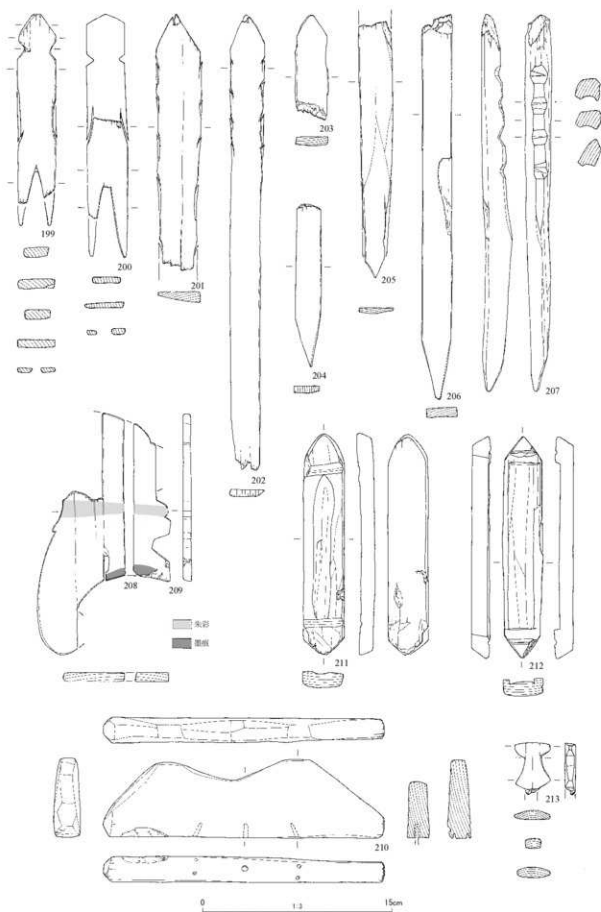


Fig.101 IV b層出土遺物 (5)

6 IV a 層・Ⅲ層の調査

(1) IV a 層・Ⅲ層の概要

IV a 層 IV a 層は、褐色粘土で形成される非常に薄い層である。大溝の北岸にわずかに堆積しているにすぎず、調査区の北東側において部分的に確認できたのみである。IV a 層の中心的な堆積年代は、平安時代中葉（10 世紀）である。伊場大溝全体にわたる基準層位とはいいいくいが、灰釉陶器が出土する地層はこの部分だけであることから、IV b 層から分離して捉えた。なお、同様の堆積層は、B 区で検出した SD102 においても確認できている。SD102 は伊場大溝の南岸であることから、IV a 層は伊場大溝の南北両岸にわたって堆積しているとみられる。

Ⅲ層 Ⅲ層は茶褐色有機物層であり、未分解の植物片を大量に含んでいる。Ⅲ層が堆積した伊場大溝の本流は北側に偏り、著しく幅を減じている。また、本流部分の南岸には堤防上の高まりがあり、その南側にもⅢ層の堆積がみられる。今回の調査ではⅢ層から出土した遺物はないが、伊場遺跡や梶子遺跡の調査成果から、平安時代中葉から鎌倉時代前半（11～13 世紀）頃の堆積層と推定できる。この段階になると伊場大溝は急速に規模を縮小し、水流もほとんどなかったとみられる。

泥炭質の強い堆積土の状態から、湿地性の植物が大量に繁茂していたことが想定できる。Ⅲ層の堆積後、室町時代（14～16 世紀）になると伊場大溝は完全に埋没し、地上にその姿を留めなくなる。

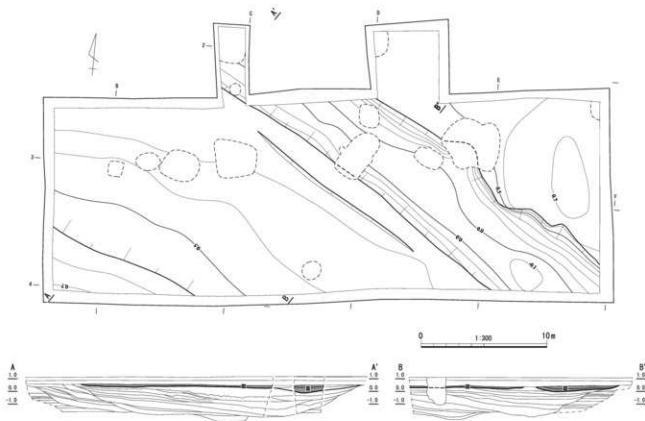
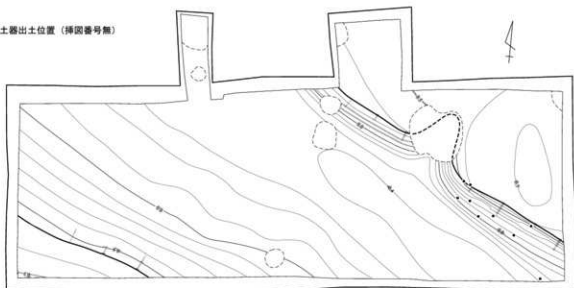
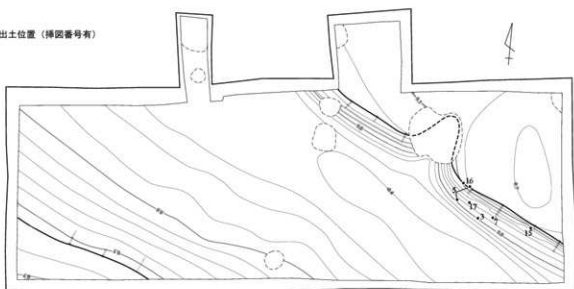


Fig.102 伊場大溝Ⅲ層

遺物土器出土位置 (棒図番号無)



土器出土位置 (棒図番号有)



石製品・木器等出土位置 (棒図番号有)

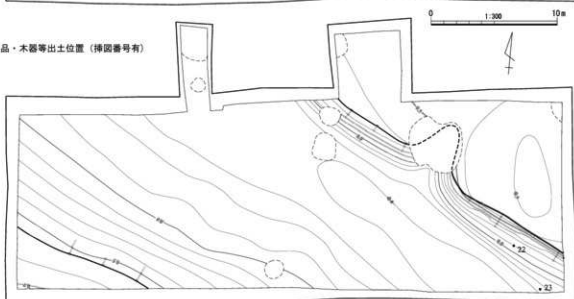


Fig.103 IV a 層における遺物出土位置

(2) 伊場大溝の形状

IV a 層 IV a 層が堆積した時点の伊場大溝の形状は、IV b 層のそれと大きな違いはなかったとみられる。IV a 層の厚みは 10cm に満たず、非常に薄い。B 区で確認した南岸 (SD102) の状況も同様である。平安時代前葉から平安時代中葉にかけて (9 世紀前葉～10 世紀)、伊場大溝は緩やかに埋没し、その深さと幅を減じていったとみられよう。

Ⅲ層 Ⅲ層が堆積した時点の伊場大溝の形状は、北側に偏り著しく幅が狭くなっている。伊場大溝本流の南岸には堤防状に盛り上がっている状況が確認できた。この盛り上がりは自然に形成されたものか、人工的に作り上げたものが、明確でない。この堤防状の盛り上がりによって伊場大溝の流路が狭くなっている。Ⅲ層が堆積する伊場大溝本流の規模は、幅 7m、地表から底面の深さは 0.8m 程度であったとみられる。なお、Ⅲ層はこの本流以南の地域の広い範囲にも堆積している。本流以南のⅢ層が堆積する区域は、広い湿地状の環境であったとみられ、水田などに利用していた可能性が考えられる。

(3) 遺物の出土状態

IV a 層から出土する遺物は比較的少ない。その出土位置も伊場大溝の北岸に限られる。こうした遺物の出土状態は、IV b 層の堆積が限定的であったことを示している。IV a 層から出土する遺物の殆どは灰軸陶器である。灰軸陶器は伊場大溝の岸に沿って、比較的まばらに出土した。出土した標高が地表面に近いが、故意に埋置したというより、伊場大溝の岸に向かって投棄したと解釈できる出土状態である。

大型の隅丸方形の曲物底板 (22) および盤 (23) は、IV a 層の灰軸陶器が集中する地域より南側に離れて出土した。出土層位は他の木製品の出土位置より高く、発掘調査時にはⅢ層から出土したものと認識した。Ⅲ層の堆積年代は 11～13 世紀と捉えられる。ただし、今回の調査ではⅢ層から 22・23 以外に遺物が出土していないことを考えると、22・23 の帰属時期は、IV a 層が堆積した平安時代中葉頃に近い可能性が高いだろう。

(4) IV a 層・Ⅲ層出土遺物

概要 Fig.104・105 に IV a 層およびⅢ層から出土した遺物を示す。IV a 層から出土した遺物のうち、図示したものは 21 点 (1～21)、Ⅲ層から出土した遺物は 2 点 (22・23) である。以下、灰軸陶器 (1～17)、土師器 (18)、石製品 (19～21)、木製品 (22・23) の項目に分けて紹介する。

灰軸陶器 (Fig.104) 1～17 は IV a 層から出土した灰軸陶器である。灰軸陶器には、碗 (1～15)、深碗 (16)、平瓶 (17) がある。

灰軸陶器の碗 (1～15) は、三日月高台もしくは三角高台をもち、底部はすべて糸切未調整である。1 は須恵器的な焼成であるが、2～15 は灰白色系統の色調を呈する。また、7 などを典型例に、焼成状況が悪く、風化が進んでいるものもみられる。施釉は 2～5、9 にみられるが、いずれも漬け掛けをしたもので発色は悪い。

16は深碗である。高い高台に、直線的な口縁が連続する。口縁端部には輪花がみられる。17は平瓶である。把手と口縁端部は欠損するが、全体形は充分にうかがえる。底部はナデ仕上げであるが、僅かに糸切の痕跡を残す。上面に施釉されており、発色は良好である。

以上、IV a層出土の灰釉陶器は概ねO53窯式からH72窯式を中心とした資料群といえ、10世紀頃の所産とみてよいだろう。

18は土師器の甕（鍋）である。鉢形に開く体部に外側に直線的に開く口縁部が取り付く。体部外面は板ナデによる調整がみられる。形態的特長から、平安時代の所産とみてよい。

19～21は石製品である。19・20は砥石であり、ともに凝灰岩を用いている。21は円柱状の叩石で、この個体も凝灰岩を用いている。叩き痕は両端部に認められるが、円柱状をなす側面に打ち欠いて成形された2条の窪みがみられる。この窪みを用いて錘として使用した可能性がある。

22は曲物底板である。III層から大きく二つに分かれて出土した。隅丸長方形を呈する大型品である。側面には側板をはめ込む段が作り出され、長辺に3箇所、短辺に1箇所の側板緊縛用の孔があげられている。表裏とも、刃物による切り傷が顕著にみられる。木材は、ヒノキ科アスナロ属が用いられている。伊場遺跡群では、長方形曲物底板の出土例が少ないが、今回の発掘調査では本例と、SE01から出土したものの（IV b層-13）の2点が知られている。23は同じくIII層から出土した盤である。側辺の一部が遺存しており、僅かな立ち上がり部分が確認できる。この個体も、表裏ともに刃物による切り傷が顕著にみられる。

年代 IV b層が堆積した年代は、出土した灰釉陶器がO53窯式からH72窯式を中心としていることから、平安時代中葉（10世紀頃）頃とみられる。III層から出土した22・23についても、III層から出土する遺物がこの他に全く見られないことを考えると、灰釉陶器が示す年代に帰属時期を求めておくほうが妥当であろう。

（5）小 結

IV a層の堆積時期は、平安時代中葉（10世紀）を中心とすることが、出土した灰釉陶器の年代観から明らかになった。IV a層の堆積は極めて薄いため、出土する遺物量が少ないが、伊場大溝内への土器等の投棄が10世紀まで継続していることが明確になった。この段階の遺跡の性格をうかがうだけの資料に恵まれないが、伊場大溝の南岸であるB区SD102からは「本」と書かれた灰釉陶器（Fig.111-30）が出土している。平安時代中頃になると、鳥居松遺跡に展開していた郡家施設は急速に衰退していったとみられる。

III層からは曲物底板（22）や木製の盤（23）が出土したが、先述のとおり下層のIV a層から混入した可能性がある。これ以外にIII層から出土する遺物はなく、今回の調査ではIII層の堆積年代をうかがう手立ては得られなかった。伊場遺跡や梶子遺跡の調査結果からはIII層の中心的な堆積年代は平安時代末から鎌倉時代前葉（11～13世紀）と推定されている。この時期の鳥居松遺跡の様相は不明瞭であるが、南のB区からはこの時代の素掘りの井戸（SE101）が確認されている。

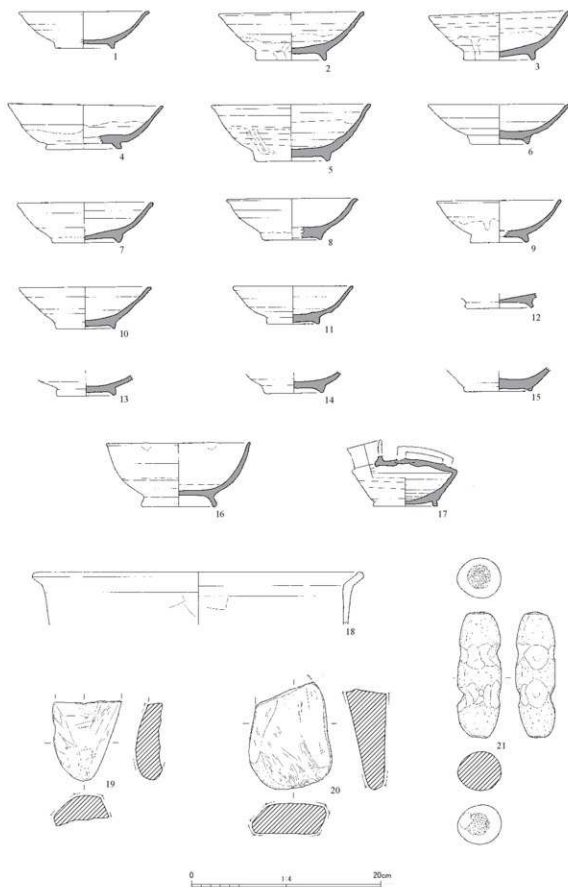


Fig.104 IV a層出土遺物

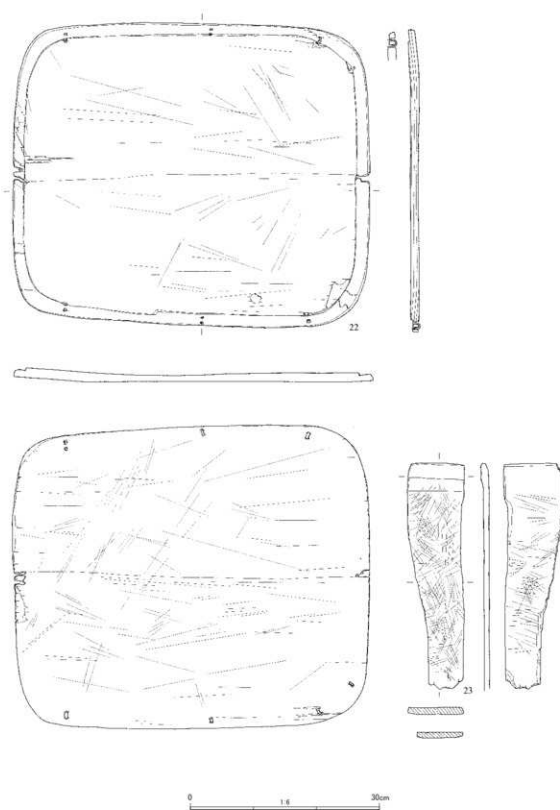


Fig.105 Ⅲ層出土遺物

7 B区の調査

(1) B区の概要

B区は下層において弥生時代の遺構を濃密に検出したが、上層においても古墳時代から鎌倉時代に至る遺構群を確認した。古墳時代中期の土器集積(SX111・112)を2箇所確認したが、この時期の明確な遺構は検出できていない。調査区の北東部では奈良時代から平安時代の伊場大溝の南岸を検出した。伊場大溝南岸では、奈良時代の井戸状遺構(SE102)が築かれている。このほか、調査区の西側では鎌倉時代の井戸(SE101)も確認されている。B区は伊場大溝のすぐ南側にあたることから、敷智郡家関連の遺構群の検出が期待されたが、当該期の建物などは確認できていない。

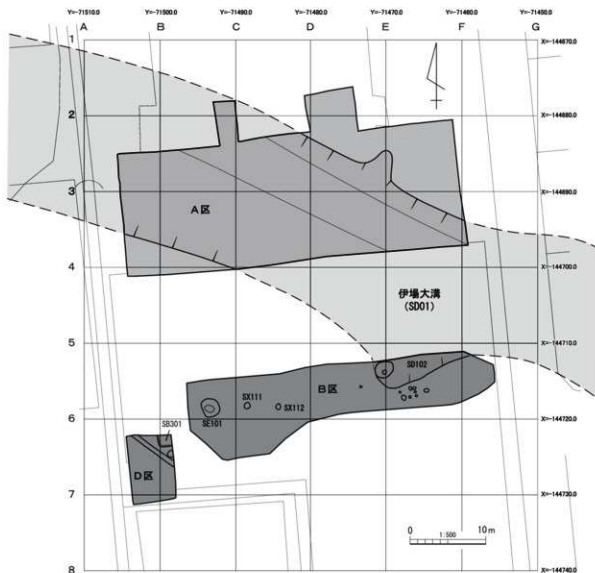


Fig.106 調査区と遺構の位置関係

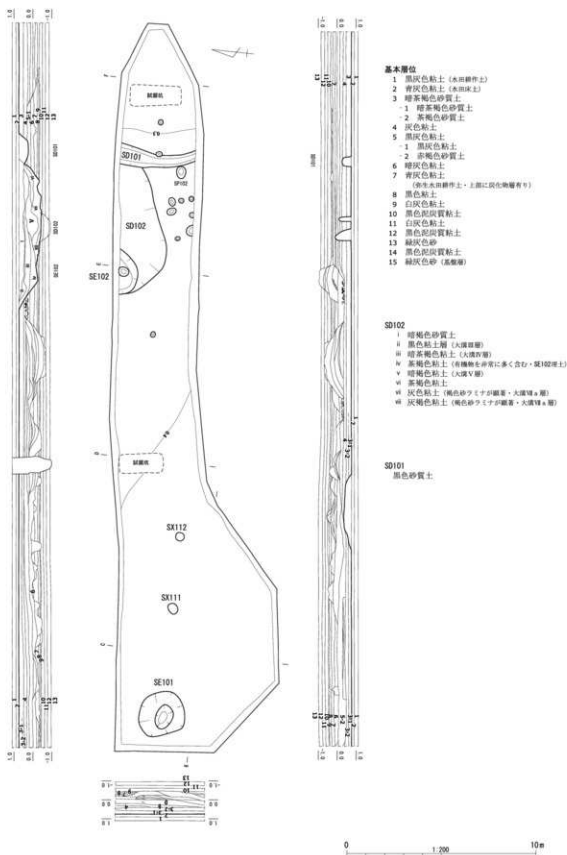


Fig.107 B区検出遺構

(2) 検出遺構と出土遺物

SX111・112 調査区の西側において古墳時代中期の土器集積を2箇所(SX111・112)確認した。いずれも炭化物や焼土に混じり、良好な遺存状態を保つ土師器(Fig.108-1・2・4・6)がまとまって出土した。炭化物や焼土の存在から、住居跡などが埋没している可能性が考えられたが、堅穴建物の掘り方や柱穴など、明確な遺構は確認できなかった。また、これら土器がまとまって出土した周囲の同一層位からも古墳時代中期の遺物が僅かに出土している。ここでは、これらの出土遺物をまとめて紹介する。

SX111・112 出土遺物 (Fig.108) 1・2・4はSX111から、6はSX112から出土した土師器である。このほか3・5もこれら遺物集積の周辺で出土した。1は二重口縁の壺で、二重口縁が形骸化した厚いつくりの口縁をもつ。2・3は内彎口縁の碗であり、ともに似たつくりである。4・5は高坏である。4は屈曲が明確な高坏の坏部で、坏端部は直線的に仕上げられる。5は高坏の脚部で、端部は曲線的に屈折している。6は平底の甕である。やや長胴化した体部に緩やかにく字形に屈曲する口縁が接続する。6は歪みが著しい。以上の遺物群は、古墳時代中期後葉(5世紀後葉)の遺物群として時期的にまとまりがある。SX111・112に伴う明確な柱穴などの遺構は確認できなかったが、建物に付随する炉などに伴う遺物とみてよいだろう。

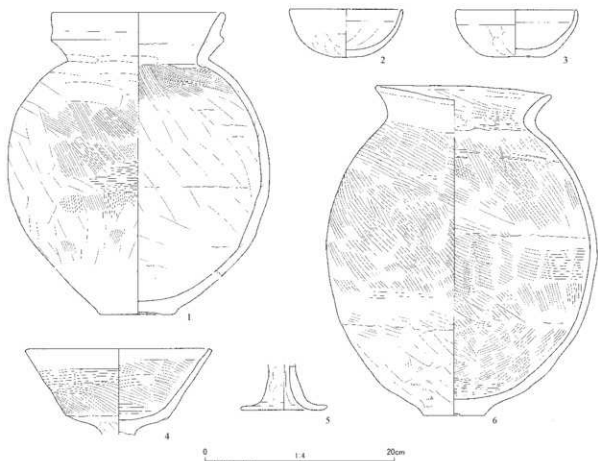


Fig.108 SX111・112 出土遺物

1・2・4：SX111 6：SX112 3・5：包含層

SE102 (Fig.109) 調査区の東側、伊場大溝の南岸に面して検出した井戸状の遺構である。井戸である確証はないが、便宜的に以下の記述では井戸として表現する。

SE102は弥生時代の遺構 SX101と重なって検出された。発掘区の制約から、掘り方の全体は確認できていない。直径 2.5m ほどの浅い皿状の土坑内のほぼ中央に、割り貫き式の臼(18)を転用した杵材が置かれている。杵材は直径 50～55cm ほどで、底が抜かれている。また、補強として何本かの杭が打ち込まれている。

杵材の周囲からは Fig.110-1～17、19・20 の遺物が出土した。土師器小碗がまともっており、何らかの儀式が執り行われた可能性もある。出土遺物から、遠江V期から遠江VI期の移行期頃(8世紀中葉)の遺構と捉えられる。伊場大溝の層位でいえばIVb層に相当する。

SE102 出土遺物 (Fig.110) 1～20はSE102から出土した遺物である。須恵器(1～8)には、摘蓋(1・2)、有台坏身(3)、箱坏(4)、無台碗(5～8)などがみられる。これらの遺物は遠江V期から遠江VI期に相当するとみられる。9・10は土師器の鉢、11～16は土師器の小碗である。

18は杵材に用いられた臼である。一つの木材を割り貫いたもので、端部には面を持つ。側面の一部は破損しているが、出土時の遺存状態は比較的良好であった。19・20は煮串である。いずれも切り込みがない小型品である。

SD102 B区で確認した伊場大溝本体をSD102とする。伊場大溝の南岸にあたるが、岸の境界は直線的でなく、南側にやや張り出した状態であった。SD102の断面の観察では、伊場大溝のV層からⅢ層に併行する層位が確認でき、21～39に示す遺物が出土した。出土遺物の年代観も層位の併行関係の理解とほぼ整合する。

SD102 出土遺物 (Fig.111) 21～39はSD102から出土した遺物である。21～27は須恵器、28～32は灰軸陶器、33～39は土師器である。

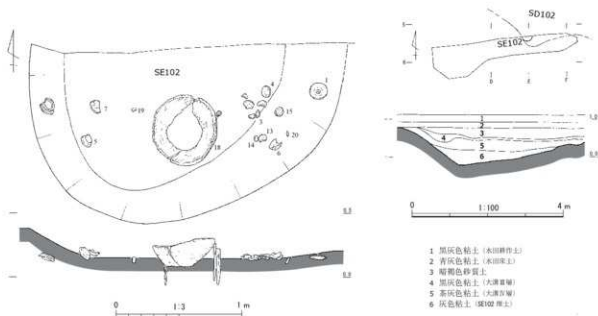


Fig.109 SE102 実測図

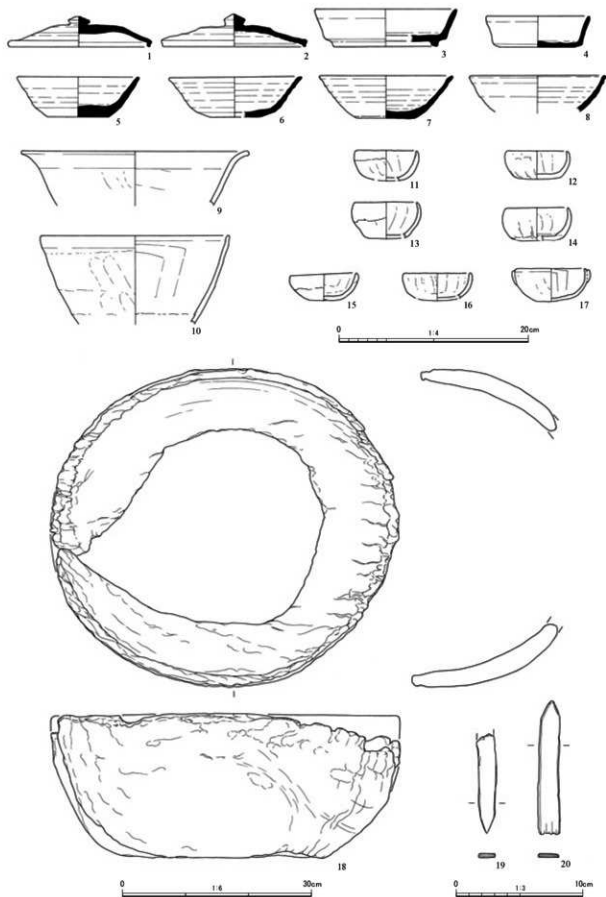


Fig.110 SE102 出土遺物 (1)

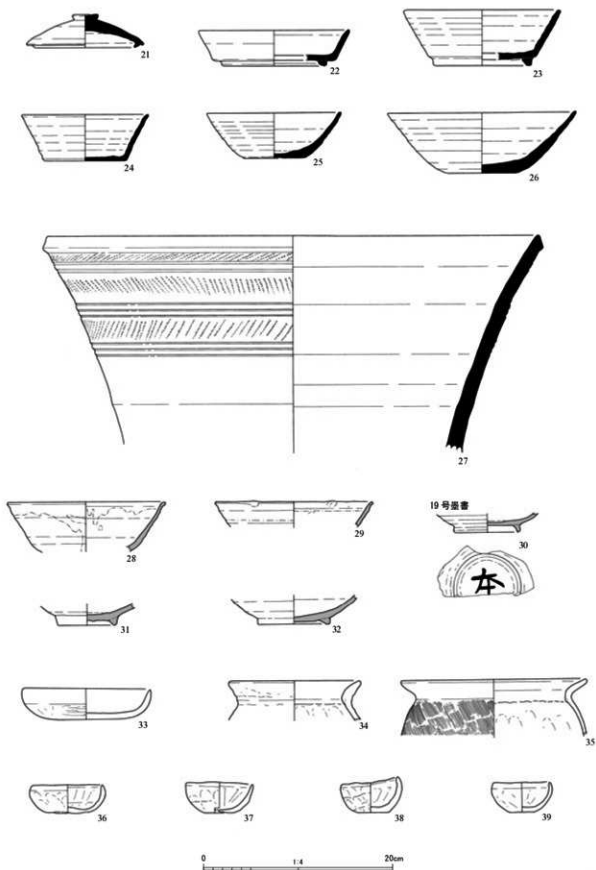


Fig.111 SD102 出土遺物 (2)

21は返り付の坏蓋、22・23は有台坏身である。23は坏部が深いつくりで遠江V-3期に位置づけられる器形である。24は箱坏、25・26は無台碗、27は甕である。

28～32は灰軸陶器である。30の底部には「本」の墨書がある。これらの資料は、漬け掛けの施軸や底部ヘラケズリ調整がみられるもので、K90 窯式（9世紀後半）に位置づけられる。

33は土師器皿で内面に赤彩がみられる。34・35は土師器甕で、前者は古墳時代中期の、後者は奈良時代前葉を中心とする形態である。36～39は土師器小碗である。口縁が丁寧に調整されるもの（36・37・39）と、調整されないもの（38）がある。

SE101 調査区の西端において検出した井戸である。井戸枠などを有しない、いわゆる素掘りの状態で、中央に深い窪みがある。掘り方はやや楕円形を呈しており、長軸2.8m、短軸2.5mほどで、検出面から底面までの深さは1.1mほどである。SE101が掘削されている面は、基本層位11層の白灰色粘土層までである。この層は湧水層とはいえないが、その上位の基本層位10層である黒色泥炭質粘土層から湧き出た水を集めたものと捉えられよう。出土遺物から、SE101は鎌倉時代後半（13世紀後半）頃の遺構と判断できる。

SE101 出土遺物 (Fig.113) 1～5は、SE101から出土した山茶碗である。1～3は茶碗、4は皿、5は壺である。茶碗1～3はいずれも粗雑なつくりで、底部には痕跡程度の高台が付けられている。皿（4）には高台がみられず、糸切りの痕跡を明瞭に残す。これらの遺物は鎌倉時代後半（13世紀後半）に位置づけられるだろう。

(3) 小 結

B区では、奈良時代から平安時代にかけての伊場大溝の南岸を確認したほか、古墳時代中期の土器集積、鎌倉時代の井戸などを検出した。伊場大溝からは9世紀後半のまとまった資料がみられ、A区の調査成果を補完している点が注目できる。

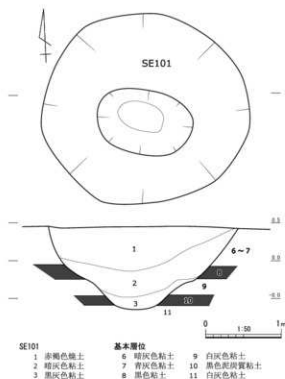


Fig.112 SE101 実測図

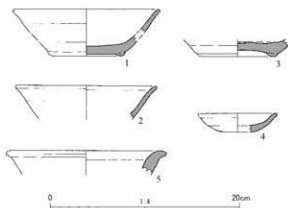


Fig.113 SE101 出土遺物

8 D区の調査

(1) D区の概要

D区はB区の南西において設定した調査区である。汚染土入れ替え工事の関係で、遺構の保存が図れない上層部分のみを発掘調査した。調査面積はわずかであったが、古墳時代中期の竪穴建物（SB301）を検出した。

(2) 検出遺構等

SB301 (Fig.114) 調査区の北東隅において、竪穴建物（SB301）を検出した。方形の竪穴建物で、壁溝を伴う南西隅の掘り方が確認できた。柱穴は検出できていない。SB301からは、Fig.115-1・2の遺物が出土した。出土遺物から、SB301は古墳時代中期後葉頃の遺構と考えられる。

D区出土遺物 (Fig.115) D区出土遺物として、古墳時代中期後葉から後期前葉頃の土師器を4点ほど図示する。1・2はSB301から出土した甕、3・4は遺構検出面において確認した甕および高坏である。

(3) 小 結

D区では、古墳時代中期後葉の竪穴建物1軒を確認した。B区においても、同時代の土器集積が確認できていることから、この段階の集落が展開しているとみられる。なお、調査の制約から、D区においては、上面遺構の調査のみを実施している。下層には弥生時代の遺構が展開しているとみられるが、本発掘調査はしていない。

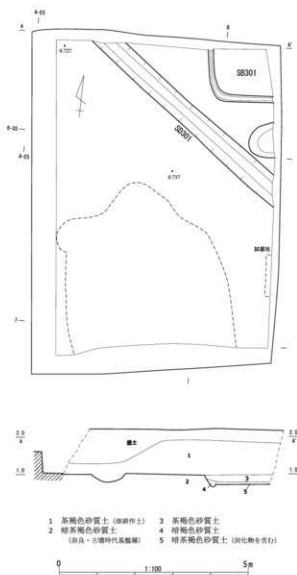


Fig.114 D区検出遺構

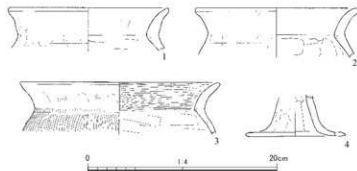


Fig.115 D区出土遺物

第3章 後 論

1 鳥居松遺跡における堆積層の年代

バリノ・サーヴェイ株式会社

(1) はじめに

浜松市に所在する鳥居松遺跡は、浜名湖東南方で三方原台地東南縁部崖下の低地に立地する。周囲の地形分類図(町田ほか編 2006)によれば、遺跡の立地する低地の北側には台地南縁部崖下に形成された砂丘が東西方向に広がり、西南側には第2列目の海岸砂丘の東端部があり、東南側には馬込川の右岸に形成された自然堤防が分布する。鳥居松遺跡はこれらの微高地に囲まれた低地の中に立地する。

発掘調査では、古墳時代中期から鎌倉時代の自然河川とされる伊場大溝が検出され、幅 25m、深さ 2.5m におよぶ規模が確認されている。大溝からは多量の遺物が出土しており、中でも古墳時代後期の金装円頭大刀、奈良～平安時代とされる木簡や墨書土器、木製形代などが注目されている。これら出土遺物のうち、古代の遺物群は数智郡衙に関わるものとされ、鳥居松遺跡は隣接する伊場大溝と一連であると考えられている。

本報告では、伊場大溝内の堆積層および伊場大溝によって削剥されているいわゆる基盤を構成す

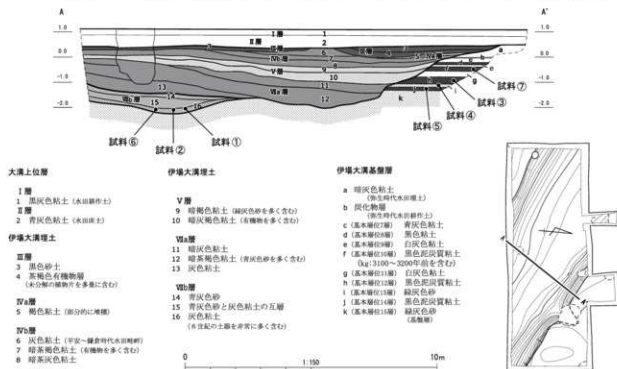


Fig.116 試料採集位置

る堆積層について、その堆積年代に関わる資料を得ることを目的として、堆積層中に包含される材や腐植質土壌等を対象として放射性炭素年代測定を行う。また、基盤を構成する堆積層中には、テフラと考えられる碎屑物が認められていることから、その碎屑物がテフラの本質物質であるか否かを明らかにし、テフラであればその特徴から、指標テフラとの対比を行い、これも堆積層の年代資料とする。

(2) 試料

試料は、伊場大溝の検出された調査区北部で作製された土層断面より採取された試料①～試料⑦までの7点である。これらのうち、試料①～試料⑥までの6点は、放射性炭素年代測定対象試料であり、試料⑦の1点はテフラ分析（屈折率測定含む）の対象試料である。

試料①、②、⑥は、伊場大溝の堆積層最下部のⅦb層より採取された試料である。試料①、②は枝材と思われる材片で、保存状態も不良であったことから組織観察は不能なため樹種は不明である。試料⑥は、包含される炭化材（組織観察より広葉樹材とされる）を測定試料とした。

試料③、④、⑤は、伊場大溝の側壁を構成する堆積層の下部に相当する12層、13層、14層の各層より採取された試料である。12層および14層は黒色を呈する植物遺体を含む腐植質土壌であり、13層はその間層をなす緑灰色砂層である。試料③および⑤は腐植質土壌を測定試料とし、試料④は包含される植物繊維を測定試料とした。

試料⑦は、伊場大溝側壁の中部付近を構成する堆積層である黒褐色を呈する腐植質土壌の10層から採取された。テフラと考えられている碎屑物で、粗砂～中砂の灰色砂が比較的多く含まれる。

(3) 分析方法

放射性炭素年代測定 試料は、超音波煮沸洗浄と酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸1.2N、水酸化ナトリウム1N、塩酸1.2N）により、不純物を取り除いたあと、グラファイトを合成し、測定用試料とする。測定機器は、NEC製コンパクトAMS・1.5SDHを用いる。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1,950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma; 68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（ ^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。暦年較正については、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。暦年代は、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

Tab.2 放射線炭素年代測定結果

試料名	層位	試料の質	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
試料①	VIIb層	木材(樹種不明)	1,530 $\pm$ 25	-29.30 $\pm$ 0.22	1,605 $\pm$ 25	10102-1
試料②	VIIb層	木材(樹種不明)	1,570 $\pm$ 20	-31.56 $\pm$ 0.23	1,680 $\pm$ 20	10102-2
試料③	12層(中層ビート)	腐植質土壌	4,290 $\pm$ 30	-27.80 $\pm$ 0.17	4,335 $\pm$ 30	10102-3
試料④	13層	植物繊維	4,120 $\pm$ 30	-31.97 $\pm$ 0.23	4,235 $\pm$ 30	10102-4
試料⑤	14層(下層ビート)	腐植質土壌	4,915 $\pm$ 25	-25.21 $\pm$ 0.22	4,920 $\pm$ 25	10102-5
試料⑥	VIIb層	炭化材(広葉樹)	1,685 $\pm$ 20	-30.47 $\pm$ 0.12	1,775 $\pm$ 20	10102-6

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。

2)BP年代値は、1,950年を基点として何年前であることを示す。

3)付記した誤差は、測定誤差(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

テフラ分析・屈折率測定 試料約 20g を蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の 3 タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

さらに火山ガラスについては、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤明の MAIOT を使用した温度変化法(古澤 1995)を用いた。

(4) 結 果

放射性炭素年代測定 同位体効果による補正を行った測定結果を表 1 に示す。6 点の試料の年代は、大きく試料①、試料②および試料⑥の年代と試料③～⑤の年代とに分けられる。前者のグループは、試料①の年代が 1,530 $\pm$ 25BP、試料②は 1,570 $\pm$ 20BP、試料⑥は 1,685 $\pm$ 20BP であり、後者のグループは、試料③の年代が 4,290 $\pm$ 30BP、試料④は 4,120 $\pm$ 30BP、試料⑤は 4,915 $\pm$ 25 BP を示す。

暦年校正結果を Tab.3 に示す。測定誤差を σ として計算させた結果、上記前者グループの試料①は calAD 442-573、試料②は calAD 435-536、試料⑥は calAD 342-402 であり、上記後者グループの試料③は calBC 2,913-2、891、試料④は calBC 2、857-2、625、試料⑤は calBC 3、701-3、695 である。

テフラ分析・屈折率測定 処理後に得られた砂分は、多量のスコリアから構成され、微量の軽石ときわめて微量の火山ガラスも認められた。スコリアは、最大径約 0.5mm、粒径の淘汰は良好である。灰黒色で発泡の不良なスコリアと暗灰色で発泡の不良なスコリアが多く、少量の灰色で発泡の不良なスコリアと微量の赤色で発泡の不良なスコリアも混在する。

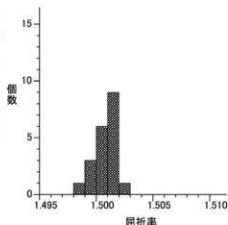


Fig.117 試料②中の火山ガラスの屈折率

Tab.3 暦年校正結果

試料名	層 位	補正年代 (BP)	暦年校正年代(cal)												相対比	Code No.		
試料①	VIIb層	1,532±23	σ	cal	AD	442	-	cal	AD	452	cal	BP	1,508	-	1,498	0.078	10102-1	
				cal	AD	461	-	cal	AD	483	cal	BP	1,489	-	1,467	0.224		
				cal	AD	533	-	cal	AD	573	cal	BP	1,417	-	1,377	0.698		
			2σ	cal	AD	433	-	cal	AD	494	cal	BP	1,517	-	1,456	0.350		
				cal	AD	505	-	cal	AD	522	cal	BP	1,445	-	1,428	0.047		
				cal	AD	526	-	cal	AD	597	cal	BP	1,424	-	1,353	0.603		
試料②	VIIb層	1,572±22	σ	cal	AD	435	-	cal	AD	492	cal	BP	1,515	-	1,458	0.725	10102-2	
				cal	AD	507	-	cal	AD	519	cal	BP	1,443	-	1,431	0.157		
				cal	AD	527	-	cal	AD	536	cal	BP	1,423	-	1,414	0.118		
			2σ	cal	AD	427	-	cal	AD	542	cal	BP	1,523	-	1,408	1.000		
				σ	cal	BC	2,913	-	cal	BC	2,891	cal	BP	4,863	-	4,841		1.000
					2σ	cal	BC	3,009	-	cal	BC	2,982	cal	BP	4,959	-		4,932
試料③	12層 (中層ビート)	4,291±29	σ			cal	BC	2,936	-	cal	BC	2,877	cal	BP	4,886	-	4,827	0.954
				cal		BC	2,857	-	cal	BC	2,828	cal	BP	4,807	-	4,778	0.207	
				cal	BC	2,824	-	cal	BC	2,811	cal	BP	4,774	-	4,761	0.086		
			σ	cal	BC	2,748	-	cal	BC	2,724	cal	BP	4,698	-	4,674	0.160		
				2σ	cal	BC	2,698	-	cal	BC	2,625	cal	BP	4,648	-	4,575	0.546	
					σ	cal	BC	2,866	-	cal	BC	2,804	cal	BP	4,816	-	4,754	0.267
試料④	13層	4,122±28	σ			cal	BC	2,776	-	cal	BC	2,769	cal	BP	4,726	-	4,719	0.011
				cal		BC	2,763	-	cal	BC	2,580	cal	BP	4,713	-	4,530	0.721	
				cal	BC	3,701	-	cal	BC	3,695	cal	BP	5,651	-	5,645	1.000		
			σ	cal	BC	3,761	-	cal	BC	3,740	cal	BP	5,711	-	5,690	0.054		
				2σ	cal	BC	3,735	-	cal	BC	3,725	cal	BP	5,685	-	5,675	0.021	
					cal	BC	3,715	-	cal	BC	3,645	cal	BP	5,665	-	5,595	0.926	
試料⑤	14層 (下層ビート)	4,915±26	σ		cal	AD	342	-	cal	AD	402	cal	BP	1,608	-	1,548	1.000	10102-5
				cal	AD	260	-	cal	AD	283	cal	BP	1,690	-	1,667	0.096		
				cal	AD	373	-	cal	AD	419	cal	BP	1,627	-	1,531	0.904		
			σ	cal	AD	260	-	cal	AD	283	cal	BP	1,690	-	1,667	0.096		
				2σ	cal	AD	373	-	cal	AD	419	cal	BP	1,627	-	1,531	0.904	
					σ	cal	AD	260	-	cal	AD	283	cal	BP	1,690	-	1,667	

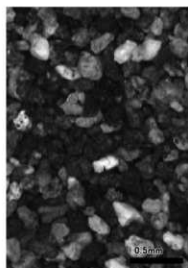
1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用。

2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。

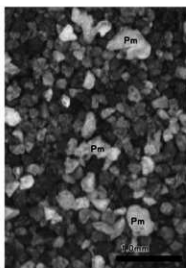
3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年校正曲線や暦年校正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

4) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である。

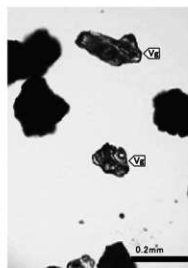
5) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。



1. スコリア (10層: 試料①)



2. 軽石 (10層: 試料②)



Pm: 軽石 3. 火山灰 (10層: 試料②) Vg: 火山ガラス

Fig.118 火山灰写真

軽石は、最大径約 0.8mm であり、白色を呈し、発泡は良好である。火山ガラスは、無色透明の軽石型（スポンジ状および繊維束状含む）である。火山ガラスの屈折率は、 $n_{1.498-1.503}$ のレンジを示し、モードは $n_{1.500-1.501}$ であった (Fig.117)。

上述の碎屑物のうち、軽石および火山ガラスは、その色調や形態および屈折率の値、さらに鳥居松遺跡の地理的位置とこれまでのテフラ分布 (町田・新井 2003) から、天城カワゴ平テフラ (Kg: 町田ほか 1984) に由来すると考えられる。Kg は、伊豆半島天城山カワゴ平火口を給源とし、西方に広く分布が認められており、鳥居松遺跡に隣接する伊場遺跡での確認も報告されている。これまでのところ、琵琶湖岸や福井県三方町まで分布が確認されている (西田ほか 1993)。また、その噴出年代は、暦年で約 3,100BP 頃とされている (町田・新井 2003)。

スコリアについては、富士山の完新世テフラに由来すると考えられるが、Kg が混在するすなわち Kg と噴出年代がほぼ同時であることと富士山より西方に分布するテフラであることが特徴となる。これらの特徴を有する富士山の完新世のテフラは、宮地直道の記載から (宮地 1988)、大沢スコリア (Os) であると判断される。

(5) 考 察

試料①、②、⑥より得られた放射性炭素年代は、その採取層位より伊場大溝の埋積開始頃の年代を示唆している可能性がある。したがって、これらの試料の放射性炭素年代の暦年から推定すれば、伊場大溝の埋積は、4 世紀後半～6 世紀頃には始まっていたことが推定される。

基盤の構成層では、側壁中部付近を構成する腐植質土壌層は、Kg および Os のテフラを包含することから、暦年で約 3,000 年前頃の堆積年代が推定される。それよりも下位の、側壁下部を構成する 2 枚の腐植質土壌層とその間層の年代は、暦年で約 5,600 年前から 4,800 年前までの期間に堆積したことが推定される。

以上述べた伊場大溝の埋積開始年代および基盤層の堆積年代は、発掘調査所見による推定堆積年代と大きく異なることはなく、今回の分析結果は、発掘調査所見をほぼ支持する結果であったと言えることが出来る。

【参考文献】

- 古澤明 1995 「火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別」『地質学雑誌』101 pp. 123-133
- 町田洋・新井房夫 2003 「新編 火山灰アトラス」東京大学出版会 p.336
- 町田洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦 1984 「テフラと日本考古学－考古学研究と関連するテフラのカatalogue」渡辺直経 (編) 『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』同朋舎 pp.865-928
- 町田洋・松田時彦・海津正倫・小泉武宏 (編) 2006 「日本の地形 5 中部」東京大学出版会 p.385
- 宮地直道 1988 「新富士火山の活動史」『地質学雑誌』94 pp.433-452
- 西田二郎・高橋 豊・竹村恵二・石田志朗・前田保夫 1993 「近畿地方へ東から飛んできた縄文後・晩期火山灰層」『第四紀研究』32 pp.129-138

2 鳥居松遺跡の立地環境

松原彰子（慶應義塾大学）

（1）浜松低地における遺跡分布

1) 浜松低地の地形

浜松低地は、浜名湖東側の三方原台地の南に広がり、6列の砂州地形（内陸側から順に砂州Ⅰ～Ⅵ）が分布することで特徴づけられる。砂州地形は、低地の東部では6列が明瞭に区別できるが、西部では砂州Ⅱの連続性が見られなくなり、さらに砂州Ⅲから砂州Ⅴまでの境界が不明瞭になる。また、浜名湖の湖口付近では3列の砂州地形に収斂する（Fig.119）。

低地西部の砂州Ⅰと砂州Ⅲの間には水域が広がり、周辺には養魚場が密集している。また低地全体では、砂州Ⅴと現在の海岸沿いに発達する砂州Ⅵとの間の堤間湿地にも養魚場が分布する。

浜松低地の地質は、全体に砂質堆積物（砂ないし砂礫）が主体であり、これらは砂州地形の構成層と考えられる。ただし、表層付近（標高約-5m以浅）では、堤間湿地を中心にして泥炭質のシルト・粘土層が分布する（松原 2001）。

浜名湖およびその沿岸では、湖口部の湖底を中心に縄文時代の遺跡が発見されている。また、湖口西側の砂州上には、古墳時代と歴史時代の遺跡が多く分布する。一方、浜松低地においては、縄

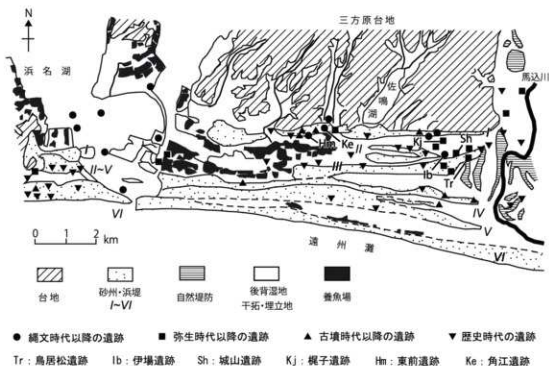


Fig.119 浜松低地の地形と遺跡分布

文時代の遺跡分布は、砂州Ⅰおよび砂州Ⅰ－砂州Ⅱ間の低湿地上に限定される。また弥生時代の遺跡は、砂州Ⅰ、Ⅲおよびこれらの堤間湿地に分布する。さらに古墳時代と歴史時代の遺跡は、砂州ⅠからⅤの上に分布している。

2) 低地の微地形と遺跡立地との関係

浜松低地に発達する砂州列および堤間湿地と遺跡の分布との関係は、次のようにまとめることができる(松原 2008b)。

① 砂州上に立地する遺跡

角江遺跡 角江遺跡は、三方原台地を刻む東神田川の谷の出口付近を塞ぐ形で発達する砂州(砂州Ⅰ)上に立地している(Fig.119)。この遺跡で確認されている遺物・遺構は、縄文時代後期から中世までのものである(静文研 1996 など)。この砂州の形成時期に関する地質学的な証拠は得られていないが、ここでの遺跡の時代と、浜松低地の西方の浜名湖における砂州の発達過程に基づけば(松原 2000、2001)、6,000 yr BP 頃にはすでに砂州の一部が離水して背後の閉塞が始まっていたと推定される。

梶子北遺跡 梶子北遺跡は、三方原台地東部の南縁に発達する砂州(砂州Ⅰ)の海側の縁辺部に立地する遺跡である。この遺跡で確認されている遺物・遺構は、縄文時代前期から平安時代までのものである(浜文協 1997)。

梶子北遺跡において 1999～2000 年度に行われた発掘調査の際に、表層の地質を確認したところ、盛土を除いた表層 1 m ほどは泥炭質堆積物に覆われ、その平均堆積速度はおよそ $0.7 \text{ mm} / \text{yr}$ と推定され、泥炭層下部の ^{14}C 年代測定値は 3,200 yr BP であった(松原 2004)。その下位には、粘土質の砂が堆積しており、湿地において河川が流入するような環境であったことが推定された。泥炭層下部の年代値 3,200 yr BP は、この付近がより海側に形成された砂州によって完全に閉塞された時期を示すものといえる。また、砂州上に縄文時代前期の遺跡が立地していることから判断して、砂州の形成時期は、6,000 yr BP 以前であったと考えられる。

② 埋没砂州上に立地する遺跡

梶子遺跡 梶子遺跡は、梶子北遺跡の南西に位置し、砂州(砂州Ⅰ)の海側に分布する後背湿地に立地する弥生時代中期から平安時代までの遺跡である(Fig.119)。地質資料を解析した結果、後背湿地の地下に砂州が埋没していること、およびその下位の海拔高度 $-10 \sim -15 \text{ m}$ に埋没海食台が分布して砂州の基盤になっていることが明らかになった(松原 2004)。なお、この埋没砂州は、現在の微地形として確認される砂州Ⅱの北東への延長部にあたる可能性も考えられる(Fig.119)。

埋没砂州堆積物を覆う後背湿地堆積物の最下部の ^{14}C 年代値として $6,090 \pm 10 \text{ yr BP}$ が得られていることから(古環境研究所 1994)、最も内陸側の砂州およびその海側の埋没砂州の形成年代は、6,000 yr BP 以前にさかのぼると推定できる。

東前遺跡 東前遺跡は、梶子遺跡の西方約 5km に位置し、三方原台地南縁に発達する砂州(砂州Ⅰ)の縁辺部にあたり(Fig.119)、地点 Hm-1 と Hm-2 の 2 箇所での遺跡発掘調査時に、現在の微地形および表層の地質調査を行った。本遺跡からは、縄文時代後期以降の遺物が確認されている。

2001 年 2 月に行った地点 Hm-1 における調査では、表層の地質は下位から順にⅠ～Ⅵの 6 層

に区分される。I層は青灰色の砂層であり、地点Hm-1のトレンチ床面において北東-南西方向に帯状に分布し、その上面は南東側に傾斜していることが確認されている。また、地点Hm-1の西方約300mの地底における試掘では、本層に対比される暗灰色〜青灰色砂層が、少なくとも1mの厚さで堆積していることが確かめられた(松原 2004, 2008a・b)。

一方、地点Hm-2は、地点Hm-1の南東約100mに位置する。2006年12月に行った本地点での調査では、表層の地質は下位から順にI〜VI層の6層に区分された。層相の特徴などから判断して、ここでのI〜VI層は、それぞれ地点Hm-1のI〜VI層に対比される。

地点Hm-2では、I層の上面高度が北側の砂州(雄踏街道沿いに発達する砂州I)との間で低くなる場所がある。同様のことは、地点Hm-1の北方でも確認されている(浜文協 2002)。これらのことから、東前遺跡で確認されたI層は、砂州(砂州I)の南側に分布する埋没砂州の堆積物である可能性が考えられる。ただし、地点Hm-2においてI層を覆う後背湿地堆積物の最下部の ^{14}C 年代値が $4,035 \pm 25 \text{ yr BP}$ であることから、本層を梶子遺跡における埋没砂州構成層と対比することは現時点ではできない。

(2) 鳥居松遺跡周辺の地形と地質

遺跡周辺の微地形 鳥居松遺跡は、砂州Ⅲの東縁部に位置すると同時に、馬込川沿いに南北方向に分布する自然堤防の北端部にもあたる(Fig.119)。したがって、本遺跡周辺の地形形成においては、海成および河成の両方の作用が及んでいたものと考えられる。

鳥居松遺跡の周辺には、伊場遺跡・城山遺跡などの一連の遺跡群が分布する。現在の微地形では、伊場遺跡、城山遺跡は、共に砂州Ⅲの内陸側の縁辺部に位置している(Fig.119)。

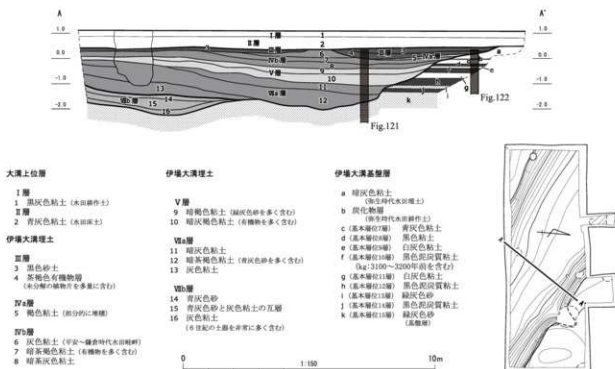


Fig.120 地質層序確認部分位置図

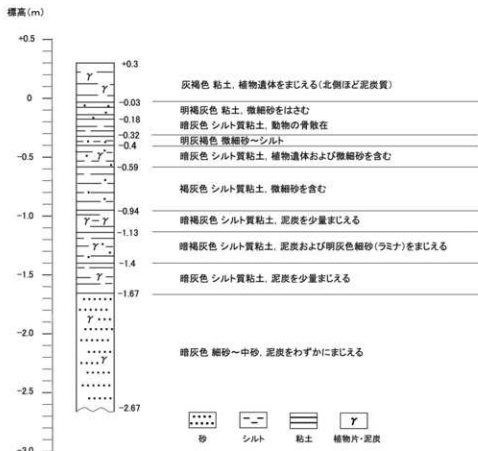


Fig.121 地質層序の観察 (1)

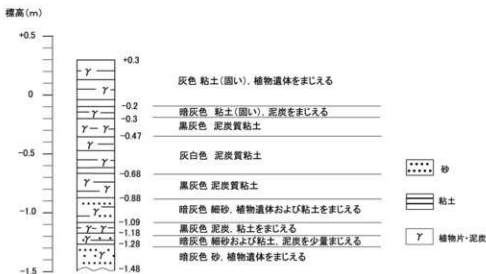


Fig.122 地質層序の観察 (2)

地質層序 2008年3月7日に現地調査を行い、発掘範囲の西側の壁面(34°41'36"N, 137°43'10"E、地表面標高+0.3m)の2箇所ですべて詳細な層相を記載した(Fig.120~122)。Fig.121はトレンチの南側で、伊場大溝の中の堆積物、Fig.122はトレンチの北側で、伊場大溝の外側の堆積物に、それぞれ相当する。

伊場大溝の基盤は標高-1.67m以深の暗灰色砂層で(Fig.121)、これはFig.122の-1.28m以深で確認された暗灰色砂層に対比される。これらの砂層は、砂州Ⅲの堆積物の上部にあたるものと推定される。バリノ・サーヴェイ(本書、第3章1)によれば、この砂層の上位に堆積する腐植質土壌(遺跡現場の層位で14層に相当)から $4,915 \pm 25$ yr BPの年代測定値が得られている。したがって、砂州Ⅲの形成時期は、5000年前以前にさかのぼるものと考えられる。このことは、鳥居松遺跡の北西に位置する梶子遺跡で、砂州Ⅰの形成年代が6000年前以前であると推定されたものと調和的である。

[参考文献]

- 古環境研究所 1994「梶子遺跡9次調査基盤層の自然科学分析」『梶子遺跡Ⅸ 本文編』(財)浜松市文化協会 pp.117-134
- 静岡県埋蔵文化財研究所 1996『角江遺跡Ⅱ 遺構編』p.155
- (財)浜松市文化協会 2002『東前遺跡』p.32
- (財)浜松市文化協会 1997『梶子北遺跡 遺構編』
- 松原彰子 2000「日本における完新世の砂州地形発達」『地理学評論』73A pp.409-434
- 松原彰子 2001「浜名湖および浜松低地の砂州地形」『慶應義塾大学日吉紀要 社会科学』11号 pp.20-32
- 松原彰子 2004「浜松低地に分布する遺跡の立地環境」『慶應義塾大学日吉紀要 社会科学』14号 pp.36-52
- 松原彰子 2008a「東前遺跡周辺の地形・地質」『東前遺跡Ⅱ』(財)浜松市文化振興財団 pp.55~61
- 松原彰子 2008b「海岸低地における砂州・浜堤の形成と遺跡立地—浜松低地および権原低地を例にして—」『慶應義塾大学日吉紀要 社会科学』18号 pp.1-13

3 鳥居松遺跡における環境考古学的検討

金原正明（奈良教育大学）、古環境研究所、
菊地大樹（京都大学）、古山真波（奈良教育大学）

（1）はじめに

鳥居松遺跡は、浜松市南区森田町に所在し、2008年に実施した5次調査によって、埋設河川である伊場大溝が検出された。伊場大溝は幅20m、深さ2.5mにおよぶ大規模なもので、5世紀から13世紀にわたる堆積土が確認されている。伊場大溝からは7世紀から10世紀に至る古代の郡役所（敷智郡家）の存在を示す豊富な考古遺物（木簡、墨書土器、木製祭祀具）が出土しており、鳥居松遺跡は、周辺遺跡を含めた「伊場遺跡群」の一角を占めていることが明らかになった。

同定・分析対象は、伊場大溝において出土、採集した貝類、動物骨および堆積土である。本報告は主に、貝類は古山、動物骨を菊池、花粉と珪藻を古環境研究所が同定分析行ったものを金原がまとめた。貝類は奈良時代貝塚SS02とSS04から出土し水洗されたもので、計25試料に区分され、計74708個体を数えた。他に植物遺体が含まれていた。動物骨は同様なものが31試料であった。花粉分析および珪藻分析用の堆積土は、貝塚から採取された7試料、中央断面から採取した55試料の計62試料であり、環境の検討を行った。

SS02とSS04のそれぞれの貝塚の中から、いくつかのトレンチを選び、主要貝類であるヤマトシジミとダンベイキサゴを各50個前後抽出し、計測した。

計測対象とするトレンチを選ぶ際には、同定・計数結果を参考にヤマトシジミとダンベイキサゴの2種を比べ、ヤマトシジミが優占するトレンチ、ダンベイキサゴが優占するトレンチ、差があまりないトレンチの3つにおおまかにわけ、その中から無作為に計10トレンチを抽出した。

（2）貝 類

1) 方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比及び参考文献によって同定を行い、分類計数した。同定が可能で半形以上のものを1個と計数した。計数は二枚貝、巻貝共に基本的に殻頂部が残っているものを一つとして計数した。巻貝の中にはカワニナなどのように、成長の過程で殻頂部が欠損するものもあるので、カワニナ類、ウミナナ類などは内容部を計数した。また、二枚貝は左右殻に分類してその数を数え、多い方を最小個体数とした。ヤマトシジミとした分類群は、殻頂部が良く発達し、セタシ

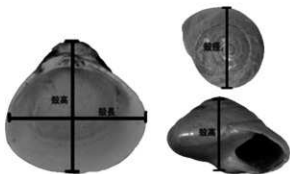


Fig.123 貝類の計測点

ジミの特徴に偏じるがここではヤマトシジミとした。

主要貝類であるヤマトシジミとダンベイキサゴは、それぞれの貝塚の中からいくつかの試料から各 50 個前後抽出し計測した。ヤマトシジミが多い試料、ダンベイキサゴの多い試料、差があまりない試料にわけ、その中から無作為に 10 試料を抽出した。ダンベイキサゴについては、完形または完形に近いものを全て取り出し、四分法により 50 個前後を抽出した。ヤマトシジミについては、同一個体を計測してしまう可能性を排除するために、左の完形貝のみを取り出し同様に四分法により 50 個前後を抽出した。ノギスを用いて、ヤマトシジミは殻長と殻高、ダンベイキサゴは殻径と殻高を計測した (Fig.123)。

2) 同定結果

①分類群同定

された分類群は 24 であった。結果は Tab.4・5 に示し、以下に学名を記す。

以下の分類群が主に同定された。

・巻貝綱

ダンベイキサゴ	<i>Umbonium giganteum</i>	ニシキウズガイ科
イシマキガイ	<i>Clithon retropictus</i>	アマオブネガイ科
ウミニナ	<i>Batillaria multiformis</i>	ウミニナ科
イボウミニナ	<i>Batillaria zonalis</i>	ウミニナ科
フトヘナタリ	<i>Cerithidea rhizophorarum</i>	ウミニナ科
ヘナタリ	<i>Cerithidea cingulata</i>	ウミニナ科
ツメタガイ	<i>Glossaulax didyma</i>	タマガイ科
シゲトウボラ	<i>Cymatium cutaceum</i>	フジツガイ科
レイシガイ	<i>Thais bronni</i>	アッキガイ科
アカニシ	<i>Rapana venosa</i>	アクキガイ科
マルタニシ	<i>Bellamyia chinensis malleata</i>	タニシ科
ヒメタニシ	<i>Bellamyia quadrata histrica</i>	タニシ科
カワニナ	<i>Semisulcospira libertine</i>	カワニナ科
チリメンカワニナ	<i>Semisulcospira reiniana</i>	カワニナ科

・二枚貝綱

ハイガイ	<i>Tegillarca granosa</i>	フネガイ科
ヒメアカガイ	<i>Scapharca trocheli</i>	フメガイ科
マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>	イタボガキ科
ヤマトシジミ	<i>Corbicula japonica</i>	シジミ科
アサリ	<i>Ruditapes philippinarum</i>	マルスダレガイ科
オキアサリ	<i>Gomphina aequilatera</i>	マルスダレガイ科
ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>	マルスダレガイ科
オキシジミ	<i>Cyclina sinensis</i>	マルスダレガイ科

イシガイ	<i>Unio douglasiae</i>	イシガイ科
植物遺体は以下の2分類群である。		
スモモ	<i>Prunus salicina</i> Lindley 核	バラ科
モモ	<i>Prunus persica</i> Batsch 核	バラ科

②貝類群集の特徴

個体数ではヤマトシジミとダンベイキサゴが圧倒的に多く、この2種で80%以上を占める。その他の種では、ハマグリ・アサリ・フトヘナタリ科・ウミナナ科などがやや多く、オキシジミ・オキアサリ・タニシなども、全ての試料から出土している。その他にも少数であるが、カキ・ヒメアカガイ・イシガイ・アカニシ・レイシガイなども出土している。沿岸の砂底に生息するものから、淡水に生息するものまで、広範囲に分類され、採貝活動が広範囲に渡っていたことがうかがえる。しかし、どちらの貝塚の組成も、ヤマトシジミとダンベイキサゴが80%以上を占めており、この2種が最も主要な貝類であったことがわかる。また、主要貝類であるヤマトシジミとダンベイキサゴを比べると、SS02ではヤマトシジミが多く、SS04ではダンベイキサゴが多い。ヤマトシジミが多いSS02では、フトヘナタリを主にウミナナなどの海産の巻貝がやや多い。ダンベイキサゴが多いSS04では、ハマグリやアサリなど海産の二枚貝がやや多い。

SS02は各試料ともヤマトシジミが多いが、試料によっては次の特徴がある。SS02北では、ヤマトシジミが特に多い。SS02北西はダンベイキサゴとオキアサリがやや多い。SS02北東 SS02 南西はアサリが多く巻貝が極端に少ない。SS02 西がややフトヘナタリ多い。SS02 南はダンベイキサゴが少なく比較的ハマグリ、ヘナタリが多い。SS02 東はダンベイキサゴが極端に少なくフトヘナタリが多く二枚貝が占める割合も多い。

SS04は各試料ともダンベイキサゴが多いが試料によっては次の特徴がある。SS04 南東ではカワナが多い。SS04 北はシゲトウボラやイシマキガイなどの試料でしか出土しなかったものもある。SS04 東北はハマグリが比較的多い。SS04 東側南ではヤマトシジミがやや多い。SS04 東側はハマグリが比較的多くカワナが多い。SS04 北側南、SS04 北側東、SS04 北側西ではダンベイキサゴが特に多い。

③計測結果

ヤマトシジミは殻長 1.5cm ~ 3.2cm、殻高 1.5cm ~ 3.5cm の間に収まり、平均は殻長 2.4cm 前後、殻高 2.3cm 前後である。ダンベイキサゴは、殻径 1.6cm ~ 3.7cm、殻高 1.0cm ~ 2.4cm の間に収まり、平均は殻径 2.6cm 前後、殻高 1.6cm 前後である。ヤマトシジミでも2つの貝塚であまり差がなく、SS04で小さい個体が多少増える。ダンベイキサゴでは、SS02では小さなものがない傾向が認められた。小さな貝を意識的に採集していない可能性がある。SS04では大きい個体が多少増える傾向がみられた (Fig.127)。

3) 考 察

SS02では、ヤマトシジミが圧倒的に多く、約60%を占めている。次に多いのはダンベイキサゴで約20%、次いでフトヘナタリで約10%となっており、この3種でほとんどを占めている。ヤマトシジミやフトヘナタリに加え、ハマグリやアサリ、オキシジミなどは砂泥質の干潟から内湾部に

Tab.4 貝類同定結果 (1)

網	分類群	形状	SS01	SS02 東 (1)	SS02 東 (2)	SS02 東 (3)	SS02 南 (1)	SS02 南 (2)	SS02 南 (3)	SS02 南西 Tr.	SS02 西	SS02 北西 Tr.
巻貝類	ダンベイクサゴ		622			39			225	585	956	
		小	14								1	
	カワニナ		16			10			61	9	150	8
	チリメンカワニナ		29			7			56	14	117	14
	ウミニナ					4			3	3	10	1
	イボウミニナ								3			
	ヘナタリ					4			7		45	1
	フトヘナタリ		1			58			303	65	540	82
	ヒメタニシ		20			3			16	8	71	7
		破片										
	マルタニシ											
	アカニシ						1				2	
	ツメタガイ											
	レイシガイ											
	シゲトウボラ											
	イシマキガイ											
	未同定巻貝					6			5			
	小計		702	0	0	131	1	0	679	684	1892	113
二枚貝類	ハマグリ	L	192	1	1	40	1	92	92	22	50	16
		R	247	1	1	51	5	77	77	22	47	17
	アサリ	L	31			14		12	12	4	4	
		R	28			17		11	11	4	6	
	オキシジミ	L	6	3	1	5	3	12	11		4	14
		R	7			10	4	18	7		5	8
	オキアサリ	L	4	2	2			3		1	12	17
		R	5	1	1			1		4	9	22
	ヤマトシジミ	L	498			750		61	2372	947	2621	804
		R	558			754		83	1935	833	2565	780
	イシガイ	L						2			2	
		R										
	破片											
	ヒメアカガイ	L				2				1	1	1
		R				1				4		
	ハイガイ								7			
	カキ						2					
		破片	1			2						
	二枚貝	L				6			7			
		R										
	未同定小計		1577	8	6	1652	15	372	4531	1842	5326	1679
	不明											
	合計個体数		2279	8	6	1783	16	372	5210	2526	7218	1792
他の遺体	モモ	核	20									
		半形				26			7	4	9	4
		破片				7			11	9	30	5
	スモモ	核							5		2	1
		破片										
	骨片 その他(土器片)											

Tab.5 貝類同定結果 (2)

SS02 北	SS02 北東 Tr.	SS04 東側 (1)	SS04 東側 南寄り (1)	SS04 東側 南寄り (2)	SS04 東側 南寄り (3)	SS04 北側 (1)	SS04 北側 (2)	SS04 北側 (3)	SS04 北側 (4)	SS04 北側 東寄り (1)	SS04 北側 東寄り (2)	SS04 北側 東寄り (3)	SS04 北側 南寄り	SS04 北側 西寄り
91	3	1036	1200	1449	28	1367		1532	1625	1415	1364	720		1454
9	1	41	31	8	15	21	37	67	36	3	6	37		
15	1	38	28	47	7	27	108	64	42	8	8	34	58	14
		70	11			8	41	41	20	2	2	17	9	2
		4	8		2	32	26	19	12			61		2
90	4	63	40	29	16	58	107	112	99	9	2	70	8	5
6	1	146	49	44	4	24	66	40	49	11	12	79		16
		+												
												1		
							2	2						
			1											
									2					
							1							
							1							
					1			1						
211	10	1398	1368	1577	73	1537	389	1878	1885	1448	1394	1019	75	1493
39	12	350	112	87	18	167	231	192	178	29	50	234	51	28
56	2	350	124	84	18	161	270	227	168	30	33	260	21	29
3	14	32	15	10	3	30	37	33	26	9	10	19	12	7
1	13	34	12	9	6	19	27	29	26	7	12	21	11	8
5	7	17	7	7	6	6	16	12	11	4	5	9	7	18
8	4	24	6	7	5	10	23	7	11	9	2	10	7	4
	3	5		1	2			1				3		
1	4	6			5			1			1	2		
1118	192	2708	1582	1091	422	933	1735	1650	1230	164	358	2005	381	155
901	177	2278	1381	983	446	997	1936	1829	1242	164	402	2036	335	138
		4			1	6	14	7		1	2	13		
						7								
2								1						
		2			2		2					2	1	
				6		5		9						
												2		
2134	428	5810	3239	2285	934	2341	4291	3998	2892	417	875	4616	826	387
			1											
2345	438	7208	4608	3862	1007	3878	4680	5876	4777	1865	2269	5635	901	1880
6	28	5		5	21	21	38		44	9		12		18
2	3	1		1	10	8	7		12	1		2		1
1				1				2	1					
						2		4						
						113	167	126	99		16			

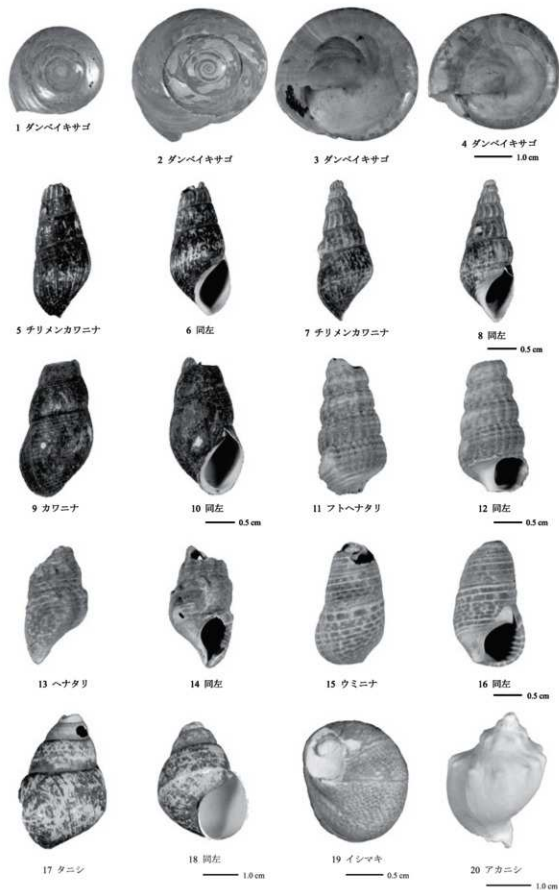


Fig.124 鳥居松遺跡の貝類 (1)

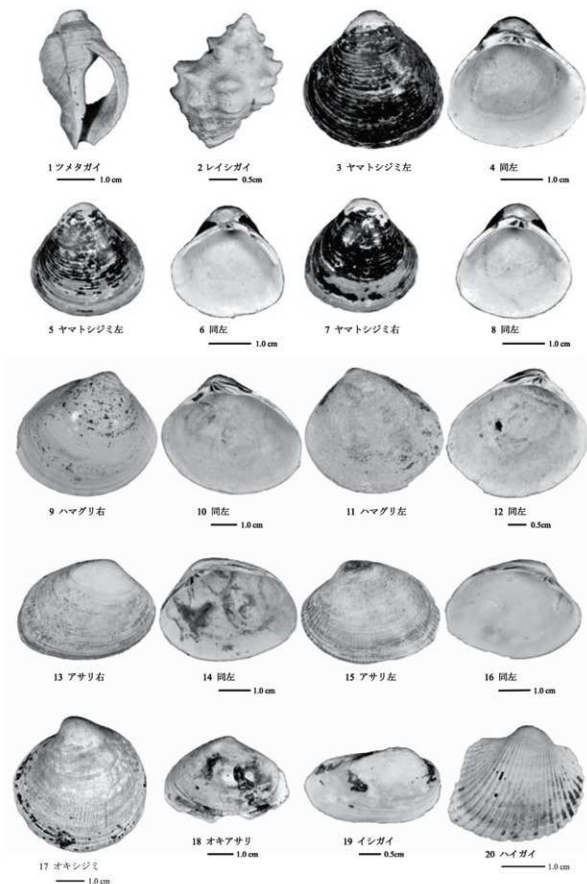


Fig.125 鳥居松遺跡の貝類 (2)

生息するため、現在の潮干狩りなどでも普通に収穫ができる貝である。フトヘナタリの出土量が多いことも特徴であり、あまり冠水しない高潮位に多いことが多いため、比較的収穫しやすかった可能性が考えられる (Fig.126)。

SS04では、ダンベイキサゴが多く、約50%を占めている。次に多いのはヤマトシジミで約35%、次いでハマグリで約5%となっており、この3種でほとんどを占めている (Fig.126)。ダンベイキサゴは水深5~30mの砂底に生息し、全身が砂に隠れる程深く潜っていることが多い。ダンベイキサゴは外洋に面した砂底に生息する。そのため、収穫する場所も違っていたとみなされる。出土量が多く、特に好んで食べられていた可能性が高い。ヤマトシジミの占める割合が小さくなり、ハマグリが増えている。ハマグリやアサリなど、他の二枚貝を多く収穫していた可能性がある。ヤマトシジミの旬は春~夏、ダンベイキサゴの旬は冬~春と、旬の季節が少しずれるため、収穫量の変化もそれに伴うものと考えられる。

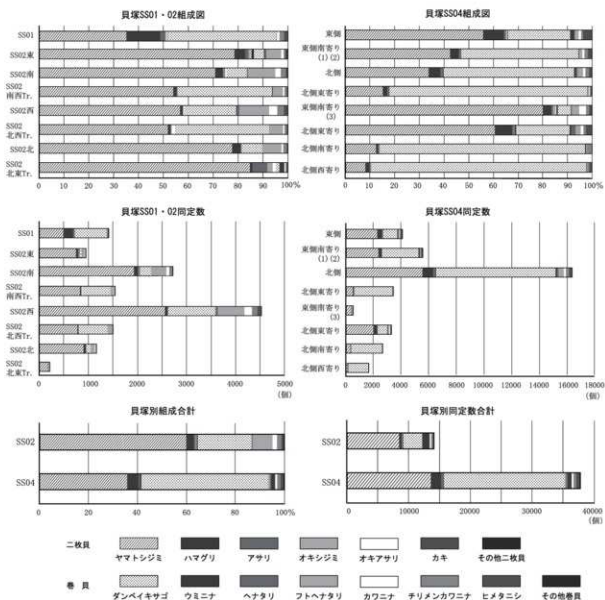


Fig.126 貝塚における貝類の組成

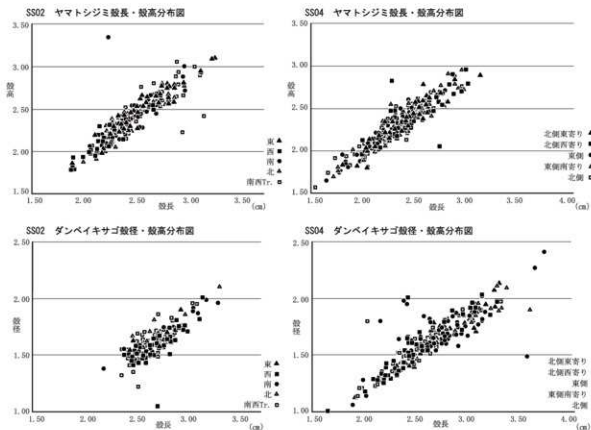


Fig.127 貝塚出土貝類の形態分布

大きさでは、SS02はヤマトシジミ、ダンベイキサゴ共にばらつきが少なく、特に2cm以下の小形の個体の出現率が低く、貝採集に際して2cm以上の大きさのものを選択していた可能性が強い。ダンベイキサゴについてはその傾向がさらに強く、2cmないし3cmより小さい個体は極端に少なく、明らかな選択性が認められる。SS04は大きさに多少のばらつきがみられる。ヤマトシジミでは小さい個体が、ダンベイキサゴでは大きい個体が増える傾向にある。SS04は貝の大きさの選択性が低い。ヤマトシジミでは、大きな個体が減少していることから、採貝活動の場がヤマトシジミの成育に適さなくなった可能性や、乱獲の結果、個体群が小形化した可能性が考えられる。ダンベイキサゴでは、大きな個体も小さな個体も増えているため、成育環境の変化よりは、収穫量の増加に伴い、選択性も弱くなった可能性の方が強いと考えられる。

(3) 動物骨

1) 資料と方法

資料は、伊場大溝のⅣb層からⅦb層における、およそ6世紀後半から9世紀の堆積層から出土した動物遺存体計30点である。一部の資料については、骨の表面や内部の劣化が著しい。同定は、資料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生骨格標本との対比によって行った。なお、発掘調査時の出土位置が明確な動物骨はB-No.を付している。出土位置についてはFig.72に示している。

Tab.6 鳥居松遺跡出土動物骨分析一覧

個体No	区	層/遺構	B-No.	分類	部位	部分	左右	歯列	備考
1	D2	IVb SX03	B-3	イノシシ/ブタ	下顎骨		L	P2-M3	
2	D2	IVb SX03	B-3	ウシ	前頭骨	角芯	L		
3	D2	IVb SX03	B-4	ニホンジカ	鹿角	第一枝	L		加工痕あり
4	D3	IV	B-6	不明	不明		-		破片
5	A3	IVb SE01周辺	B-17	ウマ	遊離歯	下顎臼歯	L		
6	A3	IVb SE01周辺	B-17	ウマ	遊離歯	下顎臼歯	R		
7	B3	V	B-8	不明	不明		-		破片
8	D3	V	B-10	不明	不明		-		破片
9	A3	V	B-12	ウシ	上顎骨		L	P2-P3	
10	E3	V	B-19	不明	不明		-		破片複数
11	B2	V SS04	B-23	キジ科	大腿骨		L		
12	B2	V SS04	B-23	カモ科	脛足根骨		L		
13	B2	V SS04	B-23	マダガスカル	鱗骨		-		
14	B2	V SS04	B-23	マダガスカル	後頭骨		L		
15	B2	V SS04	B-23	マダガスカル	方骨		R		
16	B2	V SS04	B-24	不明	肋骨		-		
17	B2	V SS04	B-24	不明	不明		-		
18	C2	VIIa	B-12	ウシ	遊離歯	上顎臼歯	-		破損顕著
19	C2	VIIa	B-13	ウマ	遊離歯	上顎第二前臼歯	L	P2	破損顕著
20	E3	VIIa	B-14	ウマ	遊離歯	下顎第三前臼歯	R	P3	破損顕著
21	E3	VIIa	B-14	ウマ	遊離歯	下顎第四前臼歯	R	P4	破損顕著
22	E3	VIIa	B-14	ウマ	遊離歯	下顎第一前臼歯	R	M1	破損顕著
23	E3	VIIa	B-14	ウマ	遊離歯	下顎第二前臼歯	R	M2	破損顕著
24	E3	VIIa	B-14	ウマ	遊離歯	下顎第三前臼歯	R	M3	破損顕著
25	D2	VIIa	B-25	ウマ	遊離歯	上顎臼歯	-		破損顕著
26	D2	VIIa	B-26	ウシ	遊離歯	下顎第二後臼歯	R	P2	
27	A3	VIIb	B-15	ウマ	遊離歯	下顎切歯	L	I1	
28	B2	VIIb	B-20	不明	遊離歯		-		破片
29	C3	VIIb	B-22	ウマ	遊離歯	不明	-		破片
30	C3	VIIb SX05	B-27	不明	不明		-		
31	A3	V	B-16	ウマ	上顎骨・下顎骨		L		

2) 結果

①分類群

同定結果は学名、和名および部位を表に示し、以下に分類群を記す。

硬骨魚綱 OSTEICHTHYES

スズキ目 *Perciformes*

マダガスカル属の一種 *Thunnus* sp. サバ科 *Scombridae*

鳥綱 AVES

カモ目 *Anseriformes*

カモ科の一種 *Anatidae*, gen. et sp. indet. カモ科 *Anatidae*

キジ目 *Galliformes*

キジ科の一種 *Phasianus*, gen. et sp. indet. キジ科 *Phasianidae*

哺乳綱 MAMMALIA

奇蹄目 *Perissodactyl*

ウマ *Equus caballus* ウマ科 *Equidae*

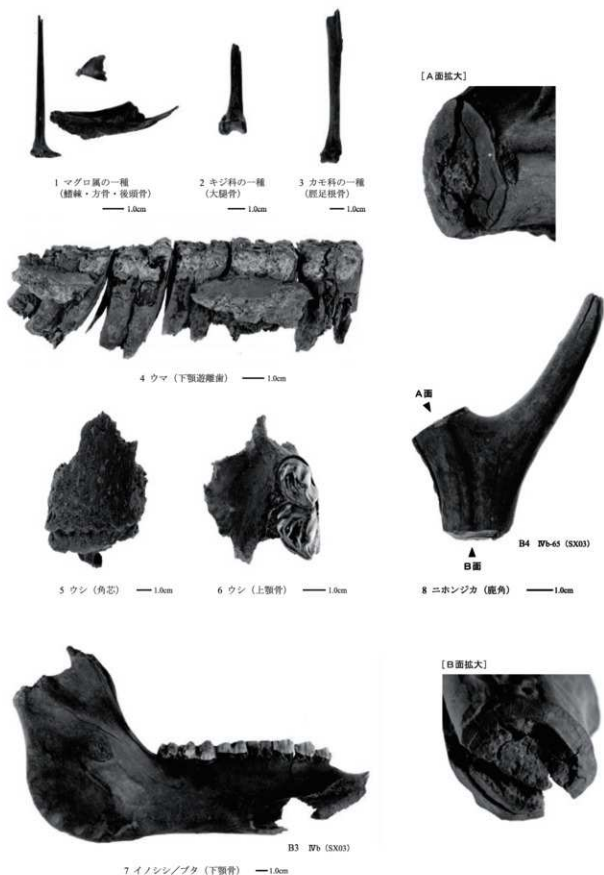


Fig.128 鳥居松遺跡の動物遺存体

偶蹄目 Artiodactyla

ウシ	<i>Bos Taurus</i>	ウシ科 Bovidae
ニホンジカ	<i>Cervus Nippon</i>	シカ科 Cervidae
イノシシ	<i>Sus scrofa</i>	イノシシ科 Suidae

②動物遺存体の特徴

マグロ属の一種：V層 SS04 より後頭骨（左）、方骨（右）、鰭棘が各1点出土している。

キジ科の一種：V層 SS04 より大腿骨（左）が1点出土している。

カモ科の一種：V層 SS04 より脛足根骨（左）が1点出土している。

ウマ：Ⅶb層より遊離歯（左1不明1）が2点、Ⅶa層より遊離歯（左1右5左右不明1）が7点、Ⅳ～V層 SE01 周辺より遊離歯（左1右1）が2点出土している。ほとんどが骨の主成分であるリンと地下水の鉄イオンとが結合した藍鉄銅（ビビアナイト）を析出させて劣化しており、破損が著しくろうじて原形を保っているが、計測等は困難であった。頭骨1があるが保存が悪く、保存処理中である。

ウシ：Ⅶa層より遊離歯（右1不明1）が2点、V層より上顎骨（左）が1点、Ⅳb層 SX03 より角芯（左）が1点出土している。観察により解体痕等は認められなかった。

ニホンジカ：Ⅳb層 SX03 より鹿角の第一枝部分（左）が1点出土している。切断面を観察すると、金属器をもちいて切断された痕跡が認められる。

イノシシ/ブタ：Ⅳb層 SX03 より第二前臼歯から第三後臼歯が残存した下顎骨（左）が1点出土している。第三後臼歯が完全に萌出していることから成獣であることがわかる。第三後臼歯の最後縁の咬頭を観察すると咬耗が進んでいることから、年齢が高い個体であることが推察される。観察により解体痕等は認められなかった。

（4）花粉分析・珪藻分析

1）方法

①花粉分析

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村純の方法（中村 1973）を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。水洗した後、0.5mmの篩で糠などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、2分間）の後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の間で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。なお、科・亜

科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。なお、併せて寄生虫卵の観察・同定・計数を行った。以下に、検出された主要な分類群を示す。

②珪藻分析

試料には以下の物理化学処理を施し、プレパラートを作成した。試料から1cm³を秤量する。10%過酸化水素水を加え、加温し反応させながら、1晩放置する。上澄みを捨て、細粒のコロイドおよび薬品の水洗を行う。水を加え、1.5時間静置後、上澄みを捨てる。この操作を5、6回繰り返す。残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下し乾燥させる。マウントメディアによって封入しプレパラートを作成する。プレパラートは生物顕微鏡で600～1500倍で検鏡し、直線視野法により計数を行う。計数は、同定・計数は珪藻被殻が100個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。珪藻ダイアグラムと解析は、生態性はLowe (Lowe1974) や渡辺仁治 (渡辺 2005) 等の記載、陸生珪藻および、環境指標種群の海水生種と汽水生種は小杉正人 (小杉 1986, 1988)、淡水生種は安藤一男 (安藤 1990) の分類を用いた。以下に検出された主要珪藻を示す。

2) 分析結果

①花粉分析

分類群 出現した分類群は、樹木花粉44、樹木花粉と草本花粉を含むもの6、草本花粉41、シダ植物孢子3形態の計94である。これらの学名と和名および粒数を表に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図に示す。なお、200個未満であっても100個以上の試料については傾向をみるため参考に図示し、主要な分類群は顕微鏡写真に示した。また、寄生虫卵についても同定した結果、3分類群が検出された。以下に出現した分類群を記載する。

樹木花粉：マキ属、モミ属、トウヒ属、ツガ属、マツ属複雑維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科・イヌガヤ科・ヒノキ科、ヤナギ属、ヤマモモ属、クルミ属、サウワグミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属・アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、イヌブナ、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属・ケヤキ、エノキ属・ムクノキ、シキミ属、アカメガシワ、サンショ

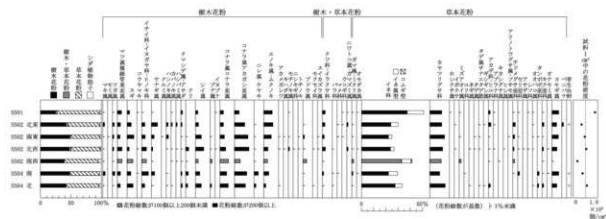
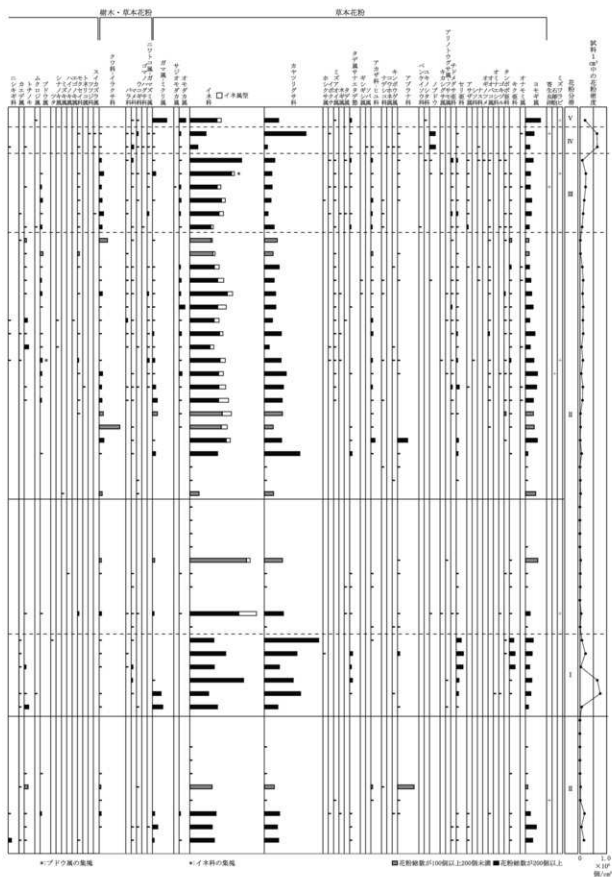


Fig.129 鳥居松遺跡の貝塚における花粉ダイアグラム





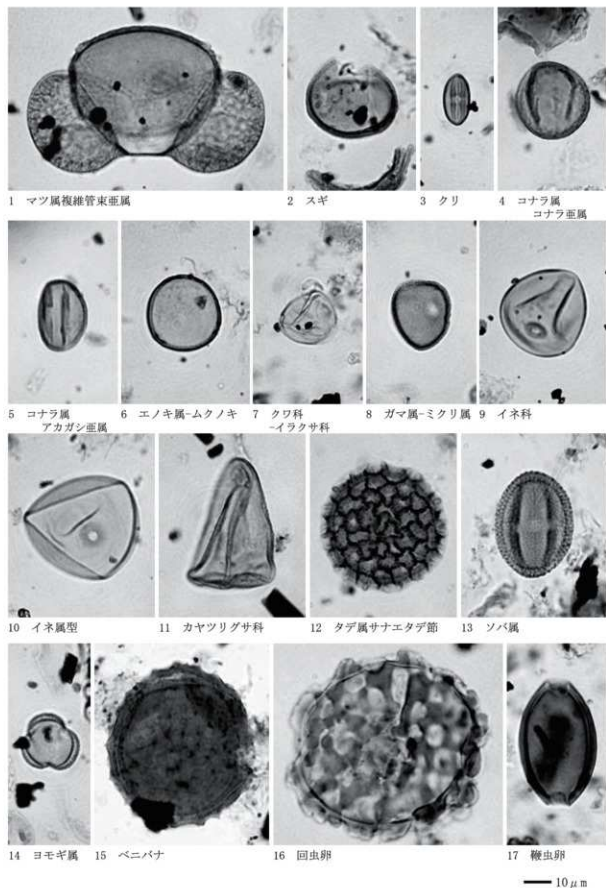


Fig.132 鳥居松遺跡の花粉・胞子・寄生虫卵

ウ属、キハダ属、ウルシ属、モチノキ属、ニシキギ科、カエデ属、トチノキ、ムクロジ属、ブドウ属、ツタ、シナノキ属、ミズキ属、ハイノキ属、エゴノキ属、モクセイ科、トネリコ属、ツツジ科、スイカズラ属

樹木花粉と草本花粉を含むもの：クワ科－イラクサ科、バラ科、マメ科、ウコギ科、ゴマノハグサ科、ニワトコ属－ガマズミ属

草本花粉：ガマ属－ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、コムギ型、カヤツリグサ科、ホシクサ属、イボクサ、ミズアオイ属、ユリ科、ネギ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、コウホネ属、キンボウゲ属、アブラナ科、ベンケイソウ科、ユキノシタ科、ノブドウ、キカシグサ属、ヒシ属、アリノトウグサ属－フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、アサザ属、シソ科、ナス科、オギノツメ、オオバコ属、オミナエシ科、ゴキヅル、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属、ペニバナ

シダ植物胞子：単条溝胞子、ミズワラビ、三条溝胞子

寄生虫卵：回虫卵、鞭虫卵、不明虫卵

花粉群集の特徴 貝塚 SS01・SS02・SS04 の花粉組成は類似する。イネ属型を含むイネ科が優占し、カヤツリグサ科、ヨモギ属が比較的多く、草本花粉が樹木花粉より多い。樹木花粉では大きく優占する分類群はないが、コナラ属アカガシ亜属、エノキ属－ムクノキ、コナラ属コナラ亜属、シイ属、スギなどの針葉樹が出現する。

断面では、下部より P I 帯から P V 帯の 5 区分した。

P I 帯（試料 40～45、7 層下部から Kg 含有層以下まで）では、草本花粉の占める割合がやや高く、イネ科、カヤツリグサ科が優占する。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属が多い。下部ではガマ属－ミクリ属がやや多い。

P II 帯（試料 10～39、46～55）では、イネ属型が出現しイネ科が優占しカヤツリグサ科がやや減少する。樹木花粉はコナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属が多く、イチイ科－イスガヤ科－ヒノキ科の針葉樹がやや多くなる。試料 38（7-1 層）と試料 34（7-2 層）では特にイネ属型を含むイネ科が優占する。

P III 帯（試料 4～9）では、エノキ属－ムクノキが増加する。

P IV 帯（試料 2・3）ではイネ属型を含むイネ科が低率になり、エノキ属－ムクノキやカヤツリグサ科が増加する。

P V 帯（試料 1）ではエノキ属－ムクノキがなくなり、草本花粉ではイネ属型を含むイネ科、ガマ属－ミクリ属、樹木花粉ではマツ属複雑管束亜属、スギが増加する。

②珪藻分析

分類群 出現した主要珪藻を以下に示す。貧塩性種（淡水性種）が主要となる。

貧塩性種： *Amphora copulata*, *Aulacoseira ambigua*, *Aulacoseira canadensis*, *Aulacoseira granulata*, *Aulacoseira* spp., *Caloneis silicula*, *Cocconeis placentula*, *Cyclotella* spp., *Cymbella silesiaca*, *Cymbella turgidula*, *Cymbella sinuata*, *Eunotia bilunaris*, *Eunotia minor*, *Eunotia soleirolii*, *Fragilaria construens*, *Gomphonema acuminatum*, *Gomphonema gracile*, *Gomphonema*

parvulum, *Gomphonema truncatum*, *Hantzschia amphioxys*, *Navicula confervacea*, *Navicula elginensis*, *Navicula pupula*, *Neidium ampliatum*, *Pinnularia microstauron*, *Tabellaria fenestrata-flocculosa*

貧-中塩性種: *Navicula peregrina*, *Rhopalodia gibberula*

珪藻群集の特徴 貝塚 SS01・SS02 は, *Gomphonema parvulum*, *Cocconeis placentula* の真・好流水性種がやや多いが, 真・好止水性種, 流水性種, 陸生珪藻と多様に出現する。SS04 では *Aulacoseira granulata* の湖沼浮遊生種がやや優占し真・好止水性種が優占する。

断面では, D I 帯から D VI 帯の 6 分帯を設定した。

D I 帯 (試料 30 ~ 45) は珪藻が少ない。

D II 帯 (試料 27 ~ 28) は *Cymbella turgidula*, *Cymbella sinuata* の中〜下流性河川指標種群, *Cocconeis placentula* の沼沢湿地付着生種が優占するが, 珪藻密度が低い。

D III 帯 (試料 10 ~ 26) では湖沼浮遊生種の *Aulacoseira granulata* を主に湖沼沼沢湿地環境指標種群の *Aulacoseira ambigua* が優占する。

D IV 帯 (試料 4 ~ 9) では *Aulacoseira granulata*, *Aulacoseira ambigua* が減少するものの多く, 沼沢湿地付着生環境指標種群の *Eunotia minor*, 陸生珪藻の *Navicula confervacea* などが出現する。

D V 帯 (試料 2・3) では貧-中塩性種: *Navicula peregrina* が優占する。

D VI 帯 (試料 1) では湖沼浮遊生種の *Aulacoseira ambigua* が優占する。

3) 推定される植生と環境

①貝塚

貝塚 SS01・SS02・SS04 の周辺はイネ科が多く, カヤツリグサ科, ヨモギ属も多く, 周囲は草本が多い。周辺は樹木が少ないが, コナラ属アカガシ亜属, エノキ属-ムクノキ, コナラ属コナラ亜属, シイ属, スギなどの針葉樹が生育する。SS01・SS02 では真・好流水性種が多く, 比較的水が

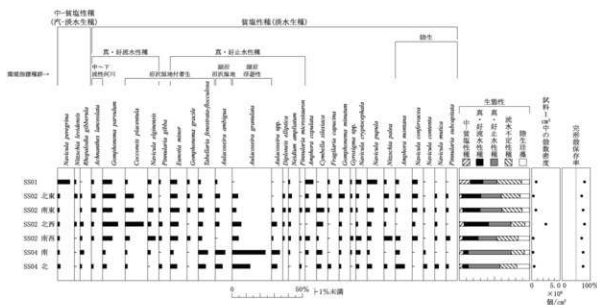


Fig.133 鳥居松遺跡の貝塚における主要珪藻ダイアグラム

流れる環境が示唆される。SS04では湖沼浮遊生種が多く、滞水する環境が示唆され、環境が異なる。SS01・SS02・SS04のいずれの貝塚も大溝の水域中に形成された貝塚である。

②周辺および大溝

弥生時代後期前半7層下部からKg含有層以下まで(PⅠ帯)では、イネ科、カヤツリグサ科が生育する湿地の環境であり、特に下部ではガマ属-ミクリ属が多い。森林ではコナラ属アカガシ亜属の照葉樹林、コナラ属コナラ亜属の落葉広葉樹林が主に分布する。コナラ属コナラ亜属の落葉広葉樹林は周辺の台地上等の乾燥したところに分布していたと考えられる。珪藻ではDⅠ帯に当たり、珪藻が少なく乾燥した環境や不安定な環境が推定される。

2～3世紀以降から8世紀(PⅡ帯)は、イネ属型を含むイネ科が増加し、周辺の低地で水田が営まれるようになった。森林植生は大きく変わらず、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属が多く、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科が主要素で、本地域における低地と台地との地形が明白な環境に起因すると考えられる。試料38(7-1層)と試料34(7-2層)では特にイネ属型を含むイネ科が優占し、弥生時代後期前半の水田の分布が示唆される。下部は珪藻のDⅠ帯で乾燥した環境が推定される。上部は大溝内で、DⅡ帯とDⅢ帯では湖沼浮遊生種を主に湖沼沼沢地環境指標種群が優占し、滞水し水草の生育する状況が示唆され、下部で中～下流水性河川指標種群が多く流れる環境の時期もある。

9～10世紀(PⅢ帯)は二次林と考えられるエノキ属-ムクノキが増加し、遺跡の縮小が考えられる。大溝(DⅣ帯)曖昧な水域になる。

12～13世紀の下部では(PⅣ帯)はイネ属型を含むイネ科が低率になり、周囲の低地の水田が衰退する。エノキ属-ムクノキやカヤツリグサ科が増加し、二次林化も進む。珪藻ではDⅤ帯で貧-中塩性種の珪藻であるが多く優占し、このことから一時的な海水準の上昇があり、低地で水田が衰退したと考えられる。

12～13世紀の上部では(PⅤ帯)では再び水田化しガマ属-ミクリ属も多く低湿地となる。珪藻からは湖沼浮遊生種が多く(DⅥ帯)、水域が示唆される。

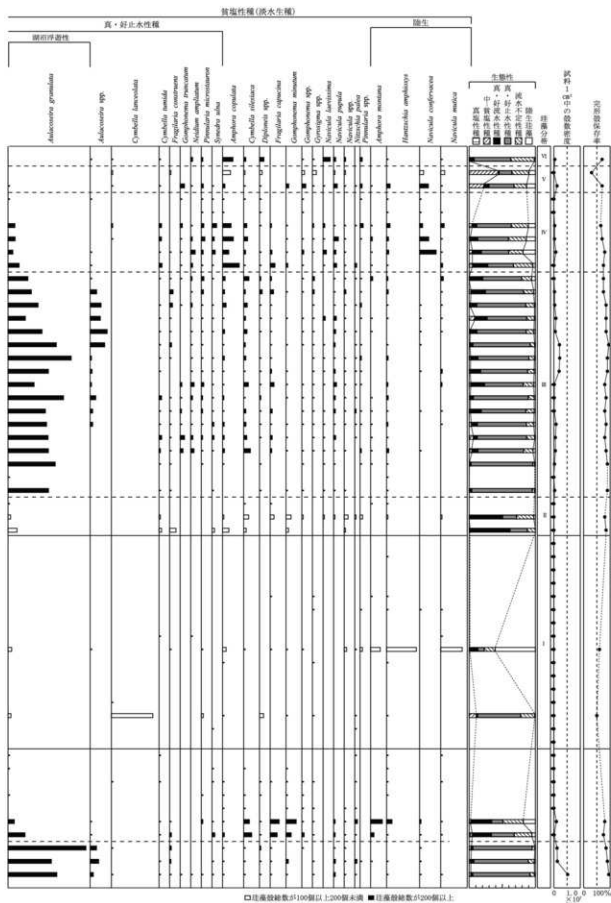
(5) まとめ

貝 類 鳥居松遺跡の人々が食料として積極的に採集したと推定される貝類は、ヤマトシジミとダンベイキサゴであり、この2種で全体の80%程を占めている。ほとんどの貝が河口、干潟、内湾の貝であり、遺跡隣に貝類採集に適した場が広がっていた。ダンベイキサゴは、外洋に面した砂底に生息しているため、周辺の遠州灘からわざわざ採取され、鳥居松遺跡の人々に特に好んで食べられていたと考えられる。

動物骨 6世紀後半のⅦb層からはウマ、7世紀のⅦa層からはウシとウマ、8世紀のⅤ層からはウシとSS04からはマクロ属の一種、キジ科の一種、カモ科の一種、8～9世紀のⅣ～Ⅴ層SE01周辺からはウマ、9世紀のⅣ層SS03からはウシ、ニホンジカ、イノシシ/ブタを同定した。

同定できた資料のなかで特に注目すべきは鹿角の未製品であろう。古代における鹿角の未製品は出土例が少なく、当時の加工技術を解明するうえで貴重な資料となる。また、8世紀のⅤ層SS04





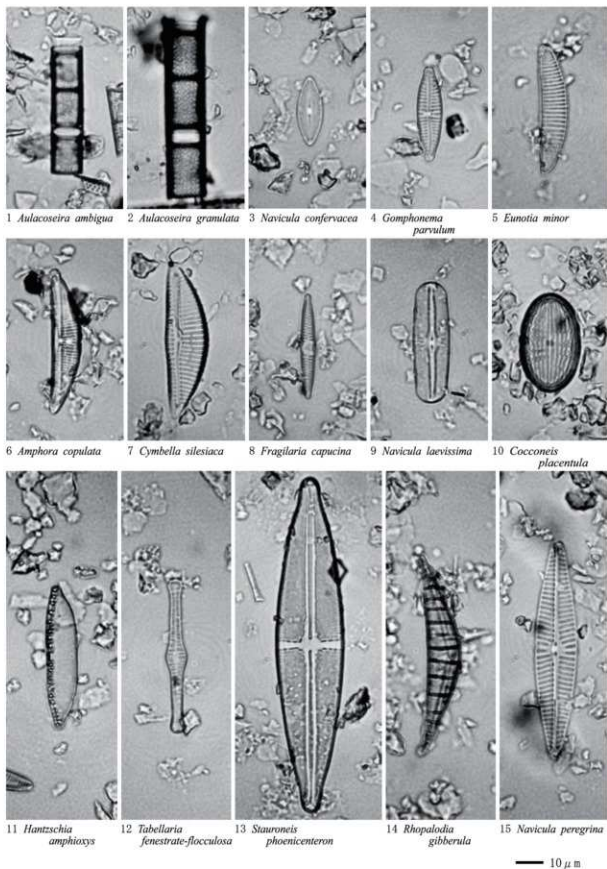


Fig.136 鳥居松遺跡の珪藻

からはマグロ属が出土しており、付近の伊場遺跡においてもマグロ属が確認されている。マグロ属は外洋魚であることから、当時この地域において外洋魚が利用されていたことを窺わせる。古代の動物利用の解明も動物考古学の課題の一つであり、本資料は古代の東海地域における重要な資料となる。

貝塚の環境 貝塚 SS01・SS02 は比較的水が流れる環境に捨てられ形成され、SS04 では湖沼浮遊生種は滞水した環境に捨てられ、形成された環境が異なる。

周辺の植生と環境 本地域では森林植生は下部の Kg 含有層以下から 8 世紀まで大きく変化せず、コナラ属アカガシ亜属の照葉樹林、コナラ属コナラ亜属の落葉広葉樹林が主に分布する。低地にはイネ科、カヤツリグサ科が分布する。2～3 世紀以降はイネ属型を含むイネ科が増加し、周辺の低地で水田が営まれるようになる。試料 38（基本層位 6 層相当）と試料 34（基本層位 7 層相当）では特にイネ属型を含むイネ科が優占し、弥生時代後期前半の水田の分布が示唆された。

伊場大溝の植生と環境 5～6 世紀の大溝の時期になっても大きく植生は変化しない。大溝は概ね滞水し水草の生育する状況であった。9～10 世紀に二次林と考えられるエノキ属—ムクノキが増加し、遺跡の縮小が推定され、12～13 世紀の下部では周囲の低地の水田が衰退し、エノキ属—ムクノキやカヤツリグサ科が増加し、二次植生化が進む。一時的な海水準の上昇があり、低地で水田が衰退したと考えられる。12～13 世紀の上部では再び水田化しがマ属—ミクリ属も多く低湿地化する。

【参考文献】

- 安藤一男 1990 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42 pp.73-88.
- 伊藤良永・堀内誠示 1991 「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌』6 pp.23-45.
- 窪田彦左衛門 1962 『福井市立郷土博物館所蔵貝類標本目録』福井市立郷土博物館.
- 小杉正人 1986 「陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが国への導入とその展望—」『植生史研究』第 1 号 植生史研究会 pp.29-44.
- 小杉正人 1988 「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『第四紀研究』27 pp.1-20.
- 滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会 1984 『粟津貝塚湖底遺跡』pp.141-142.
- 中坊徹次（編）2000 『日本産魚類検索 全種の同定 第二版』東海大学出版会.
- 中村純 1967 「花粉分析」古今書院 pp.82-110.
- 中村純 1974 「イネ科花粉について、とくにイネ（*Oryza sativa*）を中心として」『第四紀研究』13 pp.187-193.
- 中村純 1977 「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学』第 10 号 pp.21-30.
- 波部忠重 1967 『標準原色図鑑全集』第 3 巻 保育社.
- 納屋内高史・松井章 2007 「第 2 節 浜松市伊場遺跡出土の動物遺存体」『伊場遺跡補遺編（第 8～13 次調査遺構・自然遺物）』浜松市教育委員会 pp.83-105.
- 浜松市教育委員会 2007 『伊場遺跡補遺編（第 8 次～13 次調査遺構・自然遺物）』（財）浜松市文化振興財団 2009 『鳥居松遺跡 6 次』
- 林良博・西田隆雄・望月公子・瀬田季茂 1977 「日本産イノシシの歯牙による年令と性の判定」『日本獣医学雑誌』第 39 巻第 2 号 pp.165-174.
- 藤井昭二・高山茂樹 1979 「軟体動物」『鳥居貝塚—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査 I—』福井県教育委員会 pp.167-169.
- 渡辺仁治 2005 「淡水産珪藻生息図鑑」内田老鶴圃 p.666

- Hustedt, F. 1937-1938 Systematische und ologische Untersuchungen über die Diatomeenflora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch. Hydrobiol., Suppl. 15, pp. 131-506.
- Lowe, R.L. 1974 Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333p. National Environmental Research Center.
- K. Krammer · H. Lange-Bertalot 1986-1991 Bacillariophyceae · 1-4.
- Asai, K. & Watanabe, T. 1995 Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, pp. 35-47.

4 鳥居松遺跡出土木簡の概要

渡辺晃宏

(1) はじめに

鳥居松遺跡の5次調査では自然流路「伊場大溝」から合計6点の木簡が出土している。以下、各木簡の解説を行い、これら史料群の特徴と意義について触れる。

(2) 木簡の解説

1号木簡 (Fig.137-182) 上下両端折れ。左辺削り。右辺割れ。一文字目と三文字目が細い筆致で書かれているのに対し、三文字目の「三」は太めの画で記されている。上書きされている可能性もある。四文字目は辛うじて残る程度で判読できない。「三日」は日付とみられるが、その直上の文字は「月」にはならず、この部分は二文字以上の可能性もある。また、一文字目と四文字目は「三日」の部分に比べると、文字の中心がやや左にずれるようであり、一連の記載でない可能性も残る。

2号木簡 (Fig.137-183) 二片接続。上端折れ。下端と左辺削り。右辺割れ。裏面の文字は左半を欠き、その状況からみると、原形は現状の二倍以上あった可能性がある。したがって、表面の文字は二行割書の左行にあたとみられる。蛭田郷は『和名類聚抄』にみえる遠江国敷智郡蛭田郷にあたり、「郷」の下に続く墨痕はコザトの可能性もある。但し、上に続く文字は「人」であり「郡」ではない。表面は比較的大振りな一行書きの文字とみられる。

こうした形状、文字の割付、内容から判断すると、比較的大型の文書木簡の断片の可能性が高いとみられる。「蛭田郷」も文書木簡の文章の一部に登場する地名ということになり、敷智郡内の行政事務の一端を窺わせる郡家に相応しい木簡ということができよう。大型の木簡という点を重視すれば、伊場遺跡群でも類例のある郡符などに多い二尺クラスの規格の大型木簡の断片である可能性が高い。このことは、後述のように、3号木簡と同材とみられることから裏付けられよう。

3号木簡 (Fig.137-184) 五片接続。上端は山形に整形していたとみられるが、右辺上部は割れ。下端は裏面から斜めに刃物を入れて切断しているが、先端部分は折れている。左右両辺は削り。本来は二尺程度の長さをもつ大型の木簡であったとみられる。表面一文字目は縦画が一本残るだけだが、「糸」の上に続く文字としては、字配りや残画の状況からみて、「耳」の可能性が強い。「赤坂郷」は『和名類聚抄』にみえる遠江国敷智郡赤坂郷にあたる。「嶋里」は赤坂郷の曹サトで初見。耳糸(織物の耳を織るときにたて糸として用いるための糸)を赤坂郷嶋里の忍海マ某に貸したことが記される。二行割書の左行は二人目の人名か(一行目の「石□」までで人名として完結し、末尾の文字が二人目の最初の文字となる可能性もある)。裏面上部に墨痕はなく、内容は表面のみで完結していたとみてよい。

裏面は年月日の記載のみが書かれていたとみられる。神亀元年は七二四年。末尾の文字は「月」に続く数字に相当する残画であろうが、神亀元年は二月に改元が行われており、月の特定は困難。

なお、3号木簡は2号木簡と同材の可能性が高い。直接の接点はないが、2号木簡が数cmの間隔を置いて左下に連続するとみられる。その場合、2号木簡表面の「姪田郷〔 〕」は割書左行の人名の註記、同裏面の「□□□」は日付の下に続く人名の末尾と考えることができる。但し、左行の人名を「貸受人」の列記とみるべきか、「貸受人」とは別の性格の人名とみるべきかは俄には決定しがたい。

いずれにしても糸の貸与の証文の木簡であり、糸の出挙というよりは、原材料を貸し与えて絹織物を生産させたことが背景にあるとみられ、材料の調達を含めた繊維製品の生産管理に郡家が深く関与したことを示す重要な資料となろう。なお、木簡にみえる八世紀の耳糸の類例としては、平城宮跡出土の事例がある（「供御□〔耳カ〕糸十絢」、奈文研1987）

4号木簡（Fig.137-185） 上端は山形に削り尖らせる。下端折れ。左右両辺削り。伊場遺跡群の木簡に多数類例のあるイネの出挙に関わるとみられる「サト名+人名」の木簡の一例。鳥居松遺跡が伊場遺跡群と同一の遺跡空間に存在することを明確に示す木簡である。「赤坂」は『和名類聚抄』にみえる遠江国敷智郡赤坂郷にあたる。「五」の最後の横画と、「百」の最初の横画は共用している。また、「依」とした文字は、旁に最初の点画がなく、「佐」のようにもみえるが、他の筆画は「依」とみて矛盾がなく、名前としても自然であることから、「五百依」と判断した。

なお、「サト名+人名」の赤坂郷の木簡としては、伊場遺跡50号木簡「赤坂郷（以下欠損）」（(100)×31×6）、伊場遺跡54号木簡「赤坂□〔郷カ〕戸主刑部□〔歳カ〕□□〔呂カ〕」（337×12×9）、梶子遺跡6号木簡「赤坂〔 〕マ〔 〕五斗」（198×25×5）、梶子北遺跡5号木簡「赤坂郷忍海部古□（以下欠損）」（(101)×17×5）、中村遺跡5号木簡「□□〔赤坂カ〕若倭マ益万呂」（155×23×2）、中村遺跡7号木簡「赤坂□（以下欠損）」（(159)×23×6）の6点がある。4号木簡は同類の木簡の中ではもっとも幅が狭く小振りの様相を呈するが、下端が折れており、梶子北遺跡2号木簡のように文字のない部分が長大な例もあるので、長さの判断は難しい。上端を尖らせる例は他にもある（梶子北遺跡2号木簡、梶子遺跡6号木簡など）。但し、大きさや形状の違いに有意な意義を認めるのは難しそうである。

5号木簡（Fig.137-186） 上端は山形に削り出していたとみられるが、左上部は欠損。下端折れ。左右両辺削り。「己酉年」は、649年の可能性も全くないことはないが、出土層位の年代観や在地支配の拠点としての木簡使用という観点からみて、干支年使用としてはかなり遅い部類に属することにはなるが、709年（和銅2）であろう。

「相知」は、保証人の意で、木簡では平城宮跡出土木簡（770年代初頭の月借錢解の連帯保証人、奈文研2009）や新潟県延命寺遺跡出土木簡（天平7年〈735〉の口分田の売買の証人、(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団ほか2008）に類例がある。下に続く三文字は「某月記」とあるのが自然であるが、残画からはそのような読み取りがたく、またそのように考えた場合に「相知」の内容が全く見えなくなることもやや不審。「川□〔前カ〕」は姓であろう。なお、釈文を立てた墨痕以外にも、削り残りともみられる墨痕が左上部に残る。

いずれにしても、何らかの貸借関係の発生に際して作成された木簡であることは明らかで、それに郡家が関与していたことを示す木簡といつてよいだろう。「相知」の文言が確認できる最古の事



釈文

一 □ 三日

(90) × (19) × 4 081

二 人蛭田郷 □ □ □

(144) × (30) × 6 081

三 一斤貸受人赤坂郷嶋里 □ □ □

[耳カ] 忍海マ石 □ □ □

神亀元 □ □ □ [年カ]

(407) × 63 × 7 019

四 赤坂丈マ五百依

(102) × 13 × 4 019

五 己酉年 □ □ □ 相知川 [前カ]

(203) × 54 × 5 019

六 [赤カ] □ □ □ □ □ □ □

311 × 22 × 10 051

※釈文の表記方法などは、おおむね木簡学会編『木簡研究』に従った。

Fig.137 鳥居松遺跡5次調査出土木簡

例とみられることも注目される。

6号木簡 (Fig.137-187) 曲物を転用した木簡であり、上端は長方形、下端は尖らせている。左右両辺削り。墨痕は全く残らず、墨痕があった部分が浮き出て文字が確認できる。形状としては、「サト名+人名」の木簡の典型的な様相を呈しており、4号木簡と同様に「赤坂」と記されている可能性があるが、明確でない。

(3) 鳥居松遺跡出土木簡の特徴と意義

以上、個別に木簡の形状と内容について簡単に整理した。注目すべきは、伊場遺跡群に多数みられる「サト名+人名」の木簡(4号木簡)、及びそう考えて矛盾のない形状の木簡(6号木簡)が含まれていることである。鳥居松遺跡が、伊場大溝を介して伊場遺跡群と同一の空間に立地していることを如実に示す遺物といえよう。

第二に注目すべきは糸の貸借を示す木簡(3号木簡)であろう。調布布の生産を郡家が管理運営していたことは既に指摘されて久しい。この木簡からは具体的に何を生産するためのものかはわからないが、郡家が繊維製品の生産管理に深く関与していたことを物語る遺物として重要な発見といえよう。伊場遺跡40号木簡に類例のない布の荷札があることも関連するかも知れない。この木簡は神亀元年(724)の紀年銘木簡としても貴重である。伊場遺跡85号木簡の神亀4年について、伊場遺跡群としては2例めの神亀の紀年銘木簡となる(城山遺跡27号木簡は神亀6年の暦だが、直接の年記は書かれていない)。

第三に郡家の貸借関係への関与を示す5号木簡に注目したい。「相知」の記載のある最古の例であるだけでなく、その文言を記す木簡を作成しているということは、それに郡家が公式に関与してことを示すとみられる。現存部分に具体的な記載がみえないことからすれば、欠損部分にかなり長大な事実関係記載が書かれていた可能性があり、新潟県延命寺遺跡出土木簡に通じるような内容であった可能性もある。干支年の使用としてかなり遅い事例であることにも注意すべきだが、ここでは郡家の貸借関係の成立への関与が和銅2年(709)という八世紀初頭の実事であることに注目したい。和銅の紀年銘木簡としては、伊場遺跡群としては中村遺跡1号木簡の和銅8年について2例めとなり、評制下に引き続き、伊場遺跡群の地が数智郡中枢の在地支配拠点として活動していることを明確に示す遺物である。

このようにわずか6点ではあるが、今回の鳥居松遺跡出土木簡は、墨書土器とともに、伊場遺跡群の遺跡としての広がりや在地支配拠点としての活動の広がりを明確に示す、重要な発見と位置付けることができよう。

【参考文献】

- 奈良国立文化財研究所 1987『平城宮発掘調査出土木簡概報(19)』
奈良文化財研究所 2009『平城宮発掘調査出土木簡概報(39)』
(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団・新潟県教育委員会 2008『延命寺遺跡』

5 鳥居松遺跡出土墨書土器の概要

山本 崇

(1) はじめに

今回の調査から、墨書土器は19点出土した。鳥居松遺跡全体では、2次調査で2点、4次調査で1点の墨書土器が出土しており、あわせて22点となった。今回報告する19点のうち、過半を占める11点が「稲万呂（記号）」墨書ないしその断片と推定されるものである。以下、まず「稲万呂（記号）」墨書以外の墨書土器について、その概要を述べる。

(2) 墨書土器の概要

1は、「〔逆〕」（須恵器有台坏身底部、V期。SS02出土）。人名の可能性があると不詳。2の「竹田女」（須恵器摘蓋内面、V期。SE01出土）と、12の「福刀自」（須恵器双耳箱坏底部外面、Ⅶ-1期。SX03出土）は、ともに女性名を記したものである。伊場遺跡群では、女性名を記した可能性のある墨書土器は比較的認められ、竹田知刀自女（城山3次17）、千刀自女（梶子北113）、刀自女（伊場405）、淨成女（城山3次18）、□田女（城山3次19）、長女（伊場63、76）、成女（城山3次20）などがある。11は、「上殿／上」（須恵器箱坏底部外面・側面正位、Ⅶ期。SX03出土）。「殿」は敬称であろう。側面の「上」は底部外面の「上殿」を略したものか。土器を正位に置いた状態で記された文字であるが、底部の文字とは方向が合わない。15「廣」（須恵器壺蓋内面、Ⅵ～Ⅶ期。SX03出土）、17「廣」（須恵器高盤外面、Ⅶ期。SX04出土）はいずれも断片でこれ以外の文字が記されていた否か不詳。人名の一部となる可能性もあろう。19の「本」（灰釉陶器碗底部外面、Ⅶ-2期（K90）は、灰釉陶器底部外面に比較的大きめの文字を記すことなど、伊場遺跡群のⅦ期以降の過半を占める一文字墨書の特徴を示している。ただし、これまでの出土例では、「本」の一文字墨書は類例が少ない。なお、18は、

Tab.7 鳥居松遺跡5次調査出土墨書土器

墨書 番号	層位	検出 番号	取上 番号	遺構名	種 別	器 種	墨書 部位	表 文	年代観	実年代	産 地	備 考
1	V	6	1535	SS02	須恵器	有台坏身	底	「逆」	V	8世紀前半～8世紀中葉	湖西産	
2	IVb	1	216	SE01	須恵器	摘蓋	内	「竹田女」	V	8世紀前半～8世紀中葉	湖西産	
3	IVb	37	155	SX03	須恵器	摘蓋	内	「稲万呂」＋記号	VI	8世紀後半～9世紀初頭	湖西産	
4	IVb	38	179	SX03	須恵器	摘蓋	内	「稲万呂」＋記号	VI	8世紀後半～9世紀初頭	湖西産	
5	IVb	39	142	SX03	須恵器	摘蓋	内	「稲万呂」＋記号	VI	8世紀後半～9世紀初頭	湖西産	
6	IVb	40	133	SX03	須恵器	摘蓋	内	「稲万呂」＋記号	VI	8世紀後半～9世紀初頭	湖西産	
7	IVb	41	189	SX03	須恵器	摘蓋	内	「呂」＋記号	VI	8世紀後半～9世紀初頭	湖西産	稲万呂と推定される
8	IVb	42	177	SX03	須恵器	平蓋	内	「稲万呂」＋記号	Ⅶ-1	9世紀前半	湖西産	
9	IVb	43	1051	SX03	須恵器	箱坏	底	「稲万呂」＋記号	Ⅶ-1	9世紀前半	湖西産	稲万呂と推定される
10	IVb	44	1057	SX03	須恵器	箱坏	底	「稲万呂」＋記号	Ⅶ-2	8世紀末～9世紀初頭	湖西産	
11	IVb	45	130	SX03	須恵器	箱坏	底・側	「上殿」、 「上」	VI	8世紀末～9世紀初頭	湖西産	
12	IVb	46	160	SX03	須恵器	双耳箱坏	底	「福刀自」	Ⅶ-1	9世紀前半	湖西産	
13	IVb	47	25	SX03	須恵器	皿	底	「稲万呂」＋記号	Ⅶ～Ⅷ	8世紀後半～9世紀前半	湖西産	
14	IVb	48	171	SX03	須恵器	高盤	上	「稲万呂」＋記号	Ⅶ-1	9世紀前半	湖西産	
15	IVb	49	188	SX03	須恵器	壺蓋	内	「廣」	Ⅶ～Ⅷ	8世紀後半～9世紀前半	湖西産	
16	IVb	50	43	SX03	土師器	皿/坏	底	「万呂」＋記号	Ⅶ～Ⅷ	8世紀後半～9世紀前半	在来産	稲万呂と推定される
17	IVb	86	315	SX04	須恵器	高盤	外	「廣」	VI	8世紀後半～9世紀初頭	湖西産	
18	IVb	158	133	IVb層	土師器	坏	底	「□」	Ⅶ～Ⅷ	8世紀後半～9世紀前半	在来産	
19	IVa	30	1987	SD102	灰釉陶器	碗	底	「本」	Ⅶ-2 (K90)	9世紀後半	二川産	

判読不能（土師器坏底部、Ⅵ～Ⅶ期）。

3～10、13、14、16の11点は、「稲万呂」墨書ないしその断片と推測されるものであり、いずれもSX03出土。釈文と土器の器種、墨書位置、土器の時期は次の通りである。3「稲万呂（記号）」（須恵器摘蓋内面、Ⅵ期）、4「稲万呂（記号）」（須恵器摘蓋内面、Ⅵ期）、5「稲万呂（記号）」（須恵器摘蓋内面、Ⅵ期）、6「稲万呂（記号）」（須恵器摘蓋内面、Ⅵ期）、7「呂（記号）」（須恵器摘蓋内面、Ⅵ期）、8「稲万呂（記号）」（須恵器平頂蓋内面、Ⅶ-1期）、9「稲万□（記号）」（須恵器箱坏底部外面、Ⅶ-1期）、10「稲万呂（記号）」（須恵器箱坏底部外面、Ⅵ-2期）、13「稲万呂（記号）」（須恵器皿底部外面、Ⅵ～Ⅶ期）、14「稲万呂（記号）」（須恵器高盤上面、Ⅶ-1期）、16「万呂（記号）」（土師器皿もしくは坏底部外面、Ⅵ～Ⅶ期）。

（3）「稲万呂」墨書の検討

今回の調査で新たに11点の「稲万呂（記号）」墨書が出土し、伊場遺跡群全体での出土点数は19点となった。なお、『伊場遺跡総括編』（浜松市教委2008）の段階では、確実に初記号のある墨書土器は12点出土しており、そこに記された人名は、「稲万呂」8点、「安万呂」3点、「里麻呂」1点であった。この段階で、初記号墨書土器の特徴は、①すべてⅥ期（Ⅵ期1段階を含む。奈良時代後半～平安時代初頭）に属すること、②すべて湖西産の須恵器であること、③器種および墨書部位には共通性が認められないこと、以上3点を指摘したが、①については、Ⅵ～Ⅶ期、Ⅶ-1期のものも確認され初記号の墨書土器の時代幅が広がり、②土師器1点が新出したことなど、その特徴は修正せねばならない。また、器種の共通性はお認めたいが、摘蓋・平頂蓋がおよそ半数にあたる9点であることからすれば、本来は土器の蓋と身にそれぞれ「稲万呂（記号）」墨書が記された可能性が考えられる。

また前書では、同筆異筆関係の認定は困難であるが、いずれも類似した筆致であるとの指摘に留めたが、類例の増えた19点の「稲万呂」墨書を眺めてみると、いくつかの類型に分類することができる。以下、墨書の分類を試みたい。

A類に分類される墨書は、3～6。「稲」字のうち隣のくずし方の度合いが大きい。「万」字は横画をしっかり引くが縦画は左払え、縦棒とも短くおさめる。また初記号の左囲みの書き出しは右囲みの左上からはじまる。なお、「万」の縦画により注目すれば、縦画が横画に接する3と5、横画に接しない4と6に細分することができる。伊場43・城山221もA類に近いと考えられる。土器の年代は、すべてⅥ期に属する。

B類に分類される墨書は、10・13・14。「稲」字の「日」を比較的筆画をくずさず転折も明瞭に記すこと、「万」字の縦画を明瞭に記すことが特徴である。14は「稲」の字体からすればA類の特徴をもつが、「万」字はB類に近い。初記号は、書き出しの鈎部の認められないもの（14）、はっきりしないもの（10）が認められるほか、左囲みが右囲みから枝分かれするように記され、書き出しの位置がやや下がる傾向が現れはじめる（10・14）。文字の残りは悪いものの、「呂」の字体からすれば16もこの分類に含まれる可能性がある。

C類に分類される墨書は、今回出土したものでは断片の7のみである。「呂」の字体が特徴的で

Tab.8 「稲万呂」墨書土器一覧

通番	類別	遺跡名	墨書番号	押印番号	種別	器種	備 考
1	A	鳥居松5次	3	37	須恵器	坏蓋	「稲」字のうち旁のくずし方の度合いが大きい
2	A	鳥居松5次	4	38	須恵器	坏蓋	〃
3	A	鳥居松5次	5	39	須恵器	坏蓋	〃
4	A	鳥居松5次	6	40	須恵器	坏蓋	〃
5	B	鳥居松5次	10	44	須恵器	箱坏	「日」をくずさず転折も明瞭、「万」字の縦画を明瞭に記す
6	B	鳥居松5次	13	47	須恵器	盤か	〃
7	B	鳥居松5次	14	48	須恵器	高盤	「稲」の字体からするとA類。「万」字はB類に近い
8	B	鳥居松5次	16	50	土師器	皿/坏	〃
9	C	伊場	41	—	須恵器	有台坏身	「呂」の字体が特徴的。「日」をくずさず転折も明瞭。「ツ」を三面で示す
10	C	伊場	42	—	須恵器	坏蓋	〃
11	C	鳥居松4次	3	—	須恵器	箱坏	〃
12	C	梶子9次	22	—	須恵器	坏蓋	〃
13	C	鳥居松5次	7	41	須恵器	坏蓋	「呂」の字体からすると、C類
14	D	鳥居松5次	8	42	須恵器	平頂蓋	「稲」はくずさず、「万呂」は合わせ字で記す
15	D	鳥居松5次	9	43	須恵器	箱坏	〃
16	その他	城山6次	221	—	須恵器	坏身	A類に近い
17	その他	伊場	43	—	須恵器	箱坏	A類に近い
18	その他	伊場	44	—	須恵器	坏蓋	「呂」の字体からするとC類、「稲」字はA類に近い
19	その他	梶子7次	13	—	須恵器	箱坏	〃

参考 その他 新記号がみられる墨書土器

文 字	遺跡名	押印番号	種別	器種	備 考
里麻呂	伊場	50	—	須恵器	皿
安万呂	城山3次	22	—	須恵器	皿
安万	城山3次	23	—	須恵器	高盤
[須]	城山3次	25	—	須恵器	箱坏
□ [須] □	城山3次	32	—	須恵器	一文字目は「柁」の可能性がある

鳥居松5次以外の資料の押印番号：浜松市教委 2008『伊場遺跡総括編』

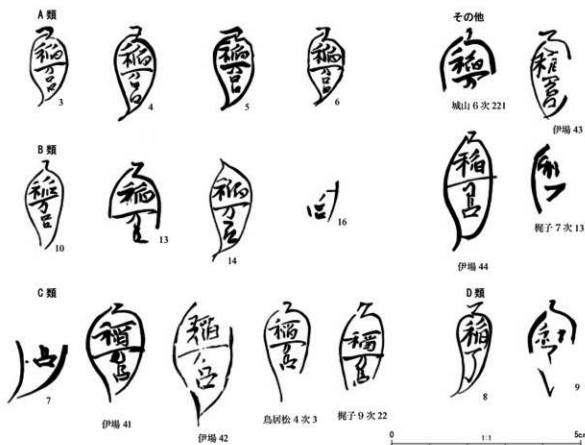


Fig.138 「稲万呂」墨書の分類

ある。「呂」の同様の字体は伊場 42、鳥居松 4 次 3 にみえ、伊場 41、梶子 22 もこれに類似する。類例による限り、「稲」字の「日」の部分で筆画をくずし方度合いがかなり明瞭に記す点のほか、「ツ」の部分も三画で記すなど、概して筆画をくずし方度合いが小さい傾向が認められる。なお、伊場 44 は、「呂」の字体からすれば C 類に含めるべき特徴をもつが、「稲」字の特徴は A 類に近く、A 類とも C 類とも判断しがたい。

D 類に分類される墨書は、8 に典型的である。これに加え、墨痕が薄く判然としないものの、9 も同様の字体を記した可能性がある。「稲」字は筆画をくずし方度合いが極めて小さいにもかかわらず、「万呂」は合わせ字で記す点の特徴といえる。加えて、初記号の左囲みの書き出しが、右囲みより下に下がる。土器の年代はⅦ-1 期で、「稲万呂」墨書のうち最も新しい年代を示す。

「稲」字、「万」字の変化に注目するとき、概して、筆画のくずし方が大きく流暢な書体の文字から、撥ね、払え、転折などが明瞭で筆画のくずし方の小さい文字へという変化が認められる。この傾向を土器の年代の先後関係とあわせ考えるならば、A 類→B 類→D 類の変化が推定できる。この順序は、初記号の変化、すなわち、左囲みの書き出し位置が鈎部の下へと下がる傾向とも一致している。一方、C 類の位置は判然としないが、伊場 44 の墨書は、A 類と C 類との特徴を持つもので、両者の過渡的な状況を示していると理解される。仮に文字のくずし方度合いが小さい C 類を先行するものと理解すれば、「稲万呂」墨書の変遷は、C 類→A 類→B 類→D 類とみる理解が成り立つ。この試案は、今後の資料の増加とともにさらなる検証を深めるべきではあるが、現段階での知見として提示しておきたい。

(4) 「稲万呂」墨書の意義

都合 19 点となった「稲万呂」墨書の出土位置は、上流の城山遺跡から下流の鳥居松遺跡までおよそ 1.5km におよび、墨書の年代は、概ね 8 世紀後半ないし 8 世紀末（Ⅶ期）から 9 世紀前半（Ⅶ-1 期）までにあたる。地理的にも年代的にも、確実に広がりを見せつつあるといえる。ここでは、「稲万呂」墨書を上記のごとき 4 つの類型に分類し、書体の相違が土器の時期と概ね対応することを示した。一方で、今回出土した 11 点の「稲万呂」墨書が、すべて大溝内の同一の遺構 SX03 から出土した一括性の高い資料であることからすれば、ここで提示した墨書の変遷が即時期差として理解できるか否か、この特徴的な墨書を残した人物が一人であるか、あるいは複数の手にかかるものかなど、なお残された問題も多い。今後の資料の増加に俟ちたい。

ともあれ、「稲万呂」墨書は、伊場遺跡群出土の墨書土器のなかでも注目すべき一群といえるが、これらの出土位置、すなわち分布は、古代人の行動範囲が窺われる点で極めて貴重といえる。とともに、まとまった出土をみた鳥居松遺跡付近が、稲万呂の本拠地である可能性は高く、彼自身が、城山遺跡か梶子北遺跡付近に推定される数智郡の中心施設との間を行き来する郡司ないし郡雑任クラスの有力者とする理解は、さらに確かなものになったといえる。

【参考文献】

浜松市教育委員会 2008 『伊場遺跡総括編』

6 鳥居松遺跡における伊場大溝調査の意義

(1) はじめに

今回の調査では、伊場大溝を総延長 25 m にわたり調査し、膨大な量の出土遺物を得た。ここでは、前節までに明らかになった内容をふまえ、検出遺構の検討と出土品の位置づけを行い、伊場遺跡群における鳥居松遺跡の性格について触れておきたい。

(2) 伊場大溝の層位と年代

上流部との関係 伊場大溝の形状や深さについて、鳥居松遺跡の検出状況と、伊場遺跡および梶子遺跡 9 次調査（以下、「梶子遺跡」とする）で確認した状況を比較しておこう。3 地点で確認できた伊場大溝の規模は、幅 20～25m、深さ 2.5m 程度で、互いに近似している。伊場遺跡では伊場大溝が屈曲し、幅が広い部分がみられるものの、伊場遺跡群内における規模の違いはほとんどないといつてよいだろう。

底面の標高も、3 地点における差異は僅かである。Ⅶ層底面の比較では、梶子遺跡が -1.9m 前後、伊場遺跡が -2.0m 前後、鳥居松遺跡が川底溝埋没後の状況で -2.0m 前後である。鳥居松遺跡では 6 世紀後半に形成された川底溝が深く刻まれており、ごく短い期間、水流が激しかったとみられるが、その後は 3 地点において川底の高さの違いがほとんどみられない。伊場大溝における水流は緩やかで、常時は葦などの植物が繁茂する湿地状の景観であったとみられる。

埋没層位の年代観 今回の調査で確認できた埋没層位や各層位の年代観も、伊場遺跡や梶子遺跡で確認されたものとほとんど変わらない。その詳細は Fig.139 に示すとおりである。伊場遺跡におけるⅨ層や、梶子遺跡におけるⅨ層（両者のⅨ層は違う地層である）との対応関係では課題が残ったものの、Ⅷ層、Ⅶ層、Ⅵ層、Ⅴ層、Ⅳ層、Ⅲ層といった層位は伊場大溝にほぼ普遍的にみられる堆積層と判断できる。

今回の調査で確認した最古の堆積層はⅧ層である。同層中から出土する須恵器は TK208 型式期以降のものがほとんどであり、Ⅷ層の堆積開始期もほぼこの段階と捉えられる。梶子遺跡 9 次調査

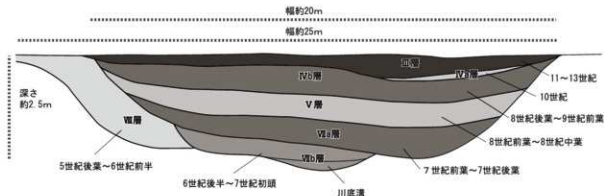


Fig.139 伊場大溝堆積状況模式図

における調査所見では、伊場大溝の形成時期が4世紀代に遡る可能性が示された。しかし、今回の調査結果からは、4世紀代の遺物は他所からの混入品と捉える方が妥当と考えられる。伊場大溝の形成時期は、Ⅶ層の堆積が始まる時期、すなわち古墳時代中期後葉（TK208型式期、5世紀後葉）と捉えておきたい。

Ⅶ層にかんしては、今回の調査において上下2層に分け、古い時期の堆積をⅦb層、新しい時期の堆積をⅦa層と呼んだ。出土遺物から、Ⅶb層の堆積開始は、遠江Ⅲ期中葉（TK43型式期、6世紀後半）、Ⅶa層の堆積開始時期は、遠江Ⅲ期末葉（飛鳥Ⅰ期後半、7世紀前葉）と想定できる。

V層の堆積期間は、遠江V期にほぼ併行する。8世紀前葉の2点の紀年銘木簡（鳥居松5号木簡：己酉年〈709〉、鳥居松3号木簡：神亀元年〈724〉）が相伴していることも整合的である。

続くⅣ層への移行時期については、遠江V期後葉頃と捉えられる。Ⅳ層も今回の調査において、Ⅳb層とⅣa層の上下2層に分けた。ただし、Ⅳa層は伊場大溝の岸沿いに薄く堆積しているのみで、Ⅳ層のほとんどはⅣb層に相当する。Ⅳb層の堆積は遠江V期に始まっているとみられるが、その中心的な時期は、遠江Ⅵ期、実年代では800年前後の数十年に相当する。「稲万呂」墨書土器が集中して出土したSX03の出土遺物が堆積年代を決める資料として重要である。「稲万呂」墨書土器は、遠江Ⅵ期とⅦ期にまたがり、墨書の筆跡にも新旧の違いが認められた。ただし、SX03から出土する遺物には高低差がなく、ほぼ同一層位面からの出土と判断できる。「稲万呂」墨書土器の時期差は、長期に見積もることはできないことを明記しておきたい。

伊場大溝の沿岸にわずかにみられるⅣa層の堆積時期は、平安時代中葉（10世紀）頃を中心とする。さらに上層のⅢ層からは年代の決め手となる出土遺物が全く出土せず、今回の調査結果からではその堆積年代を知ることができない。伊場遺跡や梶子遺跡の調査結果から、Ⅲ層の中心的な堆積年代は平安時代後葉から鎌倉時代前葉（11～13世紀）と想定しておく。

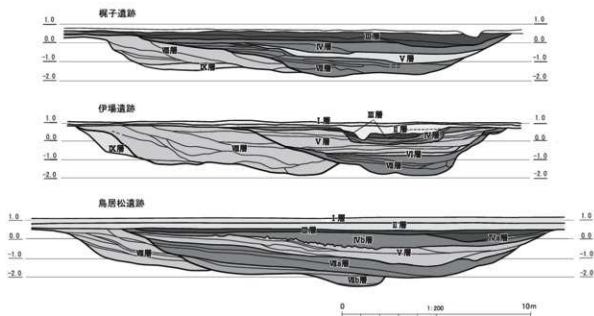


Fig.140 伊場大溝の土層断面比較

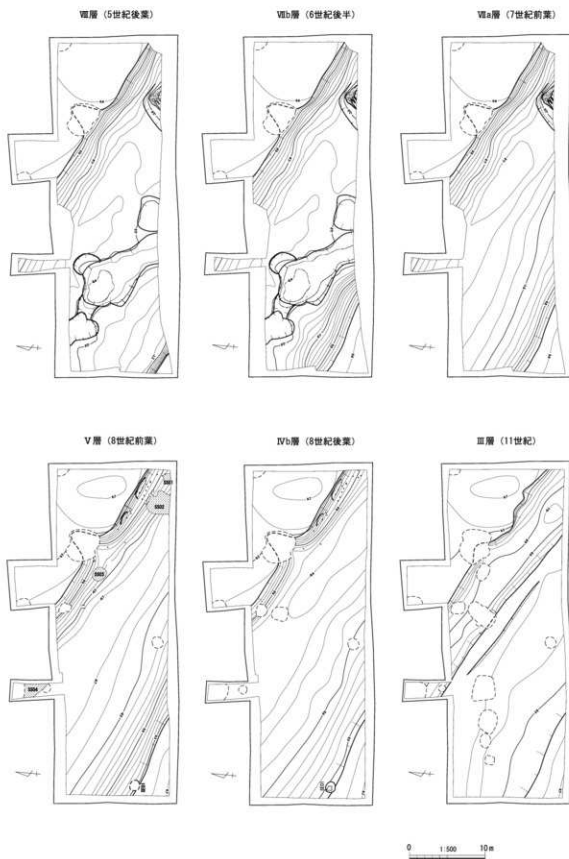


Fig.141 伊場大溝堆積状況の変遷

(3) 6・7世紀の鳥居松遺跡

生産用具 今回の調査ではFig.142に紹介するような手工業生産にかかわる遺物が出土している。これら生産用具は、主にⅦa層もしくはⅦb層から出土しており、6世紀後半から7世紀にわたり、近隣地域に手工業生産を行った工房があった可能性を示唆するものである。輪羽口や鉄鉢は鍛冶工房の存在をうかがわせるものとして注目できるだろう。また、漆が付着する土器も、漆を必要とする工房が並存していた可能性を示す遺物である。

ただし、こうした手工業生産工房の存在をうかがわせる遺物の出土量は限定的である。共存する他の生産用具には、土製紡錘車や木錘といった一般集落で用いられるものも認められ、手工業生産に特化した様相を見出すことは難しい。同一層位からは、木製農具や土錘なども出土していることも留意しなければならない。6世紀後半から7世紀にわたる鳥居松遺跡には、小規模な鍛冶を行いながら、農業や漁業を営んだ集落が展開していたことがうかがえる。

特殊遺物 出土遺物の多くから一般的な集落の存在がうかがえるいっぽうで、6・7世紀の埋没層からは、金銀装円頭大刀をはじめ、玉類や耳環などの装身具、銅製有孔円盤といった特殊な遺物が出土しており、その特異性も指摘できる。装飾大刀をはじめ玉類や耳環といった装身具は、古墳副

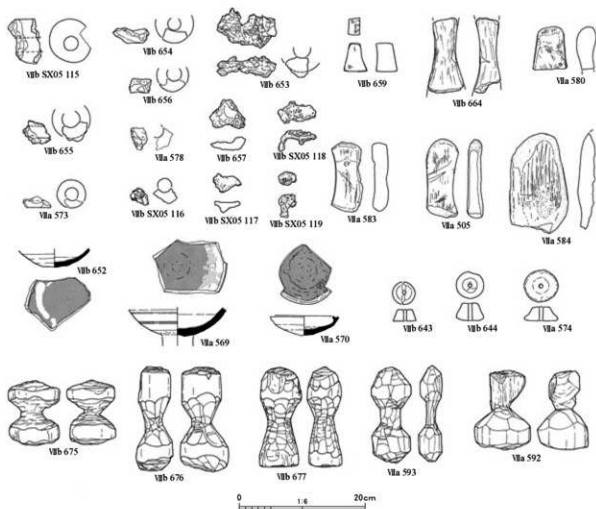


Fig.142 伊場大溝Ⅶ層出土生産用具

葬品と共通する。何らかの儀礼に伴い、古墳副葬品と共通する品目を伊場大溝に沈めたものと評価できる。耳環は梶子遺跡から3点、伊場遺跡からも3点出土しており、今回の調査で出土した2点を合わせて合計8点分を数えることになった (Fig.143)。東西1kmほど離れた地点で出土が確認できることから、伊場大溝に埋没する耳環の総数は相当数にのぼると推定できる。装飾大刀や耳環の出土は、6世紀後半から7世紀にかけて、鳥居松遺跡を含む伊場遺跡群が西遠江における中心地域のひとつになっていたことを雄弁に物語る。

VIIa層から出土した銅製有孔円盤 (Fig.144-1) も類例が少ない遺物として注目できる。直径6cmほどの円形をなし、4方向に2個一組の小円孔と中央に方形の孔がある。詳しい用途は不明であるが、法隆寺や東大寺正倉院に伝わる円形飾金具が形態的に類似している。これらの円形飾金具は金銅製で、布帛に糸を取り付けて飾ったものである。本例には金銅の痕跡はみられないが、轆などの装飾的な布に装着した飾金具である可能性が高い。銅製有孔円盤は出土層位から7世紀後半以降のものとみられ、初期官衙の形成に伴い、当地にもたらされた遺物と評価しておきたい。

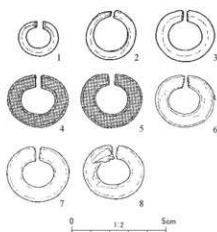


Fig.143 伊場大溝出土耳環

1～3：梶子9次 4～6：伊場 7-8：鳥居松5次

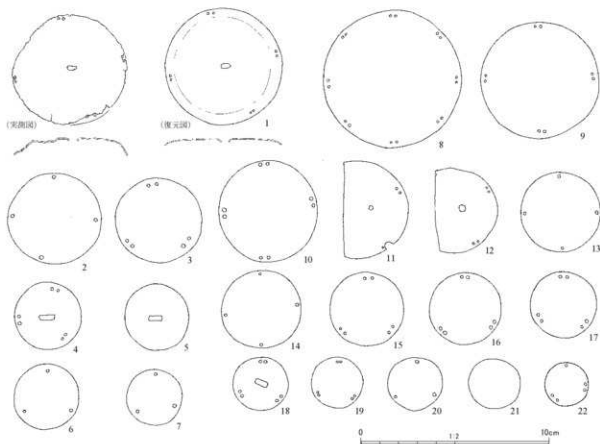


Fig.144 銅製有孔円盤と円形飾金具

1：鳥居松 2～7：正倉院 8～22：法隆寺

(4) 敷智郡家における鳥居松道跡の性格

伊場道跡群に敷智郡家が本格的に展開する奈良時代の様相は、鳥居松道跡の調査によって、より具体的に示せるようになった。ここでは、製塩土器、祭祀具、文字資料を取り上げ、比較検討しておきたい。

製塩土器 V層中で検出できた貝塚には製塩土器が含まれていた。とくに、SS02は製塩土器の集中が顕著で、報告では34点の口縁を図示した(Fig.74)。図示した個体以外にも口縁の破片数は数多く、未図化の破片数(80点)を含めると、口縁破片は114点を数える。製塩土器は、SS02のほかSS04からも出土している。このほか、出土位置が特定できない小破片(V層出土品)を含めると、今回の調査で出土した製塩土器の口縁破片数は145点にのぼる(Tab.9)。

製塩土器は、いずれも直径8cm程度の小型品で、形態や胎土の特徴から渥美半島から搬入されたものとみられる。精製された固形塩が製塩土器に入れられて渥美半島から運ばれたものと解釈できるだろう。今回の調査で出土した製塩土器は、口縁を中心とした坏部の破片のみで、棒状の脚部は全く確認できない。また、棒状脚を伴わないような底部の破片も見当たらなかった。鳥居松道跡で廃棄された製塩土器は坏部のみで、脚部は別の地域で取り外されていたとみられる。こうした製塩土器の遺存状態から、脚部を外した製塩土器に入ったまま、渥美半島から固形塩が運ばれたとい

Tab.9 製塩土器口縁点数

出土地点	図化点数	未図化点数	総数
SS02	34	80	114
SS04	4	19	23
V層	0	8	8
合計	38	107	145

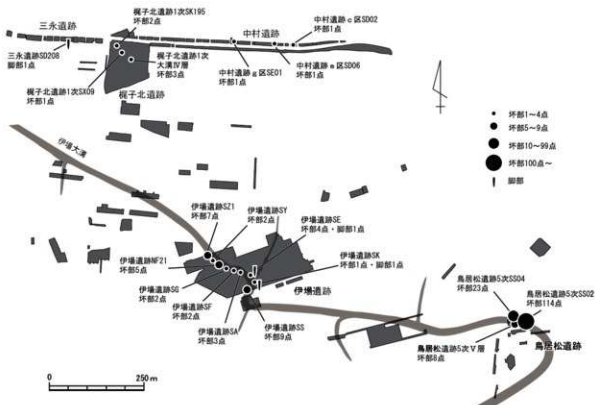


Fig.145 製塩土器出土量の比較

う運搬形態が復元できるだろう（森 1997、鈴木敏 2010）。

従来、伊場遺跡群から出土した製塩土器は、小さな破片を含めて公表され、検討が加えられてきたが（鈴木敏 2007、大林 2008）、図示された資料の総数は 50 点に満たない。同一基準による数量の比較は難しいが、鳥居松遺跡 SS02 における製塩土器の集中度は伊場遺跡群の中でも圧倒的に多い。鳥居松遺跡は推定される古代東海道に近接するだけでなく、後述するように、伊場大溝から潟湖、遠州灘へと繋がる海上交通の利便性もよい立地環境にある。伊場大溝の下流部にあたる鳥居松遺跡で大量の製塩土器が出土したことを考慮すると、渥美半島から固形塩が供給された運搬経路には、遠州灘を介した海上経路を想定することが妥当である。製塩土器の様相から、鳥居松遺跡には、陸上交通と海上交通の結節点として、港湾施設に程近い物資の集散拠点といった性格を読み取ることができるだろう。

祭祀具出土状態 伊場大溝からは、斎串、人形、馬形、舟形といった木製祭祀具に加え、人面墨書土器、土師器の雛形品、土馬、ト骨といった多岐にわたる祭祀具が出土した。また、伊場大溝から出土した馬骨も、祭祀に用いられたものが多かったと想定できる。これらの祭祀具の出土位置は VII a 層、V 層、IV b 層の各層にまたがり、形態的な変遷がうかがえる点で注目できる。

Fig.146 に各層位から出土した祭祀具の出土位置を示した。斎串をはじめとした祭祀具の多くが伊場大溝の岸沿いから出土している。祭祀具は北岸と南岸の双方に分布しており、伊場大溝の両岸が祭祀空間として満遍なく使用されていたことがうかがえる。また、伊場大溝の中央部は祭祀具の分布が希薄であることから、水際において祭祀が執り行われ、使用された祭祀用具はそのまま埋没していった経緯が読み取れるだろう。

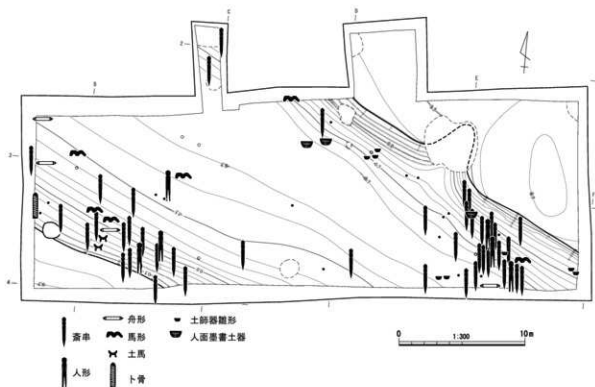


Fig.146 鳥居松遺跡における祭祀具の出土位置

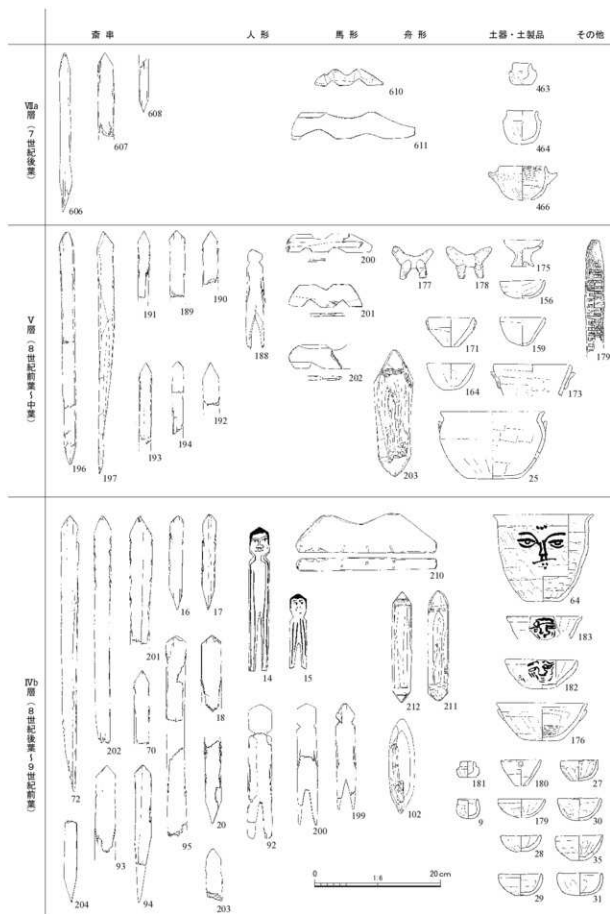


Fig.147 鳥居松道跡出土祭祀具の変遷

木製祭祀具の変遷 伊場遺跡群における木製祭祀具の基本組成は、斎串、人形、馬形、舟形である。このうち、形態の差異が大きい人形、馬形、舟形といった形代について、今回の調査で出土した資料を含めて形態分類を行い、その変遷について素描しておこう。

人形は頭部の形態と手足の有無による違いが認められる。Fig.148 に伊場遺跡群から出土した主要な人形を示す。伊場遺跡群から出土する人形は、Ⅰ類) 手の切り込みがあるもの、Ⅱ類) 手の切り込みがないもの、Ⅲ類) 足の表現がなく斎串状に尖るもの、といった3形態に分類できる。Ⅲ類は斎串と形態的に共通するので、人頭状の形態的表現もしくは、人面墨書によって人形と認定できるものである。なお、Ⅰ類は頭部の形態差に着目して、Ⅰa類) 頭部上端が山形であるもの、Ⅰb類) 頭部上端が直線的であるものといった細分が可能である(浜松市教委 2002, p28)。

人形は、形態的に丁寧なつくりとみられるⅠa類が基本形態で、手の切り込みがみられないⅡ類には後出の要素を認めてよい。鳥居松遺跡 SX01 で出土した人面墨書がある人形はいずれもⅡ類であり、出土層位(Ⅳb層)から、8世紀後葉から9世紀前葉に位置づけられる。Ⅱ類には大型品も認められるが、いずれも9世紀以降のものでⅡ類が新しい時期に出現したと捉える根拠になりうる。

伊場遺跡群から出土する馬形は、いずれも裸馬を表現したもので、鞍などの表現がみられないと

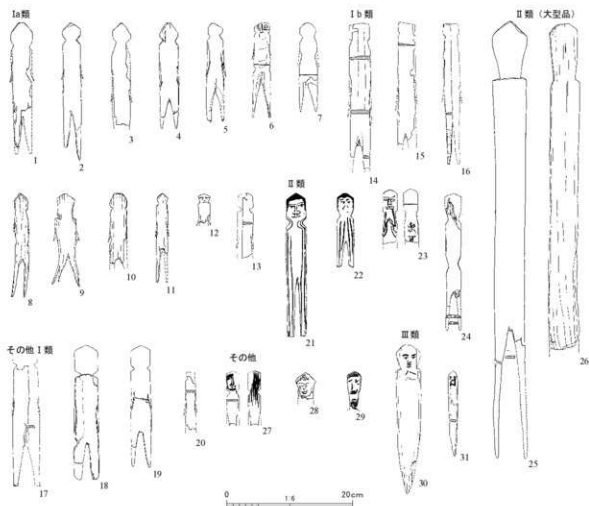


Fig.148 伊場遺跡群出土人形

1・6～17・20・23・26・27・29～31：伊場 2・3・24・25・28：梶子9次 4・5・18・19・21・22：鳥居松5次

いった特徴がある。これら馬形は、Ⅰ類) 背部に一箇所、腹部に二箇所の切り欠きがあり、尾を下げたもの(Ⅱ類) 背部に一箇所、腹部に二箇所の切り欠きがあり、尾を上げたもの、Ⅲ類) 背部に一箇所、腹部に一箇所の切り欠きがあり、尾を上げたもの(Ⅳ類) に分類ができる。このうち、Ⅰ類は、Ⅰa類) 尾が長く左右非対称のもの、Ⅰb類) 尾が短く左右対称のもの、といった細分ができる。鳥居松遺跡で出土したⅠa類の2点は、いずれも7世紀後葉のⅦb層から出土したものである。小型の1点は後頭部に切り込欠きをもち蛇のような形態をもつ。馬形は、Ⅰa類が古相を示し、全長が短く対称形のⅠb類が新出の形態と見なしうる。Ⅱ類、Ⅲ類についてはいずれも全長が短いものが主体であることから、Ⅰb類に併行する時期のものと捉えてよいだろう。Ⅰb類、Ⅱ類、Ⅲ類には腹部に孔もしくは切り込みを入れて支柱を挿入したことが多い。

鳥居松遺跡からは腹部に切り込みがなく、背部を二つの山形に表現した大型の馬形が出土した(Ⅳ類)(Fig.149-22)。腹部には棒状の4本足を挿入した痕跡と、支柱を立てた孔がみられる。Ⅰb類の腹部の切り欠きが無くなったものと捉えられるだろう。この個体は出土層位(Ⅳb層)から、8世紀後葉から9世紀前葉に位置づけられ、形態の省略傾向を読み取ることができる。

伊場遺跡群から出土する舟形は、形態差が顕著で従来から分類案が示されてきた(浜松市教委2002)。ここでは、船倉と船首・船尾との間にみられる造作に注目し、Ⅰ類) 船倉と船首・船尾の

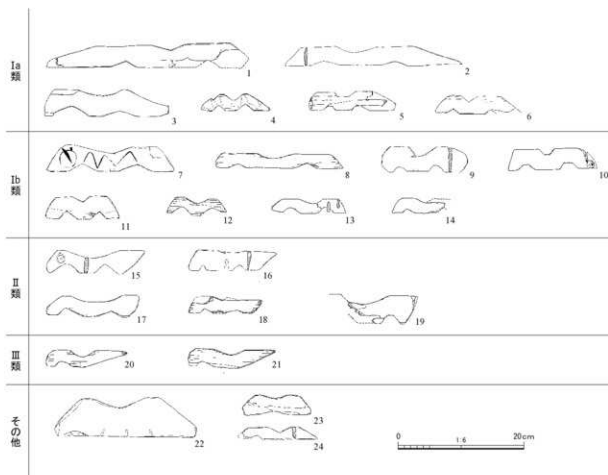
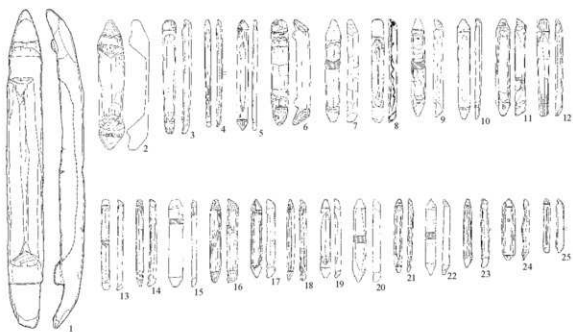


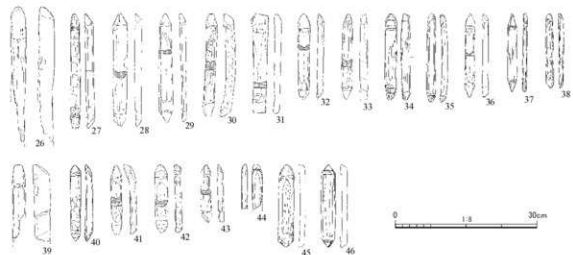
Fig.149 伊場遺跡群出土馬形

1-17-19-23: 梶子9次 2-7-9-12-15-16-18-20-21-24: 伊場 3-5-11-22: 鳥居松5次 6: 梶子11次 10-13-14: 梶子北1次

I類 (段差)



II類 (溝)



III類 (造作なし)

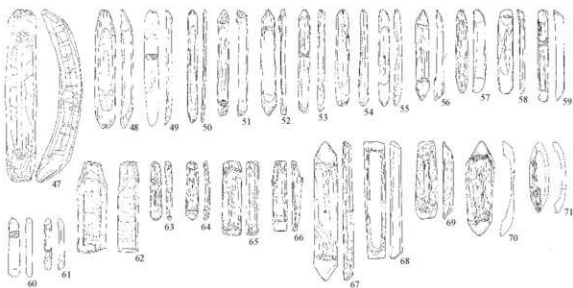


Fig.150 伊場遺跡群出土舟形

1・67: 梶子9次 2～44・47～66: 伊場 45・46・70・71: 鳥居松5次 68・69: 梶子北1次

間に段差が認められるもの、Ⅱ類) 船倉と船首・船尾の間を溝で区画するもの、Ⅲ類) 船倉と船首・船尾の間に特別な表現がみられないもの、の3種に分類しておきたい。Ⅰ・Ⅱ類とⅢ類は、象った舟(船)の構造が異なっていた可能性があり、必ずしも同一系譜に捉える必要はない。造形の省略傾向を認めるなら、Ⅰ類を古相、Ⅱ類を新相と評価しうる。鳥居松遺跡の調査では省略傾向が認められるⅡ類が、8世紀後葉から9世紀前葉に位置づけられるⅣb層から出土している。いっぽう、Ⅲ類については、Ⅰ・Ⅱ類から派生する形態を考慮する必要があるが、別系譜と捉えれば、Ⅰ・Ⅱ類と並存するとみて問題はない。今回の調査ではⅢ類の舟形が8世紀に位置づけられるⅤ層から出土している。

以上、木製祭祀具の変遷の傾向として、次の二点をあげることができる。一点目は形態の簡略化である。人形は手の切り込みがないものが8世紀後葉～9世紀前葉に多くみられる。馬形も頭部と尾部の区別がつけられないような左右対称化したものが新相を示し、全体形も新しい時期になるものほど短小化したものが多い。二点目は新しい時期にみられる大型品の存在である。形態上の簡略化は著しいものの、8世紀後葉～9世紀には人形や馬形に大型化したものがみられるようになる。

人面墨書遺物 今回の調査では人面墨書が施された人形が2点、人面墨書土器が3点出土した。いずれもⅣb層(8世紀後葉から9世紀前葉の堆積層)からの出土である。人面墨書の資料が集中して出土したことも、鳥居松遺跡の特長といえる。木製祭祀具の出土量も、調査面積と比較して多いことから、今回調査した位置は、伊場大溝の中でも比較的盛んに祭祀が行われた地点と評価できるだろう。

伊場遺跡群では、人面墨書がみられる人形が従来までに8点知られていた。今回の出土例によって、合計10点を数えることになった。今回出土した人面墨書付の人形は、斎串と組み合わせた使用状態がうかがえ(SX01)、遺存状態も良好な点で注目できる。

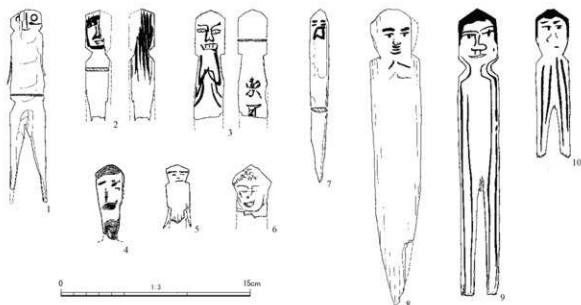


Fig.151 伊場遺跡群出土人面墨書人形

1～5・7・8：伊場 6：梶子9次 9・10：鳥居松5次

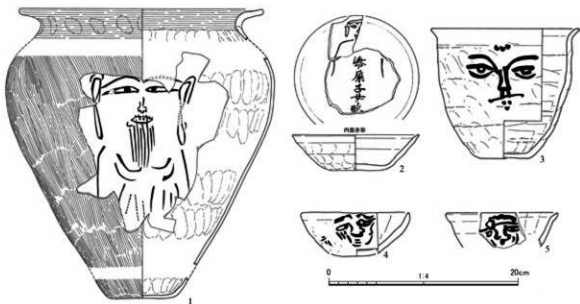


Fig.152 伊場遺跡群出土人面墨書土器

1: 梶子9次 2: 伊場 3~5: 鳥居松5次

いっぽう、伊場遺跡群における人面墨書土器は、従来までに2点知られており、今回の出土例で合計5点になった。土師器の小甕（Fig.152-3）は、「稲万呂」墨書土器が集中的に出土したSX03に含まれ、4点の斎串（Fig.93-68～71）と近接して出土した。これらの斎串と関連して用いられた可能性が考えられる資料である。

文字資料 鳥居松遺跡から出土した古代の文字関係資料は6点の木簡と19点の墨書土器がある。木簡はいずれもV層から出土したもので、8世紀前半代に位置づけられる。

従来、伊場遺跡群における木簡は177点（古代に限定）が知られていた（渡辺 2008）。鳥居松遺跡出土品を合わせて、伊場遺跡群の古代木簡は183点を数えることになった。

鳥居松遺跡から出土した木簡には2点の紀年銘木簡が含まれる点でも注目できる（Tab.10）。伊場遺跡群では今までに18点の紀年銘木簡が確認されていたが、今回の2点を加え、合計20点になった。20点の紀年銘木簡のうち、干支表記がなされたものが9点あるが、己酉年（709）が記された鳥居松5号木簡は干支表記の中で最も遅い事例である。

いっぽう、伊場遺跡群の墨書土器は、従来までに1024点が知られていた（山本 2008）。今回出土した19点を合わせ、伊場遺跡群の墨書土器は1043点になった。

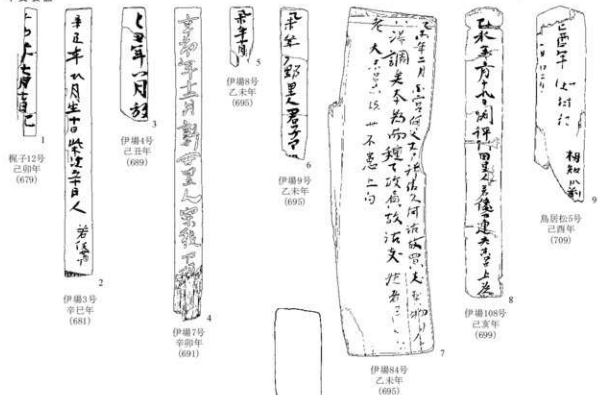
Tab.10 伊場遺跡群出土紀年銘木簡

番号	資料名	年紀	西暦	備考
1	梶子12号	(己卯年)	679	
2	伊場3号	辛巳年	681	顔稲数量
3	伊場4号	己丑年	689	放生関連
4	伊場7号	辛卯年	691	
5	伊場8号	乙未年	695	
6	伊場9号	乙未年	695	
7	伊場84号	乙未年	695	
8	伊場108号	己亥年	699	
9	鳥居松5号	己酉年	709	貸借記事
10	中村1号	和銅八年	715	出挙関連
11	伊場37号	(養老五年)	721	
12	鳥居松3号	神龜元年	724	糸貸年証文
13	伊場85号	神龜四年	727	人夫目録/召文か
14	城山27号	(神龜六年)	729	具注曆表1
15	城山10号	(天平四年)	732	
16	伊場30号	天平五年	733	
17	伊場31号	天平七年	735	
18	伊場32号	天平七年	735	
19	伊場33号	(天平七年)	735	
20	伊場77号	延長二年	925	題箋

(バーレン内で示した年紀は不確実な要素があることを示す)

※1 神龜六年の暦が記されており、年紀の記載はない。

干支表記



年号表記

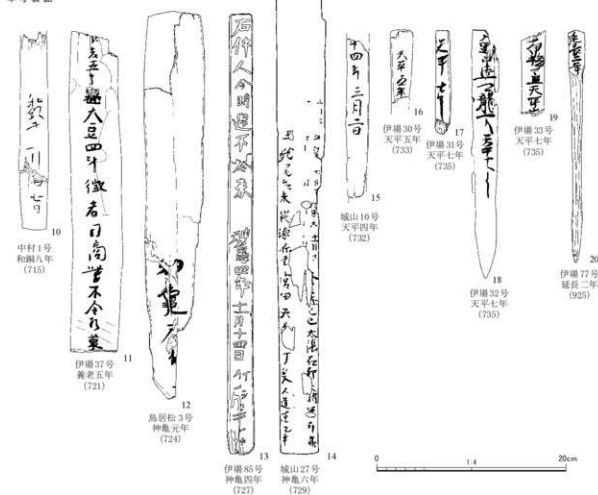


Fig.153 伊場道跡群出土紀年銘木簡

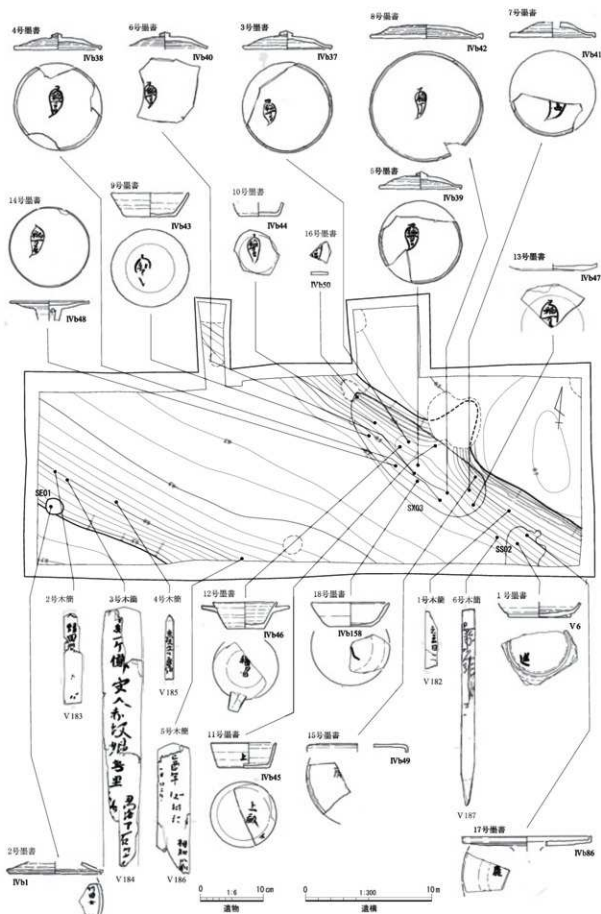


Fig.154 鳥居遺跡における古代文字資料出土位置

今回の調査では「稲万呂」墨書土器（その断片と推定できるものを含む）が11点集中して出土していることが注目できる（第3章5）。「稲万呂」墨書土器は過去の伊場遺跡群の調査で8点が知られていたが、その量を凌駕する出土量である。「稲万呂」墨書土器は、独特の初記号を伴う点でも、伊場遺跡群出土墨書土器の中では異彩を放っている。なお、初記号をもつ墨書土器は、19点の「稲万呂」のほか、「安万呂」が3点、「里麻呂」が1点、「□須□」が1点ある。

従来知られていた「稲万呂」墨書土器の出土地は、伊場遺跡群の広域に分散する傾向が認められ、稲万呂は数智郡家の広範囲にわたり影響力をもった人物と評価されていた。今回の調査で出土した「稲万呂」墨書は、従来認められていた遠江Ⅵ期の須恵器に加え、平頂蓋や双耳箱坏など遠江Ⅶ期に位置づけられる須恵器にもみられた。9世紀前半とみられる遠江Ⅶ期まで「稲万呂」墨書土器が残存していることが明確である。また、今回出土した11点の「稲万呂」墨書土器は、すべて伊場大溝の同一遺構 SX03 からの出土であり、従来の分散的な出土傾向とは大きく異なる。まとまった量の墨書土器が出土したことから、8世紀後半から9世紀前半にかけて数智郡家の中で勢力を誇った「稲万呂」の本拠地が鳥居松遺跡にある可能性が高いといえる。

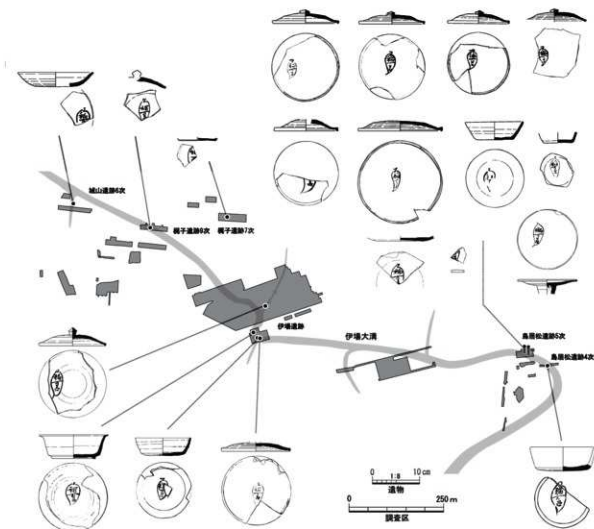


Fig.155 伊場遺跡群における「稲万呂」墨書土器の分布

(5) 結 語

伊場遺跡群の面的な発掘調査が進むにおよび、敷智郡家にかかわる諸施設の位置についても、具体的な復原案が示せるようになってきている（浜松市教委 2008）。奈良時代の政庁は、唐三彩や具注暦木簡などの希少品の集中と地形的な安定度から城山遺跡近辺に想定され、梶子北遺跡で検出された掘立柱建物群も平安時代の政庁もしくは館と捉える見方が有力である。これら郡家の中枢施設は伊場大溝の上流域に展開しており、伊場大溝の流路からはやや離れている傾向がある。いっぽう、伊場大溝を中心に建物群が展開している伊場遺跡は、郡家関連の雑舎群とみられ、豊富な文字資料から厨や栗原駅関連施設が置かれていた可能性が高いと判断できる。また、伊場遺跡の下流域にあたる九反田遺跡では、白鳳様式の軒丸瓦を含む古代瓦が比較的豊富に出土した。礎石を伴う瓦葺建物の存在が想定でき、郡寺が存在した可能性が示唆されている。

伊場大溝は鳥居松遺跡において、流れの方向を東から南西に変えている。下流の延長方向約 1km には、近世以降「沼田池」と呼ばれた沼地があり、伊場大溝が接続していた蓋然性が高い。沼田池は浜松南部に広がっていた潟湖の名残とみられ、この潟湖は馬込川（かつては天竜川の流路の一つ）を伝って遠州灘に繋がっている。

古代における潟湖の広がりとは不明確であるが、鳥居松遺跡の近辺まで船が遡行できたとみられる。伊場大溝は水量や規模から考えると、大型船が遡行することは困難である。大型船が停泊する港湾

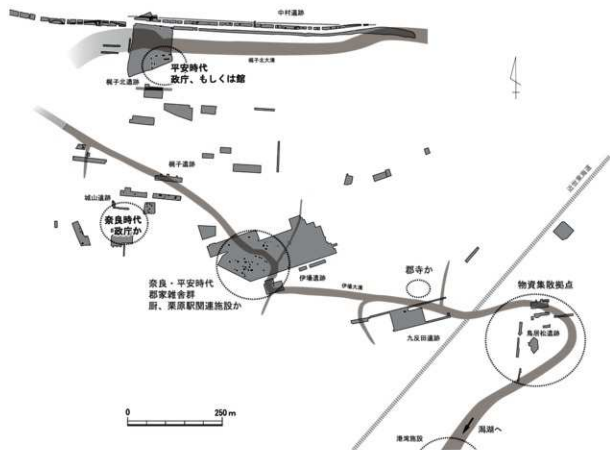


Fig.156 敷智郡家の機能想定図

施設は、鳥居松遺跡の南側にある潟湖の湖畔に存在すると考えてよい。外洋を行きかう物資は大型船から小舟に積み替え、伊場大溝を遡って敷智郡家の中枢部に運ばれたと想定できよう。

いっぽう、陸上交通の動脈である古代東海道との位置関係についても、伊場遺跡群の中では鳥居松遺跡が比較的近い位置にあったと推定できる。伊場遺跡群近辺における古代東海道の位置は必ずしも明確になっていないが、近世東海道は鳥居松遺跡の西脇をかすめている。陸上交通と海上交通の結節点という鳥居松遺跡の立地環境は、敷智郡家における物資の集散拠点として捉える視点を補強している。敷智郡家における有力者「稲万呂」がこの地に拠点を構えたのも、郡家にかかわる流通機能の掌握に主眼があったとみられよう。

【参考文献】

- 鈴木敏則 2007『伊場遺跡の貝塚と出土した考古遺物』『浜松市博物館報』第20号 浜松市博物館
 鈴木敏則 2010『静岡県内の製塩土器』『東海土器製塩研究』考古学フォーラム
 浜松市教育委員会 2008『伊場遺跡総括編』
 大林 元 2008『静岡県西部出土の古代製塩土器について』『静岡県考古学研究会』No.450 静岡県考古学会
 向坂潤二 1996『解説 伊場・城山遺跡の古代文字資料』『遠江』19号
 森 泰通 1997『東海地方における消費地出土の製塩土器—特に固形塩の問題をめぐる—』『製塩土器の諸問題—古代における塩の生産と流通—』塩の会シンポジウム実行委員会
 渡辺晃宏 2008『伊場遺跡群出土土器の再検討』『伊場遺跡総括編』浜松市教育委員会
 山本 崇 2008『伊場遺跡群出土土器の再検討』『伊場遺跡総括編』浜松市教育委員会

【伊場遺跡群主要発掘調査報告書】

- 可美村教育委員会 1978『浜名郡可美村城山遺跡範囲確認調査概報』（城山遺跡2次調査）
 可美村教育委員会 1981『城山遺跡発掘調査報告書』（城山遺跡3・4次調査）
 （財）浜松市文化協会 1991a『梶子遺跡Ⅶ』（梶子遺跡8次調査）
 （財）浜松市文化協会 1991b『梶子遺跡Ⅷ』（梶子遺跡9次調査）
 （財）浜松市文化協会 1993『城山遺跡Ⅴ』（城山遺跡5次調査）
 （財）浜松市文化協会 1997a『鳥居松遺跡』（鳥居松遺跡1次調査）
 （財）浜松市文化協会 1997b『城山遺跡Ⅵ』（城山遺跡6次調査）
 （財）浜松市文化協会 1997c『梶子北遺跡（遺物編）』（梶子北遺跡1次調査）
 （財）浜松市文化協会 1997d『梶子北遺跡（遺物編）』（梶子北遺跡1次調査）
 （財）浜松市文化協会 1997e『九反田遺跡』（九反田遺跡1次調査）
 （財）浜松市文化協会 2000a『鳥居松遺跡2』（鳥居松遺跡2次調査）
 （財）浜松市文化協会 2000b『城山遺跡Ⅶ』（城山遺跡7次調査）
 （財）浜松市文化協会 2002『鳥居松遺跡—3次調査—』
 （財）浜松市文化協会 2003a『鳥居松遺跡—4次調査—』
 （財）浜松市文化協会 2003b『龍東遺跡—2次調査—』
 （財）浜松市文化協会 2004『梶子遺跡Ⅹ』（梶子遺跡10次調査）
 （財）浜松市文化協会 2005『梶子北（三永）・中村遺跡—弥生時代編—』
 （財）浜松市文化振興財団 2006a『梶子北遺跡（三永地区）—古墳・奈良時代編—』（三永遺跡1次調査）
 （財）浜松市文化振興財団 2006b『中村遺跡—古墳・奈良時代編—』（中村遺跡1次調査）
 （財）浜松市文化振興財団 2008『梶子遺跡12次』
 （財）浜松市文化振興財団 2009a『鳥居松遺跡5次』（本書）
 （財）浜松市文化振興財団 2009b『鳥居松遺跡6次』
 浜松市遺跡調査会 1980『国鉄浜松工場内遺跡発掘調査報告書Ⅴ』（梶子遺跡5次調査）

浜松市道跡調査会	1983a	『国鉄浜松工場内（梶子）道跡第Ⅵ次発掘調査概報』（梶子道跡 6 次調査）
浜松市道跡調査会	1983b	『国鉄浜松工場内道跡第Ⅶ次発掘調査概報』（梶子道跡 7 次調査）
浜松市教育委員会	1976a	『伊場木簡』伊場道跡発掘調査報告書 第 1 冊
浜松市教育委員会	1976b	『国鉄浜松工場内発掘調査略報』（梶子道跡 1 次調査、非公式刊行物）
浜松市教育委員会	1977a	『伊場道跡遺物編』伊場道跡発掘調査報告書 第 2 冊
浜松市教育委員会	1977b	『国鉄浜松工場内道跡発掘調査概報Ⅱ』（梶子道跡 2 次調査）
浜松市教育委員会	1978a	『国鉄浜松工場内道跡発掘調査概報Ⅲ』（梶子道跡 3 次調査）
浜松市教育委員会	1978b	『伊場道跡遺物編 1』伊場道跡発掘調査報告書 第 3 冊
浜松市教育委員会	1979	『国鉄浜松工場内道跡発掘調査概報Ⅳ』（梶子道跡 4 次調査）
浜松市教育委員会	1980	『伊場道跡遺物編 2』伊場道跡発掘調査報告書 第 4 冊
浜松市教育委員会	1982	『伊場道跡遺物編 3』伊場道跡発掘調査報告書 第 5 冊
浜松市教育委員会	1987	『伊場道跡遺物編 4』伊場道跡発掘調査報告書 第 6 冊
浜松市教育委員会	1990	『伊場道跡遺物編 5』伊場道跡発掘調査報告書 第 7 冊
浜松市教育委員会	1994	『伊場道跡遺物編 6』伊場道跡発掘調査報告書 第 8 冊
浜松市教育委員会	1997	『伊場道跡遺物編 7』伊場道跡発掘調査報告書 第 9 冊
浜松市教育委員会	2002	『伊場道跡遺物編 8』伊場道跡発掘調査報告書 第 10 冊
浜松市教育委員会	2007	『伊場道跡補遺編』伊場道跡発掘調査報告書 第 11 冊
浜松市教育委員会	2008	『伊場道跡総括編』伊場道跡発掘調査報告書 第 12 冊

【図出典】

Fig.144 2～7：正倉院事務所 1997『正倉院寶物』9 南倉Ⅲ 毎日新聞社、8～22：法隆寺昭和資料編集委員会 1993『法隆寺の至宝』第 12 巻 小学館 より写真トレス
上記以外は各報告書より引用

第4章 総括

本書で報告した伊場大溝の調査結果は、古代敷智郡家とその前身にかかわる豊富な情報をもたらした。発掘調査と検出遺構や出土遺物の分析を通じて得られた成果は多岐にわたるが、さいごに報告の内容を要約するとともに、後論で明らかにされた内容を総合し、今後の展望を示したい。

1 発掘調査の成果

検出遺構 発掘調査で検出した伊場大溝は、幅 20m、深さ 2.5m 以上におよぶ。総延長 25m を底面まで確認した。伊場大溝は 5 世紀後葉に形成されたとみられる自然河川で、6 世紀から 9 世紀にかけての遺物を大量に含んでいる。伊場大溝の埋没層位を数段階に分けて調査し、各時代の様相を明確にした。なお、伊場大溝は 13 世紀頃には、水流を殆ど失い、土中に埋没したとみられる。

伊場大溝の各層からは、注目できる遺構がみられる。6 世紀後半の堆積層である VII b 層の底面では、大量の土器を伴う土器集積 SX05 を検出した。この土器集積の近隣には金銀装円頭大刀が出土している。8 世紀の堆積層である V 層中では、大溝の岸に貝塚を検出した。貝塚は北岸に 4 箇所(SS01～04)確認できた。とくに SS02 と SS04 は貝層が厚く、出土遺物も豊富である。8 世紀後葉～9 世紀前葉の堆積層である IV b 層中からは、「稲万呂」墨書土器が集中する土器集積 SX03 や、人面墨書がある人形が出土した祭祀遺構 SX01 などが検出された。

出土遺物 伊場大溝の各層から大量の遺物が出土した。土師器や須恵器とともに木器がまわって出土しており、6～9 世紀に至る充実した資料が得られた。

特筆できる出土遺物として、VII b 層（6 世紀後半）から出土した金銀装円頭大刀、V 層（8 世紀）から出土した 6 点の木簡、V 層、IV b 層、IV a 層の各層位（8 世紀～10 世紀）から出土した 19 点の墨書土器などがあげられる。

VII b 層および VII a 層（6 世紀後半～7 世紀）からは鉄滓や櫛羽口、漆が付着する土器片といった手工業生産にかかわる遺物や、玉類や耳環などの装身具、幡などの装飾的な布に装着したとみられる銅製有孔円盤が出土した。

V 層（8 世紀）中で検出できた貝塚 SS02 からは口縁破片で 114 点を数える大量の製塩土器が出土した。一つの遺構からの出土数としては周辺地域では群を抜いている。

VII a 層（上層）、V 層、IV b 層（7 世紀後葉～9 世紀初頭）からは祭祀用具が大量に出土した。この中には、人面墨書がある人形 2 点、人面墨書土器 3 点が含まれる。斎串、人形、馬形、舟形といった木製祭祀具は各層から出土し、形態の変遷がうかがえる貴重な事例を提供した。

動植物遺体等 伊場大溝の各層から豊富な動植物遺体が出土した。堆積土に含まれる花粉や珪藻に加え、V 層（8 世紀）の貝塚からは大量の貝類が出土したほか、馬骨や鹿角などの獣骨類もみられる。また、伊場大溝埋没時の環境を検討するため、堆積土に含まれる花粉や珪藻を検出した。

2 特筆すべきことがら

年代 伊場大溝の形成時期については、5世紀後葉と想定した。伊場大溝の堆積層中に含まれる木材の放射性炭素年代とも矛盾はない。ただし、放射性炭素年代を測定した資料はすべてⅦb層からの出土品である。厳密に伊場大溝の形成開始期を捉えるとするなら、最下層の堆積層であるⅦ層中に含まれる試料で測定すべきであろう。また、伊場大溝の基盤層（基本層位10層）からは天城カワゴ平テフラ（Kg）および大沢スコリア（Os）が検出できた。おおよそ3100～3200年前の堆積年代が想定できる。また、土壌の放射性炭素年代測定では、基盤砂層の上部に泥炭質土壌（基本層位14層）が堆積し始める年代は、約5600～4800年前という分析結果を得た〔第3章1〕。この分析結果は、第3砂洲の形成が5000年前以前に遡ることを示すもので、梶子遺跡で確認できた第1砂洲の形成年代（6000年前以前）とも矛盾しない〔第3章2〕。

古環境分析 鳥居松遺跡にかかわる古環境の情報を得るため、貝類、動物骨、堆積土を対象に、同定・分析を行った。堆積土については、花粉および珪藻の分析を実施した。

貝類は奈良時代の貝塚（SS01・02・04）から出土したもので、全体の80%がヤマトシジミとダンベイキサゴで占められていた。ダンベイキサゴが遠州灘から運ばれたとみられるほか、その他多くの貝類は遺跡近隣で採集されたものと判断される。また、堆積土中に含まれる花粉・珪藻の分析からは、貝塚SS01・SS02は比較的水が流れる環境に、SS04は滞水した環境に形成されたことが明らかにされた。

伊場大溝の堆積土からは、比較的豊富な動物骨が確認できた。動物骨はウマが多く、頭骨のみが出土する場合も認められた。伊場大溝近辺でウマを屠殺する儀礼が頻繁に行われたことが判明する。

伊場大溝の堆積土中に含まれる花粉・珪藻分析によって、Kgが降下した3100～3200年前から13世紀に至る鳥居松遺跡の古環境が復元された。分析結果からは、鳥居松遺跡は湿地性の環境が続いていたと判断できるが、時代の変化による微妙な植生の変化が指摘できる〔第3章3〕。

木簡 伊場大溝から6点の木簡が出土した。この中には2点の紀年銘木簡（3号木簡：神亀元年（724年）、5号木簡：己酉年（709年））が含まれる。伊場遺跡群で多数みられる「サト名+人名」の木簡（4号木簡、6号木簡も可能性あり）が含まれ、鳥居松遺跡が伊場遺跡群と同一空間に立地していることが明確になった。また、糸の賃借を示す3号木簡の内容から、郡家が繊維製品の生産管理に関与していたことが読み取れた。さらに、5号木簡の内容から、8世紀初頭に郡家が賃借関係に関与していた可能性が示された〔第3章4〕。

墨書土器 伊場大溝から19点の墨書土器が出土した。このうち11点が「稲万呂」墨書土器（その断片と推定できるものを含む）であり、従来、伊場遺跡群から出土が知られていた数量（8点）を上回った。合計19点となった「稲万呂」墨書土器の出土範囲は、上流の城山遺跡から、下流の鳥居松遺跡まで1.5kmにわたり、墨書の年代は8世紀後葉から9世紀前葉におよぶ。11点というまとまった出土量から、鳥居松遺跡が、郡司もしくは郡雑任級の有力者とみられる稲万呂の本拠地である可能性が高くなった〔第3章5〕。

円頭大刀 6世紀後半の堆積層から出土した金銀装円頭大刀は国内で類例を求めることが難しい希少品である。自然河川に鞘から抜いた装飾大刀を沈めるという儀礼行為が明らかにされた意義は大きい。また、柄頭と柄間の特徴から、この大刀は朝鮮半島で製作された可能性が高いことが指摘できた。装飾大刀を入手し、自然河川に沈める儀礼を行った人物には、相当の有力者が想定できる。この大刀の出土によって、従来その様相が不明瞭であった6世紀後半段階の当地に、有力者が権勢を誇っていたといえるようになった。6世紀後半における有力者の存在は、後に敷智郡家が置かれることと関連づけることもできる〔第3分冊、円頭大刀編〕。

製塩土器 伊場大溝内の8世紀前葉～中葉の貝塚SS02からは、当地では希少な製塩土器がまとまって出土した。坏部口縁破片数では、114点を数え、伊場遺跡群における出土量としては圧倒的に多い。製塩土器はいずれも渥美半島から搬入されたものと考えられる。出土した製塩土器は坏部ばかりで脚部が全くみられないことから、製塩土器を運搬容器として、固形塩が供給されたと捉えてよい。製塩土器の圧倒的な出土量からは、鳥居松遺跡が物資の集散拠点であったことを読み取ることができる〔第3章6〕。

祭祀具 伊場大溝内のⅦb層（7世紀後葉）、Ⅴ層（8世紀前葉～中葉）、Ⅳb層（8世紀後葉～9世紀前葉）の各層から祭祀具がまとまって出土した。とくに、8世紀後葉～9世紀前葉の資料が充実しており、人面墨書がある人形が2点、人面墨書土器が3点含まれる。伊場遺跡群出土品のうち、人面墨書がみられる資料は、人形が10点、土器が5点を数えることになった。上下3層にわたる祭祀具の資料は、従来曖昧であった木製祭祀具（人形、馬形、舟形）の形態変遷を探る上でも貴重である〔第3章6〕。

鳥居松遺跡の性格 鳥居松遺跡は推定される古代東海道に近接するだけでなく、伊場大溝から潟湖を介して遠州灘へと繋がる海上交通の利便性もよい立地環境にある。製塩土器の大量出土が伝えるように、鳥居松遺跡には、陸上交通と海上交通の結節点として、港湾施設に程近い物資の集散拠点といった性格を読み取ることができる。敷智郡家における有力者「稻万呂」がこの地に拠点を構えたのも、敷智郡家にかかわる流通機能の掌握に主眼があったとみられる〔第3章6〕。

3 今後の展望

鳥居松遺跡の調査では、伊場大溝の下流部分を全面調査し、この地まで敷智郡家の施設が広がっていることが明らかになった。郡家関連施設は上流の城山、梶子、梶子北遺跡から中間の伊場遺跡を挟んで、下流の鳥居松遺跡に至る東西1.5kmの広範囲におよぶことが確実にになった。

郡家関連の諸施設の性格についても、伊場大溝の流路を中心に、具体性を帯びるようになっていく。奈良時代の政庁は、唐三彩などの希少品の集中と地形的な安定度から城山遺跡近辺に想定され、梶子北遺跡で検出された掘立柱建物群も平安時代の政庁もしくは館と捉える見方が有力である。これら郡家の中枢施設は伊場大溝の上流域に展開しており、伊場大溝の流路からはやや離れている傾向がある。

いっぽう、伊場大溝を中心に建物群が展開している伊場遺跡は、郡家関連の雑倉群とみられ、豊

富な文字資料から厩や栗原駅関連施設が置かれていた可能性が高いと評価されている。さらに、今回調査した鳥居松遺跡は、建物群などの遺構が確認できなかったものの、出土遺物と立地環境から、港湾施設に程近い物資の集散拠点という性格が導き出せた。墨書土器にその存在が確認できる稲万呂は、奈良時代の終り頃から平安時代のはじめ頃にかけて鳥居松遺跡に本拠をおき、敷智郡家内の物資流通にも深くかかわった有力人物とみなせるようになった。

今後は、継続的な調査によって、上述したような郡家諸施設の役割の違いを高い精度で把握していく作業が求められる。また、敷智郡家の近隣にあったと想定されている古代東海道の位置についても検討する必要がある。伊場遺跡に関連が見出せる栗原駅も、正確な所在地が不明確であり、古代交通路にかかわる課題は多い。

伊場大溝は鳥居松遺跡を南北に貫き、さらに下流に至っている。現在までのところ、鳥居松遺跡2次調査によって確認された地点が伊場大溝の最も下流の部分である。この調査地点においても、古代の貝塚や墨書土器が確認されており、敷智郡家関連施設が展開していることが明らかである。

今後の調査によって、伊場大溝の流路を正確に位置づけると共に、伊場大溝の下流域のどの程度の範囲まで古代の遺構群が展開しているか把握する必要がある。同時に、本書でその存在を強調した潟湖畔における港湾施設の検出にも期待したい。

【謝 辞】

本書の作成にあたり、以下の方々のご協力、ご教示を得た。その名を記して謝意を表したい。

井鍋啓之、大谷宏治、川江秀孝、田村隆太郎、鶴間正昭、早野浩二、土生田純之、平野吾郎、広瀬和雄、松井一明、丸杉俊一郎、向坂鋼二、森泰通

出土遺物観察表

凡 例

出土遺物のうち、木製品以外の遺物は種別にかかわらず pp.198 ～ 218 に示す

木製品については、pp.219 ～ 220 に示す

残存率：％表示、10％単位での切り上げ

反転：「反」は反転して図化したもの

大きさの単位はcm

回転体以外の大きさ表示 器径：長さ 器高：幅 口径：厚み

ケズリ方向は、砂粒の移動方向を示す 右：右回転、左：左回転

色調：『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠

「SD01」は伊場大溝内の各堆積層からの出土であることを示す

木製品処理 含浸：高級アルコール含浸 乾燥：自然乾燥

出土遺物観察表

Fig	部位	番号	取上番号	遺構	グッド	種類	説明	発見年	反転	属性	高さ	口径	色調	備考
9	甕	1	1807	S001	A3	須恵焼	坏蓋	20	反	12.8	13	灰	TK208, 11°方向右	
9	甕	2	1807	S001	A3	須恵焼	坏蓋	30	反	11.2		灰	TK23, 外面自然釉	
9	甕	3	1807	S001	A3	土師器	罐	30	反	12.8		12.6	緑	
9	甕	4	1807	S001	A3	土師器	罐	40	反	15.4	6.0		透黄緑	
9	甕	5	1807	S001	A3	土師器	高坏	20	反	17.2			にぶい黄	
9	甕	6	1807	S001	A3	土師器	高坏	30					緑	銅線文 3.3, 銅線 8.6
9	甕	7	1807	S001	A3	土師器	直口甕	10	反		10.2	にぶい黄	銅線 5.7	
9	甕	8	1070	S001	B2	土師器	<字甕>	5			17.7	緑	龍東渡	
9	甕	9	1807	S001	A3	土師器	甕	5	反				黄緑	
9	甕	10	1807	S001	A3	土師器	甕	10	反		15.2	にぶい黄		
13	甕b	1	1817	S001	A2	弥生土器	外反口縁倉	10	反		17.6	灰白	銅線 9.2	
13	甕b	2	1817	S001	A2	弥生土器	外反口縁倉	10	反		15.0	にぶい黄緑		
13	甕b	3	1046	S001	B3	弥生土器	外反口縁倉	10	反		13.0	透黄緑	銅線 8.8	
13	甕b	4	1415	SX05	C3	弥生土器	外反口縁倉	10	反		19.0	にぶい黄		
13	甕b	5	1338	SX05	C3	弥生土器	外反口縁倉	10	反		14.0	にぶい黄緑		
13	甕b	6	1039	S001	C3	弥生土器	折底口縁倉	10	反		15.8	透黄緑	銅線 8.6	
13	甕b	7	1643	S001	B3	弥生土器	折底口縁倉	10	反		17.0	にぶい黄緑	銅線 8.7	
13	甕b	8	1858	S001	A2	弥生土器	複合口縁倉	10	反		15.8	棒状浮文 2×方向不明		
13	甕b	9	45	S001	E3	弥生土器	外反口縁倉	20			14.5	にぶい黄緑	銅線 9.5, 無彫線刻, 菊川式	
13	甕b	10	1686	S001	C2	弥生土器	折底口縁倉	10	反		21.8	にぶい黄	銅線 9.5, 菊川式	
13	甕b	11	1147	S001	C2	弥生土器	甕	5				透黄緑	円形浮文・棒状工具による刺突, 南園系	
13	甕b	12	483	S001	B2	弥生土器	甕	95		13.4 10.7	5.5	にぶい黄		
13	甕b	13	745	S001	E3	弥生土器	外反口縁倉	70		13.4 16.7	9.7	にぶい黄緑	銅線 7.8, 透緑 5.1	
13	甕b	14	1818	S001	A2	弥生土器	鉢	10	反	25.0	22.0	緑		
13	甕b	15	1841	S001	D3	弥生土器	高坏	10	反		19.4	透黄緑		
13	甕b	16	1855	S001	A2	弥生土器	高坏	10	反		24.0	緑		
13	甕b	17	691	S001	C2	弥生土器	高坏	50			22.0	緑		
13	甕b	18	1584	S001	C3	弥生土器	高坏	40				透緑	銅線 4.3, 銅線 15.1, 23/3 方向	
13	甕b	19	1254	S001	C3	弥生土器	高坏	30				透黄緑	銅線 4.4, 銅線 14.8, 23/3 方向	
13	甕b	20	1048	S001	B3	弥生土器	高坏	60				にぶい黄緑	銅線 4.5, 銅線 11.6	
13	甕b	21	1928	S001	D3	弥生土器	高坏	20				にぶい赤緑	銅線 10.4, 23/4 方向	
13	甕b	22	1950	S001	A2	弥生土器	高坏	10	反			赤緑	銅線 2.4, 銅線 10.4, 23/3 方向	
14	甕b	23	624	S001	B2	弥生土器	小型甕	20	反	10.6	8.8	赤緑	銅線 7.6	
14	甕b	24	653	S001	B3	弥生土器	小型甕	80		11.4		赤緑	銅線 6.3, 透緑 4.2	
14	甕b	25	1899	S001	E3	弥生土器	小型直口鉢	80	反	9.2	8.0	透黄緑	銅線 6.8, 透緑 4.6	
14	甕b	26	1904	S001	B3	弥生土器	甕蓋	60		5.9	6.2	灰白		
14	甕b	27	1300	SX05	C3	弥生土器	小型直口鉢	70		8.3		緑	銅線 7.2, 透緑 8.0	
14	甕b	28	1342	SX05	C3	弥生土器	<字甕>	5				にぶい黄緑	口縁刺突	
14	甕b	29	1341	SX05	C3	弥生土器	甕	10	反			灰白	銅線 4.2	
14	甕b	30	1362	SX05	C3	弥生土器	甕	20	反			透黄緑	銅線 4.6, 透緑 7.2	
14	甕b	31	640	S001	B3	弥生土器	受口甕	10	反		18.0	透黄緑	銅線 15.6, 口縁刺突・変形銅線	
14	甕b	32	991	S001	B3	弥生土器	受口甕	10	反		20.0	透黄緑	銅線 17.4, 口縁無刺突・327°	
14	甕b	33	1006	S001	B3	弥生土器	受口甕	10	反		22.0	灰白	銅線無刺突・327°	
14	甕b	34	1176	S001	C3	弥生土器	受口甕	10	反		24.0	にぶい黄	銅線刺突・317°	
14	甕b	35	991	S001	B3	弥生土器	S字甕	10	反		16.0	透黄	S字甕A類, 押引き	
14	甕b	36	584	S001	B2	土師器	S字甕	10	反		15.6	黄緑	S字甕B類	
14	甕b	37	1261	S001	D2	土師器	S字甕	10	反		18.0	にぶい黄	S字甕B類	
14	甕b	38	1563	S001	C3	土師器	S字甕	10	反		18.7	灰白	S字甕B類	
14	甕b	39	1946	S001	C3	土師器	S字甕	10	反		13.6	透緑	S字甕C類	
14	甕b	40	114	S001	C2	土師器	S字甕	10	反		14.2	にぶい黄	S字甕C類	
14	甕b	41	1943	S001	C3	土師器	S字甕	10	反		15.1	にぶい黄緑	S字甕C類	
14	甕b	42	979	S001	B3	土師器	S字甕	10	反		14.0	明黄緑	S字甕C類	
14	甕b	43	446	S001	B3	土師器	S字甕	10	反		17.0	透黄緑	S字甕C類	
14	甕b	44	452	S001	A2	土師器	S字甕	10	反		16.2	灰白	S字甕C類	
14	甕b	45	539	S001	B3	土師器	S字甕	10	反		17.2	透黄緑	S字甕C類	
14	甕b	46	482	S001	B3	土師器	S字甕	10	反		18.0	緑灰	S字甕C類	
14	甕b	47	565	S001	B2	土師器	S字甕	10	反		19.0	透黄緑	S字甕C類(新)	
14	甕b	48	980	S001	B3	土師器	S字甕	20				灰黄緑	銅線 4.4, 透緑 9.6	
14	甕b	49	1052	S001	B3	土師器	扁平片万寿			6.1 9.4	2.4	238.56, 347°		
14	甕b	50	1857	S001	A2	青銅器	銅線			1.0 5.3	0.4	13.6g, 蓋打		
19	甕b	1	1374	SX05	C3	須恵焼	坏蓋	30	反	14.0 3.9	14.0	灰	MT15, 11°方向右	
19	甕b	2	1339	SX05	C3	須恵焼	坏蓋	5	反	15.0		黄灰		
19	甕b	3	1359	SX05	C3	須恵焼	坏蓋	10	反	14.2 5.4	13.2	灰白		
19	甕b	4	1345	SX05	C3	須恵焼	坏蓋	20	反	14.0		灰白	11°方向左	
19	甕b	5	1322	SX05	C3	須恵焼	坏蓋	10	反	14.0		灰		
19	甕b	6	1335	SX05	C3	須恵焼	坏蓋	40	反	14.0 4.7		灰	11°方向右	
19	甕b	7	1364	SX05	C3	須恵焼	坏蓋	80	反	13.2 4.3	13.0	黄灰	11°方向左	
19	甕b	8	1498	SX05	C3	須恵焼	坏蓋	50	反	13.0		灰	11°方向左	
19	甕b	9	1448	SX05	C3	須恵焼	坏蓋	100	反	14.0 4.3		灰	11°方向左	
19	甕b	10	1334	SX05	C3	須恵焼	坏蓋	70	反	14.4 3.8		灰	11°方向右	
19	甕b	11	1389	SX05	C3	須恵焼	坏蓋	20	反	13.2		灰	11°方向右	
19	甕b	12	1418	SX05	C3	須恵焼	坏蓋	10	反					
19	甕b	13	487・1405	SX05	C3	須恵焼	坏蓋	80		14.3 3.8	14.0	灰	11°方向左	
19	甕b	14	1351	SX05	C3	須恵焼	坏蓋	90	反	14.0 4.6		灰	11°方向左・45°斜角	
19	甕b	15	1321	SX05	C3	須恵焼	坏蓋	10	反	14.0 4.6		灰		
19	甕b	16	1315	SX05	C3	須恵焼	坏蓋	30	反	13.8 3.3		黄灰	11°方向左	
19	甕b	17	1406	SX05	C3	須恵焼	坏蓋	30	反	14.0 4.2		灰	11°方向左	
19	甕b	18	1484	SX05	C3	須恵焼	坏蓋	70	反	15.0 4.6	12.6	灰黄	11°方向右	
19	甕b	19	1316	SX05	C3	須恵焼	坏蓋	70	反	15.0 4.4	12.8	灰	11°方向左・45°斜角	
19	甕b	20	1472	SX05	C3	須恵焼	坏蓋	40	反	17.6 4.4	15.2	灰	11°方向右	
19	甕b	21	1400	SX05	C3	須恵焼	坏蓋	70	反	16.6 4.0	14.0	灰	透黄緑調整	
19	甕b	22	1470	SX05	C3	須恵焼	坏蓋	70	反	18.2	13.8	灰	11°方向右・外面自然釉	
19	甕b	23	1372	SX05	C3	須恵焼	坏蓋	10	反	16.0	14.0	灰		
19	甕b	24	1358	SX05	C3	須恵焼	坏蓋	20	反	16.0	13.0	灰		

Fig	図位	番号	取上番号	遺構	グリッド	種類	説明	形状	長さ	幅	厚	底	口	色	備考	
19	遺	25	1363	SK05	C3	遺棄物	坪身	60	反	16.0	4.6	14.6		灰白	Y2 1方向左	
19	遺	26	1360	SK05	C3	遺棄物	坪身	50		15.6	4.6	13.0		灰白	Y2 1方向左	
19	遺	27	1324	SK05	C3	遺棄物	坪身	30	反	15.6	3.9	13.1		灰		
19	遺	28	1372	SK05	C3	遺棄物	坪身	30	反	15.4	4.1	13.0		灰		
19	遺	29	1384	SK05	C3	遺棄物	坪身	70		15.3	3.8	12.7		灰	Y2 1方向左、45°斜角	
19	遺	30	1416	SK05	C3	遺棄物	坪身	20	反	15.2	12.0			灰		
19	遺	31	1403	SK05	C3	遺棄物	坪身	30	反	15.2	12.6			灰白	Y2 1方向左	
19	遺	32	1416	SK05	C3	遺棄物	坪身	40	反	15.0	4.0	13.0		灰白	Y2 1方向左	
19	遺	33	1340	SK05	C3	遺棄物	坪身	10	反	15.0	5.4	13.5		灰白	Y2 1方向左	
19	遺	34	1310	SK05	C3	遺棄物	坪身	60		15.0	4.9	13.0		灰		
19	遺	35	1461	SK05	C3	遺棄物	坪身	40	反	15.0	13.0			灰	Y2 1方向左	
19	遺	36	1481	SK05	C3	遺棄物	坪身	40		14.8	4.1	12.6		灰白	Y2 1方向左	
19	遺	37	1395	SK05	C3	遺棄物	坪身	60		14.4	4.1	11.8		灰	Y2 1方向右	
19	遺	38	1333	SK05	C3	遺棄物	坪身	66		14.3	4.0	12.2		灰	Y2 1方向左、自然融	
19	遺	39	1332	SK05	C3	遺棄物	坪身	60		14.3	3.4	11.5		灰	未調査	
19	遺	40	1344	SK05	C3	遺棄物	坪身	20	反	14.0				灰赤		
19	遺	41	1397	SK05	C3	遺棄物	坪身	100		13.9	4.5	11.6		灰	Y2 1方向左、45°の傾斜	
19	遺	42	1312	SK05	C3	遺棄物	坪身	5	反	14.0	3.4	12.1		灰	Y2 1方向右	
19	遺	43	1483	SK05	C3	遺棄物	坪身	40	反	13.6	4.5	11.5		灰	Y2 1方向左、45°斜角、	
19	遺	44	1412	SK05	C3	遺棄物	坪身	10	反	13.2		11.4		黄	自然融	
19	遺	45	1318	SK05	C3	遺棄物	高坪蓋	10	反	15.0	3.6			灰	Y2 1方向左、幅12×3.4 スリット入り込み板	
19	遺	46	1403	SK05	C3	遺棄物	無蓋高坪	40	反	12.6				暗灰		
19	遺	47	1411	SK05	C3	遺棄物	無蓋高坪	40		11.9	12.8			暗灰	幅11.8、スリット3段3方向、全面自然融	
19	遺	48	1412	SK05	C3	遺棄物	鉢	30	反					灰	白	
19	遺	49	1474	SK05	C3	遺棄物	壺	5						灰		
20	遺	50	1311	SK05	C3	土師器	罐	80		13.3	4.8				緑	
20	遺	51	1486	SK05	C3	土師器	罐	60		16.2	5.1			明赤釉	全面赤釉	
20	遺	52	1317	SK05	C3	土師器	罐	50	反	10.9	5.3			にぶい黄緑	未調査	
20	遺	53	1357	SK05	C3	土師器	罐	50	反	14.4	5.3			にぶい黄緑	底径 5.0	
20	遺	54	1471	SK05	C3	土師器	罐	50		13.0	5.5			黄緑釉		
20	遺	55	1469	SK05	C3	土師器	鉢	70		19.6	11.3			黄緑	底径 6.4	
20	遺	56	1312	SK05	C3	土師器	把平付鉢	40	反	13.3	8.0			緑	木蓋板	
20	遺	57	1502	SK05	C3	土師器	碗	30		6.4				にぶい黄		
20	遺	58	1548	SK05	C3	土師器	高坪	50	反	15.6	10.5			緑	脚径2.8、脚径 8.6	
20	遺	59	1503	SK05	B3	土師器	有縁杯部高坪	70		16.6	11.0			緑	脚径3.6、脚径 10.4	
20	遺	60	1481	SK05	C3	土師器	高坪	20	反	15.6				にぶい赤緑		
20	遺	61	1343	SK05	C3	土師器	高坪	20						黄赤釉	脚径 8.8、外面赤釉	
20	遺	62	1484	SK05	C3	土師器	高坪	50						にぶい黄緑	脚径3.3、脚径 9.2	
20	遺	63	1503	SK05	C3	土師器	高坪	40						にぶい黄緑	脚径3.5	
20	遺	64	1484	SK05	C3	土師器	高坪	40						緑	脚径3.2、脚径 9.6	
20	遺	65	1329	SK05	C3	土師器	高坪	20						にぶい黄緑	脚径2.9、脚径 10.0	
20	遺	66	1501	SK05	C3	土師器	高坪	40						にぶい黄	脚径4.1、脚径 10.6	
20	遺	67	1327	SK05	C3	土師器	高坪	30						黄	脚径4.9、脚径 10.8	
20	遺	68	1391	SK05	C3	土師器	長脚高坪	10	反		12.0			にぶい黄		
20	遺	69	1499	SK05	C3	土師器	長脚高坪	10	反		15.0			黄緑		
20	遺	70	1484	SK05	C3	土師器	長脚高坪	10			16.0			にぶい黄緑		
20	遺	71	1371	SK05	C3	土師器	長脚高坪	30	反					灰黄	脚径3.6	
20	遺	72	1356	SK05	C3	土師器	長脚高坪	20						灰白	脚径4.4	
20	遺	73	1349	SK05	C3	土師器	鉢形杯部高坪	50	反	12.0	9.0			黄緑	脚径4.0、脚径 8.2、赤釉	
20	遺	74	1484	SK05	C3	土師器	鉢形杯部高坪	60	反	14.5	8.6			緑	脚径5.1、脚径 9.4	
20	遺	75	1494	SK05	C3	土師器	鉢形杯部高坪	5	反	14.6				明赤釉	全面赤釉	
20	遺	76	1480	SK05	C3	土師器	鉢形杯部高坪	40						黄赤釉	脚径5.6	
20	遺	77	1353	SK05	C3	土師器	鉢形杯部高坪	30						にぶい黄	脚径4.2、脚径 8.8、赤釉	
20	遺	78	1350	SK05	C3	土師器	鉢形杯部高坪	20	反					にぶい黄	脚径 9.2	
20	遺	79	1508	SK05	C3	土師器	鉢形杯部高坪	50						にぶい黄	脚径4.1、脚径 9.8	
20	遺	80	1484	SK05	C3	土師器	外反口縁蓋	70		33.4				黄緑	脚径 16.0	
21	遺	81	1378	SK05	C3	土師器	蓋	10	反				11.3	明赤釉	脚径 10.0、外面煤付着、宇田	
21	遺	82	1373	SK05	C3	土師器	蓋	10	反				14.0	灰黄	脚径 10.8、外面煤付着	
21	遺	83	1352	SK05	C3	土師器	蓋	40	反	15.6				14.8	黄緑	脚径 15.0、外面煤付着
21	遺	84	1390	SK05	C3	土師器	蓋	10	反					15.0	にぶい黄	脚径 12.1
21	遺	85	1376	SK05	C3	土師器	蓋	10	反					16.2	にぶい黄緑	脚径 12.2、外面煤付着
21	遺	86	1319	SK05	C3	土師器	蓋	5	反					15.0	黄緑	脚径 12.2
21	遺	87	1379	SK05	C3	土師器	蓋	10	反					16.0	にぶい黄緑	脚径 13.0
21	遺	88	1394	SK05	C3	土師器	蓋	20	反					16.4	にぶい黄	脚径 14.0、外面煤付着
21	遺	89	1417	SK05	C3	土師器	蓋	5	反					16.8	にぶい黄緑	脚径 16.0
21	遺	90	1396	SK05	C3	土師器	蓋	20	反					17.0	にぶい黄緑	脚径 14.8、外面煤付着
21	遺	91	1354	SK05	C3	土師器	蓋	10	反					17.0	黄赤釉	脚径 14.4、外面煤付着
21	遺	92	1348	SK05	C3	土師器	蓋	10	反					18.0	灰黄	脚径 14.4
21	遺	93	1405	SK05	C3	土師器	蓋	10	反					18.0	にぶい黄	脚径 14.6
21	遺	94	1375	SK05	C3	土師器	蓋	50	反	21.0				18.2	黄赤釉	脚径 15.4、外面煤付着
21	遺	95	1491	SK05	C3	土師器	蓋	10	反	18.2				15.2	緑	脚径 13.7
21	遺	96	1387	SK05	C3	土師器	蓋	5	反					18.4	灰黄	脚径 16.4
21	遺	97	1404	SK05	C3	土師器	蓋	10	反					19.0	緑	脚径 15.3
21	遺	98	1382	SK05	C3	土師器	蓋	10	反					19.2	にぶい黄緑	脚径 15.6
21	遺	99	1355	SK05	C3	土師器	蓋	10	反					19.4	灰黄	脚径 15.9
21	遺	100	1347	SK05	C3	土師器	蓋	20	反					19.4	黄赤釉	脚径 14.8
21	遺	101	1393	SK05	C3	土師器	蓋	10	反					20.0	緑	脚径 16.4、外面煤付着
21	遺	102	1486	SK05	C3	土師器	蓋	40	反					20.2	黄緑、緑	脚径 16.3、外面煤付着
21	遺	103	1516	SK05	C3	土師器	蓋	20	反	22.4				21.3	にぶい黄	脚径 17.2
22	遺	104	1383	SK05	C3	土師器	蓋	20	反					23.0	灰黄	脚径 20.0
22	遺	105	1365	SK05	C3	土師器	蓋	10	反					20.0	黄赤釉	脚径 26.3
22	遺	106	1361	SK05	C3	土師器	蓋	10	反						黄赤釉	煤付着
22	遺	107	1514	SK05	C3	土師器	蓋	20							にぶい黄	
22	遺	108	1368	SK05	C3	土師器	蓋	10	反						にぶい黄緑	底径 12.0

出土遺物観察表

Fla	部位	番号	取上番号	遺構	グリス	種類	説明	形状	厚さ	反転	面積	口径	色調	備考
22	甕	109	1461	SK05	C3	土師器	大型鉢	30	47.6					にぶい焼 外底煤付着
22	甕	110	1346	SK05	C3	土師器	甕	10	反 23.0					黄緑
22	甕	111	1336	SK05	C3	土師器	甕	5	反 20.0					にぶい焼
22	甕	112	1394	SK05	C3	土師器	甕	5	反					にぶい焼 底径 9.4
22	甕	113	1402	SK05	C3	土師器	甕	5						
22	甕	114	1414	SK05	C3	土師器	甕	5						にぶい焼
22	甕	115	1492・1499	SK05	C3	土製品	瓶口							黄緑 外径 6.4、内径 2.20
22	甕	116	1486	SK05	C3	土製品	瓶口							黄緑
22	甕	117	1507	SK05	C3	鉄製品	鉄滓							灰 9.3g
22	甕	118	1481	SK05	C3	鉄製品	鉄滓							灰 15.5g、流動滓
22	甕	119	1462	SK05	C3	鉄製品	鉄滓							灰 7.0g
22	甕	120	1459	SK05	C3	石製品	硯石				7.6	9.3	2.7	228.3g、黒民系
22	甕	121	1480	SK05	C3	石製品	硯石				12.3	6.3	4.2	224.9g、黒民系
23	甕	123	1892	SD01	A3	須恵器	坏蓋	40	反 12.4	5.3	12.0			灰 TK208、H ¹ 1方向
23	甕	124	1853	SD01	A2	須恵器	坏蓋	60	反 12.8	4.6				灰 TK23、外面自然釉、内面赤灰色
23	甕	125	1950	SD01	A2	須恵器	坏蓋	40	反 12.0	4.6				灰 TK47、外面自然釉
23	甕	126	1637	SD01	B2	須恵器	坏蓋	30	反 11.4					灰 TK47、H ¹ 1方向、自然釉
23	甕	127	1032	SD01	B3	須恵器	坏蓋	50	反 12.0	5.3				灰 TK47、H ¹ 1方向
23	甕	128	1685	SD01	B3	須恵器	坏蓋	30	反 12.4					黄灰 H11、黒民系、H ¹ 1方向
23	甕	129	541	SD01	A2	須恵器	坏蓋	40	反 13.2	4.9	12.6			灰 W15、H ¹ 1方向
23	甕	130	1037	SD01	C3	須恵器	坏蓋	40	反 13.6					黄灰 W15、H ¹ 1方向
23	甕	131	999	SD01	B3	須恵器	坏蓋	40	反 15.2	5.6				灰 W15、H ¹ 1方向
23	甕	132	1043	SD01	B3	須恵器	坏蓋	40	反 14.6					灰 W15、黒民系、H ¹ 1方向
23	甕	133	444	SD01	A2	須恵器	坏蓋	20	反 15.0					灰 W15、H ¹ 1方向
23	甕	134	1858	SD01	A2	須恵器	坏蓋	40	反 13.0					灰 W15、H ¹ 1方向
23	甕	135	717	SD01	B3	須恵器	坏蓋	30	反 16.4					灰 黒民系、H ¹ 1方向
23	甕	136	503・1628	SD01	A2・B2	須恵器	坏蓋	40	反 15.2					灰 H ¹ 1方向
23	甕	137	119	SD01	B3	須恵器	坏蓋	90	反 15.5	3.8				灰 灰緑
23	甕	138	1545	SD01	B3	須恵器	坏蓋	10	反 15.0					灰 灰緑系
23	甕	139	1524	SD01	B3	須恵器	坏蓋	40	反 15.0					灰 灰白
23	甕	140	519	SD01	A2	須恵器	坏蓋	60	反 14.8	5.2				灰 灰白
23	甕	141	610	SD01	B2	須恵器	坏蓋	90	反 14.2	4.1				灰 H ¹ 1方向
23	甕	142	1304	SD01	C3	須恵器	坏蓋	30	反 14.3					灰 H ¹ 1方向
23	甕	143	1215	SD01	B3	須恵器	坏蓋	40	反 14.2	3.6	14.0			灰 灰白
23	甕	144	661	SD01	B3	須恵器	坏蓋	20	反 14.0	4.9				灰 灰白
23	甕	145	950	SD01	B3	須恵器	坏蓋	20	反 14.0	4.4				灰 H ¹ 1方向
23	甕	146	568	SD01	B2	須恵器	坏蓋	50	反 14.0	4.3				灰 H ¹ 1方向
23	甕	147	468	SD01	B2	須恵器	坏蓋	80	反 13.6	2.7				灰 H ¹ 1方向
23	甕	148	1526	SD01	B3	須恵器	坏蓋	80	反 13.4	4.6				灰 H ¹ 1方向
23	甕	149	485・1950	SD01	A3・A2	須恵器	坏蓋	60	反 13.4	4.3				灰 灰緑 H ¹ 1方向
23	甕	150	431	SD01	D3	須恵器	坏蓋	30	反 13.0			12.5		灰 緑灰
23	甕	151	1902	SD01	C3	須恵器	坏蓋	80	反 12.4	4.7				灰 H ¹ 1方向
23	甕	152	1501	SD01	B2	須恵器	坏蓋	30	反 13.0	2.5				灰 H ¹ 1方向
23	甕	153	1212	SD01	C3	須恵器	坏蓋	50	反 13.2	4.2				灰 朝灰
23	甕	154	1532	SD01	C3	須恵器	坏蓋	60	反 14.7	4.1				灰 地灰
23	甕	155	1006	SD01	B3	須恵器	坏蓋	20	反 15.2	4.6				灰 黄灰
23	甕	156	586	SD01	B2	須恵器	坏蓋	70	反 15.6	6.0				にぶい焼 H ¹ 1方向
23	甕	157	541	SD01	A2	須恵器	坏蓋	60	反 16.0	4.5				灰 H ¹ 1方向
23	甕	158	362	SD01	A2	須恵器	坏蓋	40	反 14.4					灰 H ¹ 1方向
23	甕	159	1187	SD01	C3	須恵器	坏蓋	30	反 13.5	4.3				灰 H ¹ 1方向
23	甕	160	1950・619	SD01	A2・B2	須恵器	坏蓋	80	反 14.2	3.5				灰 H ¹ 1方向、415号
23	甕	161	1546	SD01	B3	須恵器	坏蓋	40	反 14.8	3.8				灰 灰白
23	甕	162	1546	SD01	B3	須恵器	坏蓋	30	反 16.0	4.4				灰 灰白
23	甕	163	576	SD01	B2	須恵器	坏蓋	60	反 13.2	3.7				灰 H ¹ 1方向
23	甕	164	1548	SD01	B3	須恵器	坏蓋	80	反 13.2	4.2				灰 H ¹ 1方向
23	甕	165	431	SD01	D3	須恵器	坏蓋	70	反 13.3	3.6				灰 H ¹ 1方向、砂がみ
23	甕	166	549	SD01	B2	須恵器	坏蓋	40	反 13.5	5.1				灰 土層未調整
23	甕	167	518	SD01	A2	須恵器	坏蓋	90	反 13.8	3.8				灰 H ¹ 1方向
23	甕	168	1210	SD01	C3	須恵器	坏蓋	40	反 13.9	4.5				灰 H ¹ 1方向、土層未調整、焼がくれ
23	甕	169	619	SD01	B2	須恵器	坏蓋	60	反 13.9	3.8				灰 H ¹ 1方向
23	甕	170	1069	SD01	B2	須恵器	坏蓋	25	反 14.0	4.6				灰 H ¹ 1方向
23	甕	171	303	SD01	B3	須恵器	坏蓋	20	反 14.0	4.2				灰 H ¹ 1方向
23	甕	172	542	SD01	B2	須恵器	坏蓋	30	反 14.0	3.7				灰 灰白
23	甕	173	462	SD01	A3	須恵器	坏蓋	40	反 14.4	4.7				灰 H ¹ 1方向
23	甕	174	1698	SD01	B3	須恵器	坏蓋	60	反 14.0	4.7				灰 H ¹ 1方向
24	甕	175	602	SD01	B3	須恵器	坏蓋	50	反 13.8	5.0	12.0			赤灰 TK208、H ¹ 1方向
24	甕	176	1808	SD01	A3	須恵器	坏蓋	30	反 12.0	4.4	10.4			黄灰 TK208 ~ TK23、H ¹ 1方向
24	甕	177	685	SD01	B3	須恵器	坏蓋	20	反 12.6		11.2			灰 TK47 ~ W15、H ¹ 1方向
24	甕	178	718	SD01	C3	須恵器	坏蓋	40	反 13.6	4.5	11.6			灰 TK47 ~ W15、H ¹ 1方向
24	甕	179	735	SD01	C3	須恵器	坏蓋	10	反 14.0		12.4			灰 TK47 ~ W15、H ¹ 1方向
24	甕	180	1622	SD01	B2	須恵器	坏蓋	30	反 13.0	3.7	11.2			灰 W15、鹿門飯家
24	甕	181	592	SD01	B2	須恵器	坏蓋	10	反 14.6		12.0			灰 H ¹ 1方向、H ¹ 1方向
24	甕	182	526	SD01	B3	須恵器	坏蓋	20	反 14.0		12.0			灰 H ¹ 1方向
24	甕	183	998	SD01	B3	須恵器	坏蓋	20	反 13.0	4.4	11.0			灰 H ¹ 1方向
24	甕	184	1096	SD01	C3	須恵器	坏蓋	40	反 13.6		11.5			黄灰 H ¹ 1方向
24	甕	185	1646	SD01	B3	須恵器	坏蓋	50	反 14.0		12.2			灰緑 H ¹ 1方向
24	甕	186	1263	SD01	D2	須恵器	坏蓋	30	反 14.5		11.1			灰 黒民系、H ¹ 1方向
24	甕	187	1633	SD01	B2	須恵器	坏蓋	40	反 13.9		11.4			灰 H ¹ 1方向
24	甕	188	630	SD01	B2	須恵器	坏蓋	30	反 14.0	4.5	11.4			灰 H ¹ 1方向
24	甕	189	1559	SD01	C3	須恵器	坏蓋	40	反 14.4	4.7	12.5			灰 H ¹ 1方向
24	甕	190	546	SD01	A2	須恵器	坏蓋	95	反 13.4	4.5	10.2			灰 H ¹ 1方向
24	甕	191	1064	SD01	B2	須恵器	坏蓋	30	反 14.0		11.8			灰 H ¹ 1方向
24	甕	192	1895	SD01	A2	須恵器	坏蓋	95	反 14.2	5.2	11.2			黄灰 H ¹ 1方向、415号
24	甕	193	496	SD01	B2	須恵器	坏蓋	90	反 14.6	4.7	11.4			灰 H ¹ 1方向

Flg	部位	番号	取上番号	遺構	グリス	種類	説明	長径	短径	厚さ	口径	色調	備考	
24	甕	194	355	S001	B2	須恵器	坏身	50	反	14.6	3.9	12.0	灰	Y1'1'方向左
24	甕	196	585・1068	S001	B2	須恵器	坏身	60	反	13.4	4.3	11.6	灰	Y1'1'方向右
24	甕	196	1023・1029	S001	B2	須恵器	坏身	40	反	13.6	4.0	11.2	灰	Y1'1'方向左
24	甕	197	542	S001	B2	須恵器	坏身	80		13.8	4.0	11.8	灰	Y1'1'方向左
24	甕	198	1187	S001	C3	須恵器	坏身	60		13.6	4.1	11.6	雑灰	Y1'1'方向右
24	甕	199	1644	S001	B3	須恵器	坏身	20	反	14.0	4.1	11.8	灰	雑灰系、Y1'1'方向左
24	甕	200	1675	S001	B3	須恵器	坏身	40	反	14.2	4.3	12.0	灰緑	Y1'1'方向左
24	甕	201	466	S001	B2	須恵器	坏身	95		14.7	4.1	11.6	灰	Y1'1'方向左
24	甕	202	1221	S001	B2	須恵器	坏身	40		14.2	4.3	11.9	灰	Y1'1'方向左
24	甕	203	486	S001	B3	須恵器	坏身	90		14.6	4.4	12.6	灰	Y1'1'方向左
24	甕	204	586	S001	B2	須恵器	坏身	40	反	14.4	3.7	12.4	灰	Y1'1'方向右
24	甕	205	1530	S001	B2	須恵器	坏身	100		14.4	4.7	12.6	灰	Y1'1'方向左
24	甕	206	1092	S001	C2	須恵器	坏身	50	反	14.4	4.2	11.6	灰	Y1'1'方向左
24	甕	207	1025	S001	B2	須恵器	坏身	70		14.5	4.6	11.8	灰	Y1'1'方向左
24	甕	208	831	S001	C3	須恵器	坏身	20	反	14.7	4.0	13.1	灰緑	Y1'1'方向左
24	甕	209	1288	S001	D3	須恵器	坏身	70		14.8	4.5	12.6	灰白	Y1'1'方向左
24	甕	210	1548	S001	B3	須恵器	坏身	20	反	14.8	4.2	13.0	灰	Y1'1'方向左
24	甕	211	484	S001	B3	須恵器	坏身	60		15.0	4.8	12.8	灰白	Y1'1'方向左
24	甕	212	431	S001	D3	須恵器	坏身	50		15.0	3.9	13.0	灰	Y1'1'方向右
24	甕	213	519	S001	A2	須恵器	坏身	40	反	15.0		12.5	黄灰	Y1'1'方向左
24	甕	214	499	S001	B3	須恵器	坏身	90		15.2	4.2	13.0	灰	Y1'1'方向右
24	甕	215	1652	S001	B3	須恵器	坏身	40	反	15.2	4.3	13.0	灰	Y1'1'方向左
24	甕	216	1047	S001	B2	須恵器	坏身	100		15.2	5.4	13.0	灰	Y1'1'方向左
24	甕	217	1851	S001	B2	須恵器	坏身	40	反	15.4	3.7	13.2	灰	Y1'1'方向左
24	甕	218	569	S001	B2	須恵器	坏身	70	反	15.4	4.1	13.2	灰	Y1'1'方向左
24	甕	219	1555	S001	C3	須恵器	坏身	30	反	15.6	4.9	13.4	雑灰	Y1'1'方向左
24	甕	220	1585	S001	C3	須恵器	坏身	50	反	15.6	4.6	13.0	雑灰	
24	甕	221	1148	S001	C2	須恵器	坏身	40		16.0	5.2	13.3	灰	Y1'1'方向左
24	甕	222	590	S001	B2	須恵器	坏身	20	反	16.6	4.0	14.2	灰	Y1'1'方向左
25	甕	223	1693	S001	B3	須恵器	高坪蓋	90		13.6	5.5		灰	焼込焼 4.1
25	甕	224	1275	S001	C3	須恵器	有蓋高坪	70		12.9	10.4	10.7	雑灰	TK23、脚径 9.3、28x3 方向、Y1'1'方向左
25	甕	225	1697	S001	A3	須恵器	無蓋高坪	60					灰	TK20B、28x3 方向、全面自然釉
25	甕	226	1885	S001	B2	須恵器	無蓋高坪	10	反		15.0		灰	自然釉
25	甕	227	961	S001	B3	須恵器	高坪	20	反				灰	脚径 5.6、脚径 13.0、28x4 方向
25	甕	228	1571	S001	C3	須恵器	高坪	10	反				灰	脚径 12.2、28x4 方向
25	甕	229	1565	S001	C3	須恵器	高坪	20	反				明灰	28x4 方向、内面自然釉
25	甕	230	1256	S001	C3	須恵器	高坪	5	反				灰黄	脚径 11.0、28x3 方向
25	甕	231	999	S001	B3	須恵器	高坪	10	反				灰	脚径 10.3、28x3 方向
25	甕	232	1496	S001	A3	須恵器	高坪	30	反				灰	脚径 5.3、脚径 10.2
25	甕	233	1260	S001	D3	須恵器	有蓋高坪	50	反	13.6	10.5	11.5	灰	脚径 11.0、外面自然釉
25	甕	234	1955	S001	C3	須恵器	高坪	70		13.4	8.9		明灰	脚径 9.1、28x4 方向
25	甕	235	960	S001	B3	須恵器	高坪	10	反				灰	脚径 12.0、28x3 方向、全面自然釉
25	甕	236	587	S001	B2	須恵器	高坪	10	反				灰	脚径 4.4、自然釉、Y1'1'方向左
25	甕	237	431	S001	D3	須恵器	無蓋高坪	30			9.8		灰	
25	甕	238	1065	S001	B2	須恵器	無蓋高坪	40	反	12.4	12.4		灰	脚径 4.8、自然釉、Y1'1'方向右
25	甕	239	956	S001	B3	須恵器	高坪	10	反				灰	脚径 9.6
25	甕	240	563	S001	A2	須恵器	高坪	30					灰	脚径 4.5、脚径 10.4、自然釉
25	甕	241	1540	S001	B3	須恵器	高坪	40	反				灰黄	脚径 4.2、脚径 10.4
25	甕	242	1540	S001	B3	須恵器	高坪	40	反				灰黄	脚径 4.4、脚径 9.8
25	甕	243	1677	S001	B3	須恵器	無蓋高坪	10	反		15.0		明灰	脚径 4.4、脚径 9.8
25	甕	244	1534	S001	A3	須恵器	無蓋高坪	20	反		16.6		雑灰	自然釉
25	甕	245	1267	S001	C2	須恵器	高坪	20					灰	脚径 3.7、脚径 10.4
25	甕	246	1281	S001	D3	須恵器	無蓋高坪	40	反	14.0	6.4		灰	脚径 4.2、脚径 8.6
25	甕	247	1555	S001	C3	須恵器	広口蓋	10	反		20.6		雑灰	脚径 13.3
25	甕	248	1552	S001	B3	須恵器	広口蓋	10	反		17.3		明灰	
25	甕	249	1003	S001	B3	須恵器	広口蓋	10	反		13.4		灰	脚径 9.4、28x4
25	甕	250	547	S001	A2	須恵器	広口蓋	5	反		19.0		雑灰	脚径 12.3
25	甕	251	1500	S001	C3	須恵器	広口蓋	10	反		15.5		灰	
25	甕	252	1167	S001	B3	須恵器	広口蓋	10	反		18.0		灰	脚径 12.1、自然釉
25	甕	253	1644	S001	B3	須恵器	広口蓋	10	反		20.0		雑灰	脚径 10.1
25	甕	254	796	S001	D3	須恵器	広口蓋	100		18.3	18.1	14.0	灰	瓦質焼成、器壁厚い
26	甕	255	611	S001	B2	須恵器	蓋	100		11.4	3.4	8.2	灰	
26	甕	256	1285	S001	D3	須恵器	長筒蓋	5	反		7.4		雑灰	脚径 7.0
26	甕	257	956	S001	B3	須恵器	長筒蓋	10	反		8.0		灰	脚径 7.1
26	甕	258	1625	S001	B2	須恵器	長筒蓋	10	反		11.0		灰	28x4
26	甕	259	943	S001	B3	須恵器	長筒蓋	10	反		11.0		灰	自然釉
26	甕	260	1445・1302	S001	C3	須恵器	長筒蓋	80		13.0	9.9		雑灰	脚径 8.7、28x4、脚径、Y1'1'方向左
26	甕	261	618	S001	B2	須恵器	長筒蓋	70	反	14.0	14.5	10.6	灰	脚径 7.8、Y1'1'方向左
26	甕	262	1024	S001	B2	須恵器	長筒蓋	10	反		14.0		灰	脚径 7.0
26	甕	263	1023	S001	B2	須恵器	長筒蓋	20	反		14.0		灰	Y1'1'方向右
26	甕	264	1094	S001	C3	須恵器	短筒蓋	90		9.0	5.0	8.4	雑灰	脚径 6.0、平持ち Y1'1'
26	甕	265	1063	S001	B3	須恵器	短筒蓋	10	反		18.8	10.0	灰	脚径 8.6
26	甕	266	1694	S001	B3	須恵器	短筒蓋	40	反		11.0		雑灰	脚径 8.4、Y1'1'方向右
26	甕	267	1172	S001	C3	須恵器	短筒蓋	10	反	13.1	11.1		雑灰	脚径 10.7
26	甕	268	457	S001	A3	須恵器	短筒蓋	20	反	14.5	9.9		灰	脚径 9.6
26	甕	269	1891	S001	B2	須恵器	円筒	60	反				灰	脚径 5.4
26	甕	270	629	S001	B2	須恵器	円筒	40					灰	脚径 5.0、Y1'1'方向右
26	甕	271	1872	S001	B2	須恵器	円筒	10	反	15.0			灰	自然釉
26	甕	272	1176	S001	C3	須恵器	円筒	30	反		14.0		雑灰	
26	甕	273	915	S001	B2	須恵器	円筒	10	反		15.0		灰	自然釉
26	甕	274	954	S001	B3	須恵器	円筒	10	反		14.2		灰白	
26	甕	275	227	S001	A2	須恵器	提瓶	30		21.6			灰	外面自然釉面
26	甕	276	768	S001	D2	須恵器	提瓶	20			6.4		灰	
26	甕	277	1223	S001	C3	須恵器	提瓶	60			8.9		雑灰	脚径 6.2、28x4、28x4

Fla	部位	番号	取上番号	遺構	グリス	種類	絶対 深度	形状	反転	面積	口径	色調	備考	
26	甕	278	1646	5001	B3	須恵焼	蓋	10	反	8.4		黄灰	小定品須恵焼、装飾須恵焼?	
26	甕	279	506	5001	B2	須恵焼	把平付碗	10	反			灰	自然焼	
26	甕	280	482	5001	B3	須恵焼	脚台	10	反			灰	磨かないし、脚付意匠	
27	甕	281	1007	5001	B3	須恵焼	蓋	30			42.9	灰	図様 30.6	
27	甕	282	1885	5001	B2	須恵焼	蓋	10	反		36.2	灰	TK01、磨面を後流状文	
27	甕	283	624	5001	B2	須恵焼	蓋	10	反		33.1	灰	磨面を後流状文	
27	甕	284	1002	5001	B3	須恵焼	蓋	10	反		40.0	灰明		
27	甕	285	1671	5001	A3	須恵焼	蓋	5			38.8	暗灰		
27	甕	286	508 + 531	5001	A2 + B2	須恵焼	蓋	5	反		38.0	暗灰	口縁外面自然焼、内面灰	
27	甕	287	966	5001	B3	須恵焼	蓋	5	反		36.0	暗青灰	口縁内面34%	
27	甕	288	1676	5001	B3	須恵焼	蓋	10	反		21.4	暗灰		
27	甕	289	467	5001	A3	須恵焼	蓋	5	反		22.6	灰		
27	甕	290	1024	5001	B2	須恵焼	蓋	10	反		24.0	灰	図様 19.0	
27	甕	291	1041	5001	B3	須恵焼	蓋	10	反		22.8	暗灰	図様 17.5	
27	甕	292	1652	5001	B3	須恵焼	蓋	10	反		17.6	暗灰	図様 15.2、34%焼34%	
27	甕	293	1960	5001	A2	須恵焼	蓋	5	反		24.2	灰		
28	甕	294	1673	5001	A3	土師器	内甕坪	30	反	13.2	3.8	12.8	にぶい黄焼	底部静止34%
28	甕	295	530	5001	A2	土師器	内甕坪	40	反	12.0	5.2	11.2	赤焼	
28	甕	296	550 + 544	5001	B2	土師器	内甕坪	30	反	12.0	4.2	11.0	赤焼	
28	甕	297	1675	5001	B3	土師器	内甕坪	20		12.0	5.7		にぶい黄焼	
28	甕	298	463	5001	B2	土師器	内甕坪	30	反	12.4	4.2	11.6	赤黄焼	
28	甕	299	1890	5001	B2	土師器	内甕坪	100		12.4	5.1	12.0	明赤焼	
28	甕	300	1678	5001	B3	土師器	内甕坪	30	反	12.6			赤焼	
28	甕	301	982	5001	B3	土師器	内甕坪	80		12.7	5.8	12.2	赤焼	
28	甕	302	1696	5001	B3	土師器	内甕坪	40		13.0	5.6	12.2	にぶい黄焼	
28	甕	303	1677	5001	B3	土師器	内甕坪	30	反	13.0		11.7	赤焼	
28	甕	304	983	5001	B3	土師器	内甕坪	20	反	13.4			赤焼	
28	甕	305	1045	5001	B3	土師器	内甕坪	90		13.4	4.8		赤焼	
28	甕	306	1257	5001	C3	土師器	内甕坪	20	反	13.6	4.9	13.0	灰焼	木葉痕、飯河?
28	甕	307	642	5001	B3	土師器	内甕坪	20	反	13.6			赤焼	
28	甕	308	948	5001	B3	土師器	内甕坪	20		13.6	5.7		赤焼	口縁部保存付着
28	甕	309	546	5001	A2	土師器	内甕坪	30	反	13.8			赤焼	
28	甕	310	1672	5001	A3	土師器	内甕坪	40	反	14.0	4.6	13.6	赤焼	全面保存付着
28	甕	311	1830	5001	A3	土師器	内甕坪	30	反	14.0		13.6	にぶい黄焼	
28	甕	312	1543	5001	B3	土師器	内甕坪	40		14.0	4.0		赤焼	
28	甕	313	554	5001	B2	土師器	内甕坪	40	反	14.2			赤焼	
28	甕	314	1675	5001	B3	土師器	内甕坪	70		14.9	6.2	13.1	赤焼	
28	甕	315	964	5001	C2	土師器	内甕坪	40	反	15.8	5.5		赤焼	木葉痕
28	甕	316	606	5001	B3	土師器	台形鉢	60		13.6	5.0		にぶい黄焼	
28	甕	317	1283	5001	D3	土師器	台形鉢	50		14.0			にぶい黄焼	木葉痕、ひずみ欠
28	甕	318	1033	5001	B3	土師器	台形鉢	90		12.6	5.7		にぶい黄焼	
28	甕	319	1833	5001	A3	土師器	台形鉢	40	反	13.2	6.0		にぶい黄焼	
28	甕	320	612	5001	B2	土師器	台形鉢	80		12.6	7.5		にぶい黄焼	
28	甕	321	934	5001	B2	土師器	模範坪	10	反	17.2			にぶい黄焼	模範坪、精良品、図案系?
28	甕	322	1078	5001	C3	土師器	模範坪	20	反	15.4			にぶい黄焼	全面赤形、底部静止34%
28	甕	323	557	5001	B2	土師器	模範坪	20	反	14.8			赤焼	全面赤形
28	甕	324	1580	5001	C3	土師器	模範坪	60		15.2	4.8		赤焼	
28	甕	325	534	5001	A2	土師器	模範坪	5	反	14.4			赤焼	
28	甕	326	457	5001	A2	土師器	模範坪	40	反	14.4			赤黄焼	
28	甕	327	546	5001	A2	土師器	模範坪	40	反	13.8	3.9		赤焼	
28	甕	328	1679	5001	B3	土師器	模範坪	30		14.0			にぶい黄焼	
28	甕	329	470 + 593	5001	B2	土師器	模範坪	30	反	14.2		13.2	赤黄焼	
28	甕	330	540	5001	B3	土師器	模範坪	20	反	13.0		12.0	赤焼	
28	甕	331	1944	5001	C3	土師器	模範坪	20	反	13.0		12.0	灰焼	
28	甕	332	1537	5001	B3	土師器	模範坪	30	反	13.0	5.0	11.4	赤焼	
28	甕	333	1648	5001	B3	土師器	模範坪	20	反	14.0		12.2	赤焼	
28	甕	334	576	5001	B2	土師器	模範坪	50	反	14.0		12.0	灰焼	
28	甕	335	1541	5001	B3	土師器	模範坪	20	反	14.1		12.2	赤焼	
28	甕	336	1211	5001	C3	土師器	模範坪	50	反	14.2	3.9	12.5	赤焼	
28	甕	337	588	5001	B2	土師器	模範坪	40	反	14.2		12.6	灰焼	
28	甕	338	1049	5001	B3	土師器	模範坪	50		14.2	4.8	13.0	赤焼	
28	甕	339	457	5001	A3	土師器	模範坪	30	反	14.8		12.6	赤焼	
28	甕	340	457	5001	A3	土師器	模範坪	20	反	15.0		12.2	赤焼	
29	甕	341	1690	5001	B3	土師器	有段坪部高坪	100		15.8	12.4		にぶい黄焼	50%、図様 8.9、外蓋保存付着
29	甕	342	1821	5001	B3	土師器	有段坪部高坪	100		17.0	10.8		にぶい黄焼	50%、図様 3.0、図様 9.0
29	甕	343	1044	5001	B3	土師器	有段坪部高坪	50					にぶい黄焼	図様 2.5、図様 9.3
29	甕	344	960	5001	B3	土師器	有段坪部高坪	50					赤焼	図様 3.0、図様 8.9
29	甕	345	1013	5001	B3	土師器	有段坪部高坪	40					赤黄焼	図様 4.8、図様 9.6
29	甕	346	661	5001	B2	土師器	有段坪部高坪	100		15.0	10.2		赤焼	図様 3.0、図様 9.4
29	甕	347	944 + 943	5001	B3	土師器	有段坪部高坪	60		15.6	11.3		赤焼	図様 3.7、図様 10.6
29	甕	348	492	5001	A3	土師器	有段坪部高坪	95		16.0	12.2		赤焼	図様 3.4、図様 10.7
29	甕	349	1182	5001	B2	土師器	有段坪部高坪	30	反	16.2	10.0		赤焼	図様 2.8、図様 9.0
29	甕	350	964	5001	C2	土師器	有段坪部高坪	20	反			14.6	赤焼	
29	甕	351	1881	5001	B2	土師器	有段坪部高坪	60				14.6	赤焼	
29	甕	352	1522	5001	A3	土師器	有段坪部高坪	30				14.6	にぶい黄焼	
29	甕	353	1672	5001	A3	土師器	有段坪部高坪	40	反			14.6	にぶい黄焼	
29	甕	354	1877	5001	B3	土師器	有段坪部高坪	20	反			14.6	赤焼	全面保存付着
29	甕	355	1812	5001	B3	土師器	有段坪部高坪	20	反			14.6	にぶい黄焼	
29	甕	356	1672	5001	A3	土師器	有段坪部高坪	20	反			14.6	にぶい黄焼	
29	甕	357	1807 + 1834	5001	A3	土師器	有段坪部高坪	30				14.6	赤焼	
29	甕	358	1670	5001	A3	土師器	有段坪部高坪	30	反			16.2	赤焼	
29	甕	359	1944	5001	C3	土師器	有段坪部高坪	10	反			16.4	赤焼	
29	甕	360	1811	5001	B3	土師器	有段坪部高坪	20	反			17.0	にぶい黄焼	
29	甕	361	1506	5001	C3	土師器	有段坪部高坪	30	反			17.4	灰焼	

Fig	部位	番号	取上番号	遺構	グリッド	種類	説明	長径	短径	厚さ	口径	色調	備考
29	甕b	362	511	S001	A2	土師器	有縁坏部高坪	5	反		17.8	灰白	
30	甕b	363	1035	S001	B3	土師器	有縁坏部高坪	70				にふい境	断面径 3.2、断面 9.0
30	甕b	364	616	S001	B2	土師器	有縁坏部高坪	30	反			明赤褐色	断面径 3.2、断面 10.4
30	甕b	365	607	S001	B3	土師器	有縁坏部高坪	50	反			浅黄褐色	断面径 3.6、断面 10.8
30	甕b	366	1024	S001	B3	土師器	有縁坏部高坪	60				にふい境	断面径 3.2、断面 9.4
30	甕b	367	1946	S001	C3	土師器	有縁坏部高坪	40				淡緑	断面径 2.7、断面 7.6
30	甕b	368	1832	S001	A3	土師器	有縁坏部高坪	40				緑	断面径 2.6、断面 8.4
30	甕b	369	1583	S001	C3	土師器	有縁坏部高坪	40				黄緑	断面径 3.1、断面 8.6
30	甕b	370	1834	S001	A3	土師器	有縁坏部高坪	40				にふい境	断面径 4.0、断面 8.6
30	甕b	371	1861	S001	A2	土師器	有縁坏部高坪	20				にふい境	断面径 2.5、断面 5.8
30	甕b	372	1819	S001	A2	土師器	有縁坏部高坪	30				緑	断面径 2.8、断面 9.0
30	甕b	373	1004	S001	B3	土師器	有縁坏部高坪	30				黄緑	断面径 8.0
30	甕b	374	608	S001	A3	土師器	有縁坏部高坪	50				浅黄褐色	断面径 9.1
30	甕b	375	607	S001	B3	土師器	有縁坏部高坪	30				浅黄褐色	断面径 3.4、断面 9.2
30	甕b	376	948	S001	B3	土師器	有縁坏部高坪	30				浅黄褐色	断面径 4.0、断面 9.2
30	甕b	377	555	S001	B2	土師器	有縁坏部高坪	40				にふい境	断面径 2.5、断面 9.4
30	甕b	378	517	S001	B3	土師器	有縁坏部高坪	30				にふい境	断面径 3.6、断面 9.4
30	甕b	379	1677	S001	B3	土師器	有縁坏部高坪	40				緑	断面径 3.2、断面 9.4
30	甕b	380	637	S001	B3	土師器	有縁坏部高坪	40				浅黄褐色	断面径 3.2、断面 9.5
30	甕b	381	1825	S001	A2	土師器	有縁坏部高坪	30				緑	断面径 2.4、断面 9.6
30	甕b	382	944	S001	B3	土師器	有縁坏部高坪	20				緑	断面径 3.0、断面 9.6
30	甕b	383	1807	S001	A3	土師器	有縁坏部高坪	50				緑	断面径 3.2、断面 9.7
30	甕b	384	1235	S001	B2	土師器	有縁坏部高坪	0				にふい境	断面径 3.2、断面 9.9
30	甕b	385	1020	S001	B3	土師器	有縁坏部高坪	30	反			にふい境	断面径 4.0、断面 10.6
30	甕b	386	1833	S001	A3	土師器	有縁坏部高坪	40				にふい境	断面径 3.6、断面 10.0
30	甕b	387	544	S001	B2	土師器	有縁坏部高坪	30	反			にふい境	断面径 2.9、断面 10.0
30	甕b	388	1871	S001	B2	土師器	有縁坏部高坪	40				緑	断面径 2.7、断面 10.0
30	甕b	389	1070	S001	B2	土師器	有縁坏部高坪	30				にふい境	断面径 3.2、断面 10.0
30	甕b	390	991	S001	B3	土師器	有縁坏部高坪	10				にふい境	断面径 3.2、断面 10.0
30	甕b	391	1825	S001	A2	土師器	有縁坏部高坪	20				にふい境	断面径 10.5
30	甕b	392	1855	S001	A2	土師器	有縁坏部高坪	20				にふい境	断面径 10.3
30	甕b	393	1545	S001	B3	土師器	有縁坏部高坪	40				緑	断面径 4.8、断面 10.4
30	甕b	394	1620	S001	B2	土師器	有縁坏部高坪	30				緑	断面径 2.8、断面 10.4
30	甕b	395	1834	S001	A3	土師器	有縁坏部高坪	40				緑	断面径 3.6、断面 10.4
30	甕b	396	1671	S001	A2	土師器	有縁坏部高坪	40				緑	断面径 3.9、断面 10.6
30	甕b	397	520	S001	A2	土師器	有縁坏部高坪	20				にふい境	断面径 3.6、断面 10.6
30	甕b	398	1580	S001	C3	土師器	有縁坏部高坪	30				褐色	断面径 3.1、断面 10.7
30	甕b	399	1665	S001	B3	土師器	有縁坏部高坪	40				黄緑	断面径 3.2、断面 11.2
30	甕b	400	1028	S001	B2	土師器	有縁坏部高坪	20				緑	断面径 3.5、断面 11.3
30	甕b	401	1182	S001	B3	土師器	有縁坏部高坪	30				緑	断面径 3.6、断面 11.6
30	甕b	402	742	S001	B3	土師器	有縁坏部高坪	30				緑	断面径 3.4、断面 12.1
31	甕b	403	1543	S001	B3	土師器	有縁坏部高坪	70	反	15.4	10.2	にふい境	断面径 3.4、断面 9.0
31	甕b	404	596	S001	B2	土師器	有縁坏部高坪	40	反	12.4	9.4	にふい境	断面径 3.4、断面 8.8
31	甕b	405	1167	S001	B3	土師器	有縁坏部高坪	20		12.0			
31	甕b	406	1585	S001	C3	土師器	長部高坪	10	反	15.0		淡緑	
31	甕b	407	1281	S001	D3	土師器	長部高坪	10	反	18.2		浅黄褐色	
31	甕b	408	993	S001	B3	土師器	長部高坪	10		21.0		緑	
31	甕b	409	1950	S001	A2	土師器	有縁坏部高坪	40				にふい境	断面径 3.7、断面 9.0
31	甕b	410	564	S001	A2	土師器	有縁坏部高坪	20				淡緑	断面径 2.9、断面 9.0
31	甕b	411	1622	S001	B2	土師器	有縁坏部高坪	10	反			にふい境	断面径 2.3、断面 9.2
31	甕b	412	462	S001	A3	土師器	有縁坏部高坪	50				にふい境	断面径 3.7、断面 9.3
31	甕b	413	471	S001	B2	土師器	有縁坏部高坪	20	反			にふい境	断面径 3.4、断面 9.4
31	甕b	414	629	S001	B2	土師器	有縁坏部高坪	20	反			緑	断面径 3.0、断面 9.5
31	甕b	415	456	S001	A2	土師器	有縁坏部高坪	20				にふい境	断面径 3.9、断面 10.0
31	甕b	416	1658	S001	B3	土師器	有縁坏部高坪	20				緑	断面径 3.8、断面 11.0
31	甕b	417	460	S001	A3	土師器	長部高坪	50				緑	断面径 3.3、断面 11.9
31	甕b	418	481	S001	B3	土師器	長部高坪	10				灰白	断面径 5.0、断面 12.6、外周赤彩
31	甕b	419	1260	S001	D3	土師器	長部高坪	20	反			黄緑	断面径 3.6、断面 12.4
31	甕b	420	520	S001	A2	土師器	長部高坪	30				にふい境	断面径 2.6、断面 8.0
31	甕b	421	1078	S001	B3	土師器	長部高坪	20				浅黄	断面径 3.8、断面 10.0、太刀片状
31	甕b	422	540	S001	B3	土師器	長部高坪	20				にふい境	断面径 4.0、断面 11.4
31	甕b	423	1546	S001	B3	土師器	長部高坪	30	反			浅黄褐色	断面径 4.0、断面 12.2
31	甕b	424	1523	S001	C3	土師器	長部高坪	50				淡緑	断面径 3.7、断面 12.3
31	甕b	425	1692	S001	B3	土師器	長部高坪	40				浅黄褐色	断面径 3.8、断面 13.8
31	甕b	426	1277	S001	B3	土師器	長部高坪	40				にふい境	断面径 5.5、断面 9.4
31	甕b	427	1262	S001	D3	土師器	長部高坪	20	反			浅黄褐色	断面径 5.2、断面 15.6
31	甕b	428	1274	S001	C3	土師器	長部高坪	30				緑	断面径 14.0
31	甕b	429	1954	S001	B2	土師器	長部高坪	30	反			にふい境	断面径 4.8
31	甕b	430	538	S001	B3	土師器	長部高坪	20	反			灰白	断面径 4.0、断面 16.0
31	甕b	431	601	S001	B3	土師器	長部高坪	20				灰白	断面径 4.2
31	甕b	432	624	S001	B2	土師器	長部高坪	30				緑	断面径 5.0
32	甕b	433	1077	S001	C3	土師器	鉢形坏部高坪	30		13.5	9.1	淡緑	断面径 5.0、断面 9.4
32	甕b	434	920	S001	B3	土師器	鉢形坏部高坪	60		14.6	8.1	緑	断面径 5.2、断面 9.8
32	甕b	435	1552	S001	B3	土師器	鉢形坏部高坪	70		15.0	8.6	浅黄褐色	断面径 4.4、断面 9.8
32	甕b	436	1541	S001	B3	土師器	鉢形坏部高坪	40	反			緑	断面径 5.2、断面 9.8
32	甕b	437	456	S001	A2	土師器	鉢形坏部高坪	10	反	14.2		緑	
32	甕b	438	1944	S001	C3	土師器	鉢形坏部高坪	20		14.5		緑	
32	甕b	439	1545	S001	B3	土師器	鉢形坏部高坪	50		14.6		にふい境	断面径 5.0
32	甕b	440	1633	S001	B3	土師器	鉢形坏部高坪	40		15.2		にふい境	断面径 5.6
32	甕b	441	1281	S001	D3	土師器	鉢形坏部高坪	20		15.2		黄緑	
32	甕b	442	1217	S001	C3	土師器	鉢形坏部高坪	50		15.5		淡緑	断面径 3.8
32	甕b	443	582・507	S001	B2	土師器	鉢形坏部高坪	20	反	16.0		にふい境	
32	甕b	444	546・585	S001	B2	土師器	鉢形坏部高坪	40	反	13.4	8.2	補注	断面 8.8、全周赤彩(遺跡除く)
32	甕b	445	617・627	S001	B2	土師器	鉢形坏部高坪	40	反	13.8	8.2	淡緑	断面径 4.9、断面 9.6

出土遺物観察表

Fig	図位	番号	取上番号	遺構	グリッド	種類	絶対	地所	反転	面積	口径	色調	備考	
32	遺	446	516・582	5001	B2	土師器	鉢形坏部高坪	60	14.6	9.0		浅黄褐色	断面 5.1, 断面 10.2	
32	遺	447	1963	5001	E3	土師器	鉢形坏部高坪	20	反	13.0		褐色	断面 4.4	
32	遺	448	616・823	5001	B2	土師器	鉢形坏部高坪	60	13.2	8.0		にぶい褐色	断面 5.2, 断面 9.6	
32	遺	449	1567	5001	C3	土師器	鉢形坏部高坪	10	反	14.5		褐色		
32	遺	450	1669	5001	B2	土師器	鉢形坏部高坪	40				にぶい褐色	断面 8.2	
32	遺	451	1624	5001	B2	土師器	鉢形坏部高坪	20	反			にぶい褐色	断面 8.6	
32	遺	452	625	5001	B2	土師器	鉢形坏部高坪	10	反			にぶい褐色	断面 4.8, 断面 9.2	
32	遺	453	1663	5001	B3	土師器	鉢形坏部高坪	40				褐色	断面 5.2, 断面 9.8	
32	遺	454	505	5001	B2	土師器	鉢形坏部高坪	40				淡褐色	断面 6.0, 断面 9.2	
32	遺	455	953	5001	B3	土師器	鉢形坏部高坪	40				褐色	断面 4.8, 断面 9.2	
32	遺	456	546	5001	A2	土師器	鉢形坏部高坪	30	反			褐色	断面 4.2, 断面 9.4	
32	遺	457	1661	5001	B3	土師器	鉢形坏部高坪	60				浅黄褐色	断面 4.4, 断面 9.4	
32	遺	458	586	5001	B2	土師器	鉢形坏部高坪	10	反			赤褐色	断面 4.8, 断面 10.0	
32	遺	459	585	5001	A2	土師器	鉢形坏部高坪	20		5.7		褐色	断面 10.0	
32	遺	460	636	5001	B3	土師器	鉢形坏部高坪	30				浅黄褐色	断面 10.6	
32	遺	461	1025	5001	B2	土師器	鉢形坏部高坪	20	反			淡褐色	断面 6.0, 断面 10.8	
32	遺	462	619	5001	B2	土師器	鉢形坏部高坪	20				浅黄褐色	断面 5.0, 断面 10.8	
32	遺	463	619	5001	B2	土師器	鉢形坏部高坪	20	反			淡赤褐色	断面 4.6, 断面 11.2	
32	遺	464	541	5001	A2	土師器	鉢形坏部高坪	40				にぶい黄褐色	断面 10.2, 断面 11.2	
32	遺	465	482	5001	B3	土師器	鉢形坏部高坪	20				にぶい褐色	断面 17.2	
32	遺	466	1622	5001	B2	土師器	鉢形坏部高坪	5	反			褐色	断面 12.4	
33	遺	467	975	5001	B3	土師器	二重口縁蓋	10	反			18.0	にぶい褐色	断面 12.4
33	遺	468	1225	5001	C2	土師器	二重口縁蓋	10				19.0	褐色	断面 13.0
33	遺	469	945	5001	B3	土師器	二重口縁蓋	10	反			16.0	にぶい褐色	断面 12.8
33	遺	470	1812	5001	B3	土師器	二重口縁蓋	5	反			17.0	にぶい褐色	断面 14.6
33	遺	471	1835	5001	A3	土師器	二重口縁蓋	5	反			16.6	浅黄褐色	断面 14.3
33	遺	472	1672	5001	A3	土師器	二重口縁蓋	10	反			16.6	にぶい黄褐色	断面 13.9
33	遺	473	547	5001	A2	土師器	二重口縁蓋	5	反			14.3	にぶい褐色	
33	遺	474	534	5001	A2	土師器	二重口縁蓋	20	反			22.0	褐色	断面 17.4
33	遺	475	1015	5001	B3	土師器	折返し口縁蓋	10	反			15.0	にぶい黄褐色	断面 11.0, 外面煤付層
33	遺	476	1823	5001	A2	土師器	折返し口縁蓋	5	反			16.5	にぶい褐色	
33	遺	477	1676	5001	B3	土師器	折返し口縁蓋	10	反			17.6	にぶい褐色	断面 11.0
33	遺	478	470	5001	B2	土師器	折返し口縁蓋	10	反			18.4	にぶい黄褐色	断面 14.4
33	遺	479	1659	5001	B3	土師器	折返し口縁蓋	10	反			19.0	褐色	断面 14.4
33	遺	480	1661	5001	B3	土師器	折返し口縁蓋	5	反			21.0	にぶい褐色	
33	遺	481	1632	5001	B2	土師器	折返し口縁蓋	10	反			23.2	淡褐色	断面 18.0
33	遺	482	454	5001	A2	土師器	折返し口縁蓋	5	反			21.6	褐色	断面 18.3
33	遺	483	550	5001	B2	土師器	広口蓋	10	反			17.2	にぶい黄褐色	断面 15.3
33	遺	484	1879	5001	B2	土師器	直口蓋	90	19.8	25.2	9.2	にぶい褐色	断面 8.3, 断面 7.2	
33	遺	485	491	5001	A3	土師器	長筒蓋	80	15.4	7.4	11.4	褐色	断面 6.7, 断面 37ノ底	
33	遺	486	643	5001	B3	土師器	長筒蓋	10	反			9.0	褐色	
33	遺	487	529	5001	B3	土師器	長筒蓋	10	反			9.0	にぶい褐色	
33	遺	488	940	5001	B3	土師器	長筒蓋	10	反			9.4	褐色	断面 6.2
33	遺	489	1525	5001	C3	土師器	長筒蓋	40	反	13.5			淡褐色	断面 6.4
33	遺	490	1698	5001	A3	土師器	長筒蓋	80		15.0			褐色	断面 6.8
33	遺	491	1216	5001	B3	土師器	長筒蓋	70	13.1				褐色	断面 7.7
33	遺	492	1801・584	5001	B2	土師器	小型蓋	70	6.0				黒	断面 4.7, 断面 2.5
33	遺	493	1894	5001	B2	土師器	小型蓋	100	7.2	7.4	5.2	にぶい黄褐色	断面 4.9, 断面 4.5	
34	遺	494	1447	5001	C3	土師器	鉢	60	11.0	8.3	9.7	褐色	断面 9.3	
34	遺	495	1671	5001	A3	土師器	鉢	40	反	14.4	12.8		にぶい黄褐色	断面 11.0
34	遺	496	992	5001	B3	土師器	鉢	50	14.6	10.5	14.4	にぶい褐色	断面 13.1, 断面煤付層	
34	遺	497	1625	5001	B2	土師器	鉢	20	反	19.0	18.6		にぶい黄褐色	断面 16.6, 煤付層
34	遺	498	1818	5001	A2	土師器	鉢	10	反	17.0	14.8		褐色	
34	遺	499	508	5001	A2	土師器	鉢	20	反	17.0			浅黄褐色	
34	遺	500	529	5001	A2	土師器	鉢	60	反	12.2	9.8	9.7	にぶい黄褐色	
34	遺	501	1671	5001	A3	土師器	鉢	50		14.6	13.8		褐色	
34	遺	502	1528	5001	B3	土師器	鉢	40	反	15.4	9.0	13.6	褐色	
34	遺	503	895	5001	C2	土師器	鉢	40	反	16.5	13.6		褐色	
34	遺	504	1822	5001	A2	土師器	鉢	60		17.6	8.9		褐色	断面 37ノ底
34	遺	505	556	5001	B2	土師器	鉢	10	反	23.2			灰褐色	
34	遺	506	1805	5001	A2	土師器	鉢	5	反		34.4		灰黄褐色	断面 29.0
34	遺	507	1486	5001	C3	土師器	鉢	60		6.5	3.5		にぶい黄褐色	断面 3.9
34	遺	508	1258	5001	B3	土師器	鉢	50	反	6.5	4.1	5.7	褐色	断面 4.2
34	遺	509	1521	5001	B3	土師器	鉢	60		10.6	5.0		にぶい褐色	断面 4.4
34	遺	510	944	5001	B3	土師器	鉢形	70		5.4	5.7	4.2	褐色	断面 2.4
34	遺	511	454	5001	A2	土師器	鉢形	60	反	7.2	5.6	6.0	灰黄褐色	断面 4.0
34	遺	512	1527	5001	B3	土師器	鉢形	100		5.9	6.8		暗灰黄褐色	断面 4.3
34	遺	513	920	5001	B3	土師器	鉢	50	反	20.8	19.0		浅黄褐色	断面 11.2
34	遺	514	1068	5001	B2	土師器	鉢	50	反	21.0			浅黄褐色	
34	遺	515	1672	5001	A3	土師器	鉢	5	反	18.0			にぶい黄褐色	
34	遺	516	512	5001	B2	土師器	鉢	10	反	10.6			にぶい褐色	煤付層
34	遺	517	355	5001	B3	土師器	鉢	10	反	21.0			にぶい褐色	
34	遺	518	1020	5001	B3	土師器	鉢	10	反	22.0			褐色	
35	遺	519	1464	5001	C3	土師器	鉢	20	反	25.8	24.8		にぶい黄褐色	外面煤付層
35	遺	520	1066	5001	B2	土師器	鉢	60	反	29.6			浅黄褐色	断面 15.2
35	遺	521	1556	5001	C3	土師器	鉢	10	反	23.6			褐色	
35	遺	522	1674	5001	A3	土師器	鉢	5	反	26.0			にぶい褐色	
35	遺	523	1822	5001	A2	土師器	鉢	30	反				にぶい褐色	断面 8.6
35	遺	524	1680	5001	B3	土師器	鉢	10	反				にぶい黄褐色	断面 7.7
35	遺	525	504	5001	B3	土師器	鉢	20	反				にぶい褐色	断面 9.2, 下部煤付層
35	遺	526	527	5001	A2	土師器	鉢	10	反				にぶい褐色	断面 10.8
35	遺	527	506	5001	B2	土師器	鉢	10	反				にぶい褐色	断面 11.2
35	遺	528	616	5001	B2	土師器	鉢	10	反				浅黄褐色	断面 10.0
35	遺	529	458	5001	A3	土師器	鉢	5	反				にぶい褐色	断面 15.4, 煤付層

File	部位	番号	取上番号	遺構	グランド	種類	縮尺	透写率	反転	露出	高さ	口径	色調	備考	
25	甕b	530	565	3001	A2	土師器	縦	5	反				にぶい黄緑	底径 17.6	
25	甕b	531	518	3001	A2	土師器	縦	5	反				黄緑、内面黄緑	底径 17.4	
25	甕b	532	1833	3001	A3	土師器	縦	5	反				にぶい黄緑	底径 22.2	
26	甕b	533	1257	3001	C3	土師器	縦	10	反			15.5	灰白色	底径 14.0、平部黄	
26	甕b	534	1541	3001	B3	土師器	縦	20	反			16.0	明褐色	底径 13.6、平部黄	
36	甕b	535	683・703	3001	B3	土師器	縦	70	反	13.7	16.8		13.5	にぶい黄緑	胴径 4.5、底径 8.8、南側系?
36	甕b	536	1006	3001	B3	土師器	縦	20	反	20.0			21.6	灰白	5C、底径 18.8、外底煤付着
36	甕b	537	1832	3001	A3	土師器	縦	5	反				18.6	黄	底径 16.2、外底煤付着
36	甕b	538	521	3001	A3	土師器	縦	5	反				22.6	にぶい黄緑	底径 18.6
36	甕b	539	1492	3001	C3	土師器	縦	10	反				16.5	にぶい黄緑	底径 12.2、積みあげ口縁
36	甕b	540	1651	3001	B3	土師器	縦	10	反				16.6	黄	底径 13.8、積みあげ口縁
36	甕b	541	2025	3001	D5	土師器	縦	50	反		14.8		12.2	黄	底径 15.8、煤付着
36	甕b	542	944	3001	B3	土師器	縦	40	反	12.8			12.6	黄	底径 10.4、外底煤付着
36	甕b	543	531	3001	B2	土師器	縦	10	反				13.0	にぶい黄緑	底径 11.7
36	甕b	544	524	3001	A2	土師器	縦	5	反				13.6	にぶい黄緑	底径 11.4
36	甕b	545	1671	3001	A3	土師器	縦	5	反				13.6	にぶい黄緑	底径 12.7、外底煤付着
36	甕b	546	1026	3001	B2	土師器	縦	10	反				14.6	黄	底径 13.0、外底煤付着
36	甕b	547	541	3001	A2	土師器	縦	5	反				15.0	にぶい黄緑	底径 12.7、外底煤付着
36	甕b	548	481	3001	B3	土師器	縦	0					15.0	黄	底径 13.2
36	甕b	549	454	3001	A2	土師器	縦	5	反				15.2	灰黄	底径 12.1、外底煤付着
36	甕b	550	534	3001	A2	土師器	縦	10	反				15.2	にぶい黄緑	底径 13.4、外底煤付着
36	甕b	551	614	3001	B2	土師器	縦	10	反				15.2	にぶい黄緑	底径 13.3
36	甕b	552	1038	3001	B3	土師器	縦	30	反	15.6				明褐色	底径 14.1、外底煤付着
36	甕b	553	1672	3001	A3	土師器	縦	5	反				15.6	にぶい黄緑	底径 12.1、外底煤付着
36	甕b	554	454	3001	A2	土師器	縦	10	反				16.2	黄	底径 13.2、外底煤付着
36	甕b	555	1584	3001	C3	土師器	縦	20	反				16.5	にぶい黄緑	底径 13.7、外底煤付着
37	甕b	556	1879	3001	B2	土師器	縦	80	反		23.7	33.1	18.0	黄	底径 15.3
37	甕b	557	460	3001	A3	土師器	縦	10	反				16.6	にぶい黄緑	底径 14.0
37	甕b	558	487	3001	B3	土師器	縦	20	反				16.6	黄	底径 14.0、煤付着
37	甕b	559	634	3001	A2	土師器	縦	5	反				16.8	にぶい黄緑	底径 12.5
37	甕b	560	1277	3001	C3	土師器	縦	10	反				17.0	にぶい黄緑	底径 14.3
37	甕b	561	628	3001	B2	土師器	縦	10	反				17.0	にぶい黄緑	底径 14.2
37	甕b	562	998	3001	B3	土師器	縦	10	反				17.2	黄	底径 14.6
37	甕b	563	1825	3001	A2	土師器	縦	5	反				17.2	にぶい黄緑	底径 15.9
37	甕b	564	1893	3001	A2	土師器	縦	20	反				17.8	灰白	底径 12.7
37	甕b	565	1465	3001	B3	土師器	縦	20	反				17.8	黄	底径 14.4
37	甕b	566	981	3001	B3	土師器	縦	10	反				18.0	灰黄	底径 15.6
37	甕b	567	1175	3001	C3	土師器	縦	10	反				18.4	黄	底径 17.2、外底煤付着
37	甕b	568	1209	3001	C3	土師器	縦	10	反				18.4	にぶい黄緑	底径 14.4
37	甕b	569	1947	3001	C3	土師器	縦	10	反				18.5	黄土	底径 16.0、外底煤付着
37	甕b	570	503	3001	A3	土師器	縦	10	反				19.4	黄	底径 16.8、煤付着
38	甕b	571	1534	3001	A3	土師器	縦	10	反				19.0	黄	底径 15.7、白縁外底煤付着
38	甕b	572	1025	3001	B2	土師器	縦	10	反				19.0	黄	底径 16.6、煤付着
38	甕b	573	619	3001	B2	土師器	縦	10	反				19.2	にぶい黄緑	底径 16.2
38	甕b	574	1520	3001	A3	土師器	縦	20	反				19.2	にぶい黄緑	底径 16.4
38	甕b	575	519	3001	A2	土師器	縦	10	反				19.3	灰黄	底径 16.8、煤付着
38	甕b	576	534	3001	A2	土師器	縦	20	反				19.8	にぶい黄緑	底径 17.5、煤付着
38	甕b	577	1042	3001	B3	土師器	縦	40	反		21.0		20.0	黄	底径 17.6
38	甕b	578	520	3001	A2	土師器	縦	10	反				20.0	灰黄	底径 16.8、煤付着
38	甕b	579	631	3001	B2	土師器	縦	10	反				20.4	にぶい黄緑	底径 18.1、煤付着
38	甕b	580	1690	3001	B3	土師器	縦	10	反		22.2		20.6	にぶい黄緑	底径 17.4
38	甕b	581	589	3001	B2	土師器	縦	10	反				20.6	にぶい黄緑	底径 17.7、煤付着
38	甕b	582	1665	3001	B2	土師器	縦	10	反				21.0	黄	底径 17.0、煤付着
38	甕b	583	1270	3001	D3	土師器	縦	10	反				21.6	にぶい黄緑	底径 20.3
38	甕b	584	1016	3001	C3	土師器	縦	10	反				22.2	黄	底径 17.9、外底煤付着
38	甕b	585	1024	3001	B2	土師器	縦	10	反				22.8	にぶい黄緑	底径 18.6
39	甕b	586	969	3001	B3	土師器	縦	10	反		24.7		23.0	黄	底径 20.0、外底煤付着
39	甕b	587	953	3001	B3	土師器	縦	20	反				24.0	灰白	底径 20.8、外底煤付着
39	甕b	588	511	3001	A2	土師器	縦	5	反				24.0	黄	底径 21.8
39	甕b	589	2024	3001	D5	土師器	縦	20	反				24.2	にぶい黄緑	底径 22.1、煤付着
39	甕b	590	1671	3001	A3	土師器	縦	10	反		24.9		24.9	にぶい黄緑	底径 23.3、外底煤付着
39	甕b	591	487	3001	B3	土師器	縦	40	反		28.8			灰白	底径 25.0、外底煤付着
39	甕b	592	617	3001	B2	土師器	縦	5	反				28.4	にぶい黄緑	底径 24.2
39	甕b	593	1672	3001	A3	土師器	縦	5	反				29.6	にぶい黄緑	底径 24.7
39	甕b	594	1941	3001	B3	土師器	縦	10	反				30.4	黄	底径 29.8
39	甕b	595	1022	3001	B2	土師器	縦	10	反				31.0	にぶい黄緑	底径 29.0、煤付着
39	甕b	596	1651	3001	B3	土師器	縦	20	反		32.0		31.0	灰黄	底径 29.0、外底煤付着
39	甕b	597	1550	3001	B3	土師器	縦	20	反				31.8	黄	底径 28.6
39	甕b	598	1020	3001	B3	土師器	縦	30	反		33.4			にぶい黄緑	底径 30.8、外底煤付着
40	甕b	599	495	3001	B3	土師器	大口径	20	反		33.8			灰白	底径 29.6、外底煤付着
40	甕b	600	457	3001	A3	土師器	大口径	5	反				33.6	にぶい黄緑	底径 30.1
40	甕b	601	1064	3001	B2	土師器	大口径	5	反				37.2	にぶい黄緑	底径 32.6、煤付着
40	甕b	602	1075・1176	3001	C2・C3	土師器	大口径	10	反				40.0	にぶい黄緑	底径 35.3、外底一部2C?
40	甕b	603	1622	3001	B2	土師器	大口径	30	反				42.0	にぶい黄緑	底径 39.0、煤付着
40	甕b	604	555	3001	B2	土師器	大口径	10	反					黄	底径 6.4、木炭痕、駿河系?
40	甕b	605	1691	3001	B3	土師器	大口径	20	反					黄	底径 6.0
40	甕b	606	1540	3001	B3	土師器	大口径	20	反					にぶい黄緑	底径 10.0、木炭痕、外底煤付着
40	甕b	607	1665	3001	B2	土師器	大口径	10	反					にぶい黄緑	底径 4.4
41	甕b	608	640	3001	B3	土師器	大口径	10	反					灰黄	底径 4.0、底径 6.0、底面煤付着
41	甕b	609	977	3001	B3	土師器	大口径	10	反					にぶい黄緑	底径 5.2、底径 7.0、内面煤付着
41	甕b	610	540	3001	B3	土師器	大口径	10	反					黄	底径 4.6、底径 9.1、煤付着
41	甕b	611	1563	3001	C3	土師器	大口径	30	反					にぶい黄緑	底径 4.7、底径 9.5
41	甕b	612	445	3001	A2	土師器	大口径	20	反					黄	底径 6.2、底径 12.8
41	甕b	613	1551	3001	B2	土師器	大口径	20	反					黄	底径 7.5、底径 15.0

出土地物観察表

Fig	図位	番号	取上番号	遺構	グランド	種類	説明	長さ	幅	厚	面積	口径	色調	備考	
41	墳b	614	1867	S001	B2	土師器	甕	30					灰黄	即置径 5.8、底径 11.2	
41	墳b	615	519	S001	A2	土師器	甕	30					灰黄	即置径 6.2、底径 11.3	
41	墳b	616	1675	S001	B3	土師器	甕	30					にぶい黄緑	即置径 5.4、底径 11.6	
41	墳b	617	506	S001	B2	土師器	甕	30					灰黄緑	即置径 6.6、底径 13.2	
41	墳b	618	1805	S001	C3	土師器	甕	30					淡緑	即置径 7.8、底径 14.2	
41	墳b	619	832	S001	C3	土師器	甕	30					黄土	即置径 7.4、底径 14.3	
41	墳b	620	1632	S001	B2	土師器	甕	30					にぶい黄緑	即置径 4.6、底径 8.8	
41	墳b	621	567	S001	B2	土師器	甕	30					灰黄緑	即置径 7.2、底径 13.9	
41	墳b	622	521	S001	A2	土師器	甕	30					灰黄緑	即置径 5.7、底径 11.2	
41	墳b	623	471	S001	B2	土師器	甕	30	反				にぶい黄緑	即置径 5.3、底径 14.2	
41	墳b	624	1251	S001	C3	土師器	甕	40					にぶい黄緑	即置径 7.3、底径 15.0	
41	墳b	625	1546	S001	B3	土師器	甕	20					にぶい黄緑	即置径 9.5、底径 14.1	
41	墳b	626	1657	S001	B3	土師器	甕	5					暗灰	高さ僅成・発見	
41	墳b	627	542	S001	B2	土師器	甕	5					にぶい暗色	高さ僅成・発見	
41	墳b	628	1696	S001	B3	土製品	支脚						黄灰	経直、使用直	
41	墳b	629	1651	S001	B3	土製品	支脚						黄灰	経直、使用直	
41	墳b	630	1562	S001	C3	土製品	支脚						にぶい黄緑		
41	墳b	631	1869	S001	B2	土製品	支脚						にぶい黄緑		
41	墳b	632	540	S001	B3	土製品	支脚						淡緑		
42	墳b	633	1229	S001	C3	石製品	小玉	100		8.2		0.2	緑色	0.1g 未満の為計測不能。鑄型法	
42	墳b	634	561	S001	B2	石製品	小玉	100		0.4		0.2	緑色	0.1g 未満の為計測不能。鑄型法	
42	墳b	635	1913	S001	B2	石製品	小玉	100		0.5		0.3	水色	0.1g 未満の為計測不能。鑄型法、発見	
42	墳b	636	1593	S001	B2	石製品	白玉	100		0.6		0.2	緑灰	0.2g、滑石	
42	墳b	637	926	S001	B2	石製品	丸玉	100		0.8		0.5	黒	0.5g、粒状物	
42	墳b	638	1591	S001	B2	石製品	白玉	100		0.9		0.6	緑灰	0.8g、滑石	
42	墳b	639	1590	S001	B2	石製品	白玉	100		0.8		0.7	緑色	0.5g、鑄型法、面有リ	
42	墳b	640	923	S001	B2	石製品	曹玉	100		0.8	2.2	0.7	淡緑	1.9g、粒状物	
42	墳b	641	1592	S001	B2	石製品	曹玉	100		0.9	2.2	0.9	淡黄	2.4g、粒状物	
42	墳b	642	925	S001	B3	石製品	曹玉	100		0.9	2.8	0.9	深緑	3.5g、曹玉	
42	墳b	643	999	S001	B3	土製品	紡錘車	50		3.5	1.8		にぶい黄緑	10.9g	
42	墳b	644	1238	S001	C3	土製品	紡錘車	100		4.3	2.7		にぶい黄緑	46.3g	
42	墳b	645	553	S001	B2	土製品	土埴	100		6.0	6.1	2.1	にぶい黄緑	87.1g、紐ズレ有り	
42	墳b	646	1926	S001	D3	土製品	土埴	95		1.8	4.9		にぶい黄緑	13.0g	
42	墳b	647	1180	S001	C3	土製品	土埴	30		4.0	4.9		にぶい黄緑	54.1g	
42	墳b	648	1075	S001	C3	土製品	土埴	50		3.6	5.2		灰黄	52.5g	
42	墳b	649	1075	S001	C3	土製品	土埴	50		3.0	5.6		にぶい黄緑	41.7g	
42	墳b	650	1076	S001	C3	土製品	土埴	40		3.8	4.2		緑灰	39.0g	
42	墳b	651	1165	S001	C2	土製品	土埴	30		3.5			灰	内径 1.4、全面磨蝕	
42	墳b	652	507	S001	B3	須恵器	鉢	20					灰	底径 4.0、5号、内面・断面に遺痕、15°方向右	
42	墳b	653	515	S001	B3	須恵器	鉢	10		7.0			黄緑	内径 2.6、20.6g、羽口付遺	
42	墳b	654	1175	S001	C3	土製品	輪			5.8			黄緑	内径 2.4	
42	墳b	655	644	S001	B3	土製品	輪			5.8			灰	内径 2.0	
42	墳b	656	1674	S001	B2	土製品	輪	10		5.0			黄緑	内径 2.4	
42	墳b	657	1549	S001	B3	須恵器	鉢			4.5	5.7	1.8			29.7g
42	墳b	658	1682	S001	B3	石製品	硖石			2.4	5.1	1.7			25.9g、凝灰岩、磨蝕
42	墳b	659	1030	S001	B2	石製品	硖石			3.6	4.5	3.3			65.1g、凝灰岩
42	墳b	660	558	S001	A2	石製品	硖石			3.9	7.6	2.2			70.2g、凝灰岩
42	墳b	661	23	S001	C3	石製品	硖石			3.7	5.5	3.2		白灰	71.0g、凝灰岩
42	墳b	662	1073	S001	C2	石製品	硖石			6.9	7.4	4.8			268.3g、凝灰岩
42	墳b	663	1173	S001	C3	石製品	硖石			5.1	9.5	3.5			151.2g、凝灰岩
42	墳b	664	13	S001	A3	石製品	硖石			9.6	11.8	3.7			207.8g、凝灰岩
42	墳b	665	1145	S001	C2	石製品	硖石			6.1	10.3	5.2			312.2g、凝灰岩
42	墳b	666	627	S001	B2	石製品	硖石			8.0	11.2	5.3			642g、凝灰岩
42	墳b	667	1145	S001	C2	石製品	硖石			7.0	12.8	5.5			505.9g、凝灰岩
42	墳b	668	1543	S001	B3	石製品	硖石			6.6	15.8	3.7			356.8g、凝灰岩
42	墳b	669	1285	S001	D3	石製品	硖石			7.5	16.9	4.5			832g、凝灰岩
42	墳b	670	1667	S001	B2	石製品	中石			5.2	13.2	4.6			475.3g、輝緑岩
47	墳a	1	680	S001	B3	須恵器	坏蓋	30					暗緑	15°方向左	
47	墳a	2	459	S001	A3	須恵器	坏蓋	80					暗灰	15°方向左	
47	墳a	3	201	S001	B3	須恵器	坏蓋	70					暗灰	15°方向左	
47	墳a	4	666	S001	B3	須恵器	坏蓋	20	反				灰		
47	墳a	5	1289	S001	D3	須恵器	坏蓋	20	反				灰		
47	墳a	6	1219	S001	D3	須恵器	坏蓋	50					灰	15°方向左	
47	墳a	7	756	S001	C3	須恵器	坏蓋	40	反				灰	15°方向左、磨きぶくれ、ゆがみ	
47	墳a	8	1269	S001	E3	須恵器	坏蓋	10					灰白	15°方向左	
47	墳a	9	201	S001	B3	須恵器	坏蓋	20	反				灰	15°方向左	
47	墳a	10	448	S001	A2	須恵器	坏蓋	40	反				灰白	上蓋未調査	
47	墳a	11	649	S001	B3	須恵器	坏蓋	20	反				灰	15°方向左	
47	墳a	12	1962	S001	D3	須恵器	坏蓋	60					暗灰	15°方向右	
47	墳a	13	792	S001	E3	須恵器	坏蓋	20					灰	15°方向右	
47	墳a	14	1846	S001	D3	須恵器	坏蓋	40	反				灰		
47	墳a	15	863	S001	B3	須恵器	坏蓋	10					灰		
47	墳a	16	1849	S001	E3	須恵器	坏蓋	40	反				灰		
47	墳a	17	308	S001	B2	須恵器	坏蓋	70					灰白	15°方向右	
47	墳a	18	1837	S001	D3	須恵器	坏蓋	30	反				暗灰	15°方向左	
47	墳a	19	418	S001	A3	須恵器	坏蓋	70					灰	15°方向左	
47	墳a	20	1179	S001	C3	須恵器	坏蓋	30	反				灰		
47	墳a	21	1099	S001	C3	須恵器	坏蓋	90					灰青		
47	墳a	22	634	S001	B3	須恵器	坏蓋	100					灰	上蓋未調査	
47	墳a	23	1263	S001	D2	須恵器	坏蓋	30	反				灰	15°方向左	
47	墳a	24	717	S001	B3	須恵器	坏蓋	60					にぶい暗緑	15°方向右	
47	墳a	25	707	S001	C3	須恵器	坏蓋	30	反				灰	15°方向右	
47	墳a	26	756	S001	C3	須恵器	坏蓋	60	反				灰	15°方向右	
47	墳a	27	663	S001	B3	須恵器	坏蓋	40					灰	15°方向左	

Fig	図位	番号	取上番号	遺構	グリッド	種類	説明	長さ(寸)	幅(寸)	厚さ(寸)	口径(寸)	色調	備考	
47	Ⅷa	28	660	S001	C3	須恵器	杯蓋	80		12.4	4.7	灰	Ⅷ1方向右、A5記号	
47	Ⅷa	29	736	S001	C3	須恵器	杯蓋	30	反	12.2		灰白		
47	Ⅷa	30	1813	S001	E3	須恵器	杯蓋	20	反	12.0		灰	Ⅷ1方向左	
47	Ⅷa	31	1291	S001	D3	須恵器	杯蓋	20	反	12.0		灰	Ⅷ1方向左	
47	Ⅷa	32	1290	S001	D3	須恵器	杯蓋	10	反	12.0		灰	Ⅷ1方向左	
47	Ⅷa	33	694	S001	C2	須恵器	杯蓋	40		11.8	3.4	灰	Ⅷ1方向右	
47	Ⅷa	34	596	S001	B3	須恵器	杯蓋	50		11.8		灰白	Ⅷ1方向左	
47	Ⅷa	35	1170	S001	C2	須恵器	杯蓋	40	反	11.8	4.1	灰白	Ⅷ1方向左、上部未調整	
47	Ⅷa	36	1291	S001	D3	須恵器	杯蓋	20	反	11.8	4.0	11.4	灰	Ⅷ1方向右、横ぶくれ
47	Ⅷa	37	420	S001	D3	須恵器	杯蓋	20		12.0		灰	Ⅷ1方向右、上部未調整?	
47	Ⅷa	38	291	S001	B3	須恵器	杯蓋	100		11.7	4.1	灰	Ⅷ1方向右、A5記号	
47	Ⅷa	39	1534	S001	A3	須恵器	杯蓋	30	反	11.6	4.6	灰褐	Ⅷ1方向右	
47	Ⅷa	40	1849	S001	E3	須恵器	杯蓋	20	反	11.6		灰	Ⅷ1方向右、内面横ぶくれ	
47	Ⅷa	41	659	S001	C2	須恵器	杯蓋	90		11.6		灰	A5記号	
47	Ⅷa	42	786	S001	D3	須恵器	杯蓋	30	反	11.6	4.4	暗灰	Ⅷ1方向右、外側自然釉	
47	Ⅷa	43	453	S001	A2	須恵器	杯蓋	30	反	11.6		灰		
47	Ⅷa	44	429	S001	D3	須恵器	杯蓋	20	反	11.6		灰		
47	Ⅷa	45	463	S001	A3	須恵器	杯蓋	40	反	11.4	3.8	灰	Ⅷ1方向左	
47	Ⅷa	46	1295	S001	D3	須恵器	杯蓋	50	反	11.2	4.3	灰	Ⅷ1方向左、A5記号	
47	Ⅷa	47	1170	S001	C2	須恵器	杯蓋	40	反	11.2	4.3	灰	Ⅷ1方向右	
47	Ⅷa	48	655	S001	B2	須恵器	杯蓋	30		11.1	4.6	明褐色	Ⅷ1方向右	
47	Ⅷa	49	1293	S001	D3	須恵器	杯蓋	20	反	11.0	3.2	灰	Ⅷ1方向右	
47	Ⅷa	50	1443	S001	D3	須恵器	杯蓋	30	反	11.0	4.6	灰	Ⅷ1方向右、横ぶくれ、自然釉	
47	Ⅷa	51	1250	S001	C2	須恵器	杯蓋	30	反	11.2	4.3	11.0	にぶい緑	
47	Ⅷa	52	1844	S001	D3	須恵器	杯蓋	30	反	11.0	3.7	灰白	Ⅷ1方向右	
47	Ⅷa	53	1930	S001	D3	須恵器	杯蓋	20	反	11.0	3.5	暗灰	Ⅷ1方向左	
47	Ⅷa	54	802	S001	D3	須恵器	杯蓋	90		10.8	3.5	灰	Ⅷ1方向右	
47	Ⅷa	55	1291	S001	D3	須恵器	杯蓋	20	反	10.8	3.7	灰		
47	Ⅷa	56	1841	S001	D3	須恵器	杯蓋	20	反	10.8		灰	A5記号	
47	Ⅷa	57	1928	S001	D3	須恵器	杯蓋	80		10.8	4.4	灰	Ⅷ1方向左、A5記号	
47	Ⅷa	58	645	S001	B3	須恵器	杯蓋	80		10.8	4.1	灰	Ⅷ1方向左	
47	Ⅷa	59	1840	S001	D3	須恵器	杯蓋	70		10.8	3.9	黄灰	Ⅷ1方向左、横ぶくれ	
47	Ⅷa	60	1291	S001	D3	須恵器	杯蓋	40	反	10.8	4.5	緑灰	Ⅷ1方向右	
47	Ⅷa	61	645	S001	B3	須恵器	杯蓋	30		10.8		灰	Ⅷ1方向左、横ぶくれ	
47	Ⅷa	62	1849	S001	E3	須恵器	杯蓋	30	反	10.8		灰	横ぶくれ	
47	Ⅷa	63	1291	S001	D3	須恵器	杯蓋	40	反	10.8	4.1	灰	Ⅷ1方向左	
47	Ⅷa	64	1433	S001	D3	須恵器	杯蓋	60		10.6	3.9	灰	上部未調整	
47	Ⅷa	65	418	S001	A3	須恵器	杯蓋	60	反	10.6	4.1	灰	Ⅷ1方向左、A5記号	
47	Ⅷa	66	813	S001	E3	須恵器	杯蓋	40		10.6	4.2	灰	Ⅷ1方向右、A5記号	
47	Ⅷa	67	794	S001	B3	須恵器	杯蓋	40	反	10.6		灰		
47	Ⅷa	68	817	S001	D3	須恵器	杯蓋	30	反	10.6		暗灰		
47	Ⅷa	69	786	S001	D3	須恵器	杯蓋	20	反	10.4	4.7	Ⅷa	上部未調整、横ぶくれ	
47	Ⅷa	70	1420	S001	D3	須恵器	杯蓋	70		10.4	3.8	暗灰		
47	Ⅷa	71	810	S001	D3	須恵器	杯蓋	70		10.4	3.9	灰	上部静止?A51?	
47	Ⅷa	72	1095	S001	C2	須恵器	杯蓋	70		10.2	4.2	10.0	灰	Ⅷ1方向左
47	Ⅷa	73	1925	S001	D3	須恵器	杯蓋	40	反	10.2	3.8	灰白	Ⅷ1方向左	
47	Ⅷa	74	1425	S001	D3	須恵器	杯蓋	80		10.2	3.9	暗灰	Ⅷ1方向左、外周自然釉	
47	Ⅷa	75	1897	S001	D3	須恵器	杯蓋	70		10.2	3.8	灰	上部未調整	
47	Ⅷa	76	816	S001	D3	須恵器	杯蓋	50		10.2	3.8	灰	上部未調整、A5記号	
47	Ⅷa	77	807	S001	D2	須恵器	杯蓋	30	反	10.2	3.3	暗灰	手持ち?A51?	
47	Ⅷa	78	782	S001	D3	須恵器	杯蓋	30	反	10.2	3.8	灰	A5記号、Ⅷ1方向左	
47	Ⅷa	79	788	S001	E3	須恵器	杯蓋	20	反	10.3	3.3	10.1	灰白	
47	Ⅷa	80	732	S001	C2	須恵器	杯蓋	60		10.3	3.6	10.0	灰	上部未調整
47	Ⅷa	81	1437	S001	D3	須恵器	杯蓋	80		10.0	3.7	灰	上部未調整、A5記号	
47	Ⅷa	82	743	S001	C2	須恵器	杯蓋	80		10.0	3.4	灰	上部未調整、A5記号	
47	Ⅷa	83	1300	S001	D3	須恵器	杯蓋	10	反	10.0		暗灰		
47	Ⅷa	84	1297	S001	C2	須恵器	杯蓋	10	反	10.0	4.0	灰	Ⅷ1方向右	
47	Ⅷa	85	1291	S001	D3	須恵器	杯蓋	40	反	10.0	3.6	灰褐	外周自然釉	
47	Ⅷa	86	1294	S001	D3	須恵器	杯蓋	30	反	10.0	3.5	灰	Ⅷ1方向左	
47	Ⅷa	87	702	S001	C2	須恵器	杯蓋	20	反	10.0	3.8	灰		
47	Ⅷa	88	1074	S001	C2	須恵器	杯蓋	10	反	10.0		灰		
47	Ⅷa	89	1297	S001	C2	須恵器	杯蓋	40		10.4	3.3	10.0	灰	A5記号、Ⅷ1方向右
47	Ⅷa	90	749	S001	E3	須恵器	杯蓋	100		9.8	3.5	灰	上部未調整、A5記号	
47	Ⅷa	91	785	S001	D3	須恵器	杯蓋	50	反	9.8	3.5	灰	Ⅷ1方向左	
47	Ⅷa	92	812	S001	D3	須恵器	杯蓋	40	反	9.8	3.3	暗褐色		
47	Ⅷa	93	1298	S001	D3	須恵器	杯蓋	20	反	9.8	3.8	灰白	Ⅷ1方向右	
47	Ⅷa	94	669	S001	C2	須恵器	杯蓋	25	反	10.0	4.0	9.7	灰	Ⅷ1方向右
47	Ⅷa	95	419	S001	B2	須恵器	杯蓋	60		9.6	3.9	9.7	灰	
47	Ⅷa	96	813	S001	D3	須恵器	杯蓋	90		9.6	3.4	灰	Ⅷ1方向右	
47	Ⅷa	97	1442	S001	D3	須恵器	杯蓋	100		9.6	3.2	灰	上部未調整	
47	Ⅷa	98	1088	S001	C2	須恵器	杯蓋	60		10.0	3.6	9.6	灰	外周黄い文様
47	Ⅷa	99	1531・651	S001	B2・B3	須恵器	杯蓋	50		9.8	3.4	9.6	灰	Ⅷ1方向右
47	Ⅷa	100	1425	S001	D3	須恵器	杯蓋	40	反	9.6	3.4	暗灰		
47	Ⅷa	101	1932	S001	E3	須恵器	杯蓋	30	反	9.6	4.0	灰	Ⅷ1方向右	
47	Ⅷa	102	1438	S001	D3	須恵器	杯蓋	30	反	9.6	3.4	灰		
47	Ⅷa	103	1086	S001	C2	須恵器	杯蓋	50		9.6	3.7	9.2	灰	Ⅷ1方向右
47	Ⅷa	104	410	S001	A2	須恵器	杯蓋	95		9.4	3.3	灰	Ⅷ1方向右、上部未調整	
47	Ⅷa	105	1910	S001	A2	須恵器	杯蓋	80		9.5	3.5	灰	Ⅷ1方向右	
47	Ⅷa	106	815	S001	D3	須恵器	杯蓋	30	反	9.4	3.5	灰	外周自然釉	
47	Ⅷa	107	414	S001	A2	須恵器	杯蓋	60	反	9.2	3.7	灰	Ⅷ1方向左	
47	Ⅷa	108	412	S001	A2	須恵器	杯蓋	100		8.4	3.7	灰	Ⅷ1方向左	
47	Ⅷa	109	736	S001	C3	須恵器	杯蓋	30	反	16.4		13.3	灰白	外周自然釉、重ね模様、Ⅷ1方向右
47	Ⅷa	110	686	S001	B3	須恵器	杯蓋	30	反	16.0		13.0	灰	Ⅷ1方向左
47	Ⅷa	111	1261	S001	D2	須恵器	杯蓋	40	反	16.0		13.6	灰	Ⅷ1方向左

出土遺物観察表

Fig	図位	番号	取上番号	遺構	グランド	種類	地所	長径	短径	厚さ	口径	色調	備考	
49	Ⅷa	112	597	S001	B3	遺棄物	坪井	10	反	15.5	12.8	灰	外蓋自然釉	
49	Ⅷa	113	446	S001	A2	遺棄物	坪井	20	反	15.3	13.4	灰	Ⅱ' 1' 方向左	
49	Ⅷa	114	306	S001	B2	遺棄物	坪井	40	反	15.0	12.6	灰	Ⅱ' 1' 方向左	
49	Ⅷa	115	1842	S001	D3	遺棄物	坪井	20	反	15.0	3.5	12.8	灰	
49	Ⅷa	116	462	S001	B3	遺棄物	坪井	20	反	15.0	13.0	灰	Ⅱ' 1' 方向左	
49	Ⅷa	117	1813	S001	E3	遺棄物	坪井	20	反	14.4	3.6	12.4	灰白	Ⅱ' 1' 方向左
49	Ⅷa	118	278	S001	A2	遺棄物	坪井	100	反	14.4	4.6	12.6	灰	Ⅱ' 1' 方向左
49	Ⅷa	119	308	S001	B2	遺棄物	坪井	20	反	14.0	12.2	灰白	Ⅱ' 1' 方向左	
49	Ⅷa	120	1852	S001	E3	遺棄物	坪井	20	反	14.0	12.2	灰	立ち上がり内面褐色	
49	Ⅷa	121	719	S001	C3	遺棄物	坪井	10	反	14.2	12.0	灰	Ⅱ' 1' 方向右、外蓋自然釉	
49	Ⅷa	122	784	S001	D3	遺棄物	坪井	30	反	14.0	11.5	灰		
49	Ⅷa	123	1292	S001	B3	遺棄物	坪井	20	反	14.0	11.8	灰	Ⅱ' 1' 方向左	
49	Ⅷa	124	545	S001	B3	遺棄物	坪井	20	反	14.0	3.9	12.0	灰	外蓋自然釉
49	Ⅷa	125	1287	S001	D3	遺棄物	坪井	60	反	13.6	4.5	11.4	灰	Ⅱ' 1' 方向左
49	Ⅷa	126	787	S001	D3	遺棄物	坪井	20	反	13.2	11.0	灰		
49	Ⅷa	127	1852	S001	E3	遺棄物	坪井	20	反	13.2	11.0	灰	Ⅱ' 1' 方向右	
49	Ⅷa	128	863	S001	B3	遺棄物	坪井	40	反	13.1	11.4	灰	Ⅱ' 1' 方向右	
49	Ⅷa	129	1917	S001	D3	遺棄物	坪井	20	反	13.0	3.5	10.8	灰	Ⅱ' 1' 方向右
49	Ⅷa	130	1851	S001	E3	遺棄物	坪井	20	反	13.0	10.8	灰白		
49	Ⅷa	131	635	S001	B3	遺棄物	坪井	90	反	13.0	4.8	10.2	灰	Ⅱ' 1' 方向左
49	Ⅷa	132	704	S001	C3	遺棄物	坪井	70	反	13.0	10.9	明灰白		
49	Ⅷa	133	699	S001	C3	遺棄物	坪井	30	反	12.9	10.2	灰白		
49	Ⅷa	134	721	S001	B2	遺棄物	坪井	80	反	12.9	4.4	11.0	灰	Ⅱ' 1' 方向右
49	Ⅷa	135	1909	S001	D3	遺棄物	坪井	100	反	12.8	4.2	10.6	灰	Ⅱ' 1' 方向左、△記号
49	Ⅷa	136	1906	S001	E3	遺棄物	坪井	100	反	12.7	4.2	10.8	灰	外蓋自然釉、内面焼く、受け部変色
49	Ⅷa	137	774 + 792	S001	E3	遺棄物	坪井	90	反	12.7	3.7	10.8	灰白	造部什調整、黒変
49	Ⅷa	138	698	S001	C3	遺棄物	坪井	40	反	12.6	4.3	10.5	灰白	
49	Ⅷa	139	655	S001	B2	遺棄物	坪井	30	反	12.6	10.2	10.2	灰白	Ⅱ' 1' 方向左
49	Ⅷa	140	1295	S001	D3	遺棄物	坪井	90	反	12.6	3.7	10.6	灰	Ⅱ' 1' 方向左、△記号、受け部変色焼痕
49	Ⅷa	141	736	S001	C3	遺棄物	坪井	20	反	12.5	10.5	10.5	灰	外蓋自然釉、内面焼く
49	Ⅷa	142	1019	S001	C3	遺棄物	坪井	40	反	12.4	4.5	10.0	灰	Ⅱ' 1' 方向左
49	Ⅷa	143	1234	S001	B2	遺棄物	坪井	20	反	12.4	10.0	10.0	暗灰	Ⅱ' 1' 方向左
49	Ⅷa	144	845	S001	B3	遺棄物	坪井	50	反	12.3	4.4	9.6	灰	Ⅱ' 1' 方向右、△記号、自然釉、焼く
49	Ⅷa	145	1919	S001	D3	遺棄物	坪井	40	反	12.2	10.2	10.2	灰	Ⅱ' 1' 方向左
49	Ⅷa	146	381	S001	A2	遺棄物	坪井	90	反	12.1	4.4	9.8	灰	Ⅱ' 1' 方向左
49	Ⅷa	147	1148	S001	C2	遺棄物	坪井	60	反	12.0	9.8	9.8	灰	造部未調整
49	Ⅷa	148	312	S001	B2	遺棄物	坪井	40	反	12.0	10.0	10.0	灰白	Ⅱ' 1' 方向右、△記号
49	Ⅷa	149	1295	S001	D3	遺棄物	坪井	20	反	12.0	3.3	9.6	灰	造部未調整
49	Ⅷa	150	688	S001	C2	遺棄物	坪井	100	反	12.0	4.1	9.6	灰	Ⅱ' 1' 方向右
49	Ⅷa	151	744	S001	C2	遺棄物	坪井	40	反	12.0	9.6	9.6	灰	造部未調整
49	Ⅷa	152	1915	S001	D3	遺棄物	坪井	30	反	12.0	3.7	9.8	灰	外蓋自然釉
49	Ⅷa	153	1852	S001	E3	遺棄物	坪井	30	反	12.0	3.4	10.8	灰	Ⅱ' 1' 方向左
50	Ⅷa	154	753	S001	C2	遺棄物	坪井	40	反	12.0	3.7	9.6	灰	Ⅱ' 1' 方向左
50	Ⅷa	155	645	S001	B3	遺棄物	坪井	20	反	11.9	10.0	10.0	灰	Ⅱ' 1' 方向左
50	Ⅷa	156	1287	S001	D3	遺棄物	坪井	60	反	11.8	4.3	8.4	灰	造部未調整
50	Ⅷa	157	464	S001	A3	遺棄物	坪井	40	反	11.8	4.3	9.8	灰	造部手付? Y
50	Ⅷa	158	1178	S001	C3	遺棄物	坪井	60	反	11.6	4.7	10.5	灰白	
50	Ⅷa	159	1440	S001	D3	遺棄物	坪井	30	反	11.8	3.7	10.0	灰白	Ⅱ' 1' 方向左
50	Ⅷa	160	597	S001	B3	遺棄物	坪井	50	反	11.6	3.8	9.4	灰	Ⅱ' 1' 方向左
50	Ⅷa	161	736	S001	C3	遺棄物	坪井	10	反	11.4	9.4	9.4	灰	Ⅱ' 1' 方向右
50	Ⅷa	162	279	S001	A2	遺棄物	坪井	95	反	11.4	3.1	9.4	灰	Ⅱ' 1' 方向左、造部未調整
50	Ⅷa	163	1019	S001	C2	遺棄物	坪井	50	反	11.4	4.1	9.4	灰	Ⅱ' 1' 方向左
50	Ⅷa	164	358	S001	B3	遺棄物	坪井	40	反	11.2	4.0	9.0	灰	Ⅱ' 1' 方向右、焼く
50	Ⅷa	165	1423	S001	D3	遺棄物	坪井	90	反	11.2	3.4	9.2	灰	Ⅱ' 1' 方向右、外蓋自然釉
50	Ⅷa	166	782	S001	D3	遺棄物	坪井	50	反	11.2	3.0	9.2	暗灰	
50	Ⅷa	167	1268	S001	C2	遺棄物	坪井	60	反	11.0	3.4	9.2	灰	造部未調整
50	Ⅷa	168	1844	S001	D3	遺棄物	坪井	20	反	11.0	3.5	9.0	灰	造部未調整
50	Ⅷa	169	292	S001	B3	遺棄物	坪井	50	反	11.0	3.8	9.0	灰	Ⅱ' 1' 方向左、△記号、焼く
50	Ⅷa	170	1280	S001	D2	遺棄物	坪井	60	反	11.0	4.2	9.6	灰	Ⅱ' 1' 方向左
50	Ⅷa	171	600	S001	B3	遺棄物	坪井	40	反	10.8	8.8	8.8	灰	Ⅱ' 1' 方向左
50	Ⅷa	172	302	S001	B3	遺棄物	坪井	70	反	10.8	3.1	8.8	灰	造部未調整
50	Ⅷa	173	1439	S001	D3	遺棄物	坪井	60	反	10.8	3.3	8.6	灰	△記号
50	Ⅷa	174	1289	S001	D3	遺棄物	坪井	50	反	10.7	4.6	8.6	灰	Ⅱ' 1' 方向左
50	Ⅷa	175	1931 + 1944	S001	E3 + C3	遺棄物	坪井	50	反	10.6	3.5	8.5	灰	
50	Ⅷa	176	1430	S001	D3	遺棄物	坪井	70	反	10.6	3.5	8.8	灰白	Ⅱ' 1' 方向右
50	Ⅷa	177	409	S001	A2	遺棄物	坪井	100	反	10.6	3.1	8.8	灰	Ⅱ' 1' 方向左
50	Ⅷa	178	359	S001	B3	遺棄物	坪井	95	反	10.5	3.4	8.5	灰	△記号、左
50	Ⅷa	179	295	S001	B3	遺棄物	坪井	20	反	12.2	10.4	10.4	にない焼	
50	Ⅷa	180	1441	S001	D3	遺棄物	坪井	30	反	10.4	4.0	8.4	暗灰	Ⅱ' 1' 方向左
50	Ⅷa	181	1245	S001	D2	遺棄物	坪井	60	反	10.4	3.9	8.0	灰	Ⅱ' 1' 方向右、造部未調整
50	Ⅷa	182	1289	S001	D3	遺棄物	坪井	50	反	10.4	3.6	8.4	灰白	Ⅱ' 1' 方向左、△記号
50	Ⅷa	183	1908	S001	D3	遺棄物	坪井	100	反	10.4	3.3	8.4	灰	Ⅱ' 1' 方向左
50	Ⅷa	184	415	S001	A2	遺棄物	坪井	40	反	10.4	3.5	8.4	灰	Ⅱ' 1' 方向左、造部未調整
50	Ⅷa	185	1169	S001	C2	遺棄物	坪井	50	反	10.2	3.3	8.0	灰	Ⅱ' 1' 方向右
50	Ⅷa	186	1213	S001	B2	遺棄物	坪井	50	反	10.2	3.6	8.0	灰	
50	Ⅷa	187	1245	S001	D2	遺棄物	坪井	50	反	10.2	3.2	8.2	灰色	Ⅱ' 1' 方向右
50	Ⅷa	188	706	S001	C3	遺棄物	坪井	70	反	12.4	11.0	11.0	灰白	Ⅱ' 1' 方向右
50	Ⅷa	189	354	S001	B2	遺棄物	坪井	70	反	12.0	4.3	10.6	灰白	
50	Ⅷa	190	792 + 793	S001	C3	遺棄物	坪井	90	反	11.8	3.1	10.0	灰	造部未調整
50	Ⅷa	191	1091	S001	C2	遺棄物	坪井	100	反	11.2	2.8	9.2	暗灰	造部未調整
50	Ⅷa	192	816	S001	D3	遺棄物	坪井	100	反	10.6	3.1	9.0	灰	造部未調整
50	Ⅷa	193	1426	S001	D3	遺棄物	坪井	100	反	10.4	3.2	8.6	灰	造部未調整
50	Ⅷa	194	1424	S001	D3	遺棄物	坪井	100	反	10.0	2.8	8.2	灰	Ⅱ' 1' 方向左、△記号、外蓋自然釉
50	Ⅷa	195	1419	S001	B2	遺棄物	坪井	90	反	10.0	3.3	8.2	灰	Ⅱ' 1' 方向右

Flr	階位	番号	取上番号	遺構	グランド	種類	総所	長	幅	厚	傾斜	高さ	口縁	色調	備考
50	Ⅷa	196	411	3001	A2	遺石器	坪身	95		10.0	3.0	8.8		灰	Ⅱ' 1' 方向右
50	Ⅷa	197	36	3001	B2	遺石器	坪身	50		9.9	3.2	8.0		灰白	
50	Ⅷa	198	1432	3001	D3	遺石器	坪身	70		11.2	2.7	9.4		雑炭	内面2次焼成?
50	Ⅷa	199	770	3001	E3	遺石器	坪身	80		10.9	2.6			灰	Ⅱ' 1' 方向左、+5記号
50	Ⅷa	200	360・702	3001	B1・C2	遺石器	坪身	95		10.8	2.7	8.4		灰	Ⅱ' 1' 方向左
50	Ⅷa	201	764	3001	E3	遺石器	坪身	70		10.8	2.8			灰	遺部未調整
50	Ⅷa	202	1202	3001	C3	遺石器	坪身	30	反	10.8		8.6		灰	遺部未調整
50	Ⅷa	203	1291	3001	D3	遺石器	坪身	30	反	11.2	3.0	9.4		灰白	遺部未調整
50	Ⅷa	204	1085	3001	C2	遺石器	坪身	60	反	10.5	3.0	8.6		灰	遺部未調整
50	Ⅷa	205	816	3001	D3	遺石器	坪身	100		10.4	2.5	9.0		灰	遺部未調整
50	Ⅷa	206	817	3001	D3	遺石器	坪身	100		10.4	2.6	8.8		雑炭	遺部未調整
50	Ⅷa	207	795	3001	B3	遺石器	坪身	20	反	9.8		8.2		灰	Ⅱ' 1' 方向左
50	Ⅷa	208	1436	3001	D3	遺石器	坪身	50		9.8	2.6	7.8		雑炭	遺部未調整、+5記号
50	Ⅷa	209	420	3001	A3	遺石器	坪身	20	反	9.8		7.8		灰	遺部未調整、+5記号
51	Ⅷa	210	1902	3001	D3	遺石器	返り蓋	30		10.2				灰	反付-7 反軸
51	Ⅷa	211	694	3001	C2	遺石器	返り蓋	40	反	10.2		7.0		灰	自然軸
51	Ⅷa	212	301・356	3001	B3	遺石器	返り蓋	30		10.2	2.6			赤灰	Ⅱ' 1' 方向右、組み径2.4
51	Ⅷa	213	750	3001	C3	遺石器	返り蓋	95		10.3		8.4		灰	焼ぶくれ
51	Ⅷa	214	1820	3001	D3	遺石器	返り蓋	20	反	11.0				灰	
51	Ⅷa	215	1295	3001	D3	遺石器	返り蓋	30		11.2				灰	
51	Ⅷa	216	817	3001	D3	遺石器	無台坪身	60	反	10.2	4.1			灰	
51	Ⅷa	217	1435	3001	D3	遺石器	無台坪身	90		11.0	4.1			灰	
51	Ⅷa	218	518	3001	A2	遺石器	無台坪身	50	反	10.2	3.8			灰	遺部未調整
51	Ⅷa	219	801	3001	D2	遺石器	無台坪身	80		11.2	4.0			雑炭	遺部静止Ⅱ' 1'
51	Ⅷa	220	773	3001	E3	遺石器	無台坪身	90		11.3	3.9			灰	遺部未調整
51	Ⅷa	221	781	3001	D2	遺石器	無台坪身	50		11.4	4.3			灰	遺部未調整、内面自然軸
51	Ⅷa	222	1259	3001	D2	遺石器	無台坪身	90		11.4	4.0			灰	遺部未調整
51	Ⅷa	223	825	3001	D3	遺石器	無台坪身	70		11.4	4.2			灰白	遺部未調整、内面自然軸
51	Ⅷa	224	706	3001	C3	遺石器	無台坪身	60	反	11.6	4.0			灰白	遺部未調整、+5記号
51	Ⅷa	225	808	3001	D3	遺石器	無台坪身	80		12.2	4.6			灰	遺部未調整
51	Ⅷa	226	725	3001	C2	遺石器	無台坪身	100		12.3	4.6			雑炭灰	Ⅱ' 1' 方向右
51	Ⅷa	227	820	3001	D3	遺石器	無台坪身	60	反	12.6	4.9			灰	遺部未調整
51	Ⅷa	228	790	3001	E3	遺石器	無台坪身	40	反	13.0	4.6			灰白	黒炭
51	Ⅷa	229	723	3001	C2	遺石器	無台坪身	80		15.6	6.2			灰	Ⅱ' 1' 方向右
51	Ⅷa	230	788	3001	A2	遺石器	無台坪身	70		9.4	4.0			雑炭	Ⅱ' 1' 方向左
51	Ⅷa	231	295	3001	B3	遺石器	無台坪身	20	反	9.2	3.7			灰	Ⅱ' 1' 方向右、+5記号
51	Ⅷa	232	228	3001	A2	遺石器	無台坪身	20	反	9.7				灰	Ⅱ' 1' 方向左
51	Ⅷa	233	1143	3001	C2	遺石器	無台坪身	40	反	9.8	3.1	9.4		雑炭	手付+Ⅱ' 1'
51	Ⅷa	234	657	3001	C2	遺石器	無台坪身	50		9.8	3.3			灰	
51	Ⅷa	235	1930	3001	D3	遺石器	無台坪身	10	反	10.0				灰	
51	Ⅷa	236	1422	3001	D2	遺石器	無台坪身	90		10.0	3.8			雑炭	遺部未調整
51	Ⅷa	237	817	3001	D3	遺石器	無台坪身	20		10.0	4.0			雑炭	遺部未調整
51	Ⅷa	238	798	3001	D3	遺石器	無台坪身	100		10.2	3.9			灰白	反付-7 反軸
51	Ⅷa	239	1903	3001	D3	遺石器	無台坪身	100		10.2	3.6			灰	Ⅱ' 1' 方向左、内面自然軸顯著
51	Ⅷa	240	1295	3001	D3	遺石器	無台坪身	50	反	10.2				灰	
51	Ⅷa	241	215	3001	A3	遺石器	無台坪身	20	反	10.0	3.2			雑炭	Ⅱ' 1' 方向右
51	Ⅷa	242	1250	3001	C2	遺石器	無台坪身	20		10.8				灰白	
51	Ⅷa	243	810	3001	D3	遺石器	無台坪身	30	反	10.4	2.5			灰	
51	Ⅷa	244	819	3001	D3	遺石器	無台坪身	40		10.6				灰	
51	Ⅷa	245	1900	3001	D3	遺石器	無台坪身	40	反	10.8	4.1	10.6		灰	遺部未調整
51	Ⅷa	246	1087	3001	C2	遺石器	無台坪身	70		11.0	4.2	10.7		灰	
51	Ⅷa	247	474	3001	B3	遺石器	無台坪身	100		11.0	2.7			灰白	+5付2??
51	Ⅷa	248	1272	3001	D3	遺石器	無台坪身	30		11.0				灰白	遺部未調整
51	Ⅷa	249	1205	3001	D2	遺石器	無台坪身	20	反	11.2				灰	Ⅱ' 1' 方向右、内面自然軸
51	Ⅷa	250	810	3001	D3	遺石器	無台坪身	20	反	11.6				灰	
51	Ⅷa	251	1845	3001	D3	遺石器	無台坪身	40	反	11.8	4.4			灰	
51	Ⅷa	252	1250	3001	C2	遺石器	無台坪身	70		11.6	3.9			灰白	遺部未調整、+5記号
51	Ⅷa	253	809	3001	D3	遺石器	無台坪身	10	反	12.0				灰	
51	Ⅷa	254	260	3001	A2	遺石器	無台坪身	70		12.0	5.1	12.0		灰	
51	Ⅷa	255	793	3001	E3	遺石器	無台坪身	40	反	12.2	3.9			灰	遺部未調整
51	Ⅷa	256	808	3001	D3	遺石器	無台坪身	70		12.2	4.9			灰	遺部未調整
51	Ⅷa	257	816	3001	D3	遺石器	無台坪身	40		12.2	4.1			灰白	遺部未調整、内面自然軸
52	Ⅷa	258	817・818	3001	D3	遺石器	無台坪身	80		12.2	5.0			灰	+5付2?
52	Ⅷa	259	1171	3001	C2	遺石器	無台坪身	60		12.2	4.5			灰	
52	Ⅷa	260		3001	D3	遺石器	無台坪身	10		12.2		8.2		灰白	
52	Ⅷa	261	778・790	3001	E3	遺石器	無台坪身	80		12.4	4.0			灰	Ⅱ' 1' 方向左
52	Ⅷa	262	811	3001	D3	遺石器	無台坪身	20	反	12.4				灰白	
52	Ⅷa	263	295	3001	B3	遺石器	無台坪身	20	反	12.4				灰	Ⅱ' 1' 方向左、内面自然軸
52	Ⅷa	264	717	3001	B3	遺石器	無台坪身	50	反	12.5	3.5			灰	遺部未調整
52	Ⅷa	265	786	3001	D3	遺石器	無台坪身	70		12.6	5.0			灰	
52	Ⅷa	266	1896	3001	D3	遺石器	無台坪身	90		12.6	5.0			灰	
52	Ⅷa	267	803	3001	D3	遺石器	無台坪身	100		12.6	5.0			灰	遺部未調整
52	Ⅷa	268	808	3001	D3	遺石器	無台坪身	30	反	13.0	4.1			灰	Ⅱ' 1' 方向左
52	Ⅷa	269	812	3001	D3	遺石器	無台坪身	30	反	13.4	4.6			灰白	
52	Ⅷa	270	785	3001	D3	遺石器	無台坪身	20	反	14.0	4.0			灰白	遺部未調整
52	Ⅷa	271	706	3001	C3	遺石器	無台坪身	20	反	14.4				灰	Ⅱ' 1' 方向右
52	Ⅷa	272	701	3001	D2	遺石器	無台坪身	20		14.0	5.0			灰	外蓋火だすき
52	Ⅷa	273	701	3001	D2	遺石器	無台坪身	20		14.0	4.4			雑炭	Ⅱ' 1' 方向左
52	Ⅷa	274	1207	3001	B2	遺石器	無台坪身	10	反	15.0				灰	
52	Ⅷa	275	711	3001	C2	遺石器	無台坪身	20	反	15.0	4.3			雑炭	遺部未調整
52	Ⅷa	276	728	3001	C2	遺石器	無台坪身	30		15.0		14.4		灰	Ⅱ' 1' 方向右
52	Ⅷa	277	689	3001	C2	遺石器	無台坪身	80		15.8	4.1	15.4		灰	Ⅱ' 1' 方向左、組み径3.0
52	Ⅷa	278	782	3001	D2	遺石器	無台坪身	90		15.4	3.8			灰	Ⅱ' 1' 方向右、外蓋自然軸、組み径3.2
52	Ⅷa	279	782	3001	E3	遺石器	無台坪身	60		15.6	3.7			灰白	外蓋自然軸、組み径3.1

出土遺物観察表

Fla	部位	番号	取上番号	遺構	グランド	種類	地所	発見率	反転	属性	高さ	口径	色調	備考
52	甕	200	740	3001	E3	須恵器	横置	60		15.8	4.3		灰白	12°1'方向右、横置。積み残3.1
52	甕	281	1911	3001	D3	須恵器	横置	70	反	16.8	4.0		灰	12°1'方向左、積み残3.5、積み残3.0
52	甕	282	775	3001	E3	須恵器	有台坪身	50	反	14.0	4.2		灰	12°1'方向左
52	甕	283	1222	3001	B2	須恵器	有台坪身	50	反	14.2	4.4		灰白	12°1'方向左
52	甕	284	761	3001	D3	須恵器	有台坪身	70	反	14.2	3.7		灰	12°1'方向左
52	甕	285	766	3001	D3	須恵器	有台坪身	50	反	14.4	4.4		灰	12°1'方向右
52	甕	286	702	3001	C2	須恵器	有台坪身	30	反	15.8	4.8		灰	自然熱
52	甕	287	667	3001	C2	須恵器	有台坪身	40	反	16.0	3.8		灰白	12°1'方向左
52	甕	288	548	3001	B3	須恵器	高脚	10	反	28.8			灰	
52	甕	289	215	3001	A3	須恵器	高脚	10	反	30.0			黄灰	12°1'方向右
52	甕	290	905	3001	D3	須恵器	無蓋高坪	30	反				灰	23°2'2'3'方向、外蓋自然熱
52	甕	291	1444	3001	D3	須恵器	無蓋高坪	50	反	11.6			黄灰	距離12.4、23°2'2'方向、外蓋自然熱
52	甕	292	811	3001	D3	須恵器	高坪	5	反				灰	12°1'方向左、積み残3.6、上部焼ぶくれ
52	甕	293	464	3001	A3	須恵器	高坪	20	反	14.2	4.2		灰	距離3.6、上部焼ぶくれ
52	甕	294	814	3001	D3	須恵器	有蓋高坪	10	反	12.4			9.9	距離3.9、距離12.0、自然熱
52	甕	295	707	3001	C3	須恵器	高坪	30	反				灰	
52	甕	296	1289	3001	D3	須恵器	無蓋高坪	10	反	16.0			黄灰	12°1'方向右
52	甕	297	1171	3001	C2	須恵器	無蓋高坪	10	反	16.2			灰	全蓋自然熱
52	甕	298	1814	3001	E3	須恵器	無蓋高坪	5	反	16.0			灰	距離3.0、距離10.0
52	甕	299	707	3001	C3	須恵器	無蓋高坪	10	反	11.6			灰	距離2.6、距離8.6
52	甕	300	1929	3001	D3	須恵器	高坪	30	反				灰	距離3.3、距離9.0
52	甕	301	793	3001	E3	須恵器	高坪	30	反				灰	距離3.1、距離9.6
52	甕	302	813	3001	D3	須恵器	高坪	30	反				灰	距離2.8、距離9.6、12°1'方向右
52	甕	303	817	3001	D3	須恵器	高坪	40	反				灰	距離3.2、距離9.6
52	甕	304	285	3001	A3	須恵器	高坪	30	反				灰	距離4.0、距離10.0
52	甕	305	1814	3001	E3	須恵器	高坪	30	反				灰	距離10.4
52	甕	306	1918	3001	D3	須恵器	高坪	30	反				灰	距離3.5、距離10.4
52	甕	307	1814	3001	E3	須恵器	高坪	30	反				灰	距離10.5、内面一部自然熱
52	甕	308	1927	3001	D3	須恵器	高坪	40	反				灰	距離3.3、距離10.4
52	甕	309	295	3001	B3	須恵器	高坪	20	反				灰	距離3.1、距離10.6、内面12°1'方向
52	甕	310	709	3001	C3	須恵器	高坪	30	反				灰	距離10.6
52	甕	311	1525	3001	E2	須恵器	高坪	10	反				灰	距離11.0
52	甕	312	1280	3001	D2	須恵器	高坪	10	反				灰	距離3.2、距離11.0
52	甕	313	1931	3001	E3	須恵器	高坪	30	反				灰	距離3.5、距離11.2、底部全体付着
52	甕	314	1852	3001	D3	須恵器	高坪	40	反				灰	距離3.4、距離11.4
52	甕	315	690	3001	C2	須恵器	高坪	30	反				灰	距離3.5、距離11.6
52	甕	316	1927	3001	D3	須恵器	高坪	20	反				灰	距離3.8、距離12.0
52	甕	317	817	3001	D3	須恵器	高坪	30	反				灰	距離3.6、距離12.6
52	甕	318	812	3001	D3	須恵器	高坪	30	反				灰	距離9.8
52	甕	319	1925	3001	D3	須恵器	高坪	5	反				灰	距離17.6
52	甕	320	730	3001	B2	須恵器	広口甕	10	反			11.0	灰	距離13.2、外蓋自然熱
52	甕	321	1906	3001	D3	須恵器	広口甕	5	反				灰	距離8.8、自然熱全面付着、12°1'方向左
52	甕	322	309	3001	B2	須恵器	広口甕	10	反			13.2	灰	距離11.3、距離11.8、外蓋一部自然熱、12°1'方向左
52	甕	323	425 ~ 427	3001	B3 ~ D3	須恵器	広口甕	50		15.0	13.8	9.6	灰	距離9.0、12°1'方向右
52	甕	324	1201	3001	C3	須恵器	広口甕	50		18.4		11.0	灰	距離10.2、距離6.4、12°1'方向左
52	甕	325	1901	3001	D3	須恵器	広口甕	80		17.0	19.1	11.0	灰	距離11.8、外蓋自然熱
52	甕	326	1273	3001	D3	須恵器	広口甕	80		21.8	22.0	12.6	灰	積み残4.0、12°1'方向左
52	甕	327	1529	3001	B2	須恵器	広口甕	40		20.6		13.4	灰	内面反打7°自然熱
52	甕	328	1434	3001	D3	須恵器	高脚	50		15.6	5.1	11.2	灰	距離4.2、外蓋自然熱
52	甕	329	1923	3001	A3	須恵器	長頸甕	5	反			6.8	灰	
52	甕	330	727	3001	C2	須恵器	長頸甕	5	反			9.4	灰	
52	甕	331	707	3001	C3	須恵器	長頸甕	5	反			9.6	灰	
52	甕	332	920	3001	D3	須恵器	長頸甕	10	反			10.0	灰	
52	甕	333	692	3001	C2	須恵器	長頸甕	5	反			10.9	灰	
52	甕	334	1293	3001	D3	須恵器	長頸甕	5	反			14.4	灰	
52	甕	335	763	3001	D2	須恵器	長頸甕	70		14.2			灰	距離5.4、12°1'方向左、底部・口縁内部自然熱
52	甕	336	1199 ~ 645	3001	C2 ~ B3	須恵器	長頸甕	40	反	13.2			灰	12°1'方向右
52	甕	337	1681 ~ 1279	3001	D2	須恵器	長頸甕	50	反	13.8			灰	底部剥離、12°1'方向右
52	甕	338	711 ~ 1705	3001	C2 ~ C3	須恵器	長頸甕	5				16.3	灰	自然熱
52	甕	339	1907	3001	D3	須恵器	鉢	90		8.2	4.3	7.0	灰	内面反打7°反転、12°1'方向右
52	甕	340	658	3001	C2	須恵器	鉢	80		9.6	4.4	9.0	灰	12°1'方向右、内蓋自然熱
52	甕	341	1090	3001	C2	須恵器	鉢	100		9.4		6.6	黄灰	底部未剥離
52	甕	342	38	3001	B3	須恵器	鉢	40	反	10.0	8.1		灰	12°1'方向左
52	甕	343	1931	3001	E3	須恵器	鉢	5	反	11.4			灰	
52	甕	344	418	3001	A3	須恵器	鉢	30	反	12.2		9.2	灰	底部剥離
52	甕	345	707	3001	C3	須恵器	鉢	40	反	7.0		5.1	灰	底部剥離12°1'、全面自然熱
52	甕	346	407	3001	A2	須恵器	鉢	70		9.6	4.2	9.0	灰	12°1'方向左、12°1'方向右
52	甕	347	1535	3001	B2	須恵器	鉢	40	反	9.2	3.8		灰	12°1'方向右
52	甕	348	1914	3001	D3	須恵器	鉢	40	反	10.0	4.8	9.4	灰	12°1'方向右、内面12°1'反転、自然熱
52	甕	349	705	3001	C3	須恵器	鉢	40	反	10.4		9.2	灰	全面自然熱
52	甕	350	645	3001	B3	須恵器	鉢	50	反	10.2	5.1	10.0	黄灰	12°1'方向右、積み残4.0、内面自然熱
52	甕	351	1523	3001	B2	須恵器	鉢	70		10.2	4.8	10.0	灰	距離4.0、12°1'方向左
52	甕	352	782	3001	C3	須恵器	鉢	40		10.6		10.0	灰	12°1'方向右、全面自然熱、内面全体付着
52	甕	353	633	3001	B3	須恵器	鉢	80		11.0	4.7	10.0	灰	12°1'方向右、自然熱
52	甕	354	1931	3001	E3	須恵器	短頸甕	30		11.6			灰	
52	甕	355	811	3001	D3	須恵器	短頸甕	30	反	13.7		8.4	黄灰	外蓋一部自然熱
52	甕	356	797	3001	D3	須恵器	短頸甕	60		13.6			灰	全面自然熱、12°1'方向左
52	甕	357	744	3001	C2	須恵器	短頸甕	60		12.4	10.5	8.8	灰	外蓋自然熱、12°1'方向左
52	甕	358	665	3001	B3	須恵器	短頸甕	60		14.0	12.7	10.0	灰	12°1'方向左
52	甕	359	782	3001	D3	須恵器	短頸甕	15				14.0	灰	
52	甕	360	1290	3001	D3	須恵器	鉢	5	反			16.0	灰	
52	甕	361	1199	3001	C3	須恵器	鉢	40	反	17.3			灰	鉢
52	甕	362	916	3001	C2	須恵器	鉢	20	反	18.0		17.2	灰	12°1'方向左、自然熱
52	甕	363	1294	3001	D3	須恵器	鉢	5	反	16.8		16.4	灰	口縁内部反打7°、自然熱

Fla	部位	番号	取上番号	遺構	グリス	種類	植物	形状	反転	面積	高さ	口径	色調	備考
55	甕	364	1929	S001	D3	須恵器	鉢	5	反		18.0		灰	
55	甕	365	1849	S001	E3	須恵器	鉢	5	反		18.0		灰	外面自然釉
55	甕	366	1243	S001	D2	須恵器	鉢	10	反	23.0	23.0		灰黄緑	
55	甕	367	599	S001	B3	須恵器	鉢	20	反	24.0			灰	Y1?方向左、浅縁
55	甕	368	485	S001	B2	須恵器	鉢	30	反				灰白	Y1?方向左、底径9.2、Y1部、内面自然釉
56	甕	369	609	S001	B2	須恵器	鉢	40	反	14.4			灰白	外面釉による凹凸付、陶白
56	甕	370	290	S001	B3	須恵器	鉢	40	反	15.4	13.0	14.9	灰	底径10.0、外面自然釉、陶白
56	甕	371	1921	S001	D3	須恵器	鉢	20	反	15.0			黄灰	底径9.6、陶白
56	甕	372	724	S001	C2	須恵器	鉢	80	反	16.0	15.8		灰	底径10.0、小孔2、陶白
56	甕	373	413	S001	A2	須恵器	鉢	10	反	17.8			陶白	陶白
56	甕	374	736	S001	C3	須恵器	鉢	20	反	17.4			灰白	陶白
56	甕	375	1206	S001	C2	須恵器	鉢	5	反	17.3			灰白	陶白
56	甕	376	1899	S001	E3	須恵器	鉢	30	反				灰	底径9.0、縁ぶくれ、陶白
56	甕	377	1929	S001	D3	須恵器	ハツ	5	反				灰	
56	甕	378	687・737	S001	B3・C3	須恵器	ハツ	40	反				灰	Y1?方向右
56	甕	379	769	S001	E3	須恵器	ハツ	90	反				灰	Y1?方向左、底面未調整
56	甕	380	780	S001	E3	須恵器	7512瓶形	30				9.1	灰	底径5.0
56	甕	381	793	S001	E3	須恵器	7512瓶形	80		15.8			灰	Y1?方向右、全面自然釉
56	甕	382	414	S001	A2	須恵器	椀	10					灰	
56	甕	383	432	S001	D3	須恵器	甕	5	反			18.6	灰	
56	甕	384	1851	S001	E3	須恵器	甕	5	反			26.4	灰	
56	甕	385	424	S001	B3	須恵器	不明器	5	反				灰	小型杯身状品
56	甕	386	461	S001	A3	須恵器	把手	5					黄灰	環風の把手?
57	甕	387	1842	S001	D3	須恵器	甕	5	反			46.0	灰	
57	甕	388	1843	S001	D3	須恵器	甕	5	反			26.5	灰白	
57	甕	389	1427	S001	D3	須恵器	甕	5	反			36.2	灰	
57	甕	390	737	S001	C2	須恵器	甕	5	反			25.2	灰白	
57	甕	391	1427	S001	D3	須恵器	甕	20	反			25.0	灰	底径18.6
57	甕	392	1205	S001	D2	須恵器	甕	5	反			27.8	灰	全面自然釉
57	甕	393	1250	S001	C2	須恵器	甕	10	反			31.0	灰白	全面自然釉
57	甕	394	1266・1813	S001	D2	須恵器	甕	20	反			41.3	灰色	
58	甕	395	431	S001	D3	土師器	杯	40	反	14.2	5.2		にぶい煙	底径4.7、内外放射状ミガキ面
58	甕	396	431	S001	D3	土師器	内甕杯	40	反	11.2	3.8		にぶい煙	
58	甕	396	478	S001	B3	土師器	内甕杯	30	反	14.0	4.7		煙	
58	甕	399	864	S001	B3	土師器	内甕杯	70	反	14.6	5.4		煙	
58	甕	400	717・729	S001	B3・C2	土師器	横切杯	50	反	14.0	5.1		煙	
58	甕	401	1849	S001	E3	土師器	横切杯	30	反	12.8	4.6		浅黄煙	
58	甕	402	1294	S001	D3	土師器	横切杯	5	反	13.9		13.2	明灰	
58	甕	403	441	S001	A2	土師器	横切杯	10	反	14.0		12.4	浅黄煙	
58	甕	404	662	S001	B3	土師器	横切杯	10	反	14.0		12.4	煙	
58	甕	405	441	S001	A2	土師器	横切杯	20	反	14.2		12.4	にぶい煙	
58	甕	406	294	S001	B3	土師器	有粒高杯	50	反	14.0	10.2		煙	底径3.4、底径9.0
58	甕	407	771	S001	E3	土師器	高杯	90	反	8.8	6.8		灰白	底径4.6、内面にぶい煙
58	甕	408	464	S001	A3	土師器	高杯	40					灰煙	底径3.0、底径9.4
58	甕	409	416	S001	A3	土師器	高杯	30					浅黄煙	底径2.9、底径10.0
58	甕	410	478	S001	B3	土師器	高杯	20					煙	底径3.0、底径9.6
58	甕	411	695	S001	C2	土師器	高杯	30					浅黄煙	底径3.0、底径9.2
58	甕	412	756	S001	C3	土師器	高杯	5	反				黄煙	底径9.6
58	甕	413	609	S001	B3	土師器	高杯	20					煙	底径10.0
58	甕	414	461	S001	A3	土師器	高杯	20	反				灰煙	底径4.2、底径15.2
58	甕	415	308	S001	B2	土師器	高杯	30					浅黄煙	底径3.8、底径12.0
58	甕	416	920	S001	D3	土師器	長脚高杯	20					煙	底径5.1、底径13.0
58	甕	417	1218	S001	C3	土師器	長脚高杯	30					浅黄煙	底径3.7
58	甕	418	1844	S001	D3	土師器	鉢形杯部高杯	50		13.8	8.4		赤煙	底径5.0、底径9.4
58	甕	419	442	S001	A2	土師器	鉢形杯部高杯	10	反	14.0			煙	
58	甕	420	458	S001	A3	土師器	鉢形杯部高杯	20	反	14.0			にぶい煙	
58	甕	421	418	S001	A3	土師器	鉢形杯部高杯	5	反	14.2			煙	
58	甕	422	441	S001	A2	土師器	鉢形杯部高杯	20	反	15.8			にぶい黄煙	
58	甕	423	478	S001	B3	土師器	鉢形杯部高杯	20					煙	底径5.2、底径10.0
58	甕	424	450	S001	A2	土師器	鉢形杯部高杯	40					煙	底径5.2、底径9.0
58	甕	425	646	S001	B3	土師器	長脚甕	10				9.4	煙	底径6.3
58	甕	426	705	S001	C3	土師器	長脚甕	30	反	15.8			にぶい煙	
58	甕	427	680	S001	B3	土師器	把手	5					灰黄	幅2.6
58	甕	428	471	S001	B3	土師器	外反口縁蓋	5	反			17.9	にぶい煙	底径14.4
59	甕	430	656	S001	B2	土師器	外反口縁蓋	10	反			17.2	浅黄煙	底径14.4
59	甕	431	788	S001	E3	土師器	外反口縁蓋	5	反			17.2	灰白	底径12.5
59	甕	432	548	S001	B3	土師器	外反口縁蓋	5	反			18.0	にぶい煙	底径14.8
59	甕	433	707	S001	C2	土師器	外反口縁蓋	5	反			19.1	灰白	底径14.3、内面黄灰
59	甕	434	1918	S001	D3	土師器	外反口縁蓋	10	反			19.7	浅黄煙	底径15.7
59	甕	435	1296	S001	B3	土師器	外反口縁蓋	10	反			18.8	黄煙	底径16.1、外面黄灰
59	甕	436	757	S001	D3	土師器	外反口縁蓋	20	反				灰黄煙	底径11.8、底径
59	甕	437	1245	S001	D2	土師器	鉢	40		7.0	2.8		にぶい黄煙	底径
59	甕	438	792	S001	E3	土師器	鉢	30	反	7.2	3.3	6.9	にぶい煙	
59	甕	439	464	S001	A3	土師器	鉢	20	反	7.0	2.9		灰煙	
59	甕	440	772	S001	E3	土師器	鉢	80		7.4	3.5	7.1	にぶい黄煙	底径4.0
59	甕	441	793	S001	E3	土師器	鉢	80		7.5	3.5	7.0	灰黄	
59	甕	442	796	S001	D3	土師器	鉢	30	反	8.5	3.5		灰白	
59	甕	443	755	S001	C3	土師器	鉢	10	反	8.5			浅黄煙	
59	甕	444	752	S001	E3	土師器	鉢	20	反	9.1	4.1	8.8	灰白	
59	甕	445	800	S001	D2	土師器	鉢	80		9.2	4.9		にぶい黄煙	底径4.0
59	甕	446	1069	S001	C2	土師器	鉢	100		9.8	3.7		にぶい煙	底径4.5
59	甕	447	1245	S001	D2	土師器	鉢	30		10.2			にぶい黄煙	

出土遺物観察表

Fig	部位	番号	取上番号	遺構	グリッド	種類	縮尺	発祥年	反映	属性	高さ	口径	色調	備考	
59	甕	a48	1293	3001	D3	土師器	鉢	30	反	10.6	4.8	10.4	にぶい青	底径 4.8、全面赤彩、内面底部野止付	
59	甕	a49	1233	3001	C2	土師器	鉢	40	反	10.4	4.5	10.1	黄灰	底径 3.3	
59	甕	a50	701	3001	D2	土師器	鉢	60					にぶい褐色		
59	甕	a51	709	3001	C2	土師器	鉢	50	反	11.2		10.0	淡灰白		
59	甕	a52	683	3001	B2	土師器	鉢	10	反	17.0			淡黄		
59	甕	a53	709	3001	C3	土師器	鉢	10		17.9			反		
59	甕	a54	762	3001	D3	土師器	鉢	70		7.6		7.0	にぶい青		
59	甕	a55	1262	3001	D2	土師器	鉢	30	反	9.0	4.9		にぶい青	底径 7.9	
59	甕	a56	475	3001	B2	土師器	鉢	70		9.0	5.0		反白	底径 3.8	
59	甕	a57	1535	3001	B2	土師器	鉢	70					9.2	連黄緑	
59	甕	a58	1261	3001	D2	土師器	鉢	60		9.6	5.8		にぶい黄緑	底径 4.6	
59	甕	a59	609	3001	D3	土師器	<字鉢	30	反	10.2	5.9		連黄緑		
59	甕	a60	1927	3001	D3	土師器	<字鉢	10	反			10.3	反黄		
59	甕	a61	786	3001	D3	土師器	<字鉢	10	反	12.8			淡黄緑		
59	甕	a62	789	3001	E3	土師器	<字鉢	5	反	13.8			黄灰	内面黄緑	
59	甕	a63	497	3001	B2	土師器	甕形	100		4.4	3.5	3.0	にぶい青	底径 3.2	
59	甕	a64	496	3001	B3	土師器	甕形	50		6.0	5.3	5.0	にぶい青	底径 3.2	
59	甕	a65	1421	3001	D3	土師器	甕形	20	反	7.0			反白		
59	甕	a66	790	3001	E3	土師器	甕形	50	反	7.9	5.3	7.2	にぶい青		
59	甕	a67	707	3001	C3	土師器	基鉢形	30					反白		
60	甕	a68	812	3001	D3	土師器	鉢	30	反	12.8			明赤褐色	地文、内面底、黄鳥羽跡	
60	甕	a69	818	3001	D3	土師器	鉢	40	反	12.4	3.2		にぶい青	地文、内面底、黄鳥羽跡	
60	甕	a70	818	3001	D3	土師器	鉢	10	反	12.0			明緑	地文	
60	甕	a71	1247	3001	D3	土師器	鉢	20	反	13.2			明緑	地文	
60	甕	a72	809	3001	D3	土師器	鉢	50	反	14.4	3.1		明赤褐	地文、全面赤彩	
60	甕	a73	804	3001	D2	土師器	鉢	10	反	15.0			赤褐	地文、全面赤彩	
60	甕	a74	817	3001	D3	土師器	鉢	30	反	16.0			緑	地文、全面赤彩、外面煤付着	
60	甕	a75	1247	3001	D3	土師器	鉢	10	反	16.0			にぶい赤褐	地文、内面赤彩	
60	甕	a76	711	3001	C2	土師器	鉢	30	反	16.8	3.7		緑	地文	
60	甕	a77	428	3001	D3	土師器	鉢	10	反	15.0			反黄緑	地文	
60	甕	a78	430	3001	D3	土師器	鉢	10	反	16.0			にぶい青	地文	
60	甕	a79	667	3001	C2	土師器	鉢	40	反	14.8	2.7		緑	地文	
60	甕	a80	701	3001	D2	土師器	鉢	30	反	14.6	2.3		緑	地文、全面赤彩	
60	甕	a81	818	3001	D3	土師器	鉢	5	反	16.4	2.2		にぶい青	地文	
60	甕	a82	1279	3001	D2	土師器	鉢	10	反	17.0			明赤褐色	地文、全面赤彩	
60	甕	a83	700	3001	D2	土師器	高盤	50	反	19.3	5.1		褐色	地文	
60	甕	a84	792	3001	E3	土師器	高盤	10	反				反白	地文	
60	甕	a85	294	3001	B3	土師器	高盤	30	反	23.6			にぶい青	地文、赤彩	
61	甕	a86	682	3001	B3	土師器	甕	60		19.6	25.0	19.0	にぶい青	外面煤付着、底部支脚痕	
61	甕	a87	646	3001	B3	土師器	甕	40		26.5		20.0	にぶい青	外面煤付着、底部支脚痕、伊勢・尾尾系	
61	甕	a88	483・478	3001	B3	土師器	甕	20		16.0		16.0	反黄	外面煤付着、伊勢・尾尾系	
61	甕	a89	737	3001	C3	土師器	甕	5		18.0		18.0	反白	外面煤付着、伊勢・尾尾系	
61	甕	a90	1525	3001	B2	土師器	甕	20	反	10.6		12.0	反	外面煤付着	
61	甕	a91	215	3001	A3	土師器	甕	10	反	12.8		13.0	明緑灰		
61	甕	a92	813	3001	D3	土師器	甕	20		13.6		13.6	反黄	口縁がみ大、外面煤付着	
61	甕	a93	698	3001	C3	土師器	甕	10	反	13.8		14.4	にぶい青		
61	甕	a94	1266	3001	D2	土師器	甕	10	反	16.2		14.8	連黄緑		
61	甕	a95	650	3001	B3	土師器	甕	10	反	15.0		15.0	緑		
61	甕	a96	478	3001	B3	土師器	甕	5		15.0		15.0	にぶい黄緑		
61	甕	a97	1283	3001	D3	土師器	甕	10		15.7		15.7	にぶい黄緑		
61	甕	a98	1208	3001	B2	土師器	甕	20	反	15.2		16.0	反		
61	甕	a99	478	3001	B3	土師器	甕	20	反	16.0		16.0	にぶい青		
61	甕	a100	1813	3001	C3	土師器	甕	5	反	16.4		16.4	にぶい青		
61	甕	a101	1204	3001	C3	土師器	甕	5	反	16.2		16.2	にぶい青		
61	甕	a102	719	3001	C3	土師器	甕	10	反	16.4		16.4	明緑灰		
61	甕	a103	419	3001	A3	土師器	甕	10	反	16.4		16.4	反黄		
61	甕	a104	22	3001	D2・D3	土師器	甕	10	反	15.7		16.7	反白		
62	甕	a105	787	3001	D3	土師器	甕	10	反	16.8		16.8	連黄緑	底径 14.3	
62	甕	a106	506	37	3001	B2	土師器	甕	20	反	15.8		17.0	連黄緑	底径 14.0
62	甕	a107	656	3001	B2	土師器	甕	5	反	17.0		17.0	連黄緑	底径 14.0、外面煤付着	
62	甕	a108	506	420	3001	A3	土師器	甕	5	反	17.4		17.4	淡緑	底径 14.0
62	甕	a109	1828	3001	D3	土師器	甕	5	反	17.4		17.4	にぶい黄緑	底径 14.6、外面煤付着	
62	甕	a110	294	3001	B3	土師器	甕	20	反	18.0		18.0	連黄緑	底径 14.8、外面煤付着	
62	甕	a111	1843	3001	D3	土師器	甕	10	反	18.0		18.0	反黄	底径 16.6、煤付着	
62	甕	a112	660	3001	B2	土師器	甕	10	反	16.0		16.0	反黄	底径 16.0、煤付着	
62	甕	a113	719	3001	C3	土師器	甕	10	反	18.6		18.6	連黄緑	底径 14.4	
62	甕	a114	687	3001	B3	土師器	甕	10	反	19.0		19.0	にぶい黄緑	底径 15.7	
62	甕	a115	702	3001	C2	土師器	甕	10	反	19.2		19.2	うすい黄緑	底径 18.0	
62	甕	a116	418	3001	A3	土師器	甕	5	反	19.2		19.2	淡緑	底径 15.4	
62	甕	a117	697	3001	C3	土師器	甕	5	反	19.3		19.3	反白	底径 16.3	
62	甕	a118	20	3001	A3・B3	土師器	甕	20	反	18.4		19.4	反白	底径 154.4、外面煤付着	
62	甕	a119	666	3001	B3	土師器	甕	10	反	19.6		19.6	にぶい青	底径 17.5	
62	甕	a120	1264	3001	D2	土師器	甕	10	反	19.8		19.8	にぶい赤褐	底径 15.7、外面煤付着	
62	甕	a121	1813	3001	E3	土師器	甕	5	反	20.0		20.0	にぶい黄緑	底径 16.4	
62	甕	a122	461	3001	A3	土師器	甕	5	反	20.2		20.2	反黄(煤)	底径 17.3、煤付着	
62	甕	a123	446	3001	A2	土師器	甕	5	反	20.2		20.2	にぶい黄緑	底径 17.0	
62	甕	a124	784	3001	D3	土師器	甕	10	反	20.4		20.4	反白	底径 15.2、口縁部煤付着	
62	甕	a125	1179	3001	C3	土師器	甕	5	反	20.4		20.4	連黄緑	底径 15.8	
63	甕	a126	738	3001	C3	土師器	甕	5	反	21.4		21.4	反白	底径 17.5、外面煤付着	
63	甕	a127	687	3001	C3	土師器	甕	5	反	21.5		21.5	連黄緑	底径 18.6、全面赤彩	
63	甕	a128	590	3001	B2	土師器	甕	10	反	22.0		22.0	緑	底径 20.0	
63	甕	a129	794	3001	B3	土師器	甕	5	反	23.0		23.0	にぶい青	底径 19.0	
63	甕	a130	414	3001	A2	土師器	甕	50		20.9		20.6	淡緑	底径 16.0	
63	甕	a131	701	3001	D2	土師器	甕	5	反	24.4		24.4	にぶい黄緑	底径 18.8、煤付着	

Fig	部位	番号	取上番号	遺構	グリッド	種類	説明	数量	反	口径	色調	備考		
63	甕	a	532	406	S001	A2	土師器	甕	5	反	23.6	灰	甕径 20.5	
63	甕	a	533	306	S001	B2	土師器	甕	10	反	25.2	濃黄緑	甕径 19.8、外面煤付着	
63	甕	a	534	719	S001	C3	土師器	甕	10	反	25.6	明灰緑	甕径 23.0	
63	甕	a	535	756	S001	C3	土師器	甕	5	反	26.0	濃黄緑	甕径 22.4、外面一部黒染	
63	甕	a	536	698	S001	C3	土師器	甕	20	反	28.5	灰白	甕径 23.0、全面煤付着	
63	甕	a	537	792	S001	E3	土師器	甕	5	反	27.0	にぶい黄緑	甕径 23.2、煤付着	
63	甕	a	538	645	S001	B3	土師器	甕	5	反	29.0	にぶい黄緑	甕径 24.4	
63	甕	a	539	807	S001	D2	土師器	甕	10	反	30.6	黄緑	甕径 27.1、外面煤付着	
63	甕	a	540	719	S001	C3	土師器	甕	5	反	30.9	灰白	甕径 27.4、外面煤付着	
63	甕	a	541	813	S001	D3	土師器	甕	10	反	31.0	にぶい黄緑	甕径 24.4、全面煤付着	
63	甕	a	542	702	S001	C2	土師器	甕	5	反	32.8	灰	甕径 29.5、煤付着	
63	甕	a	543	463	S001	A3	土師器	甕	5	反	34.6	33.2	灰黄	甕径 35.5、黒染
63	甕	a	544	424	S001	B3	土師器	甕	5	反	33.6	緑	甕径 28.3	
64	甕	a	545	478	S001	B3	土師器	大型甕	5	反	36.0	灰黄	甕径 33.4	
64	甕	a	546	736	S001	C3	土師器	大型甕	10	反	39.4	濃黄緑	甕径 37.8、外面煤付着	
64	甕	a	547	294	S001	B3	土師器	大型甕	5	反	40.0	灰黄	甕径 37.0	
64	甕	a	548	685	S001	B3	土師器	大型甕	20	反	40.0	にぶい黄緑	甕径 37.8、全面煤付着	
64	甕	a	549	478	S001	B3	土師器	大型甕	50	反	34.0	にぶい黄緑	甕径 31.8、外面煤付着	
64	甕	a	550	649	S001	B3	土師器	大型甕	10	反	38.0	にぶい黄緑	甕径 31.6、外面煤付着	
64	甕	a	551	777	S001	E3	土師器	甕	5	反	16.2	灰黄	甕径 12.9、口縁部黒染・327F	
64	甕	a	552	450	S001	A2	土師器	甕	40			にぶい黄緑	甕径 6.8、甕径 12.4	
64	甕	a	553	1905	S001	E3	土師器	甕	10			にぶい黄緑	甕径 7.2、甕径 14.4	
64	甕	a	554	1208	S001	B2	土師器	甕	20	反		濃黄緑	甕径 8.6、甕径 8.6、外面煤付着	
64	甕	a	555	1918	S001	D3	土師器	甕	10	反		灰黄	甕径 6.2	
64	甕	a	556	786	S001	D3	土師器	甕	10	反		灰黄	甕径 12.2	
64	甕	a	557	799	S001	D3	土師器	甕	20			灰白	甕径 8.0、甕径 14.4、外面煤付着	
65	甕	a	558	818	S001	D3	土師器	甕	10	反	20.4	明灰緑		
65	甕	a	559	447	S001	A2	土師器	甕	5	反	24.6	にぶい黄緑		
65	甕	a	560	737	S001	C3	土師器	甕	5	反	29.5	灰白		
65	甕	a	561	447	S001	A2	土師器	甕	5	反	24.0	にぶい黄緑		
65	甕	a	562	1918	S001	D3	土師器	甕	10	反		緑	甕径 10.0	
65	甕	a	563	1921	S001	D3	土師器	甕	10	反		濃黄緑	甕径 11.0	
65	甕	a	564	793	S001	E3	土師器	甕	10	反		濃黄緑	甕径 12.8	
65	甕	a	565	817	S001	D3	土師器	甕	10	反		濃黄緑	甕径 17.4、外面煤付着	
65	甕	a	566	1914	S001	D3	土師器	甕	10			黄緑		
65	甕	a	567	752	S001	E3	土師器	甕	5			濃黄緑	穿孔	
65	甕	a	568	1262	S001	D2	土師器	甕	5			にぶい黄緑		
65	甕	a	569	1293	S001	D3	遺棄物	高坪	20	反		灰白	内面漆塗り、断面漆付着	
65	甕	a	570	702	S001	C2	遺棄物	坪身	60		10.8 3.1	灰	内面漆塗り	
65	甕	a	571	1152	S001	C3	金属製品	耳環	100		3.3 2.9 0.8		30.2g、銅芯のみ造作	
65	甕	a	572	1201	S001	C3	金属製品	耳環	100		3.2 2.8 0.8		24.3g、金銀複合	
65	甕	a	573	1262	S001	B3	金属製品	有孔円筒	100		6.1 5.8 9.9		2.7g、2×4、中央方孔孔1	
65	甕	a	574	776	S001	C3	土製品	鉄線	100		5.3 2.2		明灰緑	
65	甕	a	575	796	S001	B3	土製品	土鍋	100		4.4 9.6 4.6		にぶい黄緑	
65	甕	a	576	713	S001	B3	土製品	土鍋	40		3.5 4.8		明灰緑	
65	甕	a	577	440	S001	A2	土製品	輪郭口					にぶい黄緑	
65	甕	a	578	1295	S001	D2	土製品	輪郭口					緑、灰	
66	甕	a	579	1179	S001	C3	石製品	硖石		3.8	6.8 2.2	灰白	68.3g、凝灰岩	
66	甕	a	580	696	S001	C3	石製品	硖石		5.4	6.8 3.1		137.9g、矢野砂岩	
66	甕	a	581	1912	S001	D3	石製品	硖石		7.9	6.2 2.7		112.6g、凝灰岩、両面穿孔	
66	甕	a	582	1296	S001	D3	石製品	硖石		8.5	8.3 3.1		177.0g、凝灰岩	
66	甕	a	583	921	S001	D3	石製品	硖石		4.6	10.9 2.5		165.6g、砂岩、矢野砂岩	
66	甕	a	584	1203	S001	C3	石製品	硖石		5.1	11.4 4.5		300.8g、凝灰岩	
66	甕	a	585	311	S001	B2	石製品	硖石		4.7	12.5 2.5		180.3g、凝灰岩	
66	甕	a	586	654	S001	B3	石製品	硖石		10.6	9.0 7.0		642g、砂岩？、幅1.5cm程度の溝	
66	甕	a	587	707	S001	C3	石製品	硖石		7.8	9.0 5.9		485.2g、凝灰岩	
66	甕	a	588	780	S001	D2	石製品	硖石		8.5	13.2 3.2		512.0g、凝灰岩	
66	甕	a	589	1827	S001	D3	石製品	硖石		9.2	15.9 2.8		386.5g、凝灰岩	
66	甕	a	590	501	S001	B2	石製品	硖石		9.9	26.5 8.3		2518g、凝灰岩	
66	甕	a	591	500	S001	B2	石製品	硖石		12.8	16.3 8.4		1850g、凝灰岩	
74	V	1	25	S201	E3	遺棄物	輪蓋	60		15.6 3.3	灰	輪径 2.5、V1'方向左		
74	V	2	373	S201	E3	遺棄物	輪台座	10	反	13.2		灰		
74	V	3	371	S201	E3	遺棄物	輪台座	30	反	13.4 4.1		増灰		
74	V	4	373	S201	E3	遺棄物	輪台座	10	反	15.0		増灰		
74	V	5	371	S201	E3	遺棄物	輪台座	50	反	15.1 3.1		増灰		
74	V	6	1525	S202	E3	遺棄物	有台坪身	30	反			灰	輪径 2.8、V1'方向左	
74	V	7	315	S202	E3	遺棄物	有台坪身	20	反	4.4	14.0	灰緑	1号遺棄「逆」、V2'方向右	
74	V	8	315	S202	E3	遺棄物	有台坪身	10	反	14.6 3.9		増灰	甕径 10.0、V3'方向	
74	V	9	317	S202	E3	遺棄物	有台坪身	20	反	14.5 4.0		灰白	甕径 9.4、内面溝？、V2'方向左	
74	V	10	315	S202	E3	遺棄物	有台坪身	50	反	15.4 4.1		灰白		
74	V	11	315	S202	E3	遺棄物	有台坪身	50	反	12.4 4.2		灰	転用破、甕径 11.8	
74	V	12	374	S202	E3	遺棄物	輪台座	10	反	14.4		増灰		
74	V	13	213	S202	E3	遺棄物	輪台座	20	反	14.8		灰		
74	V	14	217	S202	E3	遺棄物	輪台座	70	反	14.0 4.4		灰白	甕径 6.8、底部未調整	
74	V	15	215	S202	E3	遺棄物	輪台座	40	反	14.0 4.0		増灰	甕径 6.7、底部未調整	
74	V	16	372	S202	E3	遺棄物	輪台座	20	反	16.2		明灰白		
74	V	17	315	S202	E3	遺棄物	輪台座	10	反	15.8		灰白	口縁部黒染	
74	V	18	374	S202	E3	遺棄物	鉢	20	反	20.4		オリブ緑	甕径 19.7、V2'方向左	
74	V	19	374	S202	E3	土師器	坪	20	反	17.6		黄赤	増灰、全面赤彩（内面褐色に黄色）	
74	V	20	374	S202	E3	土師器	坪	10	反	17.8		にぶい黄緑	全面赤彩	
74	V	21	213	S202	E3	土師器	甕	5				にぶい黄緑	赤彩、黒染	
74	V	22	374	S202	E3	土師器	甕	20	反	17.7	15.4	にぶい黄緑	甕径 12.2	
74	V	23	217	S202	E3	土師器	甕	10	反		20.0	黄赤	甕径 18.6	
74	V	24	374	S202	E3	土師器	甕	10	反	31.0		黄赤	甕径 27.2	

出土遺物観察表

Fig	部位	番号	取上番号	遺構	グリッド	種類	絶対	浅部	反転	属性	高さ	口径	色調	備考	
74	V	25	213	S502	E3	土師器	鉢形	20	反	17.1			灰	頸径 15.4、底径 8.0、把手付き	
74	V	26	213	S502	E3	土師器	鉢形	10		14.8			にぶい焼	頸径 14.0	
74	V	27	317	S502	E3	土師器	鉢形	10	反	17.1			にぶい焼	頸径 16.2、把手付き	
74	V	28	317	S502	E3	土師器	香形	50	反	3.1	2.8	2.4	にぶい黄緑	底径 2.0	
74	V	29	399	S502	E3	土師器	製造土器	10		7.2			にぶい焼		
74	V	30	317	S502	E3	土師器	製造土器	30		7.8			赤灰	精良土・調査員作成	
74	V	31	181	S502	E3	土師器	製造土器	10	反	7.4			灰焼	精良土	
74	V	32	317	S502	E3	土師器	製造土器	30		7.9			にぶい焼	精良土	
74	V	33	317	S502	E3	土師器	製造土器	20	反	8.0			灰焼	精良土・口縁部工具の付	
74	V	34	317	S502	E3	土師器	製造土器	20		8.0			にぶい黄緑	精良土	
74	V	35	317	S502	E3	土師器	製造土器	20		8.0			灰焼	精良土	
74	V	36	317	S502	E3	土師器	製造土器	20		8.3			灰黄緑	精良土	
74	V	37	374	S502	E3	土師器	製造土器	10	反	8.2			灰黄緑	精良土	
74	V	38	317	S502	E3	土師器	製造土器	20		8.2			灰焼	精良土	
74	V	39	317	S502	E3	土師器	製造土器	20	反	8.2			灰焼	精良土	
74	V	40	317	S502	E3	土師器	製造土器	20		8.2			灰焼	精良土	
74	V	41	317	S502	E3	土師器	製造土器	20	反	8.2			灰焼	精良土	
74	V	42	792	S502	E3	土師器	製造土器	30	反	8.4			灰黄緑	精良土	
74	V	43	792	S502	E3	土師器	製造土器	20		8.4			灰黄緑	精良土	
74	V	44	213	S502	E3	土師器	製造土器	20	反	8.4			灰黄緑	精良土	
74	V	45	317	S502	E3	土師器	製造土器	10		8.4			補灰	精良土	
74	V	46	315	S502	E3	土師器	製造土器	20		8.4			灰黄緑	精良土	
74	V	47	317	S502	E3	土師器	製造土器	20		8.6			灰焼	精良土	
74	V	48	317	S502	E3	土師器	製造土器	40		8.6			灰黄緑	精良土	
74	V	49	752	S502	E3	土師器	製造土器	20	反	8.8			灰褐色	精良土	
74	V	50	792	S502	E3	土師器	製造土器	10		9.0			灰黄緑色	精良土	
74	V	51	374	S502	E3	土師器	製造土器	30		9.0			灰褐色	精良土	
74	V	52	374	S502	E3	土師器	製造土器	20	反	9.4			灰褐色	精良土	
74	V	53	792	S502	E3	土師器	製造土器	30		9.6			灰褐色	精良土	
74	V	54	317	S502	E3	土師器	製造土器	20		9.6			灰黄緑色	精良土	
74	V	55	315	S502	E3	土師器	製造土器	30		9.8			灰黄緑色	精良土	
74	V	56	317	S502	E3	土師器	製造土器	20		8.8			灰黄緑色	精良土	
74	V	57	374	S502	E3	土師器	製造土器	20	反	8.9			補灰	粗い胎土	
74	V	58	187	S502	E3	土師器	製造土器	10	反	8.2			黒褐色	粗い胎土	
74	V	59	317	S502	E3	土師器	製造土器	20		8.4			褐色	粗い胎土	
74	V	60	187	S502	E3	土師器	製造土器	20		8.6			黒褐色	粗い胎土	
74	V	61	317	S502	E3	土師器	製造土器	10	反	8.6			褐色	粗い胎土	
74	V	62	317	S502	E3	土師器	製造土器	20		9.2			黒褐色	粗い胎土	
75	V	63	820	S504	B2	須恵器	有台坪身	30	反	14.0	11.7		灰白	頸径 3.6、底径 10.0	
75	V	64	1206	S504	B2	須恵器	有台坪身	30	反	13.4	3.8		灰白	底径 10.3	
75	V	65	1588	S504	B1・B2	須恵器	有台坪身	40		13.8	3.6		灰白	底径 10.6、外面自然磨	
75	V	66	1535	S504	B2	須恵器	有台坪身	40		14.0	3.8		灰	底径 10.6、*1'方向左	
75	V	67	820	S504	B2	須恵器	有台坪身	40	反	14.6	4.0		灰白	底径 10.2、*1'方向左	
75	V	68	1207	S504	B2	須恵器	有台坪身	30	反	15.2	3.9		灰	底径 10.0、*1'方向左	
75	V	69	1207・1588	S504	B1・B2	須恵器	有台坪身	50		15.2	6.5		灰白	底径 9.4、天平・鍔部、*1'方向右	
75	V	70	1207	S504	B2	須恵器	無台坪身	40	反	13.8	3.8		灰白	*1'方向左	
75	V	71	1207	S504	B2	須恵器	無台坪身	20	反	15.0	5.0		灰白	底部未調整	
75	V	72	1207	S504	B2	須恵器	無台坪身	10	反	15.0			灰白		
75	V	73	1207	S504	B2	須恵器	無台坪身	30	反	15.4	4.8		灰白	*1'方向右	
75	V	74	1207	S504	B2	須恵器	無台坪身	40		17.0	4.7		灰白		
75	V	75	1207	S504	B2	須恵器	無台坪身	10	反	14.0			灰白		
75	V	76	1207	S504	B2	須恵器	無台坪身	10	反	15.0			灰白		
75	V	77	1588	S504	B1・B2	須恵器	短筒壺	10	反			16.0	灰		
75	V	78	826	S504	B1	須恵器	短筒壺	10	反			16.0	灰白		
75	V	79	1588	S504	B1・B2	土師器	坪	10	反	16.0	2.6		明焼灰		
75	V	80	1588	S504	B1・B2	土師器	坪	10	反	17.8			灰	焼文、内面赤彩	
75	V	81	835・1297	S504	B1・B2	土師器	坪	30	反	16.4	2.0		焼灰	焼文、全周うすい赤彩	
75	V	82	1588	S504	B1・B2	土師器	壺	10	反			20.4	連黄緑	外面煤付層	
75	V	83	1206	S504	B2	土師器	壺	10	反			28.0	焼	外面煤付層	
75	V	84	121	S504	B1	土師器	製造土器	10		8.2			にぶい赤焼	精良土	
75	V	85	1588	S504	B1・B2	土師器	製造土器	20		9.0			灰焼	精良土	
75	V	86	1588	S504	B1・B2	土師器	製造土器	20	反	9.0			灰焼	精良土	
75	V	87	1588	S504	B1・B2	土師器	製造土器	20		9.8			灰黄緑	精良土	
75	V	88	1206	S504	B2	石製品	碇石	10		6.7	8.7	3.5	灰白	284.6g、凝灰岩	
75	V	89	826	S504	上層	B1	須恵器	短筒壺	50		16.5	2.7		灰白	焼み 2.7、*1'方向左
75	V	90	826	S504	上層	B1	須恵器	短筒壺	10	反	15.0			灰白	
75	V	91	826	S504	上層	B1	土師器	坪	10	反	12.0			灰白	焼文、外面赤彩
75	V	92	826	S504	上層	B1	土師器	坪	10	反	14.2	2.1		灰白	焼文、全周赤彩
75	V	93	826	S504	上層	B1	土師器	坪	10	反	16.0	2.6		明焼灰	焼文、内面赤彩
75	V	94	826	S504	上層	B1	土師器	坪	20	反	16.0			焼灰	焼文、内面赤彩
75	V	95	826	S504	上層	B1	土師器	壺	10	反			18.2	連黄緑	頸径 12.3、外面煤付層
77	V	99	396	S501	C3	須恵器	坪身	50	反	11.1			9.4	灰	*1'方向右
77	V	100	365	S501	C2	須恵器	坪身	50	反	10.3	3.2		8.6	灰	底部未調整
77	V	101	262	S501	A2	須恵器	無台坪身	40	反	10.2	3.6		灰	底部未調整	
77	V	102	394	S501	C3	須恵器	無台坪身	50	反	11.0	4.2		灰	底部未調整	
77	V	103	1098	S501	C3	須恵器	無台坪身	80		11.6	5.0		灰	*1'方向右・外面斜めに近い波線	
77	V	104	287	S501	A3	須恵器	無台坪身	70		13.0	4.1		灰	*1'方向右	
77	V	105	365	S501	C2	須恵器	無台坪身	80		13.0	4.8		灰	*1'方向右	
77	V	106	615	S501	B2	須恵器	無台坪身	40	反	18.8	4.4		灰	底面磨整不明	
77	V	107	2025	S501	D6	須恵器	短筒壺	90		15.0	3.1		灰	焼み 2.6、*1'方向左	
77	V	108	215	S501	A3	須恵器	短筒壺	30	反	15.6			15.2	灰	*1'方向左
77	V	109	213	S501	C3	須恵器	短筒壺	20		17.1	3.1			にぶい焼	焼み 2.7
77	V	110	1081	S501	D2	須恵器	短筒壺	70		15.8	3.4		灰	焼み 2.7、*1'方向左	
77	V	111	116	S501	C2	須恵器	短筒壺	90		15.6	2.9		灰	焼み 3.0、*1'方向左・自然磨	

Fla	部位	番号	取上番号	遺構	グランド	種類	説明	発見率	反転	面積	口径	色調	備考	
77	V	112	790	S001	E3	遺石器	横置	40	反	15.8	3.8	灰白	溝み 2.7, Y1' 方向左, 外面自然蝕	
77	V	113	212	S001	D3	遺石器	有台坪身	20	反	13.5	4.0	暗灰	遺径 10.8	
77	V	114	364	S001	C2	遺石器	有台坪身	50	反	14.8	4.3	灰	遺径 8.0, Y1' 方向左	
77	V	115	392	S001	C2	遺石器	有台坪身	80	反	14.2	4.4	灰	遺径 10.8, Y1' 方向左	
77	V	116	399	S001	E3	遺石器	有台坪身	20	反	15.6	4.0	灰	遺径 10.8	
77	V	117	20	S001	A3 + B3	遺石器	有台坪身	20		13.4	4.1	灰白	遺径 8.0	
77	V	118	363	S001	C2	遺石器	有台坪身	30	反	15.2	3.4	灰緑	遺径 10.8, Y1' 方向左	
77	V	119	391	S001	C2	遺石器	有台坪身	10	反	17.0	3.9	灰緑	遺径 12.6	
77	V	120	399	S001	E3	遺石器	有台坪身	10	反	14.6	3.4	暗灰	遺径 10.8	
77	V	121	829	S001	B2	遺石器	有台坪身	60	反	14.2	3.7	灰	遺径 9.8, Y1' 方向左	
77	V	122	399	S001	E3	遺石器	無台坪	40	反	14.6	5.1	灰緑	遺部未調査	
77	V	123	397	S001	E2	遺石器	無台坪	50	反	14.6		灰	遺部未調査	
77	V	124	391	S001	C2	遺石器	無台坪	30	反	14.6	4.2	暗灰	遺部未調査, 内面煤付層	
77	V	125	10	S001	C2	遺石器	無台坪	60	反	14.9	4.2	灰	遺部未調査	
77	V	126	284	S001	A3	遺石器	無台坪	20	反	14.8	3.5	灰緑	遺部手持Y1'	
77	V	127	352	S001	B3	遺石器	無台坪	30	反	14.3	4.5	暗灰	Y1' 方向左, 横ぶくれ	
77	V	128	140	S001	E3	遺石器	無台坪	20	反	14.4		灰	Y1' 方向左, 裏面?	
77	V	129	615	S001	B2	遺石器	無台坪	20	反	14.4		灰	Y1' 方向左	
77	V	130	1059	S001	D2	遺石器	無台坪	90	反	15.0	5.0	灰	Y1' 方向左	
77	V	131	87	S001	B1	遺石器	無台坪	10	反	15.0		灰白	Y1' 方向左	
77	V	132	263	S001	A2	遺石器	鉢	30				青灰	陶器, 穿孔 3 × 方向不明 + 1 × 未貫通	
77	V	133	307	S001	B3	遺石器	ハツ	80				軟灰	Y1' 方向左	
77	V	134	356	S001	B3	遺石器	書置	30	反	10.7	3.7	8.4	灰	陶器 4.6
77	V	135	117	S001	C2	遺石器	長筒蓋	40				12.4	灰	陶器 17.2
77	V	136	362	S001	C2	遺石器	蓋	10				22.2	灰	陶器 17.2
77	V	137	368	S001	E3	遺石器	横置	40					灰	溝み 2.7, 転用後, 外面自然蝕
77	V	138	10	S001	C2	遺石器	横置	40	反	15.4	3.4	灰	溝み 2.7, 転用後, Y1' 方向左	
77	V	139	399	S001	E3	遺石器	有台坪身	20	反	15.4		暗灰	遺径 10.8, 転用後	
77	V	140	357	S001	B2	遺石器	円面鏡	5				灰白	中空肥平台円面鏡, 円径 1.5	
78	V	141	187	S001	E3	土師器	杯	30	反	14.3	2.8	緑灰		
78	V	142	1962	S001	E3	土師器	杯	20	反	15.6		にぶい黄緑	全面赤彩, 噴文	
78	V	143	399	S001	E3	土師器	杯	20	反	15.7	5.4	灰白	全面赤彩	
78	V	144	186	S001	E3	土師器	杯	10				にぶい黄緑	遺部指図層	
78	V	145	230	S001	B3	土師器	杯	10	反	14.4		にぶい黄緑	全面赤彩	
78	V	146	229	S001	A3	土師器	杯	40	反	18.6		赤黄	全面赤彩	
78	V	147	427	S001	D3	土師器	杯	50	反	14.6	2.9	にぶい赤緑	口縁内部注線	
78	V	148	230	S001	B3	土師器	杯	20	反	17.4		灰緑	全面赤彩, 噴文	
78	V	149	69	S001	A3	土師器	蓋	5	反			19.4	灰緑	陶器 15.4
78	V	150	361	S001	C2	土師器	蓋	20	反			15.0	連黄緑	陶器 11.4
78	V	151	224	S001	A2	土師器	蓋	10	反	18.6		にぶい黄緑	陶器 13.9	
78	V	152	365	S001	C2	土師器	蓋	5	反			29.4	連黄緑	陶器 24.8, 外面煤付層
78	V	153	139	S001	C2	土師器	蓋	5	反			27.6	灰緑	陶器 24.7
78	V	154	1959	S001	A3	土師器	蓋	5	反			18.0	灰黄	陶器 14.4
78	V	155	314	S001	D3	土師器	蓋	10	反	16.6		14.8	連黄緑	陶器 14.5
78	V	156	390	S001	C2	土師器	小碗	40		7.2	2.9	灰白		
78	V	157	399	S001	E3	土師器	小碗	20	反	7.2	2.6	にぶい黄緑		
78	V	158	390	S001	C2	土師器	小碗	30	反	7.2		にぶい黄緑		
78	V	159	1053	S001	E3	土師器	小碗	90		7.2	4.5	灰黄		
78	V	160	1207	S001	B2	土師器	小碗	90		7.2	3.7	灰黄		
78	V	161	361	S001	C2	土師器	小碗	50		7.3	2.8	にぶい黄緑		
78	V	162	138	S001	C2	土師器	小碗	70		7.4	2.6	にぶい黄緑		
78	V	163	1031	S001	E3	土師器	小碗	100		7.5	3.0	にぶい黄緑		
78	V	164	615	S001	B2	土師器	小碗	50	反	7.6	4.2	にぶい黄緑		
78	V	165	215	S001	A3	土師器	小碗	30	反	7.6	4.2	にぶい黄緑	外面未調査	
78	V	166	1083	S001	D2	土師器	小碗	20	反	8.0		淡黄		
78	V	167	615	S001	B2	土師器	小碗	20	反	8.6		にぶい黄緑		
78	V	168	1150	S001	C2 + C3	土師器	小碗	40	反	9.0	3.7	連黄緑		
78	V	169	226	S001	A2	土師器	小碗	70		10.6		灰白		
78	V	170	224	S001	A2	土師器	小碗	20	反	13.4		連黄緑		
78	V	171	142	S001	D2	土師器	飯鉢	30		7.5	4.6	灰黄緑		
78	V	172	1959	S001	A3	土師器	飯鉢	40	反	9.2		8.6	にぶい黄緑	
78	V	173	212	S001	D3	土師器	飯鉢	20	反	12.4		にぶい黄緑		
78	V	174	464	S001	A3	土師器	鉢形	20	反	17.2		連黄緑	内面一部赤彩, 煤付層	
78	V	175	1058	S001	D2	土師器	高筒形	60				にぶい黄緑	即座径 2.4, 座径 3.6	
78	V	176	1062	S001	D2	土師器	高筒形	40				にぶい黄緑	即座径 2.6, 座径 3.2	
78	V	177	290	S001	B3	土製品	土馬			3.0	6.5	5.2	にぶい黄緑	
78	V	178	289	S001	B3	土製品	土馬			3.3	7.2	5.1	にぶい黄緑	耳取り付付値
78	V	179	1942	S001	A3	骨角製品	ト骨			3.1	17.7	0.2		十字形焼火着痕
78	V	180	141	S001	C2	石製品	硯石			3.3	4.7	1.5		20.7g, 湖沢灰, 環状
78	V	181	365	S001	C2	石製品	硯石			6.0	4.8	4.7	灰	56.3g, 硯石
88	Df B	1	216	SE01	E3	遺石器	横置	5	反	15.4	14.6	灰白色	2号番「竹田女」	
88	Df B	2	216	SE01	A3	遺石器	横置	10	反	15.6	15.0	灰白		
88	Df B	3	216	SE01	A3	遺石器	両平	10	反					遺径 11.8, Y1' 方向左, 裏面
88	Df B	4	313	SE01	A3	遺石器	書置	40	反	7.4		4.8	灰	自然輪磨
88	Df B	5	57 + 216	SE01	A3	遺石器	長筒蓋	50	反	16.0	20.0	7.6	灰白	遺部未調査
88	Df B	6	388	SE01	A3	土師器	鉢	10	反			15.6	淡黄	陶器 14.0
88	Df B	7	216	SE01	A3	土師器	鉢形	20	反			19.0	連黄緑	陶器 15.8
88	Df B	8	313	SE01	A3	土師器	小碗	10	反	7.0		5.6	連黄緑	
88	Df B	9	313	SE01	A3	土師器	鉢形	90		3.7		3.2	淡黄	
88	Df B	10	313	SE01	A3	石製品	硯石			5.6	7.8	1.8	灰	89.4g, 硯石
90	Df B	21	191	XK02	E3	遺石器	横置	50		15.6	3.6		灰	溝み径 2.4, Y1' 方向左, 横きし
90	Df B	22	265	XK02	E3	遺石器	無台坪	90		14.6	4.7	灰白	遺部未調査	
90	Df B	23	188 + 262	XK02	E3	遺石器	長筒蓋	90		20.4	26.7	9.0	灰	Y1' 方向左, 外面自然蝕, 底部煤付層, 磨痕?
90	Df B	24	186 + 203	XK02	E3	遺石器	長筒蓋	90		14.8			灰	Y1' 方向左, 自然蝕

出土遺物観察表

Fla	部位	番号	取上番号	遺構	グリッド	種類	説明	発見率	反転	面積	高さ	口径	色調	備考
90	F1b	25	262	SX02	E3	土師器	身	20	反	14.6			灰	
90	F1b	26	186	SX02	E3	土師器	身	30		16.0			灰白	全面赤彩、暗文
90	F1b	27	269	SX02	E3	土師器	小碗	70		5.8	3.4		灰	
90	F1b	28	259	SX02	E3	土師器	小碗	50	反	6.4	2.5		灰白	
90	F1b	29	261	SX02	E3	土師器	小碗	70		7.0	2.4		灰白	
90	F1b	30	261	SX02	E3	土師器	小碗	100		7.0	3.6		灰	底部黒染
90	F1b	31	269	SX02	E3	土師器	小碗	10	反	7.0	3.5		濃黄緑	
90	F1b	32	259	SX02	E3	土師器	小碗	30	反	7.4			濃黄緑	
90	F1b	33	264	SX02	E3	土師器	小碗	60		8.0		7.7	濃黄緑	
90	F1b	34	271	SX02	E3	土師器	小碗	10	反	8.1			濃褐色	
90	F1b	35	257	SX02	E3	土師器	小碗	90		7.5	4.0		にぶい黄緑	外面土粒を土上げの痕跡明確
92	F1b	37	151	SX03	D2	須恵器	横置	60		14.2	2.9		灰	3号書「福万呂」、読み1.1、1'1'方向左、412号
92	F1b	38	179	SX03	D3	須恵器	横置	90		15.0	2.4		灰	4号書「福万呂」、読み1.4、1'1'方向左
92	F1b	39	142	SX03	D2	須恵器	横置	70		13.2	2.7		灰	5号書「福万呂」、読み1.8、1'1'方向左、412号
92	F1b	40	133	SX03	D3	須恵器	横置	60					灰白	6号書「福万呂」、読み1.7、1'1'方向左、412号
92	F1b	41	189	SX03	A3	須恵器	横置	40	反	13.6			灰	7号書「福万呂」、1'1'1'方向左
92	F1b	42	177	SX03	D3	須恵器	平置	95		17.9	2.2		灰白	8号書「福万呂」、1'1'1'方向左、横中がみ
92	F1b	43	1051	SX03	C2	須恵器	路环	90		12.4	3.8		灰白	9号書「福万呂」、底径8.0、1'1'1'方向左
92	F1b	44	1057	SX03	D2	須恵器	路环	40					灰	10号書「福万呂」、底径8.0、1'1'1'方向左
92	F1b	45	130	SX03	D2	須恵器	路环	40	反	10.4	4.0		灰	11号書「福万呂」、底径8.5、1'1'1'方向左
92	F1b	46	160	SX03	D2	須恵器	板耳路环	40	反	13.8	5.2	10.3	灰	12号書「福万呂」(女性名)、底径6.0
92	F1b	47	25	SX03	E3	須恵器	皿	10	反				灰	13号書「福万呂」、底径10.0、1'1'1'方向左
92	F1b	48	171	SX03	D3	須恵器	高碗	60		12.8			灰	14号書「福万呂」、底径4.0
92	F1b	49	186	SX03	E3	須恵器	蓋	5					灰白	15号書「廣」、外面灰緑反付、色
92	F1b	50	43	SX03	D2	土師器	皿・杯	5					にぶい黄緑	16号書「福万呂」
92	F1b	51	129	SX03	D2	須恵器	横置	20	反	16.6			灰	1'1'1'方向左
92	F1b	52	133	SX03	D3	須恵器	有台杯身	60		15.8	4.0		灰	底径10.9、1'1'1'方向左
92	F1b	53	188・134	SX03	E3	須恵器	縁部有台杯身	40	反	14.4	3.4		灰	底径6.4、1'1'1'方向左
92	F1b	54	130	SX03	D2	須恵器	路环	60		14.7	4.7		灰	底径9.8、1'1'1'方向左
92	F1b	55	174	SX03	D3	須恵器	路环	10	反	17.4			焼灰	1'1'1'方向左
92	F1b	56	200	SX03	E3	須恵器	路环	50		10.7			灰白	粗用碗、(未定形)、1'1'1'方向左
92	F1b	57	172	SX03	D3	須恵器	広口壺	90		16.4		12.2	灰	緑灰色自然釉
93	F1b	58	10・89	SX03	D3・C2	須恵器	広口壺	50		25.0		15.1	灰	外周下部1111付、外面緑くれ
93	F1b	59	182	SX03	D3	須恵器	広口壺	30		23.2			灰白	1'1'1'方向左、外面黄緑自然釉
93	F1b	60	1068	SX03	D3	須恵器	壺	90		21.7		20.7	灰	底径14.4
93	F1b	61	158	SX03	D2	土師器	蓋	10		12.8	3.6		灰	縁部灰、内面赤彩、外面底部緑褐色
93	F1b	62	169	SX03	D2	土師器	蓋	50		12.8	3.6		濃黄	縁部灰、底径7.1、内面赤彩
93	F1b	63	133	SX03	D3	須恵器	蓋	5	反			25.6	灰	底径20.9
93	F1b	64	120	SX03	D3	土師器	小型甕	70		15.8	13.8		灰白	底径14.4、内面赤彩
93	F1b	65	159	SX03	D2	甕	不明						灰	底角、加工痕
95	F1b	79	187	SX04	E3	須恵器	無台碗	30		13.5	4.0		灰	底径6.2、底都未調整
95	F1b	80	187	SX04	E3	須恵器	無台碗	30		14.0	4.0		灰	底径6.4、内面底部中央の条線
95	F1b	81	187	SX04	E3	須恵器	無台碗	30	反	14.6			灰	底径7.5、底都未調整
95	F1b	82	212	SX04	D3	須恵器	無台碗	40	反	15.0	4.2		灰	底都未調整
95	F1b	83	134	SX04	E3	須恵器	無台碗	90		14.3	4.7		灰	底径6.0、底都未調整
95	F1b	84	187	SX04	E3	須恵器	無台碗	90		14.2	4.1		灰	1'1'1'方向左
95	F1b	85	187	SX04	E3	須恵器	蓋	40	反	20.0	2.0	19.8	焼灰	1'1'1'方向左
95	F1b	86	315	SX04	E3	須恵器	高碗	10	反	20.6			灰	17号書「廣」、1'1'1'方向左
95	F1b	87	187	SX04	E3	土師器	杯	20		14.6	3.7		灰	外面赤彩
95	F1b	88	187	SX04	E3	土師器	杯	30		14.0	3.0		灰	底径12.2、外面赤彩
95	F1b	89	187	SX04	E3	土師器	杯	30	反	15.0			灰	全面赤彩
95	F1b	90	188	SX04	E3	土師器	小碗	30		8.0			濃黄緑	
95	F1b	91	198	SX04	E3	土師器	小碗	80		9.5	3.5		灰	底径2.0
97	F1b	109	8	S001	A2・A3	須恵器	横置	40		15.2	3.6	14.8	灰	読み2.3、1'1'1'方向左
97	F1b	110	119	S001	C2	須恵器	横置	40		16.3	3.0	16.2	灰	読み2.2、1'1'1'方向左
97	F1b	111	58	S001	A2	須恵器	横置	40		16.0	3.5		灰	読み2.8、1'1'1'方向左
97	F1b	112	107	S001	C2	須恵器	横置	40		15.8	2.7		新灰	読み2.7、1'1'1'方向左、横面、裏面
97	F1b	113	132	S001	D3	須恵器	横置	20	反	14.8	2.8	14.5	灰	1'1'1'方向左、口縁部外面黒染
97	F1b	114	125	S001	C3	須恵器	横置	30	反	14.0		13.2	灰	1'1'1'方向左
97	F1b	115	35	S001	C2	須恵器	有台杯身	40	反	13.4	4.5		灰	底径9.2、1'1'1'方向左
97	F1b	116	119	S001	C2	須恵器	有台杯身	70		13.6	3.8		焼灰	底径10.7
97	F1b	117	193	S001	E3	須恵器	有台杯身	30	反	14.2	4.1		焼灰	底径10.2
97	F1b	118	204	S001	E3	須恵器	有台杯身	10	反	14.6	4.8		焼灰	底径11.2
97	F1b	119	115	S001	C2	須恵器	有台杯身	40	反	15.2	3.8		新灰	粗用碗、底径10.6、1'1'1'方向左
97	F1b	120	185	S001	C2	須恵器	有台杯身	10	反	15.2	3.8		灰	底径12.4、1'1'1'方向左
97	F1b	121	112	S001	C2	須恵器	有台杯身	50	反	15.4	4.4		灰	底径11.4、1'1'1'方向左
97	F1b	122	114	S001	C2	須恵器	有台杯身	40	反				灰	底径10.4、1'1'1'方向左
97	F1b	123	109	S001	C2	須恵器	有台杯身	10	反	19.3	5.8		焼灰	底径14.3
97	F1b	124	266	S001	A3	須恵器	路环	20	反	13.0	3.2		焼灰	底径7.3、1'1'1'方向左
97	F1b	125	71	S001	A3	須恵器	路环	40		13.0	3.2		灰	底径8.0、1'1'1'方向左、口縁部緑褐色、輪花
97	F1b	126	1959	S001	A3	須恵器	路环	40	反	13.2	3.6		灰	底径10.5、1'1'1'方向左
97	F1b	127	126	S001	A2・A3	須恵器	路环	40		14.0	3.4		灰	1'1'1'方向左
97	F1b	128	15	S001	D2	須恵器	有台杯身	20		13.5			明焼灰	底径11.6
97	F1b	129	70	S001	A3	須恵器	路环	10	反				焼灰	底径12.5、1'1'1'方向左
97	F1b	130	196	S001	E3	須恵器	無台碗	10	反	12.8			焼灰	
97	F1b	131	196	S001	E3	須恵器	無台碗	60		12.8	3.9		黄灰	底都未調整
97	F1b	132	57	S001	A3	須恵器	無台碗	10	反	13.5			灰	
97	F1b	133	184	S001	D3	須恵器	無台碗	80		14.1	4.3		灰	1'1'1'方向左
97	F1b	134	68	S001	A3	須恵器	無台碗	30	反	14.8	4.2		灰	底都未調整
97	F1b	135	205	S001	E3	須恵器	無台碗	70		15.2	4.8		灰	1'1'1'方向左
97	F1b	136	188	S001	E3	須恵器	横置	60		15.6	3.6		灰	粗用碗、読み2.8、1'1'1'方向左
97	F1b	137	187	S001	E3	須恵器	横置	95		15.8	3.8	15.5	灰	粗用碗、読み2.7、1'1'1'方向左、外面自然釉
97	F1b	138	90	S001	C3	須恵器	横置	20					灰	粗用碗、読み2.8
97	F1b	139	57	S001	A3	須恵器	横置	20		27.0	5.9	26.8	焼灰	粗用碗、読み2.2、1'1'1'方向左、外面自然釉

Fig	図位	番号	取上番号	遺構	グランド	種類	形状	長径	短径	厚さ	口径	色調	備考	
97	B/b	140	66	3001	A3	遺棄物	盤	10	反	28.7		灰白	Ⅱ' 1'方向左	
98	B/b	141	90	3001	B3	遺棄物	広口壺	100	15.0	12.3	11.4	灰	Ⅱ' 1'方向右, 自然蝕, 底部平持ち392f	
98	B/b	142	27	3001	E3	遺棄物	広口壺	90	14.6	16.3	12.0	灰白	頸径9.8 底径8.6, Ⅱ' 1'方向右	
98	B/b	143	92	3001	C2	遺棄物	広口壺	10				明灰	頸径10.7	
98	B/b	144	71	3001	B3	遺棄物	広口壺	100	16.6	16.1	13.1	灰	頸径10.6, 底径4.5, Ⅱ' 1'方向左, 自然蝕	
98	B/b	145	188	3001	E3	遺棄物	広口壺	10	反	12		灰白	頸径11.7	
98	B/b	146	49	3001	C2	遺棄物	鉢	10	反	15.6		灰赤	陶口	
98	B/b	147	369	3001	E3	遺棄物	香蓋	96	9.2	3.5	7.0	灰	自然蝕, Ⅱ' 3'方向右	
98	B/b	148	57・58	3001	A2・A3	遺棄物	長頸壺	70	13.2			灰	底径6.2, Ⅱ' 1'方向右, 外口縁から肩部自然蝕	
98	B/b	149	175	3001	B3	遺棄物	長頸壺	50	17.2			灰白	頸径7.9, Ⅱ' 1'方向左, 外口縁から自然蝕	
98	B/b	150	91	3001	A2	遺棄物	横皿	96	16.2	14.3	6.5	灰	外周特, 自然蝕	
98	B/b	151	188	3001	E3	遺棄物	盤	10	反			灰	頸径14.6, 自然蝕	
98	B/b	152	76	3001	A3	遺棄物	壺	20	反			明灰	頸径22.0	
99	B/b	153	130	3001	D2	土師器	杯	70	12.9	3.6		濃黄緑	全面赤彩	
99	B/b	154	93	3001	C3	土師器	杯	20	反	13.6		薄茶	全面赤彩, 増文?	
99	B/b	155	119	3001	C2	土師器	杯	20	反	14.4	3.5	明焼灰	全面赤彩	
99	B/b	156	184・187	3001	D2・E3	土師器	杯	30	反	14.0	3.2	灰白	底径11.0, 全面赤彩	
99	B/b	157	44	3001	D3	土師器	杯	90	12.6	3.3		濃黄緑		
99	B/b	158	133	3001	D3	土師器	杯	30	反	10.4	3.9	灰白	18号垂書「口」, 底径6.5, 全面赤彩	
99	B/b	159	108	3001	C2	土師器	有台杯	10	反	13.8	4.9	にぶい黄緑	底径9.5, 赤彩	
99	B/b	160	106	3001	C3	土師器	有台杯	80	14.8	5.1		灰	底径8.2, 全面赤彩	
99	B/b	161	53	3001	D2	土師器	皿	60	反	13.9	1.7	淡緑	全面赤彩(外周底部除く)	
99	B/b	162	120	3001	C2	土師器	皿	20	反	14.5	2.3	明焼灰	全面赤彩(外周底部除く)	
99	B/b	163	206	3001	C3	土師器	皿	20	反	14.6	2.0	明焼灰	内面赤彩	
99	B/b	164	93	3001	C2	土師器	高皿	10	反			薄茶	即頸径8.8, 底径9.2, 増文	
99	B/b	165	191	3001	E3	土師器	高皿	30				薄茶	即頸径6.1, 全面赤彩	
99	B/b	166	121	3001	B3	土師器	鉢	10	反	10.7		橙	底径9.8	
99	B/b	167	185	3001	D3	土師器	鉢	80	反	16.0	9.4	灰	底径9.5, 底径3.0, 内面赤彩	
99	B/b	168	89	3001	B3	土師器	鉢	20	反	16.2		明焼灰色	全面赤彩	
99	B/b	169	188	3001	E3	土師器	鉢	10	反	17.4		淡褐色		
99	B/b	170	133	3001	D3	土師器	壺	10	反	15.4		薄茶色	頸径13.4	
99	B/b	171	1061	3001	D2・D3	土師器	壺	5	反	14.5	22.3	灰白	頸径17.0	
99	B/b	172	157	3001	D2	土師器	壺	5	反		21.3	にぶい黄緑	頸径17.0	
99	B/b	173	126	3001	C2	土師器	壺	20	反	28.4		明焼灰	頸径24.0, 外周煤付着	
99	B/b	174	134	3001	E3	土師器	壺	5	反		33.6	灰	頸径30.0	
99	B/b	175	75	3001	A3	土師器	壺	10	反	35.9	6.0	灰白	頸径31.0, 煤付着	
99	B/b	176	185	3001	D3	土師器	鉢形	80	反	14.2	6.0	灰白	底径7.4, 内面赤彩, 外周煤付着	
99	B/b	177	188	3001	E3	土師器	瓶形	50		7.0	5.7	橙	底径有孔	
99	B/b	178	192	3001	E3	土師器	小罐	80	反	6.9	3.7	薄茶		
99	B/b	179	185	3001	D3	土師器	小罐	50		7.4	3.0	灰白		
99	B/b	180	188	3001	E3	土師器	瓶形	10	反	6.4	4.1	薄茶	底径2.1, 底部有孔	
99	B/b	181	201	3001	E3	土師器	瓶形	80		3.6	2.5	2.5	薄茶	底径2.5, 外周煤付着, 肩部深い付
99	B/b	182	49	3001	C2	土師器	壺	40	11.6			明焼灰	人面蓋書, 外周2f 値	
99	B/b	183	113	3001	C2	土師器	壺	10	反	12.0		明焼灰	人面蓋書, 口縁部赤彩	
99	B/b	184	110	3001	C2	土師器	壺	10				にぶい黄緑	蓋底	
104	B/a	1	32	3001	E3	反焼陶器	罐	60	14.0	3.8		灰白	無飾, 演習器のような構成	
104	B/a	2	856	3001	E2	反焼陶器	罐	60	反	15.5	5.1	灰白	底径7.6	
104	B/a	3	46	3001	E3	反焼陶器	罐	60	反	15.0	5.1	灰白	底径煤付着	
104	B/a	4	21	3001	D3	反焼陶器	罐	20	17.0	4.4		暗灰	底径8.1	
104	B/a	5	30	3001	A	反焼陶器	罐	80	16.0	6.0		灰		
104	B/a	6	167	3001	E3	反焼陶器	罐	45	反	15.0	4.2	灰黄	内面底部裏面銀焼	
104	B/a	7	48	3001	E3	反焼陶器	罐	60		14.4	4.2	灰白	底径7.6	
104	B/a	8	187	3001	E3	反焼陶器	罐	30	反	14.0	4.3	灰白	底径6.3, 無飾	
104	B/a	9	28・29	3001	E2	反焼陶器	罐	20	反	13.1	4.5	灰白	底径6.2	
104	B/a	10	21	3001	D3	反焼陶器	罐	20	反	14.0	4.4	灰白色	底径6.4, 無飾, 土師質	
104	B/a	11	45	3001	E3	反焼陶器	罐	10	反	12.8	4.0	濃黄緑色	底径5.6, 土師質	
104	B/a	12	21	3001	D3	反焼陶器	罐	10	反			明灰色	底径7.2	
104	B/a	13	45	3001	E3	反焼陶器	罐	20	反			灰白色	底径6.3	
104	B/a	14	9	3001	C2・C3	反焼陶器	罐	20	反			灰白色	底径6.2	
104	B/a	15	34	3001	E3	反焼陶器	罐	20	反			灰白	底径7.0	
104	B/a	16	29	3001	E2	反焼陶器	深碗	70	反	15.2	6.7	灰白	底径8.0, 梅花	
104	B/a	17	21	3001	D3	反焼陶器	平皿	80	11.2			明灰	K90, 底径6.8, 上部施釉	
104	B/a	18	12	3001	E3	土師器	蓋	10	反			35.0	薄黄緑, 底径33.6, 平安時代	
104	B/a	19	2026	3001	D5	石製品	硯石	5.7	7.3	2.6		165.8g, 黒灰質		
104	B/a	20	2026	3001	D5	石製品	硯石	8.9	11.4	4.0		456.9g, 黒灰質		
104	B/a	21	26	3001	E3	石製品	印石	4.7	13.3	2.2		213.5g, 黒灰質, 石緑?		
108	B区	1	2029	SX111	C5	土師器	二重口鉢蓋	50	27.8		18.4	にぶい黄緑	頸径15.0, 外周煤付着, 全体緑な調整	
108	B区	2	2029	SX111	C5	土師器	鉢	60	反	12.5	5.1	濃黄緑	底径3.6	
108	B区	3	1971	包舎層	D6	土師器	にぶい黄緑	20	12.8	5.0		濃黄緑	底径5.8	
108	B区	4	2029	SX111	C5	土師器	有接高坪	20	反		19.8	濃黄緑		
108	B区	5	1993	包舎層	D6	土師器	有接高坪	40				にぶい黄緑	即頸9.0	
108	B区	6	2030	SX112	C5	土師器	壺	90	28.8	35.0	18.8	にぶい黄緑	頸径15.7, 外周煤付着	
110	B区大溝	1	2178	SE102	D5	遺棄物	陶蓋	90	14.4	3.2	14.8	灰	焼ム2.2, Ⅱ' 1'方向左	
110	B区大溝	2	2368	SE102	D5・E5	遺棄物	横皿	30	15.4	3.4	15.0	灰	焼ム2.3, Ⅱ' 1'方向右	
110	B区大溝	3	2349	SE102	D5	遺棄物	有台杯身	30	反	15.0	4.0	灰	底径11.0, Ⅱ' 1'方向右	
110	B区大溝	4	2351	SE102	E5	遺棄物	陶杯	60	反	11.0	3.3	灰	底径9.4, Ⅱ' 1'方向右	
110	B区大溝	5	2180	SE102	D5	遺棄物	無台碗	70	反	13.0	4.2	灰	底径6.4, Ⅱ' 1'方向左	
110	B区大溝	6	2345	SE102	E5	遺棄物	無台碗	60	反	14.0	4.2	灰黄	底径5.4, Ⅱ' 1'方向右, 火だすき顯著	
110	B区大溝	7	2179	SE102	D5	遺棄物	無台碗	40	反	14.2	4.5	灰	底径6.6, 赤銅質	
110	B区大溝	8	2368	SE102	D5・E5	遺棄物	無台碗	20	反	14.6		灰		
110	B区大溝	9	2368	SE102	D5・E5	土師器	鉢	10	24.2			にぶい黄緑		
110	B区大溝	10	2368	SE102	D5・E5	土師器	鉢	20	20.0			濃黄緑		
110	B区大溝	11	2368	SE102	D5・E5	土師器	小罐	60	6.8		6.4	濃黄緑	底径3.0	
110	B区大溝	12	2368	SE102	D5・E5	土師器	小罐	50	7.0	3.0	6.4	濃黄緑	底径3.0	

Fig	層位	番号	取上番号	遺構	グリッド	種別	細別	径(mm)	反転	径長	高さ	口径	色調	備考
110	B区大溝	13	2347	SE102	E5	土師器	小碗	20	反	7.4		6.6	透黄緑	
110	B区大溝	14	2346	SE102	E5	土師器	小碗	20	反	7.3	3.5	6.6	黄緑	透径4.0
110	B区大溝	15	2348	SE102	E5	土師器	小碗	100		7.3	3.0		にぶい緑	透径3.1
110	B区大溝	16	2368	SE102	D5-E5	土師器	小碗	20		7.4		6.8	透黄緑	
110	B区大溝	17	2359	SE102	D5-E5	土師器	鉢形	80		8.3	3.5	7.8	灰黄	透径4.2
111	B区大溝	21	2018	SE102	E5	滑石器	返り蓋	40	反	12.4	3.5		灰白	透径2.9
111	B区大溝	22	2157	SE102	E5	滑石器	有台坪身	30	反	16.0	3.8		灰	透径10.8
111	B区大溝	23	2145	SE102	D5	滑石器	有台坪身	30	反	16.6	4.9		灰白	透径10.4
111	B区大溝	24	2145	SE102	D5	滑石器	踏圧	40	反	13.4	4.9		灰	透径8.6
111	B区大溝	25	2145	SE102	D5	滑石器	無台碗	40	反	14.2	4.8		灰白	透径6.4, 透部未調整
111	B区大溝	26	2157	SE102	E5	滑石器	無台碗	40	反	20.0	6.4		灰	透径7.0
111	B区大溝	27	1967	SE102	D5	滑石器	蓋	10	反			53.0	灰白	
111	B区大溝	28	1964	SE102	E5	灰釉陶器	碗	20	反	16.8			にぶい黄緑	内外釉面、内面黄緑色？
111	B区大溝	29	2018	SE102	E5	灰釉陶器	碗	5	反			8.7	にぶい黄緑	全面釉
111	B区大溝	30	1967	SE102	D5-E5	灰釉陶器	碗	20					灰白	19号墓室「本」、透径6.5、H1方向左
111	B区大溝	31	2018	SE102	E5	灰釉陶器	碗	20					灰白	透径5.8、一部黄緑？
111	B区大溝	32	1967	SE102	D5	灰釉陶器	碗	30					灰	透径7.6
111	B区大溝	33	1964	SE102	E5	土師器	蓋	90		13.4	3.5		黄	透径6.5、内面赤彩
111	B区大溝	34	2016	SE102	E5	土師器	蓋	20	反			14.0	にぶい黄緑	透径12.2、外周深付着
111	B区大溝	35	2018	SE102	E5	土師器	蓋	10	反			19.6	黄緑	透径16.4、外周深付着
111	B区大溝	36	2175	SE102	E5	土師器	小碗	50	反	7.3	3.0		灰白	透径4.4
111	B区大溝	37	1967	SE102	D5	土師器	小碗	100		7.2	3.3		透黄緑	透径3.0、底部穿孔
111	B区大溝	38	2157	SE102	E5	土師器	小碗	95		6.6	3.8	6.1	透黄緑	透径3.3
111	B区大溝	39	2372	SE102	E5	土師器	小碗	40	反	6.5	3.2	6.0	にぶい黄緑	透径2.6、外周深付着
112	B区	1	2142	SE101	B5	中世陶器	山茶碗	40		15.6	8.2		灰	透部糸切り
112	B区	2	2049	SE101	B5	中世陶器	山茶碗	10	反	15.0			灰黄	
112	B区	3	2049	SE101	B5	中世陶器	山茶碗	10	反				灰	透径10.9、透部糸切り
112	B区	4	2049	SE101	B5	中世陶器	山蓋	20	反	8.2			灰	透部糸切り
112	B区	5	2049	SE101	B5	中世陶器	広口壺	5	反			15.0	赤灰	全面自然釉
115	D区	1	3385	SE301	B6	土師器	蓋	5	反			17.0	にぶい黄緑	透径15.0
115	D区	2	3386	SE301	B6	土師器	蓋	5	反			17.3	にぶい黄緑	透径14.5
115	D区	3	3382	包倉層	B6	土師器	蓋	10	反			21.2	明赤褐	透径18.0
115	D区	4	3384	包倉層	B6	土師器	高坪	20					黄	透径2.6、裏面

Fig	部位	番号	類別番号	遺構	種類	詳細	材質	処理	長さ	幅	厚み	備考
22	竪木	122	W184	SK05	不明品	先施加工棒		乾燥	17.9	1.7	1.0	
43	竪木	671	W190	SK01	農具	曲柄平鍬	ブナ科コナラ属アカガシ産	煮浸	29.3	18.4	1.5	
43	竪木	672	W186	SK01	農具	曲柄平鍬	ブナ科コナラ属アカガシ産	煮浸	34.0	15.5	2.2	
43	竪木	673	W122	SK01	農具	曲柄平鍬	ブナ科コナラ属アカガシ産	煮浸	26.7	11.5	1.2	
43	竪木	674	W179	SK01	農具	曲柄平鍬		乾燥	6.5	6.2	1.4	
43	竪木	675	W187	SK01	農具	木鏝	ヒノキ科アスナロ属	煮浸	100	10.2	8.2	7.5
43	竪木	676	W191	SK01	農具	木鏝	マツ科モミ属	煮浸	90	16.5	7.5	6.0
43	竪木	677	W185	SK01	農具	木鏝	ヒノキ科アスナロ属	煮浸	100	15.6	6.5	5.5
44	竪木	678	W192	SK01	漆器類	椀	ブナ科コナラ属アカガシ産	煮浸	54.3	9.7	1.7	
44	竪木	679	W163	SK01	漆器類	盥洗器（覆斗）		乾燥	50	30.1	6.5	3.0
44	竪木	680	W177	SK01	不明品	先施加工棒		乾燥	15.6	2.0	0.7	
44	竪木	681	W178	SK01	不明品	挟り入り板		乾燥	29.3	3.7	0.9	
44	竪木	682	W186	SK01	容器	割物桶底板		乾燥	100	17.7	17.5	1.0
44	竪木	683	W194	SK01	不明品	有脚樽		乾燥	12.9	7.4	4.2	側面木釘痕7ヶ所
44	竪木	684	W181	SK01	容器	板付樽	ヒノキ科アスナロ属	煮浸	30.7	9.5	4.3	
44	竪木	685	W205	SK01	装身具	指輪	ツグツグツグ属ツグ	煮浸	3.9	3.2	0.8	刻線式模刻
67	竪木	592	W149	SK01	農具	木鏝	ヒノキ科ヒノキ属	煮浸	80	12.4	8.6	7.9
67	竪木	593	W157	SK01	農具	木鏝	マツ科トウヒ属	煮浸	100	15.1	6.3	3.6
67	竪木	594	W122	SK01	農具	杵	ブナ科コナラ属アカガシ産	煮浸	22.8	3.7	3.4	両端欠損
67	竪木	595	W135	SK01	不明品	有孔棒	ヒノキ科アスナロ属	煮浸	80	19.3	2.9	2.7
67	竪木	596	W155	SK01	不明品	有孔棒		乾燥	18.7	2.4	1.9	
67	竪木	597	W156	SK01	不明品	有孔棒		乾燥	100	22.8	3.0	2.1
67	竪木	598	W140	SK01	不明品	有孔棒		乾燥	19.3	2.3	2.2	両端欠損
67	竪木	599	W195	SK01	不明品	加工板	ブナ科コナラ属アカガシ産	煮浸	41.3	9.8	1.5	
67	竪木	600	W164	SK01	不明品	加工板		乾燥	80	21.8	2.9	1.2
67	竪木	601	W168	SK01	不明品	加工板		乾燥	13.9	2.6	1.3	
67	竪木	602	W138	SK01	不明品	加工板		乾燥	18.9	5.5	1.2	
67	竪木	603	W182	SK01	不明品	加工板		乾燥	90	15.4	4.7	1.3
67	竪木	604	W142	SK01	不明品	先施加工棒		乾燥	19.6	1.8	0.9	
67	竪木	605	W158	SK01	不明品	先施加工棒	ヒノキ科アスナロ属	煮浸	95	10.6	1.2	0.8
68	竪木	606	W147	SK01	祭祀具	蓋奉	ヒノキ科ヒノキ属	煮浸	95	24.4	1.8	0.4
68	竪木	607	W180	SK01	祭祀具	蓋奉	ヒノキ科アスナロ属	煮浸	13.3	2.6	0.4	
68	竪木	608	W189	SK01	祭祀具	蓋奉		乾燥	8.7	1.5	0.2	
68	竪木	609	W145	SK01	祭祀具	蓋奉（覆斗）		乾燥	7.1	2.2	0.5	
68	竪木	610	W137	SK01	祭祀具	馬形	ヒノキ科アスナロ属	煮浸	100	10.8	2.5	0.5
68	竪木	611	W167	SK01	祭祀具	馬形	ヒノキ科アスナロ属	煮浸	95	19.5	4.0	0.6
68	竪木	612	W72	SK01	装身具	指輪	広葉樹	煮浸	4.3	2.3	0.8	刻線式模刻
68	竪木	613	W160	SK01	家器	琴柱	ヒノキ科アスナロ属	煮浸	100	3.8	1.9	0.9
68	竪木	614	W161	SK01	不明品	8字形加工板	マツ科マツ属（ニ重松樹）	煮浸	10.6	4.4	1.2	
68	竪木	615	W162	SK01	容器	曲物底板		乾燥	70	16.3	11.0	0.9
68	竪木	616	W163	SK01	容器	曲物底板	ヒノキ科ヒノキ属	煮浸	95	17.1	17.1	0.7
68	竪木	617	W153	SK01	容器	曲物底板	ヒノキ科ヒノキ属	煮浸	95	17.4	16.7	0.8
68	竪木	618	W148	SK01	容器	曲物底板		乾燥	45.4	3.4	1.2	有段
69	竪木	619	W139-1	SK01	容器	曲物底板		乾燥	35.1	25.5	0.2	有段
69	竪木	620	W139-2	SK01	容器	曲物底板		乾燥	25.0	17.8	0.2	
69	竪木	621	W139-3	SK01	容器	曲物底板		乾燥	17.9	16.9	0.2	
69	竪木	622	W139-3	SK01	容器	曲物底板		乾燥	26.0	8.4	0.2	
76	V	96	W171	SS04	不明品	先施加工棒		乾燥	84.9	3.7	3.3	
76	V	97	W190	SS04	建築部材	有孔板		乾燥	95.7	16.8	5.3	階段状断面に使用
76	V	98	W197	SS04	不明品	加工板		乾燥	20.5	7.5	3.3	穿孔
79	V	182	W68	SK01	文書木器	1号木簡	ヒノキ科ヒノキ属	煮浸	9.0	1.9	0.4	
79	V	183	W62	SK01	文書木器	2号木簡	ヒノキ科ヒノキ属	煮浸	14.4	3.0	0.6	曲物転用
79	V	184	W61	SK01	文書木器	3号木簡	ヒノキ科ヒノキ属	煮浸	70	40.7	6.5	0.7
79	V	185	W60	SK01	文書木器	4号木簡	ヒノキ科アスナロ属	煮浸	10.2	1.3	0.4	
79	V	186	W125	SK01	文書木器	5号木簡	ヒノキ科アスナロ属	煮浸	20.3	5.4	0.5	709 紀年部
79	V	187	W57	SK01	文書木器	6号木簡		乾燥	100	31.1	2.2	0.8
80	V	188	W108	SK01	祭祀具	人形	ヒノキ科アスナロ属	煮浸	90	17.5	2.8	0.7
80	V	189	W99	SK01	祭祀具	蓋奉	ヒノキ科ヒノキ属	煮浸	10.6	2.4	0.4	
80	V	190	W105	SK01	祭祀具	蓋奉	ヒノキ科アスナロ属	煮浸	8.4	2.4	0.5	
80	V	191	W116	SK01	祭祀具	蓋奉	ヒノキ科アスナロ属	煮浸	10.6	1.9	0.3	
80	V	192	W117	SK01	祭祀具	蓋奉		乾燥	6.8	2.6	0.4	
80	V	193	W107	SK01	祭祀具	蓋奉	ヒノキ科アスナロ属	煮浸	12.9	1.9	0.6	
80	V	194	W109	SK01	祭祀具	蓋奉	ヒノキ科ヒノキ属	煮浸	11.5	1.8	0.3	
80	V	195	W114	SK01	祭祀具	蓋奉		乾燥	12.2	2.1	0.6	
80	V	196	W116	SK01	祭祀具	蓋奉	ヒノキ科アスナロ属	煮浸	95	36.8	2.2	0.7
80	V	197	W13	SK01	祭祀具	蓋奉	ヒノキ科アスナロ属	煮浸	100	38.3	2.6	0.6
80	V	198	W115	SK01	祭祀具	蓋奉？		乾燥	42.6	2.1	0.5	
80	V	199	W133	SK01	祭祀具	蓋奉	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ	煮浸	62.5	2.0	0.9	
80	V	200	W124	SK01	祭祀具	馬形	ヒノキ科ヒノキ属	煮浸	70	12.2	2.1	0.4
80	V	201	W134	SK01	祭祀具	馬形	ヒノキ科アスナロ属	煮浸	95	11.6	3.5	0.4
80	V	202	W101	SK01	祭祀具	馬形	ヒノキ科ヒノキ属	煮浸	8.4	3.2	0.5	腹部切り込み
80	V	203	W11	SK01	祭祀具	舟形	ヒノキ科アスナロ属	煮浸	90	20.1	6.2	3.5
81	V	204	W112	SK01	容器	曲物底板		乾燥	95	18.0	18.0	0.9
81	V	205	W112	SK01	容器	曲物底板		乾燥	40	18.0	18.0	0.9
81	V	206	W120	SK01	容器	曲物底板		乾燥	20	27.6	5.7	1.0
81	V	207	W163	SK01	容器	曲物底板	ヒノキ科アスナロ属	煮浸	30	69.0	19.0	1.3
81	V	208	W110	SK01	容器	曲物底板		乾燥	20	41.0	9.9	1.0
82	V	209	W119	SK01	運搬具	背負子	マツ科マツ属（ニ重松樹）	煮浸	100	29.2	21.9	5.1
82	V	210	W136	SK01	運搬具	背負子	マツ科マツ属（ニ重松樹）	煮浸	90	42.4	8.8	4.6
82	V	211	W166	SK01	運搬具	背負子	マツ科マツ属（ニ重松樹）	煮浸	50	27.0	4.8	4.8
83	V	212	W55	SK01	農具	曲柄平鍬	ブナ科コナラ属アカガシ産	煮浸	31.5	14.3	1.4	
83	V	213	W24	SK01	農具	曲柄平鍬	ブナ科コナラ属アカガシ産	煮浸	22.4	6.2	1.8	鍬頭部欠損
83	V	214	W7	SK01	農具	鋤付	ブナ科コナラ属アカガシ産	煮浸	46.3	8.4	8.4	鍬頭部欠損
83	V	215	W176	SK01	農具	田下駄	ヒノキ科アスナロ属	煮浸	100	81.0	5.1	2.9
84	V	216	W130	SK01	農具	木鏝	ヒノキ科アスナロ属	煮浸	90	12.3	7.1	3.9
84	V	217	W65	SK01	不明品	加工棒		乾燥	23.2	9.3	5.6	
84	V	218	W94	SK01	不明品	加工棒		乾燥	10.9	5.5	3.5	

出土遺物（木製品）観察表

Fig	部位	番号	識別番号	遺構	種類	詳細	材 種	処理	形状	長さ	幅	厚み	備 考
84	V	219	W95	S001	不明品	加工板	乾燥		乾燥	10.6	2.4	0.6	
84	V	220	W98	S001	不明品	加工棒	乾燥		乾燥	7.6	2.5	1.4	
84	V	221	W96	S001	不明品	先端加工棒	乾燥		乾燥	39.4	2.4	1.7	
84	V	222	W93	S001	不明品	先端加工棒	乾燥		乾燥	34.2	2.1	1.4	
84	V	223	W131	S001	不明品	狭り入り板	乾燥		乾燥	31.1	4.4	1.3	
84	V	224	W111	S001	不明品	加工棒	含水		含水	31.9	4.1	1.8	板状部穿孔3
84	V	225	W102	S001	不明品	先端加工棒	含水	100	含水	24.8	1.8	1.2	
84	V	226	W103	S001	不明品	先端加工棒	乾燥		乾燥	13.2	1.2	0.8	
84	V	227	W90	S001	不明品	先端加工棒	乾燥		乾燥	9.6	1.3	1.0	
88	Bb	11	W129	SE01	容器	曲物底版	乾燥	40	乾燥	44.6	16.3	1.2	有段
88	Bb	12	W126	SE01	容器	曲物底版	乾燥	20	乾燥	61.2	10.6	1.1	有段、底丸方形
88	Bb	13	W127	SE01	容器	曲物底版	含水	100	含水	53.5	44.8	1.9	有段、底丸方形
90	Bb	14	W45	SX01	祭祀具	人形	含水	95	含水	22.7	3.3	0.3	人面遺構
90	Bb	15	W40	SX01	祭祀具	人形	含水	100	含水	11.6	2.7	0.2	人面遺構
90	Bb	16	W42	SX01	祭祀具	遺構	含水	95	含水	14.7	2.1	0.3	
90	Bb	17	W41	SX01	祭祀具	遺構	含水	95	含水	14.9	2.1	0.3	
90	Bb	18	W58	SX01	祭祀具	遺構	含水		含水	12.0	3.1	0.3	
90	Bb	19	W53	SX01	祭祀具	遺構	乾燥		乾燥	23.0	1.7	0.8	
90	Bb	20	W44	SX01	祭祀具	遺構	含水		含水	13.2	2.6	0.3	
90	Bb	26	W113	SX02	祭祀具	遺構	含水		含水	6.6	1.5	0.4	
93	Bb	65	W175	SX03	祭祀具	遺構	含水		含水	6.3	1.8	0.3	
93	Bb	67	W172	SX03	祭祀具	遺構	含水	95	含水	17.1	1.6	0.4	
93	Bb	68	W171	SX03	祭祀具	遺構	含水		含水	12.6	1.6	0.4	
93	Bb	69	W60	SX03	祭祀具	遺構	含水		含水	12.8	2.0	0.4	
93	Bb	70	W70	SX03	祭祀具	遺構	含水		含水	11.6	2.3	0.4	
93	Bb	71	W48	SX03	祭祀具	遺構	含水		含水	20.3	2.2	0.5	
93	Bb	72	W53	SX03	祭祀具	遺構	含水	95	含水	43.8	2.8	0.8	
94	Bb	73	W51	SX03	容器	曲物底版	乾燥	70	乾燥	16.4	15.1	1.0	有段
94	Bb	74	W51	SX03	容器	曲物底版	乾燥	30	乾燥	17.5	6.9	0.7	有段
94	Bb	75	W49	SX03	容器	曲物底版	乾燥	25	乾燥	26.6	7.4	0.6	有段
94	Bb	76	W37	SX03	容器	曲物底版	乾燥	25	乾燥	62.7	13.4	1.4	有段、横円形
94	Bb	77	W74	SX03	容器	曲物底版	乾燥		乾燥	10.8	2.4	0.5	
94	Bb	78	W74	SX03	容器	曲物底版	乾燥		乾燥	10.8	2.0	0.4	
96	Bb	92	W66	SX04	祭祀具	人形	含水	70	含水	16.7	3.8	0.4	
96	Bb	93	W61	SX04	祭祀具	遺構	含水		含水	13.8	3.2	0.4	
96	Bb	94	W3	SX04	祭祀具	遺構	含水	80	含水	15.9	2.6	0.4	
96	Bb	95	W55	SX04	祭祀具	遺構	乾燥		乾燥	3.2	2.2	0.4	
96	Bb	96	W78	SX04	祭祀具	遺構	含水		含水	8.0	1.9	0.3	
96	Bb	97	W83	SX04	祭祀具	遺構	乾燥		乾燥	10.3	1.8	0.6	
96	Bb	98	W64	SX04	祭祀具	遺構	乾燥		乾燥	12.6	1.7	0.6	
96	Bb	99	W77	SX04	祭祀具	遺構	乾燥		乾燥	14.7	1.2	0.5	
96	Bb	100	W75	SX04	祭祀具	遺構	乾燥		乾燥	16.7	2.1	0.6	
96	Bb	101	W68	SX04	祭祀具	遺構	乾燥		乾燥	36.1	3.2	0.5	
96	Bb	102	W76	SX04	祭祀具	舟形	含水	40	含水	14.0	2.1	2.9	
96	Bb	103	W62	SX04	不明品	板状木製品	含水	100	含水	42.1	1.8	1.4	
96	Bb	104	W69	SX04	不明品	狭り部状木製品	含水		含水	23.3	2.7	0.9	
96	Bb	105	W63	SX04	容器	曲物底版	乾燥	20	乾燥	25.6	5.1	0.9	有段
96	Bb	106	W67	SX04	容器	曲物底版	乾燥	50	乾燥	14.2	7.8	0.7	無段
96	Bb	107	W56	SX04	不明品	くさび状木器	乾燥		乾燥	23.0	2.3	1.8	
96	Bb	108	W54	SX04	不明品	高橋加工棒	乾燥		乾燥	15.4	1.1	0.7	
100	Bb	185	W18	S001	農具	鎌柄	含水		含水	27.2	3.4	1.4	
100	Bb	186	W28	S001	容器	曲物底版	乾燥	40	乾燥	17.8	7.9	0.6	有段
100	Bb	187	W15	S001	容器	曲物底版	乾燥	20	乾燥	20.0	4.5	0.9	無段
100	Bb	188	W20	S001	容器	曲物底版	乾燥	25	乾燥	28.1	7.7	0.9	無段
100	Bb	189	W21	S001	容器	曲物底版	乾燥	20	乾燥	30.5	8.2	0.8	無段
100	Bb	190	W89	S001	容器	曲物底版	乾燥	30	乾燥	21.8	7.5	1.3	有段
100	Bb	191	W22	S001	容器	高台付蓋	乾燥		乾燥	47.2	13.5	1.5	
100	Bb	192	W30	S001	不明品	へう状加工板	乾燥		乾燥	24.5	3.2	0.9	
100	Bb	193	W52	S001	不明品	先端加工棒	乾燥		乾燥	17.3	1.6	1.0	
100	Bb	194	W16-1	S001	不明品	先端加工棒	乾燥		乾燥	7.5	1.5	1.3	
100	Bb	195	W17-1	S001	不明品	先端加工棒	乾燥		乾燥	7.3	1.4	1.1	
100	Bb	196	W17-2	S001	不明品	先端加工棒	乾燥		乾燥	8.3	1.3	1.0	
100	Bb	197	W16-2	S001	不明品	先端加工棒	乾燥		乾燥	6.7	1.4	1.2	
100	Bb	198	W24	S001	不明品	加工板	乾燥		乾燥	10.5	6.6	1.3	曲物転用
101	Bb	200	W27	S001	祭祀具	人形	含水	90	含水	15.0	2.0	0.8	
101	Bb	201	W33	S001	祭祀具	遺構	含水	40	含水	11.0	3.2	0.5	
101	Bb	201	W33	S001	祭祀具	遺構	含水		含水	20.2	3.5	0.8	
101	Bb	202	W10	S001	祭祀具	遺構	含水		含水	35.9	2.7	0.5	
101	Bb	203	W23	S001	祭祀具	遺構	含水		含水	8.4	2.6	0.7	
101	Bb	204	W73	S001	祭祀具	遺構	乾燥		乾燥	13.0	2.0	0.6	
101	Bb	205	W36	S001	祭祀具	遺構	含水		含水	20.7	2.7	0.5	
101	Bb	206	W2	S001	祭祀具	遺構	乾燥		乾燥	30.5	2.4	0.8	
101	Bb	207	W19	S001	祭祀具	狭り部状木製品	含水		含水	29.8	2.2	2.1	
101	Bb	208	W21	S001	祭祀具	加工板	含水		含水	19.0	5.0	0.6	遺構・朱刻
101	Bb	209	W22	S001	祭祀具	加工板	含水		含水	12.4	2.8	0.7	遺構・朱刻
101	Bb	210	W29	S001	祭祀具	舟形	含水	95	含水	22.2	6.1	2.0	断面部特殊入底
101	Bb	211	W12	S001	祭祀具	舟形	含水	90	含水	17.4	3.2	1.3	
101	Bb	212	W25	S001	祭祀具	舟形	含水	95	含水	17.5	3.1	1.5	
101	Bb	213	W14	S001	不明品	加工棒	含水		含水	4.1	1.8	0.8	翼状突起
105	III	22	W1	S001	容器	曲物底版	含水	100	含水	57.2	48.5	1.6	有段、底丸方形
105	III	23	W16	S001	容器	樽	乾燥		乾燥	36.2	9.1	1.2	
110	B 調査代	18	W602	SE102	農具	臼	含水	遺物欠損	55.8	51.3	22.3	井戸特製用	
110	B 調査代	19	W199	SE102	祭祀具	遺構	乾燥		乾燥	8.0	1.4	0.4	
110	B 調査代	20	W196	SE102	祭祀具	遺構	乾燥		乾燥	10.7	1.3	0.3	

図 版

PLATE



SX05 調査風景



Ⅶ層 完掘状況（西から）



Ⅶb層 SX05 遺物出土状態（北東から）



VIIb 層 SX05 遺物出土状態（北西から）



1 VIIb 層 SX05 遺物出土状態 (東から)



2 VIIb 層 遺物出土状態 (C2 区、南西から)



1 Vib層 円頭大刀出土状態（南東から）



2 Vib層 円頭大刀出土状態（東から）



VIIa層 完掘状況（東から）



V層 貝塚 SS01・02 (北東から)



1 V層 馬頭骨 (B11) 出土状態 (南西から)



2 V層 馬骨 (B8・B9) 出土状態 (北から)



3 V層 3号木簡出土状態 (北東から)



1 V層 貝塚 SS04 (南から)



2 V層 貝塚 SS02 (東から)



3 V層 貝塚 SS02 断面 (西から)



IVb層 SX01 遺物出土状態（南東から）



1 IVb 層 SE01 (南から)



2 IVb 層 B区 SE102 (西から)



1 IVb 層 SX03 遺物出土状態 (北西から)



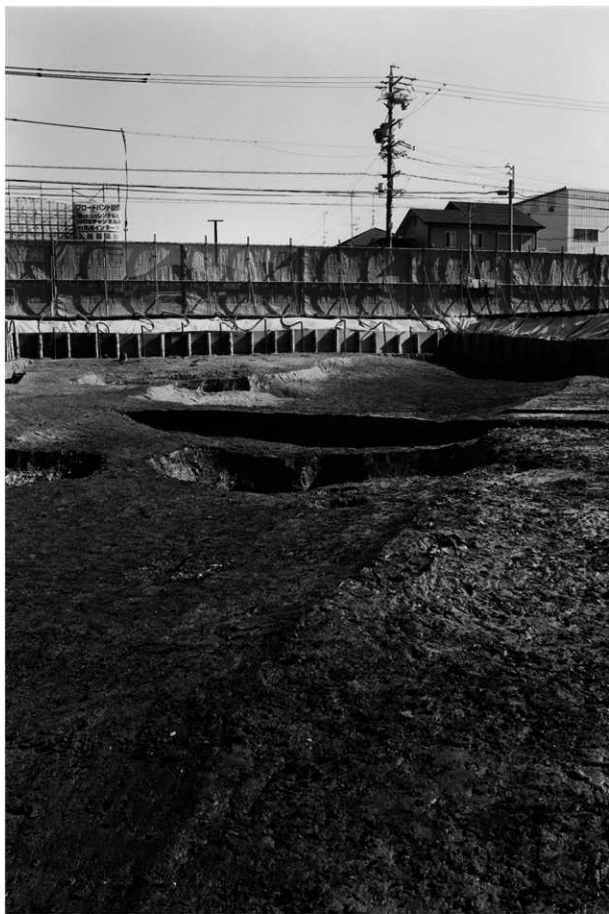
2 IVb 層 SX03 遺物出土状態 (南東から)



3 IVb 層 SX03 遺物出土状態 (南東から)



4 IVb 層竄串 (201) 出土状態 (南西から)



Ⅲ層 完掘状況（西から）



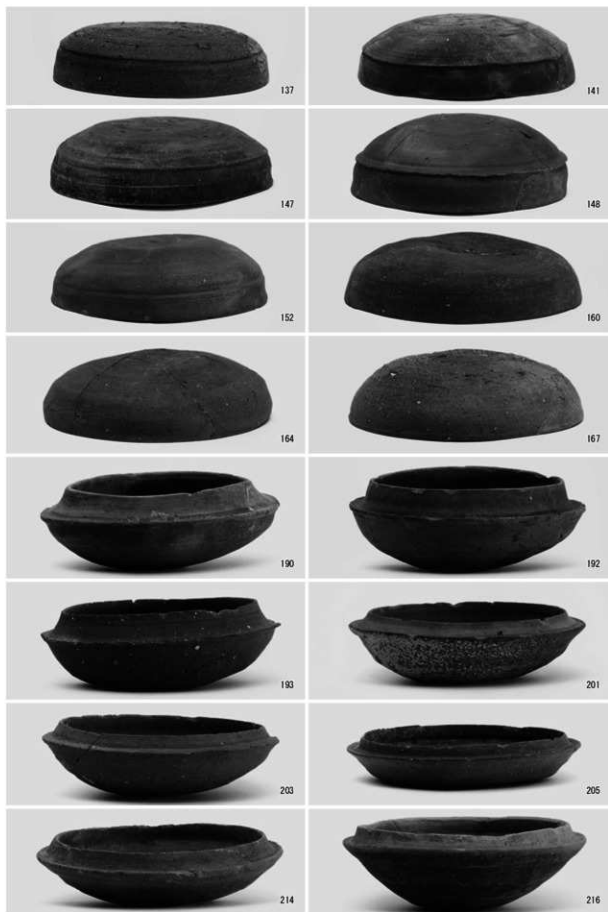
B区 最上層遺構（東から）



VIIb 層 出土主要遺物

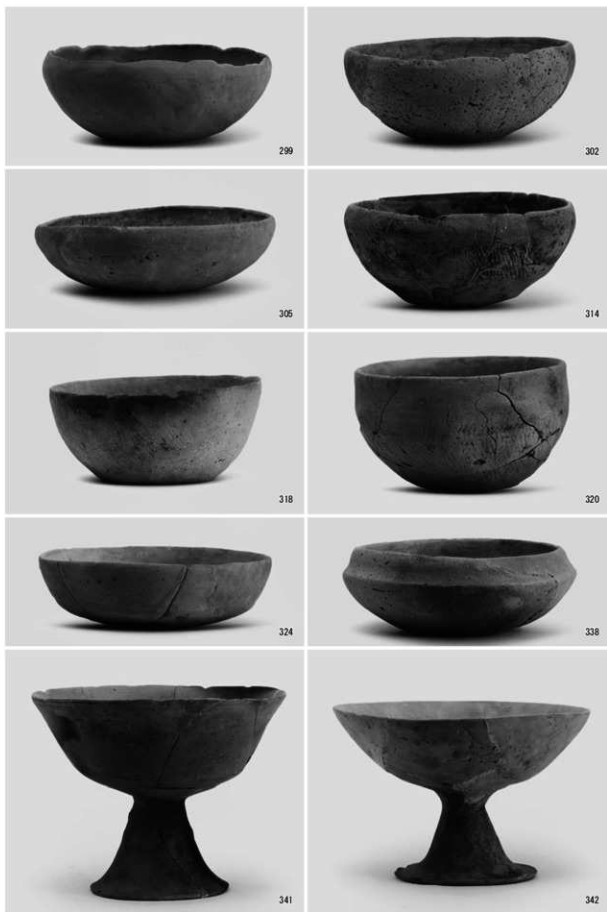


Ⅶ層 SX05 出土遺物



VIIb 層 出土遺物 (1)

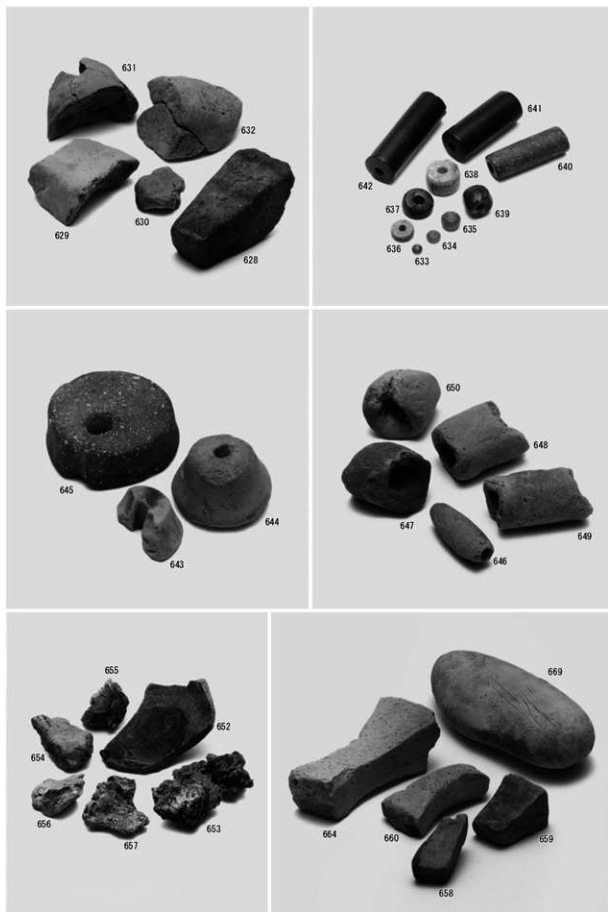




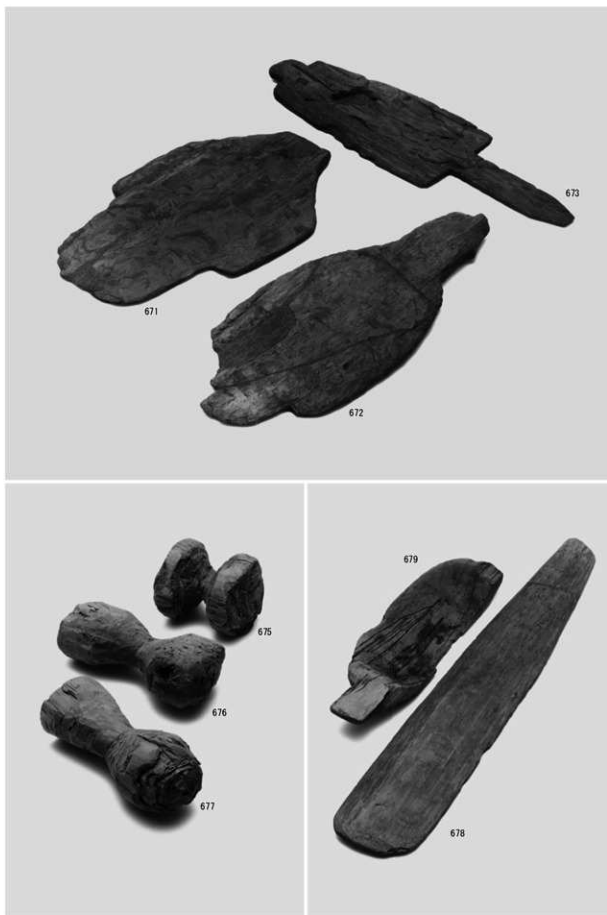
VIIb 層 出土遺物 (3)







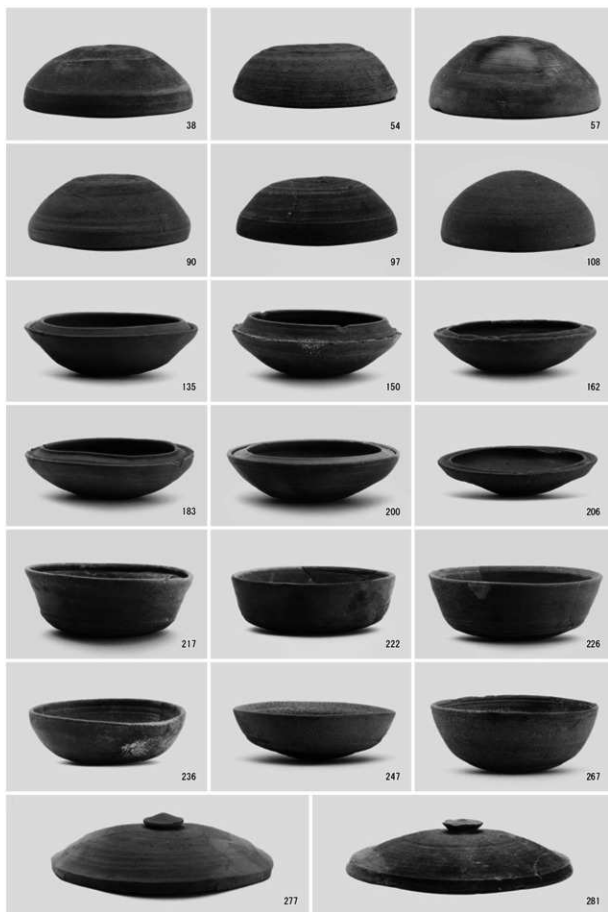
VIIb 層出土遺物 (6)



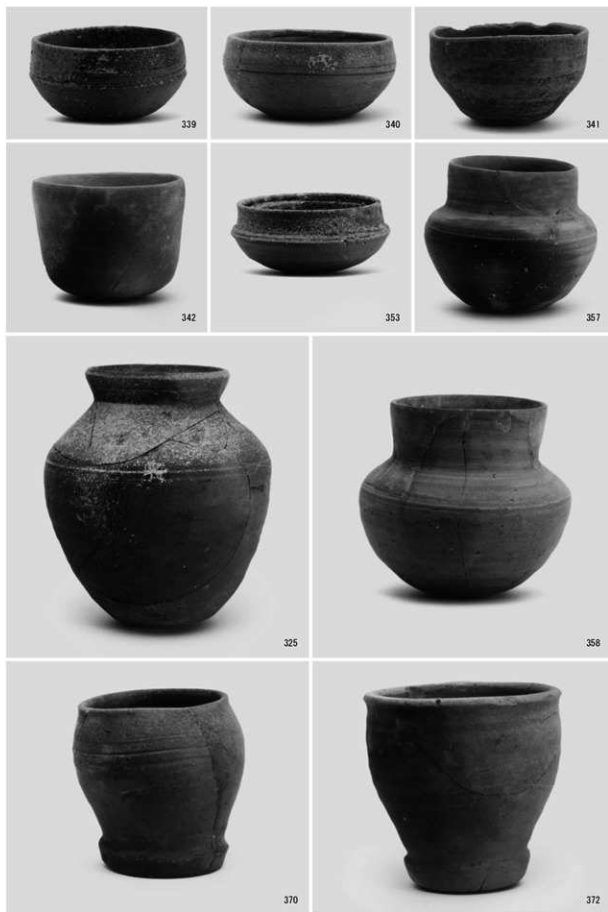
VIIb 層 出土遺物 (7)



VIIa 層 出土主要遺物



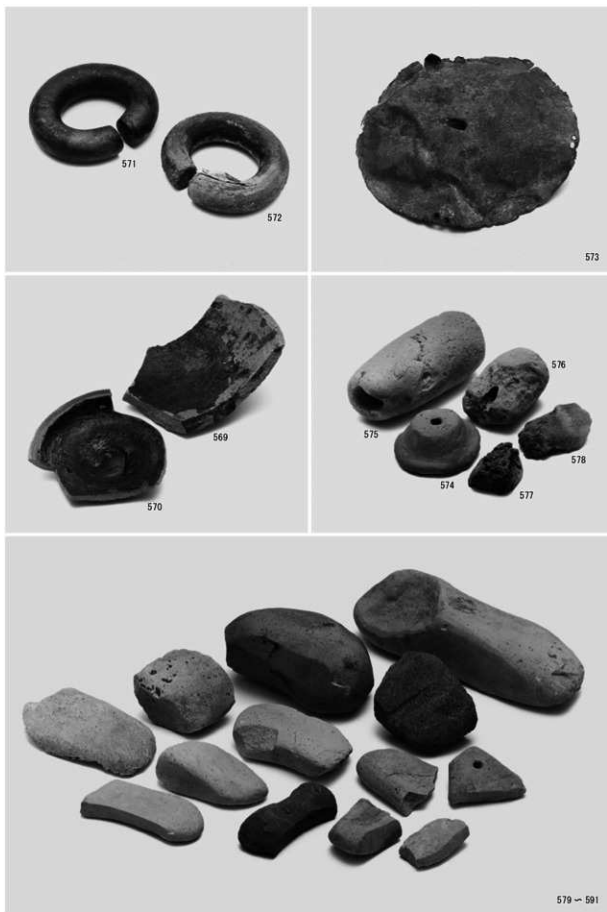
VIIa 層 出土遺物 (1)



VIIa 層 出土遺物 (2)



VIIa 層 出土遺物 (3)



VIIa層出土遺物(4)



VIIa 層 出土遺物 (5)



V層 出土主要遺物



29 ~ 62

1 V層 SS02 出土製塩土器

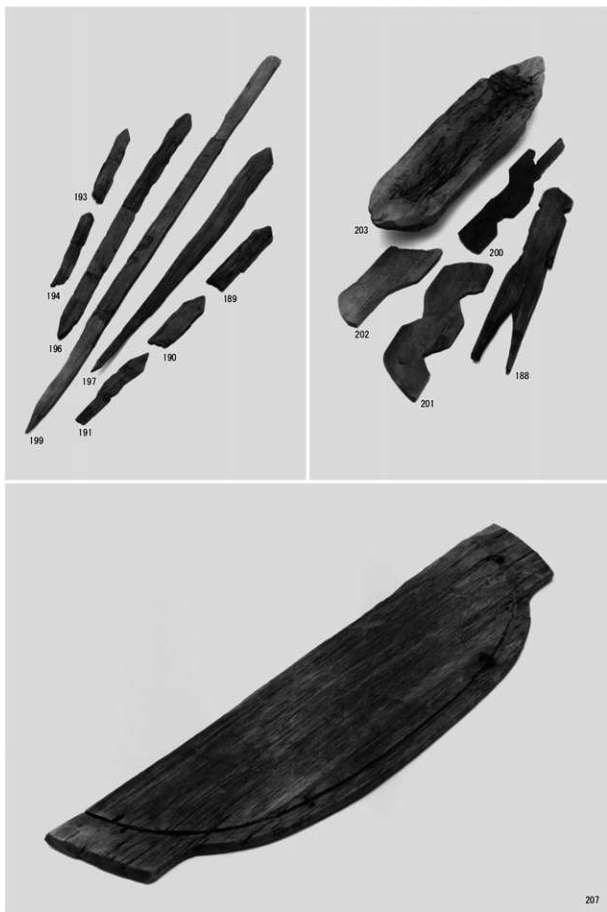


2 V層 出土祭祀遺物

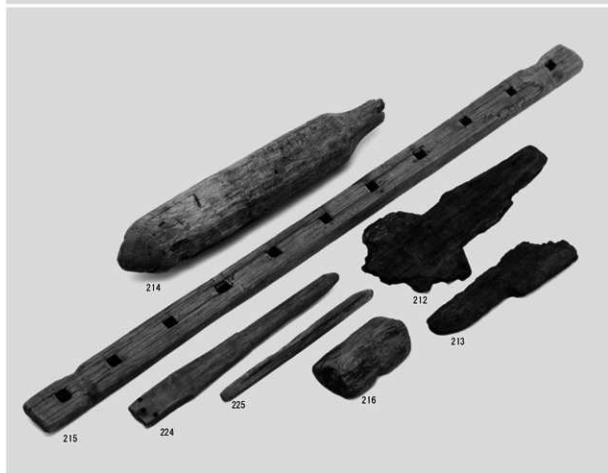




V層 出土遺物 (1)



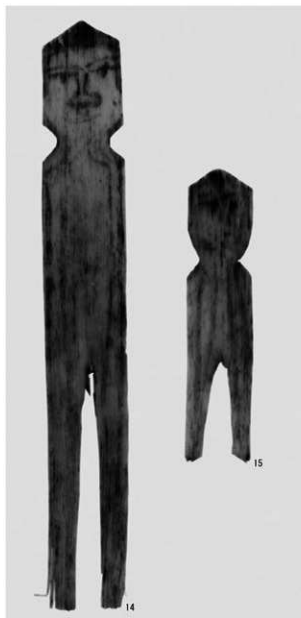
V層 出土遺物 (2)



V層 出土遺物 (3)



IVb 層出土主要遺物



1 IVb 層 SX01 出土遺物



2 IVb 層 SX02 出土遺物



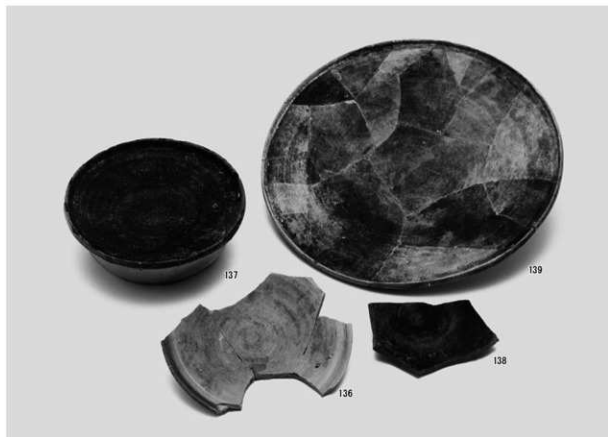
IVb 層出土「稲万呂」墨書土器



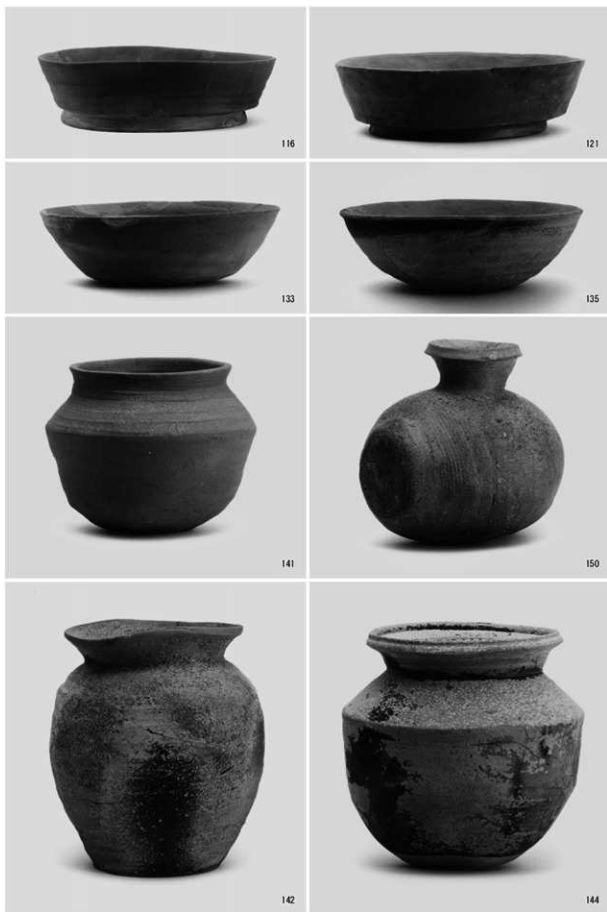
IVb 層 SX03 出土遺物



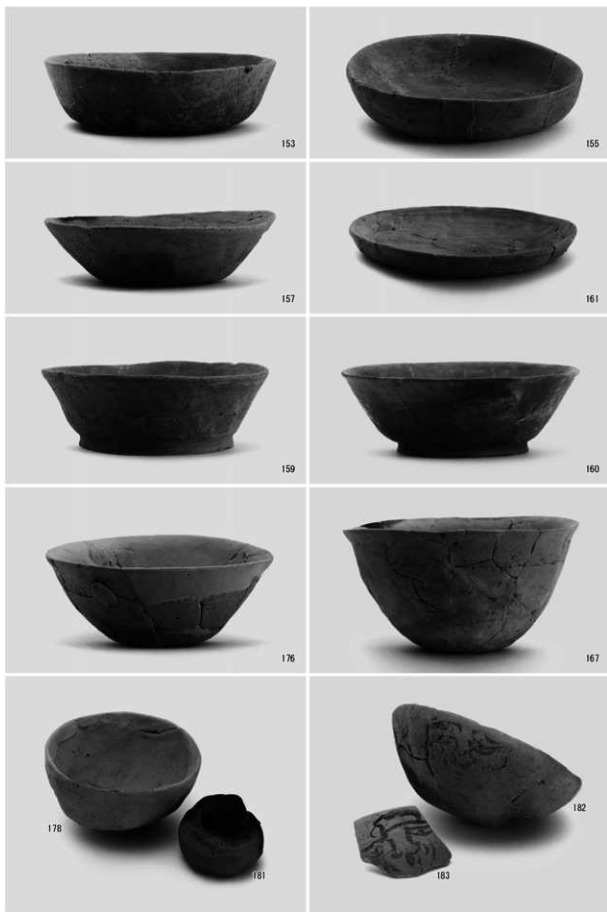
1 IVb 層 SX04 出土遺物



2 IVb 層 出土転用碗



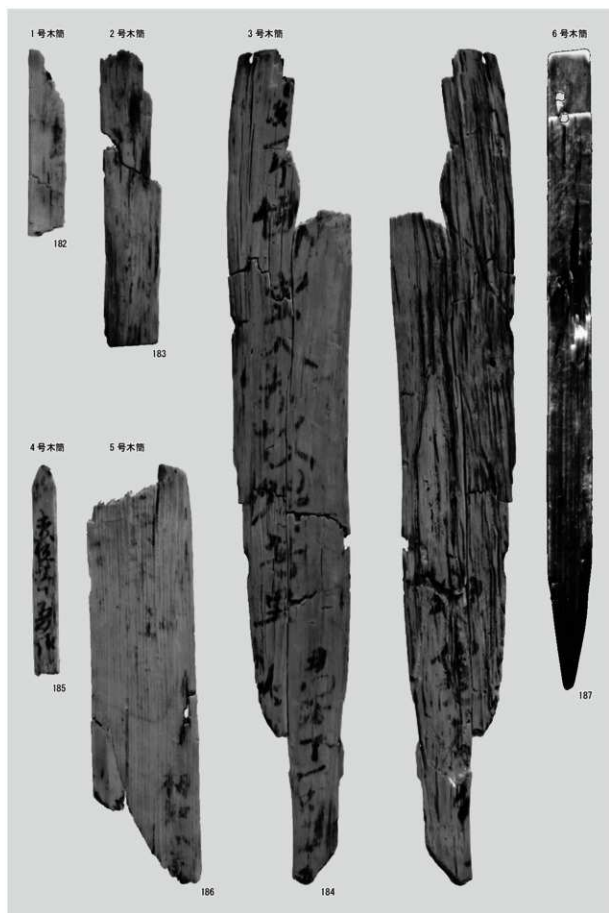
IVb 層 出土遺物 (1)



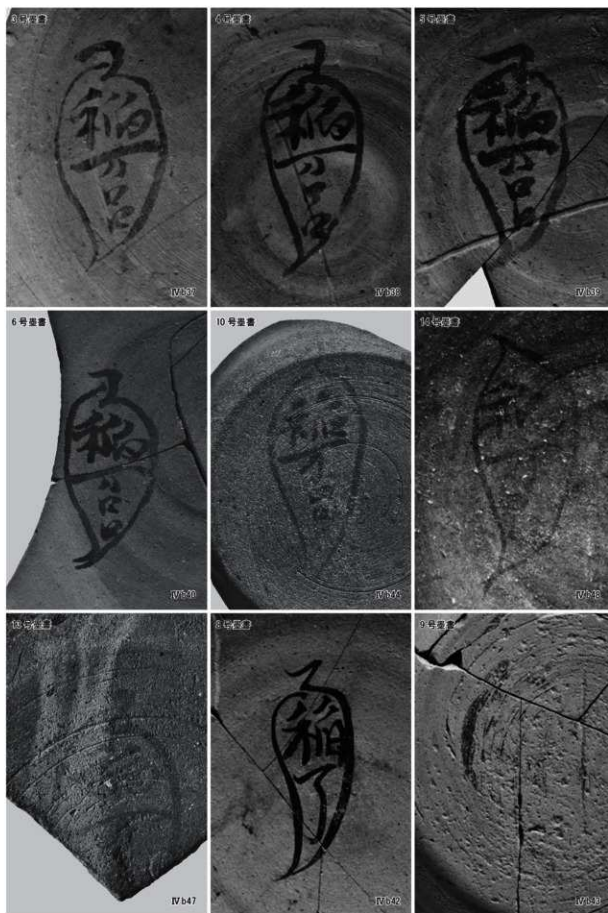
IVb 層 出土遺物 (2)



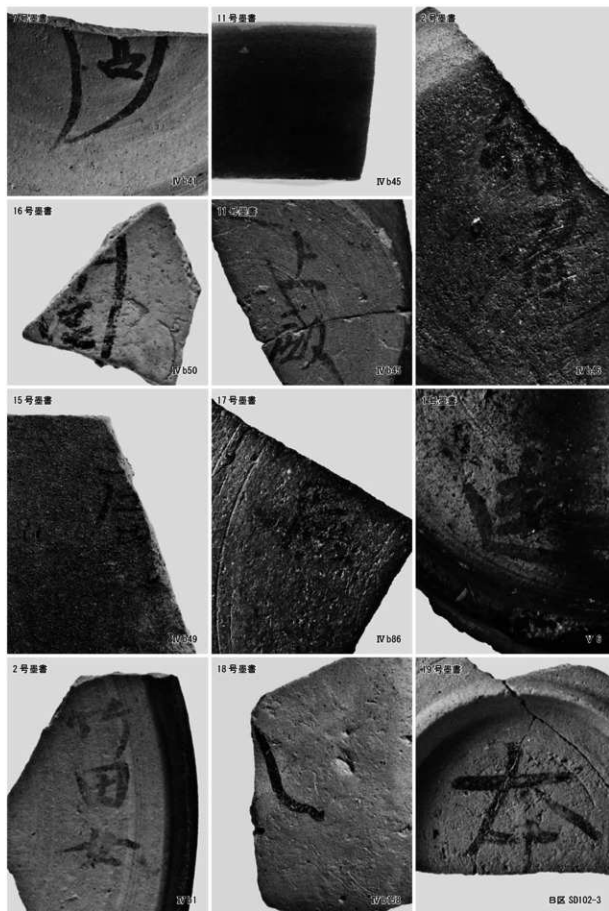
IVb 層 出土遺物 (3)



木簡 1～5号木簡：赤外線照射写真 6号木簡：斜光写真



墨書土器 (1) (赤外線照射写真)



墨書土器 (2) (紫外線照射写真)

報告書抄録

書名（ふりがな）	鳥居松遺跡 5 次 伊場大溝編 （とりいまついせき 5 じ いばおおみぞへん）
編著者名	鈴木一有（編）、金原正明、菊地大樹、古山真波、松原彰子、山本 崇、渡辺晃宏、バリノサーヴェイ株式会社、古環境研究所
編集機関	浜松市教育委員会 〒 430-0929 浜松市中区中央 1-2-1 イーステージ浜松オフィス棟 浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当（浜松市教育委員会の補助執行機関） 〒 430-0946 浜松市中区元城町 103-2 TEL (053) 457-2466 FAX (053) 457-2563
発行機関	(財) 浜松市文化振興財団
発行年月日	2009 年 12 月 25 日

遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
鳥居松遺跡	静岡県 浜松市中区 森田町	22202	01 04 28	34 度 41 分 35 秒	137 度 43 分 11 秒	2008 年 1 月 4 日 ～ 2008 年 6 月 16 日	1200 m ²	宅地造成に先 立つ事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
鳥居松遺跡	河川跡	古墳時代 飛鳥時代 奈良時代 平安時代	自然河川 (伊場大溝) 土器・遺物集積 貝塚・祭祀遺構 井戸	土師器・須恵器 円頭大刀 木簡 (6 点) 墨書土器 (19 点) 木製祭祀具 製塩土器		幅 20m、深さ 2.5m 以上の自然河川 (伊場大溝) を総延長 25m にわたって全面調査した。 豊富な文字資料の出土から、古代数智郡家の一とみられる。		

北緯、東経は世界測地系の数値である

鳥居松遺跡5次

伊場大溝編

2009 年 12 月 25 日

編集機関 浜松市教育委員会

浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当

(教育委員会の補助執行機関)

〒430-0946 浜松市中区元城町 103-2

発行機関 財団法人 浜松市文化振興財団

印刷 松本印刷株式会社
